兵庫県文化財調査報告　第 501 冊

豊岡市

尼ヶ宮古墳群

－　一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路に係る埋蔵文化財発掘調査報告書　－

平成 31（2019）年 3 月

兵　庫　県　教　育　委　員　会

尼ヶ宮古墳群

－　一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路に係る埋蔵文化財発掘調査報告書　－

平成 31（2019）年 3 月

兵　庫　県　教　育　委　員　会

調査区全景（オルソ写真）

古墳群遠景（南東上空から）

古墳群遠景（北北西上空から）

３区全景（西南西から）

３区全景（東南東から）

２号墳埋葬施設（西南西から）

６号墳埋葬施設（南西から）

２区全景（北から）

８号墳埋葬施設（南南東から）

９号墳全景（北北西から）

９号墳埋葬施設（北東から）

１区全景（南東上空から）

１区北半部（西から）

１区南半部（北西から）

１区南東部（西南西から）

12 号墳埋葬施設蓋石の状況（南南西から）

12 号墳埋葬施設（南から）

13 号墳埋葬施設（南西から）

14 号墳埋葬施設（北西から）

15 号墳埋葬施設（南南西から）

16 号墳埋葬施設（北西から）

１・３区出土土器

１～３区出土鉄器

例　　言

1．　本書は兵庫県豊岡市日高町水上の丘陵部に所在する尼ヶ宮古墳群の発掘調査報告書である。

2．　発掘調査および出土品整理作業は、一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けた兵庫県教育委員会が公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターに委託して実施した。このうち、出土品整理作業は兵庫県立考古博物館において実施した。

3．　本発掘調査は公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターの岸本一宏・垣内拓郎が担当し、発掘調査にあたっては、有限会社荒田造園（豊岡市森津 3111-1）に工事委託して実施した。発掘調査補助は大木拓巳（大手前大学＝当時）があたった。

4．　発掘調査時の地形および遺構の実測は空中写真測量図化として、株式会社リオプラン（丹波市青垣町西芦田 992-6）に委託して実施した。その他の詳細実測は調査員･補助員が実施し､西本英二･大西秀樹（安西工業）両名の協力を得た。ただし、調査前の現況地形測量および古墳墳丘盛土除去後の地形測量は調査員・調査補助員が実施し、西本英二・中西良樹（安西工業）両名の多大な協力を得た。また､出土品整理時の遺物実測および遺構･遺物図のデジタル浄写は嘱託員が行なった。

5．　出土品整理作業は平成 27（2015）年度から兵庫県立考古博物館で実施した。主として嘱託員等が整理作業を担当し、発掘調査担当者が作業指示等を行い、これに工程管理の職員が加わって実施した。また、金属器保存処理についても保存処理担当職員と嘱託員により兵庫県立考古博物館で実施した。

6．　本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影したもの、発掘中の空中写真撮影は株式会社リオプランに委託して撮影したものを使用した。また、遺物写真については株式会社クレアチオに委託して中本照雄氏が撮影したものを使用した。

7．　尼ヶ宮古墳群出土試料の自然科学分析のうち、放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）については株式会社加速器分析研究所、石製品および礫床礫の石材同定は株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。

8．　本書の執筆は岸本が行い、自然科学分析については各社の報告文の一部を掲載した。また、編集は嘱託員の前田陽子の補助のもと、岸本が行った。

9．　本報告で使用した図面･写真および遺物は、兵庫県立考古博物館および魚住分館で保管している。

10．　発掘調査にあたり、詰所の土地所有者の小田垣　守氏をはじめ、豊岡市出土文化財管理センター（当時）の潮崎　誠氏、豊岡市立歴史博物館但馬国府･国分寺館の加賀見省一氏･戸田真美子氏（いずれも当時）等にいろいろとお世話になった。また、山本亮司氏・田村清一郎氏にも御協力を得た。記して感謝の意を表します。

凡　　例

1．　本書で使用した方位は第Ⅴ系国土座標（世界測地系）を基準とし、北は座標北をさす。標高の数値は国土地理院１等水準点を利用した海抜高（Ｔ．Ｐ.）を使用した。

2．　古墳群の調査区は３地区に分かれており、調査時には地区ごとに地区を冠した古墳番号で呼称していたが、調査後に尼ヶ宮古墳群全体の分布調査を実施し、新たな古墳番号に以下のように変更した。

３区…２号墳（旧１号墳）・３号墳（旧２号墳）・４号墳（旧３号墳）・５号墳（旧４号墳）・６号墳（旧５号墳）

２区…８号墳（旧１号墳）・９号墳（旧２号墳）・10 号墳（旧３号墳）

１区…11 号墳（旧１号墳）・12 号墳（旧２号墳）・13 号墳（旧３号墳）・14 号墳（旧４号墳）・15 号墳（旧５号墳）・16 号墳（旧６号墳）17 号墳（旧７号墳）

3．　遺構等の土層色調名および土器の色調名は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるものであり、土層名のうち、堆積物の粒度区分については、『新版地学ハンドブック』（大久保雅弘・藤田至則編著、築地書館株式会社発行）により、調査担当者が経験的に触感により判断したものである。

4．　遺物番号は本文・挿図・写真とも同一とし、遺物の種類ごとに通し番号としている。
また、遺物番号のうち、石製品には番号の前に「Ｓ」、鉄器には「M」をそれぞれ冠し、種類ごとに通し番号としている。

5．　土器類実測図のうち、須恵器は断面黒塗りにしている。

6．　本書に掲載した挿図のうち、第１図は国土地理院発行の 1/25,000 地形図、第２・３図は国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所から提供をうけたものをそれぞれ使用した。

本　文　目　次

第１章　古墳群の位置と環境
第１節　古墳群の位置と地理的環境 …… 1
第２節　古墳群の歴史的環境 …… 2

第２章　調査の経緯・経過と体制
第１節　発掘調査に至る経緯と経過 …… 11
第２節　出土品整理作業の経過と体制 …… 17

第３章　調査の結果
第１節　３区（２～６号墳）の遺構と遺物 …… 19
第２節　２区（８～10 号墳）の遺構と遺物 …… 50
第３節　１区（11 ～ 17 号墳）の遺構と遺物 …… 76

第４章　自然科学分析結果
第１節　尼ヶ宮古墳群における放射性炭素年代（AMS測定）……（株式会社 加速器分析研究所） 133
第２節　尼ヶ宮古墳群から出土した石製遺物の石材同定……（株式会社 パレオ・ラボ） 136

第５章　総　括
第１節　尼ヶ宮古墳群の構造と築造時期 …… 141
第２節　竪穴系石組埋葬施設で構成される古墳群 …… 148
第３節　再び竪穴系石組埋葬施設の呼称について …… 151

巻頭図版目次

巻頭図版１　調査区全景（オルソ写真）
巻頭図版２　上　古墳群遠景（南東上空から）
　　下　古墳群遠景（北北西上空から）
巻頭図版３　上　３区全景（西南西から）
　　下　３区全景（東南東から）
巻頭図版４　上　２号墳埋葬施設（西南西から）
　　下　６号墳埋葬施設（南西から）
巻頭図版５　上　２区全景（北から）
　　下　８号墳埋葬施設（南南東から）
巻頭図版６　上　９号墳全景（北北西から）
　　下　９号墳埋葬施設（北東から）
巻頭図版７　上　１区全景（南東上空から）
　　下　１区北半部（西から）
巻頭図版８　上　１区南半部（北西から）
　　下　１区南東部（西南西から）
巻頭図版９　上　12 号墳埋葬施設蓋石の状況（南南西から）
　　下　12 号墳埋葬施設（南から）
巻頭図版 10　上　13 号墳埋葬施設（南西から）
　　下　14 号墳埋葬施設（北西から）
巻頭図版 11　上　15 号墳埋葬施設（南南西から）
　　下　16 号墳埋葬施設（北西から）
巻頭図版 12　上　１・３区出土土器
　　下　１～３区出土鉄器

挿図目次

第１図　周辺の遺跡分布図 …… 4
第２図　尼ヶ宮古墳群周辺の地形と道路線 … 12
第３図　尼ヶ宮古墳群調査区位置図 …… 13
第４図　尼ヶ宮古墳群分布状況（番号は古墳名称番号）… 16
第５図　３区調査前地形 …… 20
第６図　３区調査後地形 …… 21
第７図　３区東西畦土層断面 …… 22
第８図　３区東西畦土層名 …… 23
第９図　３区２号墳墳丘（調査前・後）… 24
第 10 図　３区２号墳墳丘土層断面 …… 25
第 11 図　２号墳埋葬施設 …… 26
第 12 図　２号墳埋葬施設墓壙 …… 27
第 13 図　２号墳区画溝埋土土層断面 …… 27
第 14 図　２号墳出土鉄刀 …… 28
第 15 図　３区３号墳墳丘（調査前・後）… 29
第 16 図　３区３号墳墳丘土層断面 …… 30
第 17 図　３号墳埋葬施設 …… 31
第 18 図　３号墳埋葬施設墓壙 …… 32
第 19 図　３号墳埋葬施設出土遺物 …… 33
第 20 図　３区４号墳墳丘（調査前・後）… 35
第 21 図　３区４号墳墳丘土層断面 …… 36
第 22 図　４号墳埋葬施設 …… 37
第 23 図　４号墳埋葬施設墓壙 …… 38
第 24 図　３区５号墳墳丘（調査前・後）… 39
第 25 図　３区５号墳墳丘土層断面 …… 40
第 26 図　５号墳埋葬施設 …… 41
第 27 図　５号墳埋葬施設墓壙 …… 42
第 28 図　３区６号墳墳丘（調査前・後）… 43
第 29 図　３区６号墳墳丘土層断面 …… 44
第 30 図　３区６号墳東部土層断面 …… 45
第 31 図　６号墳埋葬施設ＳＸ３６１ …… 46
第 32 図　６号墳埋葬施設ＳＸ３６１土層名 … 47
第 33 図　６号墳埋葬施設ＳＸ３６２ …… 48
第 34 図　６号墳埋葬施設ＳＸ３６１墓壙 … 49
第 35 図　６号墳埋葬施設ＳＸ３６２墓壙 … 49
第 36 図　６号墳ＳＸ３６１出土鉄鎌 …… 49
第 37 図　２区調査前地形 …… 51
第 38 図　２区調査後地形 …… 52
第 39 図　２区墳丘盛土除去後地形 …… 53
第 40 図　２区北西壁土層断面 …… 54
第 41 図　２区包含層出土土器 …… 55
第 42 図　２区８号墳調査前墳丘 …… 56
第 43 図　２区８号墳調査後墳丘 …… 57
第 44 図　２区８号墳墳丘土層断面(1) …… 58
第 45 図　２区８号墳墳丘土層断面(2) …… 59
第 46 図　８号墳埋葬施設 …… 60
第 47 図　８号墳埋葬施設土層名 …… 61
第 48 図　８号墳埋葬施設礫床 …… 61
第 49 図　８号墳埋葬施設墓壙 …… 61
第 50 図　２区９号墳墳丘（調査前・後）…… 63
第 51 図　２区９号墳墳丘土層断面(1) …… 64
第 52 図　２区９号墳墳丘土層断面(2) …… 65
第 53 図　９号墳埋葬施設埋土土層断面 …… 66
第 54 図　９号墳埋葬施設ＳＸ２９１ …… 68
第 55 図　９号墳埋葬施設ＳＸ２９２ …… 69
第 56 図　９号墳埋葬施設ＳＸ２９１墓壙 …… 70
第 57 図　９号墳埋葬施設ＳＸ２９２墓壙 …… 71
第 58 図　９号墳埋葬施設ＳＸ２９１出土鉄鏃 …… 71
第 59 図　２区 10 号墳墳丘（調査前・後）…… 72
第 60 図　２区 10 号墳墳丘土層断面 …… 73
第 61 図　２区ＳＸ－１ …… 74
第 62 図　１区調査前地形 …… 77
第 63 図　１区地形断面 …… 78
第 64 図　１区調査後地形 …… 79
第 65 図　１区墳丘盛土除去後地形 …… 80
第 66 図　１区表土直下出土須恵器 …… 81
第 67 図　１区 11 号墳墳丘（調査前・後）…… 82
第 68 図　１区 11 号墳墳丘土層断面(1) …… 83
第 69 図　１区 11 号墳墳丘土層断面(2) …… 84
第 70 図　１区 11 号墳周溝埋土土層断面 …… 85
第 71 図　11 号墳墳丘出土土器 …… 85
第 72 図　１区 12 号墳墳丘（調査前・後）…… 87
第 73 図　１区 12 号墳墳丘土層断面(1) …… 88
第 74 図　１区 12 号墳墳丘土層断面(2) …… 89
第 75 図　１区 12 号墳周溝埋土土層断面 …… 90
第 76 図　12 号墳埋葬施設(1) …… 91
第 77 図　12 号墳埋葬施設土層名 …… 92
第 78 図　12 号墳埋葬施設(2) …… 93
第 79 図　12 号墳埋葬施設墓壙 …… 94
第 80 図　12 号墳墳丘出土土器 …… 94
第 81 図　12 号墳埋葬施設出土鉄刀子 …… 94
第 82 図　１区 13 号墳墳丘（調査前・後）…… 96
第 83 図　１区 13 号墳墳丘土層断面(1) …… 97
第 84 図　１区 13 号墳墳丘土層断面(2) …… 98
第 85 図　13 号墳埋葬施設 …… 99
第 86 図　13 号墳埋葬施設墓壙 …… 100

第 87 図　13 号墳埋葬施設出土鉄刀子 …… 101
第 88 図　13 号墳墳丘出土土器 …… 101
第 89 図　１区 14 号墳墳丘（調査前・後）… 102
第 90 図　１区 14 号墳墳丘土層断面(1) …… 103
第 91 図　１区 14 号墳墳丘土層断面(2) …… 104
第 92 図　14 号墳埋葬施設 …… 105
第 93 図　14 号墳埋葬施設墓壙 …… 106
第 94 図　14 号墳墳丘・周溝内出土土師器… 107
第 95 図　１区 15 号墳墳丘（調査前・後）… 109
第 96 図　１区 15 号墳墳丘土層断面(1) …… 110
第 97 図　１区 15 号墳墳丘土層断面(2) …… 111
第 98 図　１区 15 号墳周溝埋土土層断面…… 112
第 99 図　１区 15 号墳下層陥し穴…… 113
第 100 図　1区15号墳下層陥し穴埋土土層名… 114
第 101 図　15 号墳埋葬施設蓋石検出状況 … 115
第 102 図　15 号墳出土土器 …… 115
第 103 図　15 号墳埋葬施設 …… 116
第 104 図　15 号墳埋葬施設墓壙 …… 117
第 105 図　１区 16 号墳墳丘（調査前・後）… 118
第 106 図　１区 16 号墳墳丘土層断面(1) …… 119
第 107 図　１区 16 号墳墳丘土層断面(2) …… 120
第 108 図　1区 16号墳周溝埋土土層断面・下層溝… 121
第 109 図　16 号墳埋葬施設…… 122
第 110 図　16 号墳埋葬施設墓壙…… 123
第 111 図　16 号墳埋葬施設・周溝埋土出土土器 … 123
第 112 図　１区小石棺 …… 125
第 113 図　１区 17 号墳墳丘（調査前・後）…… 127
第 114 図　１区 17 号墳墳丘土層断面(1) …… 128
第 115 図　１区 17 号墳墳丘土層断面(2) …… 129
第 116 図　17 号墳埋葬施設…… 130
第 117 図　17 号墳埋葬施設出土須恵器 …… 130
第 118 図　全調査区出土石製品 …… 131
第 119 図　暦年較正年代グラフ（参考）…… 135
第 120 図　尼ヶ宮古墳群とその周辺の地質…… 138
第 121 図　岩石の実体顕微鏡写真 …… 139
第 122 図　尼ヶ宮古墳群１区の古墳築造順序…… 144
第 123 図　尼ヶ宮古墳群調査区全体図と埋葬方向 … 146
第 124 図　但馬地域における箱式石棺の分類模式図 … 152
第 125 図　箱式石棺の分類(1)Ⅰ類 …… 153
第 126 図　箱式石棺の分類(2)Ⅱ類 …… 155
第 127 図　箱式石棺の分類(3)Ⅲ類 …… 156
第 128 図　箱式石棺の分類(4)Ⅳ類 …… 158
第 129 図　箱式石棺Ⅳ類と類似する竪穴式石室… 159

表 目 次

第１表　遺跡名表 …… 5
第２表　尼ヶ宮古墳群遺跡番号・古墳番号対照表 …… 16
第３表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）…… 135
第４表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用^{14}C 年代、較正年代）…… 135
第５表　尼ヶ宮古墳群の石材とその特徴および岩石 …… 136
第６表　石製遺物と岩石の種類 …… 137
第７表　尼ヶ宮古墳群調査結果一覧 …… 143
第８表　但馬地域の箱式石棺等一覧 …… 160

写 真 図 版 目 次

写真図版１上　古墳群から国府平野を望む（西南西上空から）
　　下　古墳群遠景（東北東上空から）
写真図版２上　調査区全景（東北東上空から 2013 年 11 月 8 日撮影）
　　下　３区全景（東北東上空から 2013 年 11 月 29 日撮影）
写真図版３上　１区全景（南東上空から）
　　下　２区全景（南東上空から）
写真図版４上　３区全景（東南東から）
　　下　３区全景（西南西から）
写真図版５上　３区３～６号墳（西南西から）
　　下①　３区調査前全景（東北東から）
　　下②　２～５号墳調査前状況（北東から）
　　下③　３区調査前全景（西南西から）
　　下④　５・６号墳調査前状況（西南西から）
写真図版６上　２号墳（東北東から）
　　下　２号墳（西南西から）
写真図版７上　２号墳墓壙内埋土土層断面（北北西から）
　　下　２号墳棺内鉄刀出土状況（東北東から）
写真図版８上　２号墳埋葬施設墓壙（西南西から）
　　下①　２号墳墓壙下部埋土土層断面（北北西から）
　　下②　２号墳区画溝埋土土層断面（南南東から）
　　下③　２号墳墳丘部土層断面（北西から）
　　下④　２号墳墳丘部土層断面（南西から）
写真図版９上　３号墳（東から）
　　下　３号墳（西から）
写真図版10上　３号墳墓壙内埋土土層断面（北から）
　　下　３号墳埋葬施設墓壙（西から）
写真図版11①　３号墳棺内鉄刀出土状況（東から）
　　②　３号墳墓壙内土器出土状況（東から）
　　③　３号墳墓壙内土器出土状況（北から）
　　④　３号墳墓壙内土器出土状況（西から）
　　⑤　３号墳墓壙下部埋土土層断面（北から）
　　⑥　３号墳区画溝埋土土層断面（北から）
　　⑦　３号墳墳丘部土層断面（西北西から）
　　⑧　３号墳墳丘部土層断面（西から）
写真図版12上　４号墳（東北東から）
　　下　４号墳（西南西から）
写真図版13上　４号墳墓壙内埋土土層断面（北北西から）
　　下①　４号墳埋葬施設墓壙（西南西から）
　　下②　４号墳区画溝埋土土層断面（北北西から）
　　下③　４号墳墳丘部土層断面（西から）
　　下④　４号墳墳丘部土層断面（西南西から）
写真図版14上　５号墳（東北東から）
　　下　５号墳（西南西から）
写真図版15上　５号墳埋葬施設墓壙（西南西から）

写真図版15下①　５号墳埋葬施設棺内埋土土層断面（北北西から）
下②　５号墳区画溝埋土土層断面（北北西から）
下③　５号墳墳丘部土層断面（西から）
下④　５・６号墳（西南西から）
写真図版16上　６号墳埋葬施設（北東から）
下　６号墳埋葬施設墓壙（西南西から）
写真図版17上　６号墳ＳＸ３６１（南西から）
下①　ＳＸ３６１棺内（南東から）
下②　ＳＸ３６１石枕詳細（北西から）
下③　ＳＸ３６１棺内鉄鎌出土状況（南東から）
下④　ＳＸ３６１棺内鉄鎌出土状況（南西から）
写真図版18上　６号墳ＳＸ３６２（北東から）
下①　ＳＸ３６２棺内埋土土層断面（北北西から）
下②　６号墳区画溝埋土土層断面（北北西から）
下③　６号墳墳丘部土層断面（西から）
下④　６号墳墳頂東端の溶岩塊（西南西から）
写真図版19上　２区全景（北から）
下　８・９号墳（南東から）
写真図版20上　２区全景（南西から）
中　２区北西壁土層断面（南東から）
下左　２区北西端付近遺物出土状況（南から）
下右　２区遺物出土状況拡大（南から）
写真図版21上　８号墳（北東から）
下　８号墳（北西から）
写真図版22①　８号墳埋葬施設礫床（南西から）
②　８号墳埋葬施設北東側壁（南西から）
③　８号墳埋葬施設南西側壁（北東から）
④　８号墳埋葬施設（北西から）
⑤　８号墳埋葬施設北西側壁（南東から）
⑥　８号墳埋葬施設内埋土土層断面（南西から）
⑦　８号墳埋葬施設調査前状況（北東から）
写真図版23上　８号墳区画溝埋土土層断面（南西から）
下①　８号墳埋葬施設墓壙（南東から）
下②　８号墳墳丘盛土土層断面（北から）
下③　８号墳墳丘盛土土層断面（北西から）
下④　８号墳墳丘盛土土層断面（西から）
写真図版24上　９号墳調査前（北から）
下　９号墳（北東から）
写真図版25上　９号墳（北西から）
下　９号墳（南東から）
写真図版26上　９号墳埋葬施設（南東から 下がＳＸ 291）
下　９号墳埋葬施設墓壙（南東から）
写真図版27上　ＳＸ２９１（北西から）
下　ＳＸ２９１（北東から）
写真図版28①　ＳＸ２９１北西側壁（南東から）
②　ＳＸ２９１南西側壁（北東から）
③　ＳＸ２９１北東側壁（南西から）
④　ＳＸ２９１鉄鏃出土状況（北西から）
⑤　ＳＸ２９１鉄鏃出土状況拡大（北西から）
⑥　ＳＸ２９１墓壙（南西から）
⑦　ＳＸ２９１石室埋土土層断面（北東から）
⑧　ＳＸ２９１石室上面検出状況（南東から）
写真図版29上　ＳＸ２９２（北西から）
下　ＳＸ２９２（南東から）
写真図版30①　ＳＸ２９２北東側壁（南西から）
②　ＳＸ２９２南西側壁（北東から）
③　ＳＸ２９２墓壙（東から）
④　ＳＸ２９２墓壙南西部埋土土層断面（北から）
⑤　ＳＸ２９２石室埋土土層断面（北東から）
⑥　９号墳北西区画溝埋土土層断面（南西から）
⑦　９号墳南東区画溝埋土土層断面（南西から）
⑧　９号墳墳丘盛土土層断面（北北西から）
写真図版31上①　10 号墳調査前（北から）
写真図版31上②　10 号墳区画溝埋土土層断面（南西から）
上③　10 号墳墳丘土層断面（南南西から）
上④　10 号墳墳丘土層断面（北から）
下　小石棺（旧ＳＸ１）（南西から）
写真図版32①　小石棺（旧ＳＸ１）（南東から）
②　小石棺（旧ＳＸ１）北西部（南東から）
③　小石棺（旧ＳＸ１）北西部（北東から）
④　小石棺（旧ＳＸ１）北西部（南西から）
⑤　８号墳埋葬施設掘削状況（北東から）
⑥　ＳＸ２９１掘削状況（北から）
写真図版33上　１区調査前全景（北東から）
下　１区調査後全景（東北東から）
写真図版34上　１区中央部 11 ～ 14 号墳（北東から）
下　１区中央部 11・12・14 号墳（西から）
写真図版35上　１区西部 11 ～ 15 号墳（南西から）
下　１区西部 11・13・14 号墳（東から）
写真図版36上　１区西半部 11 ～ 16 号墳（南から）
下　１区南西部 13・14・16 号墳（北西から）
写真図版37上　１区北西部 11・12・15 号墳（南西から）
下①　１区 11・12・14 号墳調査前（北東から）
下②　11 号墳墳丘部礫検出状況（南西から）
下③　11 号墳墳丘部礫検出状況（北東から）
下④　11 号墳墳頂部須恵器・礫検出状況（西から）
写真図版38上　11 号墳墳丘盛土土層断面（南西から）
下　11 号墳墳丘盛土土層断面（南南東から）
写真図版39上　11 号墳西側周溝埋土土層断面（南から）
中上　11 号墳北西側周溝埋土土層断面（南西から）
中下　11 ～ 13 号墳間周溝埋土土層断面（南東から）
下左　11 号墳墳丘盛土と礫の関係（南西から）
下右　11 号墳墳頂部木根が絡んでいた礫（北から）
写真図版40上　12 号墳埋葬施設蓋石（西から）
下　12 号墳埋葬施設蓋石（北から）
写真図版41上　12 号墳埋葬施設（西から）
下　12 号墳埋葬施設（北から）
写真図版42上　12 号墳埋葬施設東側壁（南南西から）
下　12 号墳埋葬施設西側壁（南東から）
写真図版43上　12 号墳埋葬施設南側壁と礫枕（北から）
下　12 号墳埋葬施設北側壁と刀子（南から）
写真図版44上　12 号墳埋葬施設墓壙（南から）
下①　12 号墳石棺埋土土層断面（南から）
下②　12 号墳石枕の状況（北から）
下③　12 号墳刀子出土状況（南から）
下④　12 号墳刀子出土状況拡大（南から）
写真図版45上　12 号墳墳丘盛土土層断面（南西から）
下　12 号墳墳丘盛土土層断面（南から）
写真図版46①　12 号墳調査前（北東から）
②　12 号墳墳丘盛土土層断面（南東から）
③　12 号墳東半部墳丘盛土土層断面（北東から）
④　12 号墳北東側周溝内須恵器出土状況（南から）
⑤　12 号墳墳丘盛土最下層土師器出土状況（東から）
⑥　12 号墳南側周溝埋土土層断面（東北東から）
⑦　12 号墳南東側周溝埋土土層断面（南西から）
⑧　12 号墳墳丘盛土内下層炭化材出土状況（東から）
写真図版47上　12 号墳西側周溝埋土土層断面（南から）
中　12 号墳北側周溝埋土土層断面（北西から）
下　12 ～ 14 号墳間周溝埋土土層断面（西北西から）
写真図版48上　13 号墳（西南西から）
下　13 号墳（北から）
写真図版49上　13 号墳埋葬施設北西部（南東から）
下①　13 号墳埋葬施設検出状況（北西から）
下②　13 号墳埋葬施設埋土土層断面（北西から）
下③　13 号墳埋葬施設北西部（北西から）
下④　13 号墳埋葬施設刀子出土状況（南西から）

写真図版50上　13号墳北西側周溝埋土土層断面（南西から）
中　13号墳南東側墳裾埋土土層断面（北東から）
下　13号墳埋葬施設墓壙（南西から）
写真図版51上　14号墳埋葬施設（北東から）
下　14号墳埋葬施設（南西から）
写真図版52①　14号墳埋葬施設北西側壁（南から）
②　14号墳埋葬施設北西側壁（東北東から）
③　14号墳埋葬施設北東側壁（南西から）
④　14号墳埋葬施設上面検出状況（東北東から）
⑤　14号墳埋葬施設埋土土層断面（北東から）
⑥　14号墳埋葬施設埋土土層断面（北から）
⑦　14号墳埋葬施設埋土上部土師器出土状況（北東から）
⑧　14号墳埋葬施設墓壙（南東から）
写真図版53①　14号墳北西側周溝埋土土層断面（南西から）
②　14号墳北側周溝内土師器出土状況（北から）
③　14号墳北側周溝内土器ａ出土状況（北西から）
④　14号墳北側周溝内土器ｂ出土状況（北西から）
⑤　14号墳北側周溝内土器ｃ出土状況（北北西から）
⑥　14号墳南西側周溝埋土土層断面（南東から）
⑦　14号墳北東側周溝埋土土層断面（南東から）
⑧　14号墳北西半墳丘盛土土層断面（西南西から）
写真図版54上　15号墳（南西から）
下　15号墳埋葬施設蓋石（南西から）
写真図版55上　15号墳埋葬施設（東南東から）
下　15号墳埋葬施設（西北西から）
写真図版56①　15号墳埋葬施設蓋石（東南東から）
②　15号墳蓋石間隙須恵器出土状況（西から）
③　15号墳埋葬施設埋土土層断面（東南東から）
④　15号墳埋葬施設墓壙（西北西から）
下　15号墳墳丘下陥し穴（西南西から）
写真図版57①　15号墳墳頂北部礫検出状況（西南西から）
②　15号墳墳丘西半部土層断面（南東から）
③　15号墳西側周溝内土師器出土状況（南南東から）
④　15号墳西側周溝内土師器出土状況拡大（南西から）
⑤　15～11号墳間周溝埋土土層断面（東から）
⑥　15号墳墳丘盛土土層断面（南から）
写真図版57⑦　15号墳墳丘下陥し穴（南東から）
⑧　15号墳墳丘下陥し穴埋土土層断面（東南東から）
写真図版58上　16号墳埋葬施設（西から）
①　16号墳石室床面土師器出土状況（北西から）
②　16号墳石室床面土師器出土状況（北東から）
③　16号墳埋葬施設埋土土層断面（北西から）
④　16号墳埋葬施設墓壙（南東から）
写真図版59上　16～14号墳間周溝埋土土層断面（東から）
中上　16号墳北西側周溝埋土土層断面（南西から）
中下　16号墳墳丘盛土土層断面（南西から）
下左　16号墳墳丘下溝埋土土層断面（北北東から）
下右　16号墳確認トレンチ（南から）
写真図版60上　小石棺蓋石（南南東から）
中　小石棺身（南南東から）
下左　小石棺蓋石（北北西から）
下右　小石棺下層截ち割り土層断面（東北東から）
写真図版61上　17号墳（南から）
①　17号墳埋葬施設須恵器出土状況（北北東から）
②　17号墳埋葬施設須恵器出土状況拡大（北北東から）
③　17号墳埋葬施設（北北東から）
④　17号墳埋葬施設（南南西から）
写真図版62上　17号墳西側周溝埋土土層断面（北北東から）
①　17号墳南側周溝埋土土層断面（東南東から）
②　17号墳墳丘盛土土層断面（北西から）
③　17号墳確認トレンチ（北東から）
④　17号墳調査前（北北東から）
写真図版63　３・12・14～17号墳出土土器
写真図版64上　３号墳・２区包含層出土土器
下　11号墳出土土器
写真図版65上　13号墳出土土器
下　15・16号墳、１区出土土器
写真図版66　２・３・６・９・12・13号墳出土鉄器
写真図版67上　３号墳出土鉄鏃等
下　８号墳礫床の礫
写真図版68　１・２区出土石製品

第１章　古墳群の位置と環境

第１節　古墳群の位置と地理的環境

本書で報告する尼ヶ宮古墳群は、兵庫県北東部を占める広範囲の市域をもつ豊岡市の南西部、豊岡市日高町域の東部に位置する。豊岡市日高町は、旧豊岡市と旧城崎郡日高町、同郡城崎町、同郡竹野町および、旧出石郡出石町、同郡但東町が合併して、2005（平成 17）年４月に誕生した豊岡市の一部となっているが、旧日高町域は地名にその名を残している。

日高町域は北に豊岡市竹野町および旧豊岡市、西に美方郡香美町村岡区、南に養父市とそれぞれ丘陵尾根や峠を境として接し、大半が盆地状地形となっている。

豊岡市日高町域の東部には、兵庫県中央部に源を発する但馬最大の円山川が北流し、日高町域北東部の円山川流域には国府平野と呼ばれる、旧豊岡市域にまたがる広大な盆地状平野が円山川の両岸にひろがる。尼ヶ宮古墳群はこの国府平野を西側から見下ろす丘陵に存在する。

日高町域には円山川の支流の一つ、稲葉川が東流し、その流域には盆地状・谷状地形が発達し、神鍋遺跡をはじめとする縄文時代以降の遺跡や古墳群が数多く存在している。

円山川に沿って走る国道 312 号線により養父市域とつながり、西部では、国道 482 号線が稲葉川沿いに走り、標高 1,074 ｍの蘓武岳北側にあって、2003（平成 15）年に開通した蘓武トンネルを抜ければ美方郡香美町村岡区中心部に通じ、国道９号線とつながっている。

尼ヶ宮古墳群が存在する丘陵の地質は、ちょうど尼ヶ宮古墳群が存在する位置を境として、高位側は豊岡累層と呼ばれる礫岩や砂岩のほか、石英安山岩質火砕岩類で、低位側は八鹿累層と呼ばれる玄武岩・玄武岩質安山岩や火砕岩類となっており、新第三紀の中新世（約 2,400 万年前～約 500 万年前）の形成とされている。そして、稲葉川流域を中心に国府平野の西部には、第四紀の更新世（170 万年前以降）の玄武岩・安山岩および同質の火砕岩類が堆積しており、深田遺跡や南構遺跡では溶岩礫が遺構面や基盤となっている部分が多い。その上部の堆積層は、国府平野の大半にあたり、砂礫・砂・シルト・粘土といった沖積層が上に乗っている。

尼ヶ宮古墳群が存在するのは、国府平野西側の、北は八代川、南は稲葉川に挟まれた、標高 333 ｍの丘陵から東にのびる主尾根の、標高 160 ｍの東端から派生する支尾根のうち、東北東にのびる枝尾根の先端や山塊中腹である。北東側には峠道を挟んで、最高点の標高 150 ｍの丘陵があり、この丘陵の各尾根にも南から西垣古墳群・耳谷草山古墳群・大木谷古墳群など多くの古墳が立地し、特に東側に集中して存在している。また、日高町水上と日高町中を結ぶ峠道沿いにも本古墳群をはじめ、岩谷古墳群や馬塚古墳、北側へ降りた谷沿いには宮ノ谷窯跡、イチゴ谷窯跡があり、古墳時代にはすでに街道として使用されていたと推察される。

さて、尼ヶ宮古墳群は、後述するように、１つの古墳群として呼称されているが、いくつかの支尾根に分かれて合計 41 基が存在しており、尼ヶ宮古墳群から南および南西にかけての丘陵の平地に近い支尾根や谷中には数多くの古墳群が存在している。また、第２次但馬国府の中心部分と考えられる祢布ヶ森遺跡や国府関連遺跡群、但馬国分寺跡や国分尼寺跡も尼ヶ宮古墳群から至近の距離に存在していることから、古代においては但馬国の中心地であった。

第２節　古墳群の歴史的環境

尼ヶ宮古墳群が存在する豊岡市日高町周辺には、各時代にわたって数多くの遺跡が存在している。それらについては北近畿豊岡自動車道関連の各報告書において述べられており、重複する部分も多いが、以下では豊岡市日高町を中心とした地域に的を絞って、尼ヶ宮古墳群周辺の歴史的環境について述べることとする。

１．縄文時代

豊岡市日高町域では旧石器時代の遺跡は現在発見されていないようであるが、縄文時代草創期～早期の遺跡が稲葉川上流域の神鍋遺跡（１）や山宮遺跡（４）、稲葉川流域の三方地区では伊府遺跡（18）・姫谷遺跡（20）で発見されている。神鍋遺跡では、縄文時代早期・前期を中心に草創期、中期～晩期までの土器や石器が採集されており、発掘調査では縄文前期と考えられる方形竪穴住居跡・貯蔵穴・集石土壙が検出されている。山宮遺跡では押型文（刺突・山形・楕円）土器を中心に縄文や条痕文など早期以降後期の遺物が多く出土し、集石遺構も検出されている。石器には有舌尖頭器やスクレイパーなどがある。また、南東部にある、すくもづか遺跡（６）でも縄文土器や石器が採集されている。

伊府遺跡や姫谷遺跡が存在する三方地区は三方盆地と呼ばれ、伊府遺跡では縄文時代草創期・後期の遺物が出土しており、縄文時代草創期中葉の石鏃・尖頭器・削器・局部磨製石斧・磨製石斧等の石器群が集中して出土している。姫谷遺跡では縄文草創期頃の直径約４㎝で正円に近い玦状耳飾の完形品が採集されている。また、三方盆地南部にある森山遺跡（17）では縄文時代後期末から晩期中頃の少量の土器と多量の石器が出土している。なお、多数の銅鐸片が出土した久田谷遺跡（22）は縄文時代晩期の遺跡でもある。

稲葉川の下流から円山川の合流点にかけての地域では、南構遺跡（29）で縄文時代早期の土器が発見されているほか､北～北西側の丘陵に近い台地状部分に縄文時代遺跡が分布している｡祢布ヶ森遺跡(30)では縄文時代の土器・石器が包含層中から多数出土し、但馬国分寺跡南側の焼ヶ辻遺跡（31）では縄文時代晩期の土器が出土している。また、水上遺跡（38）は縄文時代から平安時代までの複合遺跡で、縄文時代では前期・後期・晩期の土器のほか、早期の押型文土器片も採集されている。

出石川が円山川と合流する地点の豊岡市伏にある出石川河床には天神橋上流遺跡（59）があり、縄文前期の完形の鉢が採集されている。

２．弥生時代

豊岡市日高町域では弥生時代遺跡はあまり多くないが、稲葉川流域の三方盆地内に弥生時代中期の土器が採集された森山遺跡、弥生時代後期末～古墳時代前期の土器とともに木製品も出土した（広井）フンズ遺跡（14）があり、伊府遺跡からも土器が出土している。

三方盆地東側の久田谷遺跡は縄文時代晩期から弥生時代後期の遺跡であるが、小さな破片となった銅鐸片 117 点が発見された。銅鐸は突線鈕Ｖ式のもので、６区袈裟襷文となっている。復元すると 130 ㎝程度と推定され、破砕された銅鐸として銅鐸の終焉と集落の様相の変化を考えるうえで重要な資料である。

久田谷遺跡東側の浪滝遺跡（25）では弥生時代前期・後期とそれ以降の土器が出土しており、南構遺

跡では弥生時代後期の遺構・遺物が検出されたが、住居跡は発見されていない。祢布ヶ森遺跡でも住居跡は発見されていないが、溝から弥生時代後期初頭～後期末および古墳時代前期の土器が多量に出土しており、中期初頭～前半の土器片も存在し、石斧なども出土していることから、大規模な集落跡の可能性がある。

円山川左岸の丘陵下の低い台地状部分にある水上遺跡は、縄文時代から平安時代までの複合遺跡であるが、弥生時代後期末～古墳時代前期と８～９世紀に中心がある。日高東中学校建設時の調査では弥生後期末～古墳時代前期の土器が出土し、木製手桶片も出土し、掘立柱建物跡も検出された。さらに北側、八代川が流れる谷が国府平野と接する部分の現川床にあたる位置にある南八代田遺跡（50）では、弥生時代中期末～後期の土器が多量に採集されており、その中には生駒西麓産のものも認められた。また、表面を赤と黒の漆で着色された木製の盾も採集されている。

北側の前述した天神橋上流遺跡の近くでは弥生土器も多く採集されており、中には前期に遡る可能性があるものも含まれている。豊岡市加陽にある加陽遺跡（60）では弥生中期前半の土器と碧玉製管玉未成品と思われる石核が出土しており、東隣の大市山遺跡（61）は弥生時代の管玉を生産していた遺跡である。八代川の上流域の猪ノ爪（47）にある玉谷川には碧玉原石破片が散らばっており、その鉱床は北側にあり、猪爪・辻碧玉鉱床と呼ばれ、弥生時代～古墳時代の玉類の素材として利用されていた可能性が高い。

なお、豊岡市中郷の深谷古墳群（64）下層では弥生中期後半の円形竪穴住居跡が検出されている。

弥生時代墳墓は三方盆地北部の小山古墳群（９）がある部分で５基発見されており、付近に集落跡が存在する可能性が高い。南八代田遺跡の北側丘陵上にある藤井古墳群（51）では、弥生時代後期の墳丘墓２基（２・３号墳）が調査され、土器を破砕して埋納する儀礼が行われていた。また、円山川を挟んだ対岸の豊岡市中郷の朝日遺跡群（63）でも弥生時代後期の墳墓２基が調査され、２号墓の木棺からは鉄鏃が出土し、弥生後期中頃の土器を破砕して埋納する儀礼も行われていた。

なお、豊岡市日高町南側の養父市八鹿町宿南や浅間では、弥生時代の遺跡は発見されていない。

３．古墳時代

古墳時代前期

稲葉川上流域にある西気小裏山遺跡では、かつて箱式石棺数基が発見され古墳時代前期の土器が採集されている。古墳前期の集団墓が存在したようである。稲葉川流域では他に前期古墳は発見されていない。

円山川左岸の丘陵上では北近畿豊岡自動車道建設により３基の西垣古墳群（43）が調査された。１号墳は径約 30 ｍの円墳で、３基の埋葬施設のうち中心の主体部１は棺内礫敷で蓋石を２重に重ねた重厚な箱式石棺で、棺内全面に赤色顔料が塗布されており、被葬者頭部には朱が認められた。副葬品には剣･鉇･鎌や板状斧などの鉄器がある。主体部２もやや重厚な箱式石棺で、剣・鉇・鑿・鎌が出土、主体部３は割竹形木棺とされ、ガラス小玉・刀子・鉄斧が出土している。２・３号墳はやや小規模な円墳であるが、２号墳は２基の木棺を埋葬施設とし、主体部２には礫床を伴う。主体部１からは袋状鉄斧が出土した。３号墳では 6.7 ｍの長大な箱形木棺を埋葬施設とし、礫が密に敷かれ袋状鉄斧が出土した。時期は出土土器から古墳時代前期中葉末の４世紀中頃を中心とした時期と考えられる。同一丘陵北東端付近に存在する耳谷草山古墳群（49）は 30 基ほどの尾根上の古墳群で、調査された２号墳は長方形の墳頂部に５基の埋葬施設があり、そのうち２基は土器棺墓、他は箱形木棺墓で、１基はやや小型であった。大人２体子

第１図　周辺の遺跡分布図

第１表　遺跡名表

1 神鍋遺跡	23 大谷古墳群	45 宮ノ谷窯跡	67 黒谷酒屋谷古墳群
2 訓原古墳群	24 下山古墳群	46 イチゴ谷窯跡	68 奈良谷１・２号窯跡
3 岩倉古墳群	25 浪滝遺跡	47 猪ノ爪	69 才谷古墳群
4 山宮遺跡	26 久斗遺跡	48 大木谷古墳群	70 西ノ谷古墳群
5 小河江窯跡	27 定谷古墳群	49 耳谷草山古墳群	71 宮ノ谷古墳群
6 すくもづか遺跡	28 定谷遺跡	50 南八代田遺跡	72 馬場ヶ崎（先）古墳
7 清坂古窯跡群	29 南構遺跡	51 藤井古墳群	73 森垣古墳群
8 いなんば古墳	30 祢布ヶ森遺跡	52 竹貫古墳群	74 楯縫古墳
9 小山古墳群	31 焼ヶ辻遺跡	53 上石遺跡	75 スルギ（小谷）古墳群
10 小山窯跡	32 小垣谷古墳群	54 権現遺跡	76 菖蒲谷古墳群
11 石の辺古墳群	33 但馬国分寺跡	55 ホーキ古墳群	77 法尺谷古墳群
12 野中古墳群	34 川岸遺跡	56 上佐野１号墳	78 茅谷窯跡
13 猪子垣古墳群	35 若宮神社古墳	57 上佐野古墳群	79 姫路山古墳群
14（広井）フンズ遺跡	36 深田遺跡	58 雷神社古墳群	80 大谷古墳群
15 近江谷古墳群	37 カナゲ田遺跡	59 天神橋上流遺跡	81 シゲリ谷古墳群
16 荒神山古墳群	38 水上遺跡	60 加陽遺跡	82 広瀬古墳群
17 森山遺跡	39 但馬国分尼寺跡	61 大市山遺跡	83 源氏山古墳群
18 伊府遺跡	40 羽根山古墳	62 大師山古墳群	84 びくに古墳
19 横山古墳群	41 横穴式石室墳	63 中郷朝日遺跡群	85 浅間西山Ａ～Ｃ古墳群
20 姫谷遺跡	42 **尼ヶ宮古墳群**	64 中郷深谷古墳群	86 くぬぎばな古墳群
21 市場古墳群	43 西垣古墳群	65 満仲谷古墳群	87 浅間土器散布地
22 久田谷遺跡	44 馬塚古墳	66 上ノ郷古墳群	

供３体が埋葬された特定家族墓として位置づけられる。なお、副葬品は鉇が出土したにとどまるが、土器棺に使用された土器の型式から、３世紀後半の古墳時代前期前半の布留前期の築造と判断できる。

南側の養父市域では、尾根稜線上に階段状に築造された８基の源氏山古墳群（83）が調査され、４世紀代に１～３・７号墳の４基が築造されたことが判明した。１号墳には４基の木棺と５基の土器棺墓があり、箱式石棺の内部に土器棺を納めたものも存在した。１号墳には11基、２号墳には９基、３号墳は10基、７号墳には７基の埋葬施設がそれぞれ存在し、土器棺も含まれていたことから、集団墓と評価されている。

古墳時代中期～後期前葉

この時期になると、古墳が数多く築造されている。稲葉川流域の西気小裏山遺跡では、かつて古墳が発見され５世紀末頃の須恵器坏蓋セットと土師器坏・高坏が採集されている。中期末の墳墓が存在していたようである。また、北側の下山古墳では箱式石棺が発見され、須恵器や土師器、鉄刀が出土した。５～６世紀の古墳と考えられる。三方盆地では、短甲が出土した小山古墳群が特筆される。５基のうち３基の古墳が調査され、最高所の１号墳は長さ6.1ｍの墓壙に箱形木棺で三角板鋲留短甲のほか、鉄刀や鉄鏃などに加え、勾玉・ガラス玉が副葬されていた。また、５世紀中頃の須恵器の瑳には櫛が入れられていた。３号墳は石組埋葬施設（竪穴式石室）で、５世紀末～６世紀初頭の須恵器高坏や壺などが出土した。５世紀中頃から６世紀初めの中期中頃から末にかけて築造されている。

三方盆地内には、丘陵尾根上に立地することから中期～後期前葉に築造されたと考えられる古墳が他にも数多く存在している。猪子垣古墳群（13）は 18 基の古墳が丘陵上に存在する 18 基の古墳群で、２号墳は竪穴式石室とされている。他は木棺直葬墳のようである。盆地南西部に位置する近江谷古墳群(15)は２か所に分かれて 18 基が存在しており、大半は木棺直葬墳のようである。須恵器が採集されていることから、中期以降と判断できる。その南側の荒神山古墳群（16）も 16 基が大きく２つに分かれて存在するが、いずれも尾根上に築造されており、木棺直葬や箱式石棺といった埋葬施設と推定できる。ほかにもその立地により中期～後期前葉に築造されたと推定できる古墳群が多く存在している。

東側の久斗では、かつて「字久斗」から小型の四獣鏡が出土したようである。久斗遺跡（26）から出土したものではなく、古墳出土と思われるが、不明である。祢布ヶ森遺跡の北側の谷に存在する小垣谷古墳群（32）では３基の階段状古墳が調査された。いずれも単一埋葬墳で 17・18 号墳が木棺直葬、16 号墳は箱式石棺で、棺内から鉄刀と刀子各２と鉄鏃の束が副葬されていた。石棺底は礫敷で、蓋石内面には赤色顔料が遺存していた。５世紀後半～６世紀前葉にかけて築造されている。鶴岡の円山川沿いに存在した馬場ヶ崎（先）古墳（72）は、川原石を積み上げた竪穴式石室で刀剣・鐙・玉類が出土し、円筒埴輪も存在していた。古墳時代中期後半（５世紀後半）の築造とみられる。なお、経塚も存在し、和鏡と土師器経筒または外容器も出土している。水上の羽根山古墳（40）は現在、詳細な位置は不明であるが、日高東中学校埋め立て工事の土砂採取中に発見された、陰石を加工した切石の箱式石棺である。長側石の外側にも板石を重ね、小口側には副室を設けた重厚なつくりであった。棺内に人骨が２体遺存していた。いずれも男性で、赤色顔料が頭部に付着していた。副葬品は刀子１点である。詳細な時期は不明であるが、中期～後期前葉と推定している。

今回調査した尼ヶ宮古墳群（42）は日高東中学校の北西側丘陵に位置している。古墳群 41 基中、調査を実施したのは中期前半～中葉（５世紀前半～中頃）の丘陵上の５基の古墳と、石組埋葬施設を中心とした中期中頃～後期前葉（５世紀中頃～６世紀前葉）の 10 基の古墳である。古墳群下の峠道を北側に下った部分に存在する馬塚古墳（44）は、平成２年に調査された後、保存されている。直径約 15 m の円墳で、竪穴系横口式石室を内部施設とする金銅装馬具や鉄製武器類が出土した。６世紀前半～中頃に築造されたと考えられている。前出の耳谷草山古墳群では、15・17 号墳なども調査され、17 号墳の主体部木棺から鎌・鏃・U字形鋤先などの鉄器が出土していることから、中期後半頃の築造と考えられる。同一丘陵の別尾根に分かれて約 90 基で構成される大木谷古墳群（48）では､89･90 号墳が調査され、どちらも単一の木棺直葬墳で、６世紀中頃のものである。

八代川を挟んだ北側の藤井古墳群は９基で構成され、弥生墳墓以外では、１号墳が調査された。石組の埋葬施設（竪穴式石室）をもち、玉類と須恵器・土師器が出土した。６世紀初頭の築造である。同じく丘陵上に存在する竹貫古墳群（52）では、24 基のうち４号墳が横穴式石室墳である。23・24 号墳が調査され、両墳の石組の埋葬施設（竪穴式石室）から鉄刀や鉄鏃のほか土器が出土している。

円山川左岸の上郷・鶴岡・日置の丘陵上にも古墳時代中期～後期前葉の時期と想定される古墳群が多く存在している。豊岡市日高町域東端の満仲谷古墳群（65）はいくつかの尾根支群に分かれて 78 基で構成され、木棺直葬や箱式石棺といった埋葬施設が想定される。上ノ郷古墳群（66）は９基が丘陵尾根上に存在し、谷奥の黒谷酒屋谷古墳群（67）は丘陵にかけて 14 基で構成される。才谷古墳群（69）は２つの尾根上に８基と６基に分かれて存在しており､木棺直葬と想定される。西側の西ノ谷古墳群（70）は９基の古墳が尾根上に存在する。宮ノ谷古墳群（71）は９基あり、方墳であることから木棺直葬を主

とした埋葬施設と思われる。15 基で構成される菖蒲谷古墳群（76）もその立地から同様であろう。

西側に所在する法尺谷古墳群（77）は３基で構成され、調査が行われた。最高所の３号墳は直径約 20 ｍの円墳で、埋葬施設は４基あり、礫床をもつ第１主体と同一墓壙内で、木棺の横に構築された礫敷の小型箱式石棺が第２主体で、第１主体からは玉類と小型珠文鏡が出土した。第３主体は墳頂部中央に構築された礫床をもつ箱形木棺で、第４主体は第３主体の墓壙を切るかたちで半分重複している。その西～北西の丘陵突端にかけて築造されているのが姫路山古墳群（79）で、30 基ほどの古墳が丘陵上や尾根上に存在し、小型箱式石棺が存在するほか、木棺直葬墳が主体と思われる。

東側の豊岡市中郷にある深谷古墳群では、調査された１・２号墳が４世紀末～５世紀前半の方形墳で、１号墳では 10 基の埋葬施設のうち陰石と呼ばれる凝灰岩を使用した箱式石棺が１基で、破砕鏡が副葬されていた。２号墳では陰石製箱式石棺の単独埋葬で、底石にみずら風の意匠をもつ石枕が彫刻されていた。足元には斧・鉇・鉾・剣といった鉄製品があり、墓壙上から高坏・器台・低脚坏・壺などの土器が一括で出土している。北側の中郷朝日遺跡群で調査された古墳の第２主体木棺墓からは、多数の鉄鏃・鎌・刀子や鑿状の鉄製品が副葬されていた。５世紀後半～６世紀前半とされている。

円山川左岸の日高町域北端から豊岡市上佐野の丘陵上にはホーキ古墳群（55）があり、盟主墳であるホーキ古墳は全長 56 ｍの前方後円墳で、前方部の大半が開墾で失われている。葺石があり、後円部に陰石製箱式石棺が２基存在するようである。中期以前と考えられている。ホーキ古墳群は約 180 基で、径 30 ｍ程度の円墳や方墳などもあるが、小型の円墳を主体とした古式群集墳である。その北側の雷神社古墳群（58）は約 60 基で構成されている。

養父市域北端部の宿南に存在する源氏山古墳群では、中期の５世紀代には成人用の木棺墓のみとなり、４号墳が３基、５・６号墳が１基、８号墳が２基の木棺で、４世紀代の集団墓から５世紀代の成人に限った個人墓へ変化の過程が指摘されている。円山川右岸の浅間西山Ａ～Ｃ古墳群（85）のうち、Ｂ古墳群は尾根に階段状に築造された 26 基のうち 11 基が調査され、９基は木棺直葬の単葬墳、５世紀末～６世紀前半にかけて築造されたもので、墳丘平面は円形を意図している。副葬品には鉄鏃、勾玉・管玉・ガラス小玉がある。Ｃ古墳群は５基のうちＣ２号墳が調査され、６世紀前半の須恵器が周溝から出土している。

古墳時代後期

この時期には竪穴式石室や木棺直葬はきわめて少なくなり、横穴式石室が築造されるようになる。また、竪穴系横口式石室も多くなり、横穴式石室と融合して独自の発達を遂げるようである。

稲葉川流域では、上流域の訓原古墳群（２）が３ヶ所に分かれて 10 基が存在し、南端の４基のうち、４号墳が竪穴式石室墳で、出土須恵器から６世紀後半の築造と判断できる。岩倉古墳群（３）は 34 基の円墳が集中し、内部構造は大半が横穴式石室である。３号墳からは須恵器・鉄鏃・鐙・轡などが出土しており、６世紀末頃に築造された古墳群である。三方盆地に近い部分に存在する、いなんば古墳（８）は 30 ｍ× 20 ｍの方墳とされ、内部主体は横穴式石室といわれている。石の辺古墳群（11）は横穴式石室墳で、３・４号墳が残っており、１号墳は持ち送りの著しい穹窿式の横穴式石室であったといわれている。４号墳も持ち送りが著しい横穴式石室墳である。古式の横穴式石室の可能性がある。野中古墳群（12）も５基で構成される横穴式石室墳で、方墳の２号墳と３号墳は無袖式の横穴式石室墳であるが、２号墳は持ち送りが著しい石室である。盆地東部にある市場古墳群（21）は 11 基の円墳で構成され、１号墳は両袖式の横穴式石室で持ち送りが著しく、やや古式の横穴式石室であろう。他の古墳も横穴式

石室墳の可能性が高い。また、横山古墳群（19）も横穴式石室墳といわれている。

北側の谷奥に存在する大谷古墳群（23）は丘陵頂部に７基の古墳が存在し、横穴式石室といわれている。同じく谷奥に存在する定谷古墳群（27）も横穴式石室墳と考えられている古墳群で、かなり奥まった位置に存在しており、後期でも末頃の築造と思われる。南構遺跡では石室の基底部が調査されている。

円山川左岸に所在する若宮神社古墳（十二所神社古墳）（35）は単独の横穴式石室墳であるが、墳丘は削平され、天井石は残るものの、玄室上半部以外は土砂で埋もれている。日高東中学校北側の丘陵裾には道路に面して横穴式石室(41)が開口しており、内部には祠がある。山本古墳群中の１基と思われる。

円山川右岸の鶴岡の谷奥には楯縫古墳（74）が存在している。径 29 ｍの大型円墳で、墳丘後ろ側の丘陵は大きく切断されている。全長 13 ｍ、玄室幅 2.3 ｍの大型の両袖式横穴式石室を内部主体とし、石室内から須恵器・鉄刀・鉄鏃・馬具が多数出土しており、７世紀前葉に築造されたと考えられる。この時期としてはとびぬけた規模の墳丘・石室であり、被葬者像は地域のトップクラスであったことがわかる。さらに谷奥に存在するスルギ（小谷）古墳群（75）も横穴式石室墳である。

円山川左岸南部の浅倉に所在する大谷古墳群(80)は、28 基の古墳群で、横穴式石室墳とみられている。円山川対岸の日高町域南端に存在し、32 基で構成されるシゲリ谷古墳群（81）も大部分が横穴式石室墳とされ、須恵器・珠文鏡・勾玉・切子玉などの玉類・金環などが出土している。

豊岡市引野にある大師山古墳群（62）では、調査された 13 基の石室墳のうち、竪穴式石室墳１基以外はすべて竪穴系横口式石室で、６世紀前半～７世紀中頃に築造されたものである。石組の埋葬施設が大半の古墳群として、尼ヶ宮古墳群と共通性があるが、石室形態には大きな差があり、興味深い。大師山古墳群の石室には、明確な羨道部は構築せず、天井石を架けない横口部があり、石室床面が低いものである。初期のものは朝鮮半島南部からの影響と考えられる石室形態であるが、在地で横穴式石室と融合しながら独自の形態変化があるようである。なお、一画には瑪瑙などで玉生産をおこなっていた場所もあった。円山川左岸、豊岡市上佐野の上佐野古墳群（57）のうち、上佐野１号墳（56）が北近畿豊岡自動車道により調査されている。28 基程度の上佐野古墳群の最も東に位置する 15 ｍの円墳である。内部施設は片袖式横穴式石室で、石室長は約７ｍである。羨道の閉塞石から前庭部にかけての床の高さが、玄室よりも 90 ㎝高く、竪穴系横口式石室の新しい形態のものととらえられ、多数の須恵器や刀・鏃・刀子などの鉄製品、玉類・耳環が出土した。６世紀末～７世紀初頭の築造で、７世紀後半まで追葬が行われていた。

養父市域では宿南の丘陵上に広瀬古墳群（82）が存在し、１号墳が調査された結果、１墳丘に横穴式石室１、竪穴系石組埋葬施設２が発見され、横穴式石室からは装飾付須恵器、竪穴系石組埋葬施設からは玉類・鉄器・須恵器が出土した。６世紀～７世紀の古墳後期に築造されたものである。２号墳は丘陵尾根東端に位置する直径約 30 ｍの円墳で、もう少し時期が遡る可能性が高い。びくに古墳（84）は長径 16.5 ｍの楕円形の墳丘で、埋葬施設は竪穴系横口式石室である。全長 6.7 ｍ、幅 1.3 ｍの石室内には３体の埋葬があり、それぞれ須恵器転用枕と鉄刀、須恵器坏転用枕と管玉６点、須恵器坏蓋転用枕と管玉・ガラス小玉・耳環といった須恵器転用枕と副葬品が遺存していた。６世紀中頃～後半の時期である。須恵器転用枕は木棺墓にみられるが、石室にも持ち込まれていることに注目されている。円山川右岸の浅間西山Ａ古墳群は横穴式石室の３基の円墳で、６世紀後半築造のＡ３号墳は片袖式で金銅装大刀が副葬されていた。２号墳出土の鉄刀には鎺に銀象嵌で心葉形文様が施されたものであった。

古墳時代集落跡

稲葉川流域の三方盆地にある伊府遺跡では、古墳時代の遺物も出土しており、森山遺跡でも古墳時代前期土器が採集されている。浪滝遺跡では古墳時代、奈良時代の土器も出土しているが、奈良時代のものが多い。

南構遺跡では広範囲の発掘調査により古墳時代前期～後期の竪穴住居跡が数多く検出されているが、古墳時代後期以降のものが多く、掘立柱建物跡や墳丘および上部が破壊された横穴系の石室の基底面なども検出されている。古墳時代では子持勾玉なども出土している。祢布ヶ森遺跡では碧玉など玉原石と筋砥石が出土しており、古墳時代前半頃のものとみられている。

加陽遺跡では、古墳時代中期以前のピット群とともに多くの土器が出土している。養父市域の浅間土器散布地（87）では、古墳時代後期の土器が出土している。

古墳時代窯跡

八代川流域の中集落南側の谷部に存在する、昭和 39 年に調査された宮ノ谷窯跡（45）は、古墳時代後期の７世紀初め頃の窯跡で、崩落した天井の下に坏の蓋と身がまとまって出土した。また、谷を少し入った部分にあるイチゴ谷窯跡（46）は、窯体の詳細は不明であるが、採集土器から７世紀中頃の窯跡と判断される。

４．飛鳥・奈良時代以降

稲葉川上流域の山宮遺跡では、７世紀後半の飛鳥時代の竪穴住居跡３棟も調査され、いずれも竈を付設していた。また、石製紡錘車も住居跡から出土している。姫谷遺跡では発掘調査により人形・馬形多数のほか、鳥形・斎串などが出土した。９世紀代のものと考えられている。また、観音寺遺跡の正確な位置は不明であるが、かつて奈良時代の須恵器壺と和同開珎が発見されている。

定谷遺跡（28）は、発掘調査により奈良時代の掘立柱建物跡７棟以上が検出されており、「里司」の墨書土器や石銙も出土したことから、役所関係の遺跡と考えられているが、時期的には第２次国府よりも古いことから、国府関連ではない可能性が高い。また、南構遺跡は、かつて神功開宝が入った奈良時代の須恵器坏が採集された遺跡で、広範囲の発掘調査により古代の遺構・遺物も検出されている。緑釉陶器・権形土製品・銙帯・和同開珎などが出土している。

祢布ヶ森遺跡では、発掘調査により検出された平安時代の遺構は、規則性をもって配置された掘立柱建物跡が広範囲に存在し、四脚門をもつ塀跡もみつかっている。また、青磁や白磁の輸入陶磁器のほか、硯・墨書土器なども発見されている。多量に出土した木簡には、「気多郡」をはじめ「朝来郡」・「養父郡」・「二方郡」・「七美郡」の記載や、計帳や税関係の題籤軸が含まれていることから、但馬国府跡と判明している。木簡に記載された年号は９世紀代のもので、『日本後記』の延暦 23（804）年正月条に記された、但馬国府移転後のものであることから、第２次但馬国府跡と判断されている。

深田遺跡（36）・カナゲ田遺跡（37）では、調査により平安時代前期（９～ 10 世紀）の遺物が多量に発見され、井戸も発見された。木製品の遺存状態が良く、皿や曲物・履・斎串・人形など官衙的色彩が強いことが指摘され、墨書土器に他郡名や他郡本貫地の氏族名のほか但馬国分寺跡出土品の氏族名と類似すること、木簡には題籤が多いことから文書行政を行う機関が付近に存在し、その記述内容が一郡の権限を越えるものであることから、その官衙が国府である可能性が高く、場所が極めて近い位置にあることが指摘されている。また、隣接する川岸遺跡（34）でも、調査により溝内から多量の人形・馬形・

斎串が出土したことから、国府関連の祓所と考えられている。

但馬国分寺跡（33）は、塔跡の礎石が残されているが、その東で金堂跡が調査され、さらにその南では中門跡が検出されている。金堂と中門を回廊でつなぐ伽藍配置であることが判明し、築地跡も発見されている。築地塀に伴う溝からは木簡が多数出土し、年号や施設名などが記されていた。また、金堂の北東では巨大な井戸も発見され、金堂の東では炉跡や坩堝･鞴羽口などが発見され、木簡に記された「鋳所」と判断され、風鐸などの青銅製品を鋳造していた。一方、但馬国分尼寺跡（39）は、現在は２基の礎石を残すのみであるが、伊能忠敬の測量隊の記録では７基あったと記されている。礎石以外の遺構は不明であるが、日高東中学校建設時の調査では礎石と軒丸瓦・墨書土器・風字硯が出土している。

円山川沿いには権現遺跡（54）があり、奈良～平安時代の須恵器稜埦と和鏡が出土している。北側の上石遺跡（53）では、発掘調査により奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡 14 棟、井戸３基などが検出されている。建物跡は整然とした配置ではなく、井戸もランクが低い型式のものであることから、国府と直接結びつくものではなさそうだが､緑釉陶器や灰釉陶器や墨書土器･丹塗土器のほか稜埦や硯といった官衙関連の遺物が出土しており、国府関連施設と推定されている。

三方盆地には７世紀後半の窯跡があり、清坂古窯跡群（７）では２基の窯跡が一部調査された。谷の奥にも須恵器が採集され、他にも窯跡の存在が推定されている。小山窯跡（10）は小山古墳群調査時に発見されたもので、煙道部分のみ調査されたことにより、時期は確定できないが、清坂窯跡群と同じ時期の可能性がある。

円山川右岸の上郷の谷中には、奈良谷１・２号窯跡（68）があり、７世紀末の瓦窯２基が調査されている。西側の日置の谷中にも茅谷窯跡（78）が発見されており、調査により窯壁片とともに須恵器の坏蓋・坏身・壺・甕などが出土している。８世紀の奈良時代の窯跡であるが、窯体は検出されていない。

北部の奈佐川上流域の小谷に所在する小河江窯跡（５）は、調査の結果、坏や蓋を中心とした奈良時代中頃の須恵器窯であることが判明し、単独で存在していたようである。

なお、豊岡市大市山遺跡では、調査により、丘陵上にある礎石建物の礎石の下から和同開珎・万年通宝・神功開宝といった地鎮の銅銭 32 枚が出土した。皇朝十二銭の古い３種であることから、建立時期は８世紀末と推定されている。

養父市域の浅間土器散布地では、墨書土器１点を含む奈良・平安時代の土器が出土している

主要参考文献

『兵庫の地質』兵庫県　1996 年

『日高町史資料編　考古編』1980 年

『兵庫の古代遺跡』下　神戸新聞総合印刷　近刊予定

第２章　調査の経緯・経過と体制

第１節　発掘調査に至る経緯と経過

国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所が事業を実施する、兵庫県中央東端に位置する丹波市春日町から兵庫県北部北東端の豊岡市までを結ぶ高規格幹線道路、一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道のうち、兵庫県北部中央付近の養父市八鹿町までを結ぶ路線はすでに開通し、養父市八鹿町の八鹿氷ノ山インターチェンジから豊岡市日高町の日高神鍋高原インターチェンジまでの八鹿日高道路が平成 29 年３月に開通している。引き続き、豊岡市上佐野の（仮称）豊岡南インターチェンジまでの日高豊岡南道路、豊岡市戸牧までの豊岡道路の整備が進められている。

１．分布調査

今回報告する尼ヶ宮古墳群は豊岡市日高町水上に所在し、日高豊岡南道路の範囲に含まれる。この道路建設予定地のうち、埋蔵文化財の分布調査は兵庫県教育委員会により平成 21（2009）年度に行われた（遺跡調査番号 2009307）。尼ヶ宮古墳群はすでに周知の埋蔵文化財包蔵地として、兵庫県遺跡地図に遺跡番号 610549 ～ 610560・610673 ～ 610682・610684 ～ 610689 で登録されていたが、八鹿日高道路、日高豊岡南道路内№.24 地点として調査対象となった。

分布調査の所見では、事業地内で３つの群が認められ、尾根上などに各５基程度の古墳が群をなす分布状態であるとされ、本発掘調査の結果に近い。ただし、古墳の立地から、古墳時代終末期の古墳である可能性が指摘されたが、本発掘調査の結果とは大きく異なっていた。そして、この時期の古墳は低墳丘の小規模な古墳である場合が多いことから、尾根上や平坦面にさらに古墳が所在する可能性があるとして、古墳の数が増える可能性の指摘に加え、工事用道路部分についても、注意すべきとの指摘もなされた。

調査主体　兵庫県教育委員会

調査担当　兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部

　　調査第１班　吉田 昇・渡辺 昇・西口圭介・長濱誠司・上田健太郎

調査期間　平成 22（2010）年３月 16 日～３月 18 日

２．確認調査

確認調査は、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所長からの、平成 24 年８月６日付け国近整豊二調第 21 号の依頼により、平成 24 年度に実施（遺跡調査番号 2012124）された。№.24 地点の尼ヶ宮古墳群については、３箇所についてトレンチ名を１・３・４とし、１については枝番号により１－１～１－４の４本のトレンチ、３は３－１と３－２の２本、４も４－１と４－２の２本をそれぞれ設定し、調査が行われた。１は本発掘調査時の１区、３は同じく２区、４は３区にあたる部分である。なお、確認調査の２は１区から山道を挟んだ南側の小規模な突端部分であったが、遺構・遺物は検出されていない。

調査は人力により掘削を行い、遺構の有無を確認し、写真撮影・土層断面図等の実測を行った。

調査の結果、１トレンチのうち、１－１トレンチの南端で土坑状の落ち込みが検出され、埋葬施設の

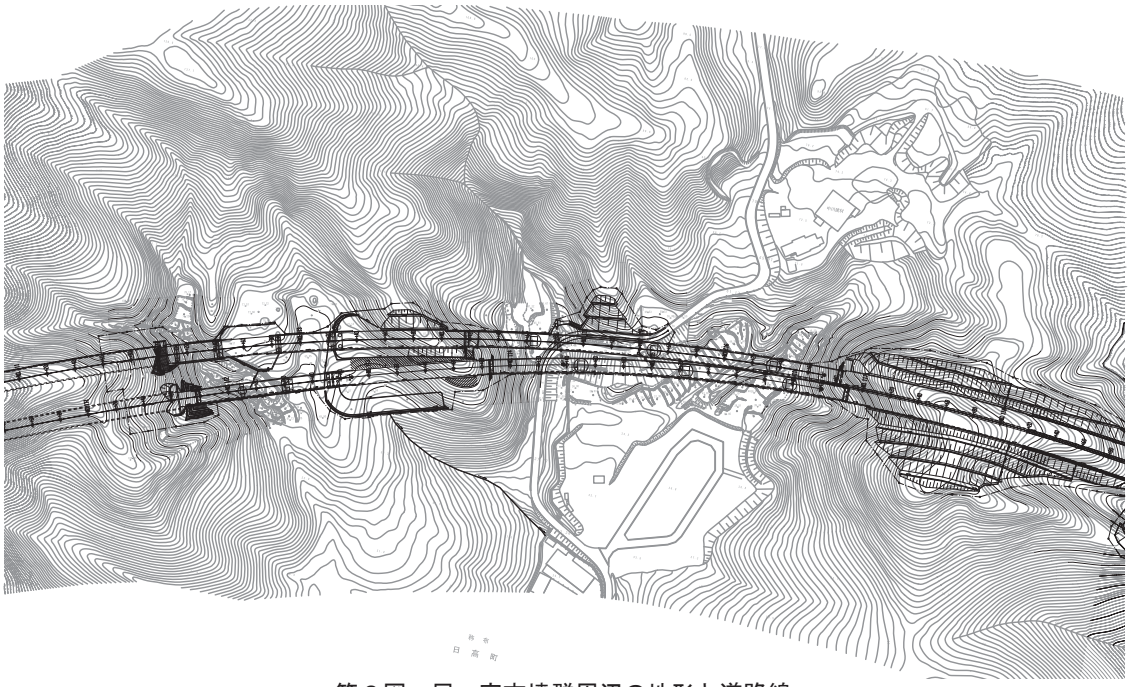
可能性が指摘された。また、墳裾と思われる変化点や北側にも墳丘が確認され、南側で須恵器・土師器片が出土した。このトレンチは 11 号墳から 13 号墳にかけての部分にあたり、落ち込みは 13 号墳の埋葬施設にあたり、本発掘調査開始時点では埋葬施設の石組みの一部が露出していた。また、表面観察で 11 号墳はかなり墳丘が高く、13 号墳も一見して墳丘と認められる状況であり、確認調査で墳裾とされた部分には 13 号墳の周溝が存在していた。すなわち､確認調査では表土からあまり深く掘削されなかったことから、周溝の確認や石組の確認には至っておらず、ほぼ現況の観察と同じ所見であった。

１－２トレンチは 12 号墳墳頂部から 11 号墳方向に設けられたトレンチであったが、ここでも 12 号墳の周溝は確認されておらず、11 号墳・12 号墳ともに現況で墳丘高が高く、一見して古墳と判断できるものであり、確認調査の所見も現況で判断したものと変化がない。１－３トレンチは 11 号墳の墳裾近くから南東方向に設けられ、14 号墳が存在していたがこの周溝も確認されなかった。13 号墳墳頂付近から南方向に設けられた１－４トレンチでも、16 号墳の周溝が確認されておらず、古墳状隆起が自然地形と判断されていた。１トレンチでは確認調査の掘削深度や遺構検出があまく、判断の間違いが多く認められた。

３トレンチのうち、９号墳部分の中央を縦断する３－１トレンチでは現状で古墳と判断できるほど墳丘高が存在しており、確認調査では周溝は確認されず、10 号墳の周溝も確認されなかった。３－２トレンチではすでに８号墳の埋葬施設が露出していたため古墳と判断できていたが、周溝は確認されなかった。３トレンチについても、確認調査の結果所見は現況所見と何ら変わるところがなかった。

４トレンチは、２～４号墳を縦断するように設定されたトレンチであったが、現況において３・４号墳は階段状の古墳と認識でき、確認調査の成果も得られるものはなく、２号墳～４号墳に伴っていた各周溝も確認されなかった。また、２号墳部分に設定された４－２トレンチにおいても、本発掘調査で検出した２号墳の区画溝が、確認調査では未確認であった。

以上のように、平成 24 年に実施された確認調査は、古墳と判断する根拠の認識がきわめて曖昧で、精度に大きく欠けるものであった。このため、本発掘調査を行うために現地において現況を観察した際には、確認調査所見とは大きく異なる結果になることがほぼ確実であると判断できた。



第２図　尼ヶ宮古墳群周辺の地形と道路線

第３図　尼ヶ宮古墳群調査区位置図

開発事業名　一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路

事業者名　国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所

調査主体　兵庫県教育委員会

調査担当　（公財）兵庫県まちづくり技術センター　埋蔵文化財調査部

調査第２課　渡辺 昇・大本朋弥・菅澤敏弘

調査種別　確認調査

調査期間　平成 24（2012）年 11 月 9 日～ 12 月 20 日

調査面積　167 ㎡

３．本発掘調査

本発掘調査は、確認調査の結果をうけるかたちで、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所長からの依頼（平成 25 年４月５日付け国近整豊二調第５号）により実施したもので、兵庫県が設定した遺跡調査番号は 2013020 である。

本発掘調査の経過

尼ヶ宮古墳群は丘陵上に位置し、本発掘調査区は古墳の分布状況から３つの調査区に分かれ、それぞれが小尾根上や台地上に位置する。１区は３つの調査区のうち南端にあり、台地状地形上に存在する支群で、工事用道路が本線部分に沿った北側の丘陵側に計画されていたことから、この部分も含めて今回の調査範囲とすることとなっていた。２区および３区については工事用道路予定部分に古墳などの埋蔵文化財が発見されていないことから、工事用道路部分の調査は１区に限定することとした。２区は中央の低く幅の狭い尾根にあたる部分、３区は最も北側にある尾根稜線上部分で、３区の古墳は但馬地域や丹後地域で特徴的にみられる階段状に構築された古墳群である。

本発掘調査を開始した時点で、現地の状況と確認調査結果を対照したところ、調査区外の事業地内にほぼ確実に古墳と判断できる隆起部分が複数箇所存在していたことから、現況地形測量時に詳細な観察を行い、加えて、当初設計の調査区対象地区内および当初設計範囲外も含めた部分のうち、古墳と想定される部分について、古墳に伴う周溝や区画溝、墳丘盛土、埋葬施設の有無を主眼として、トレンチ調査を実施し、確証をもって本発掘調査の対象範囲を拡大することとした。

その結果、古墳と想定したすべての部分で周溝や区画溝を検出し、土器も出土したことから、当初、古墳９基が対象であったが、工事用道路敷設による追加調査部分の１基を除いても、全体で５基の古墳が新たに発見され、工事用道路部分も含めて合計で 15 基の古墳を調査することとなった。

１区は、当初設計では幅 20 ～ 26 m、延長 39 mの調査区で、14 号墳部分も含まれた 11 号墳～ 13 号墳の範囲であったが、新たに４基の古墳を確認して７基となったことから、15 号墳～ 17 号墳も含めて調査範囲として拡張した結果、面積 1,102 ㎡の歪な平面形状となった。

中央部の２区は新たに１基の古墳（10 号墳）を確認して３基になったことから、１区と同様に範囲を拡張した結果、幅 16 ～ 20 m、延長 42 m、面積 797 ㎡の長方形に近い平面形状の調査区となった。

北側の３区でも新たに１基の古墳（２号墳）を確認して５基になったことから、幅３～19 m、延長 79 m、面積 1,098 ㎡の細長い平面形状の調査区となった。

１～３区を合計した調査面積は 2,997 ㎡である。

当初木棺直葬墳を想定した古墳９基の調査が、石組埋葬施設８基を含む古墳 15 基の調査となった。

古墳数や内容から２倍近い手間がかかる調査となったものの、受注業者の協力も得ることができ、大急ぎで調査を進めた結果、調査工事の期間は工期が当初 12 月 16 日であったが、１月 16 日までの実施となり、約１箇月延長して終了することができた。

調査の成果を広く知ってもらうための現地説明会は、12 月 23 日（天皇誕生日）に開催し、約 35 名の参加者があった。た。また､地元に近い八代地区公民館（コミュニティセンター）からの依頼により、2014 年２月に尼ヶ宮古墳群発掘調査解説の講座と現地見学会を開催した。

本発掘調査の方法

調査は、いずれの調査区も国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所による樹木伐採の後、人力により表土の腐植土から古墳墳丘盛土遺存部分まで掘削したのち、古墳墳頂部を埋葬施設検出面まで掘削し、同時に検出した古墳周溝についても人力により掘削した。掘削に伴う排土については、ベルトコンベアーを使用して調査区脇に横置きとした。埋葬施設については、内部の埋土を掘削すると同時に埋土の土層断面や埋葬施設全体の写真撮影および平面・側面・断面等の実測を行い、石室・石棺については実測ののち解体して墓壙を検出・掘削の後、個別の写真撮影・実測を行った。さらに、墓壙の調査後は墳丘盛土を人力により掘削除去して古墳築造時の旧地表を確認した。

空中写真測量については、調査前の測量が当初設計に計上されていなかったため、平板を使用して地形測量を実施した。埋葬施設内の掘削完了後には、古墳の遺存墳丘も含めてヘリコプターによる空中写真測量を実施したが、調査の進行状況の都合により２回に分け、11 月８日に１・２区、11 月 29 日に３区の測量を実施した。なお、古墳墳丘除去後の旧地形の測量には、電子平板を用いて実施した。

本発掘調査の体制

開発事業名　一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路

事業者名　国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所

調査主体　兵庫県教育委員会

調査担当　（公財）兵庫県まちづくり技術センター　埋蔵文化財調査部

調査第１課　岸本一宏・垣内拓郎

現場補助員　大木拓巳（大手前大学学生）

調査種別　本発掘調査

調査期間　平成 25（2013）年８月５日～平成 26（2014）年１月 16 日（実働 97 日）

調査面積　2,997 ㎡

調査工事請負業者　有限会社荒田造園　現場代理人・主任技術者：荒田広樹

調査工事下請業者　安西工業株式会社　主任技術者：西本英二

空中写真測量受託業者　株式会社リオプラン　主任技術者：井根康之　現場代理人：古川幸作

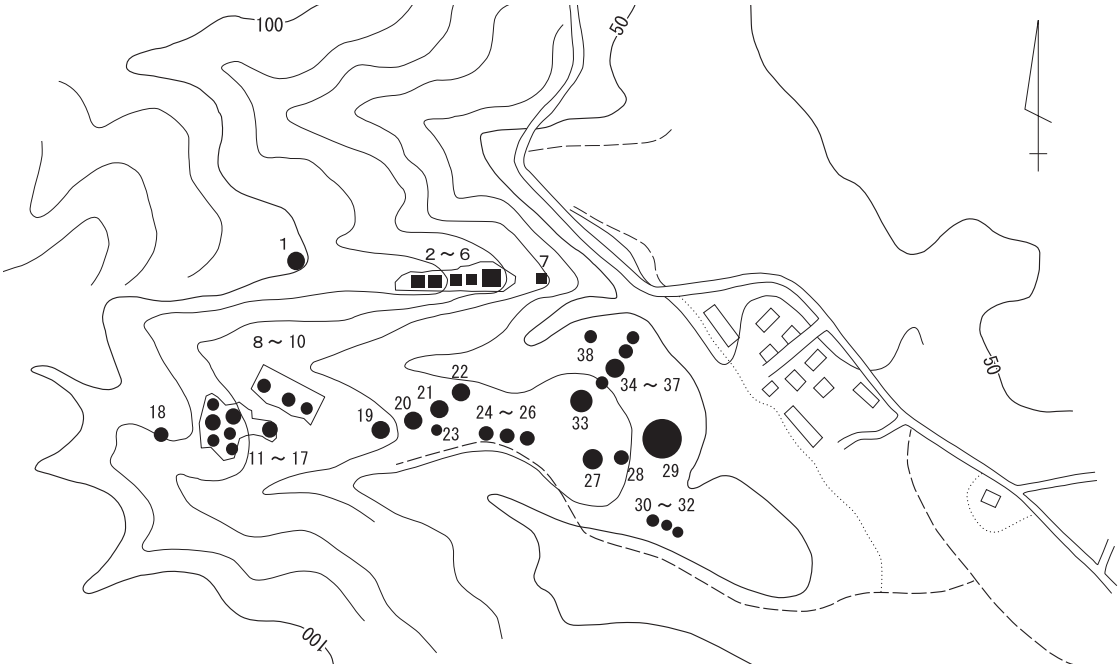
４．尼ヶ宮古墳群について

本発掘調査の過程で古墳名（古墳番号）を確定してゆくことが必要となった。分布調査・確認調査時点では問題点として指摘されていなかったが、発掘調査を実施している古墳群が、兵庫県教育委員会による平成 23（2011）年３月発行の『兵庫県遺跡地図』の尼ヶ宮古墳群の所在位置には記載されていないため、市教育員会に問い合わせたところ、遺跡地図の尼ヶ宮古墳群の記載位置がずれていることが判明した。本発掘調査時には地区ごとに古墳番号で仮称していたが､報告書作成までに古墳名（古墳番号）

を確定するため、尼ヶ宮古墳群の分布状況を把握するための現地踏査が必要となった。そこで、本発掘調査現場作業最終日の平成 26（2014）年１月 14 日午後に尼ヶ宮古墳群の分布調査を実施した。当日は積雪が約 20 ㎝あったものの、古墳分布状況の踏査・観察・判断には支障がなかった。

踏査結果の分布地図を新たに作成したが、古墳数が増加したこともあり、古墳名（古墳番号）も変更することで豊岡市教育委員会と合意できたため、本発掘調査で呼称した古墳名（古墳番号）と調整しながら変更した。

このことにより、本発掘調査時仮称の３区１号墳～５号墳は２号墳～６号墳と確定し、２区の１号墳～３号墳は８号墳～ 10 号墳、同様に１区の１号墳～７号墳は 11 号墳～ 17 号墳と確定した。



第４図　尼ヶ宮古墳群分布状況（番号は古墳名称番号）

遺跡番号	古墳番号		墳形・規模	本発掘調査部分		遺跡番号	古墳番号		墳形・規模	備　考
	新番号	旧番号		地区	調査仮番号		新番号	旧番号		
610549	１号墳	１号墳	円 13 m			610678	18 号墳	21 号墳	円　５m	
610550	２号墳	２号墳	長方 16 m	３区	１号墳	610679	19 号墳	22 号墳	円　９m	
610551	３号墳	３号墳	長方 10 m		２号墳	610680	20 号墳	23 号墳	円 10 m	
610552	４号墳	４号墳	方　６m		３号墳	610681	21 号墳	24 号墳	円 10 m	
610553	５号墳	５号墳	方 7.5 m		４号墳	610682	22 号墳	25 号墳	円 10 m	
610554	６号墳	６号墳	長方 12 m		５号墳	610683	23 号墳		円　５m	もと遺跡番号欠番
610555	７号墳	７号墳	方　６m			610684	24 号墳	26 号墳	円　６m	
610556	８号墳	８号墳	円 11.5 m	２区	１号墳	610685	25 号墳	27 号墳	円　６m	
610557	９号墳	９号墳	円 9.5 m		２号墳	610686	26 号墳	28 号墳	円　６m	
610558	10 号墳	10 号墳	円　７m		３号墳	610687	27 号墳	29 号墳	円 12 m	
610559	11 号墳	11 号墳	円 13 m	１区	１号墳	610688	28 号墳	30 号墳	円 10 m	
610560	12 号墳	12 号墳	円 12 m		２号墳	610689	29 号墳	31 号墳	円 18 m	横穴式石室ではない
610670	39 号墳	13 号墳	円 10 m			611502	30 号墳	－	円　７m	新規追加
610671	40 号墳	14 号墳	記載なし			611503	31 号墳	－	円　７m	新規追加
610672	41 号墳	15 号墳	円 10 m			611504	32 号墳	－	円　５m	新規追加
610673	13 号墳	16 号墳	円 10 m	１区	３号墳	611505	33 号墳	－	円 12 m	新規追加
610674	14 号墳	17 号墳	円　９m		４号墳	611506	34 号墳	－	円　６m	新規追加
610675	15 号墳	18 号墳	円 10 m		５号墳	611507	35 号墳	－	円　８m	新規追加
610676	16 号墳	19 号墳	円 10 m		６号墳	611508	36 号墳	－	円　６m	新規追加
610677	17 号墳	20 号墳	円 8.5 m		７号墳	611509	37 号墳	－	円　６m	新規追加
						611510	38 号墳	－	円　６m	新規追加

第２表　尼ヶ宮古墳群遺跡番号・古墳番号対照表

第２節　出土品整理作業の経過と体制

１．出土品整理作業の経過

尼ヶ宮古墳群の出土品整理作業は、平成 27 年度から開始し、平成 30 年度まで実施した。出土品整理作業は国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所から兵庫県教育委員会への依頼によるもので、年度ごとの依頼文書番号は以下のとおりである。

平成 27 年度　平成 27 年３月 20 日付け国近整豊二調第 35 号

平成 28 年度　平成 28 年１月 18 日付け国近整豊二調第 18 号

平成 29 年度　平成 29 年２月 22 日付け国近整豊二調第 43 号

平成 30 年度　平成 30 年１月 29 日付け国近整豊計第 67 号

兵庫県教育委員会は出土品整理作業を公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターに委託して、兵庫県立考古博物館で実施した。年度ごとの整理作業工程は以下のとおりである。

平成 27 年度　水洗い、ネーミング、接合・補強、金属器保存処理

平成 28 年度　実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、図面補正、分析鑑定、金属器保存処理

平成 29 年度　トレース

平成 30 年度　レイアウト、報告書印刷

平成 27 年度の作業は、尼ヶ宮古墳群出土土器について、土器の水洗い作業、土器それぞれの出土年月日、出土古墳名や出土位置および土器の種類や所見などを出土単位ごとにネーミング台帳として表に整理し、遺跡調査番号(2013020)と台帳に記載した出土単位の番号を土器に書き込む作業を行った。また、出土土器は破片となっていたものが多く、それらの接合作業や、欠損している部分のモルタル補強を実施した。尼ヶ宮古墳群では鉄刀や鉄鏃、刀子といった鉄製品の出土量がやや多く、長さ１ｍ近い鉄刀も出土していたことから、金属器保存処理作業はすべての鉄製品についての出土状態での形状観察、エックス線写真撮影、脱塩作業を実施したが、銹取り作業は大型の鉄刀を除いた、やや小型の鉄器を中心に行い、その後樹脂含浸作業を実施した。

平成 28 年度の作業は、鉄刀についての銹取り、樹脂含浸といった工程を実施した。また、土器・石製品・鉄器について実測および一部の須恵器の拓本作業後に、モルタルを使用して土器の欠損部分の復元作業を行い、遺物写真撮影を実施した。遺物写真撮影は株式会社クレアチオに委託して、中本照雄氏が撮影を行った。撮影した遺物写真は台帳を作成し、デジタル写真は名称を付けて出土古墳・出土場所や種類ごとに整理を行った。また、実測図の修正や、現場で作成した実測図・測量図について整理や補足・修正を実施した。

分析鑑定は、出土した石製品や８号墳の石棺内に敷き詰められていた礫についての石材鑑定と、12 号墳墳丘盛土内下半部出土の炭化物の放射性炭素年代測定について、それぞれ株式会社パレオ・ラボ、株式会社加速器分析研究所に委託して実施した。石材については、棺内に敷かれた礫はその形状から川原石であることは判明していたが、石材の種類による選択の有無や採取場所が近隣かどうかを判断するために実施した。放射性炭素年代測定は、出土した炭化物が古墳築造時に盛土内に混入したものであることから、古墳築造時の考古学的年代と放射性炭素測定年代との整合が図れるかどうかを確認するために実施した。このことによって、古墳築造時の現地の状況の一端が判明するものと思われた。

平成 29 年度には、発掘調査現地で作成した実測図や測量図、出土品整理作業により実施した遺物実

測図のトレースを行った

平成 30 年度には、報告書原稿執筆を行い、トレースした遺構・遺物の図面や、発掘調査現地で撮影した写真･空中写真および、空中写真測量図･遺物写真のレイアウト作業を経て、報告書印刷を実施した。

２．出土品整理作業の体制

尼ヶ宮古墳群の出土品整理作業は、上記のように４年間を費やして実施したが、４年間を通じた出土品整理作業の体制は下記のとおりである。

事業主体　兵庫県教育委員会

実施場所　兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中１丁目１番１号）

整理担当　公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター

整理担当職員　（工程管理）　菱田淳子　深江英憲　長濱誠司

（作業指示）　岸本一宏

（金属器保存処理）　岡本一秀

整理作業担当嘱託員（実測・トレース・レイアウト）　前田陽子　古谷章子　森本貴子　平宮可奈子

（ネーミング・接合補強・復元）　今村直子　吉村あけみ　上田沙耶香

高橋 満　山下和美　河合たみ　太田泉穂

（金属器保存処理）　大前篤子　桂 昭子　梶原奈津子　佐々木愛

石田典子

遺物写真撮影　株式会社クレアチオ　中本照雄

分析鑑定　株式会社パレオ・ラボ　藤根 久

株式会社加速器分析研究所

第３章　調査の結果

第１節　３区（２～６号墳）の遺構と遺物

１．概要（第５～７図、巻頭図版１・３、写真図版２・４・５）

３区は３箇所の調査区のうち最も北に位置し、東西にのびた痩せ尾根稜線に位置している。確認調査時には４基の古墳の存在が確認されていたが、本調査時には西端の平坦面にもう１基発見した。本尾根にはさらに２基の古墳が存在しており、１号墳は３区の西方約 80 ｍの標高 100 ｍ付近に円墳１基、６号墳の東側約 30 ｍの尾根稜線下で標高 72 ｍあたりに存在する階段状の方墳の７号墳がある。

３区内の古墳群は２～６号墳の５基で、調査前での２号墳の墳頂部は標高 89.6 ｍの最も高い所に位置し、最も低い６号墳墳頂部の標高は 83.4 ｍで、その差 6.2 ｍの間に３基が存在している。道路工事は下り車線で標高約 80 ｍ、上り車線では約 75 ｍまで開削される予定であることから、３区内のすべての古墳が削平されることになる。

２～６号墳の５基は連続して構築され、階段状を呈しており、いずれも尾根山側にある古墳の墳丘裾部に直線的な区画溝を設けており、墳形は矩形を意図していたと判断される。ただし、区画溝以外の部分では墳裾は不明である。埋葬施設は墳頂平坦面のほぼ中央部に営まれた木棺墓で、６号墳のみ２基、その他は単一の埋葬施設となっている。埋葬施設の主軸方向は尾根稜線とはほぼ直交方向であるが、６号墳のＳＸ３６１は尾根稜線直交とはずれている。

調査は全体的に表土から 20 ㎝程度の深さに掘削し、その面で埋葬施設等の遺構を検出した。表土である腐植土は５～ 10 ㎝程度の厚さで、その下層は地山の土壌化層となっており、いずれの古墳でも明確な盛土は認められなかった。墳頂部に盛土は行わず、墳丘は区画溝の掘削残土により墳頂隅部を整えた程度であったと推測され、墳丘斜面部においても盛土は認められなかった。

埋葬施設は箱形木棺を直葬したもので、但馬地域では弥生時代から数多く認められる。副葬品としては、２号墳の棺内より長さ約 93 ㎝の鉄刀、３号墳の棺内からは鉄刀片と鉄鏃６点以上および鉄刀子片があり、棺上には土師器が置かれていた。６号墳の棺内法長約 4.1 ｍのＳＸ３６１棺内からは鉄鎌が１点認められたにすぎず、長大な木棺でありながら出土した副葬品は僅かであった。

２．２号墳（第９～ 13 図、巻頭図版４、写真図版６～８）

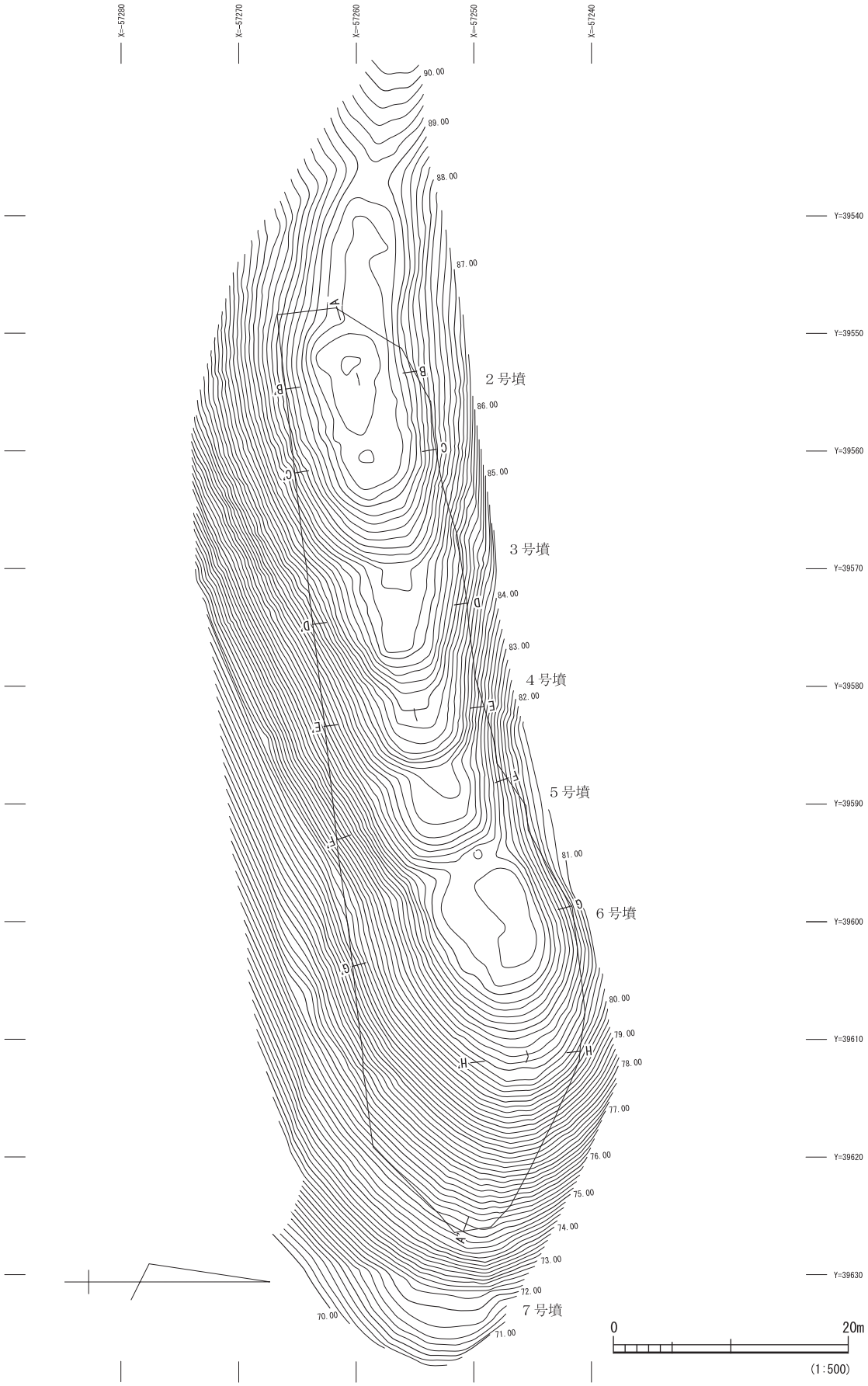
位置と検出状況

３区の西端部に位置し、確認調査では確認できなかったものであるが、調査前の現況でほぼ水平な平坦面がひろがっていたことから、埋葬施設が存在することは容易に想定できた。表土掘削の結果、山側に区画溝を有する木棺直葬墳であることが判明した。２号墳墳頂最高所は調査前で標高 89.8 ｍを測り、東側斜面下に隣接する３号墳墳頂部よりも約 2.4 ｍ高い。

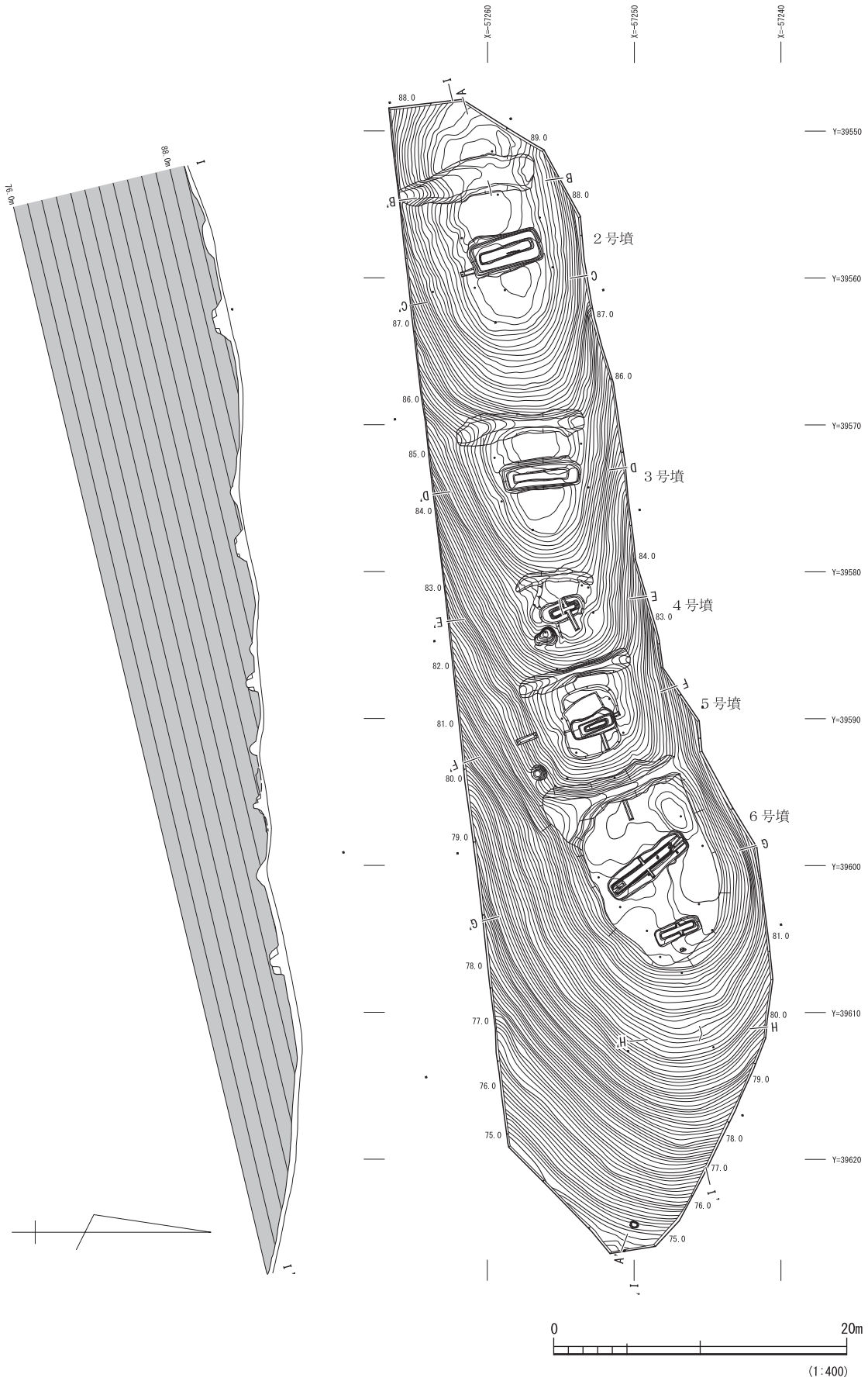
形態・規模

墳頂部は水平に近い平坦面で、南北約６ｍ、東西は区画溝東端から約 9.5 ｍの長方形に近い。墳形も長方形に近いが、斜面の加工はほとんどなされておらず、３号墳との境以外では墳裾の位置は明確ではない。２号墳の区画溝底東端から３号墳区画溝西端までの距離は約 16.0 ｍである。

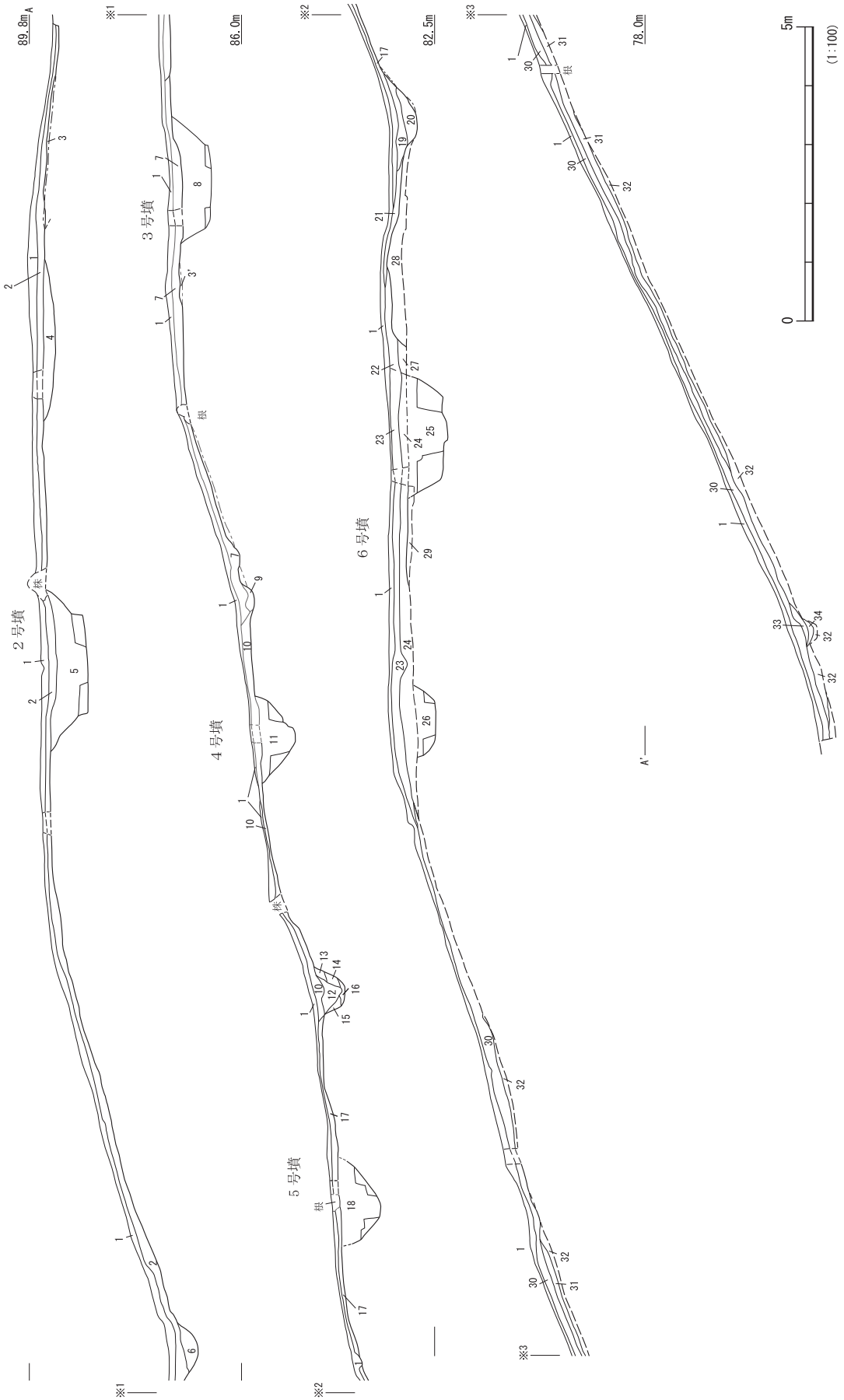
区画溝は尾根稜線と直交方向で、溝中央部での最大幅は 2.6 ｍ、検出面からの深さ約 20 ㎝で、長さ


X=-57280
X=-57270
X=-57260
X=-57250
X=-57240
Y=39540
Y=39550
Y=39560
Y=39570
Y=39580
Y=39590
Y=39600
Y=39610
Y=39620
Y=39630
90.00
89.00
88.00
87.00
86.00
85.00
84.00
83.00
82.00
81.00
80.00
79.00
78.00
77.00
76.00
75.00
74.00
73.00
72.00
71.00
70.00
２号墳
３号墳
４号墳
５号墳
６号墳
７号墳
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
0
20m
(1:500)

第５図　３区調査前地形


X=-57260
X=-57250
X=-57240
Y=39550
Y=39560
Y=39570
Y=39580
Y=39590
Y=39600
Y=39610
Y=39620
２号墳
３号墳
４号墳
５号墳
６号墳
88.0
89.0
87.0
86.0
85.0
84.0
83.0
82.0
81.0
80.0
79.0
78.0
77.0
76.0
75.0
76.0m
0
20m
(1:400)

第６図　３区調査後地形



第７図　３区東西畔土層断面

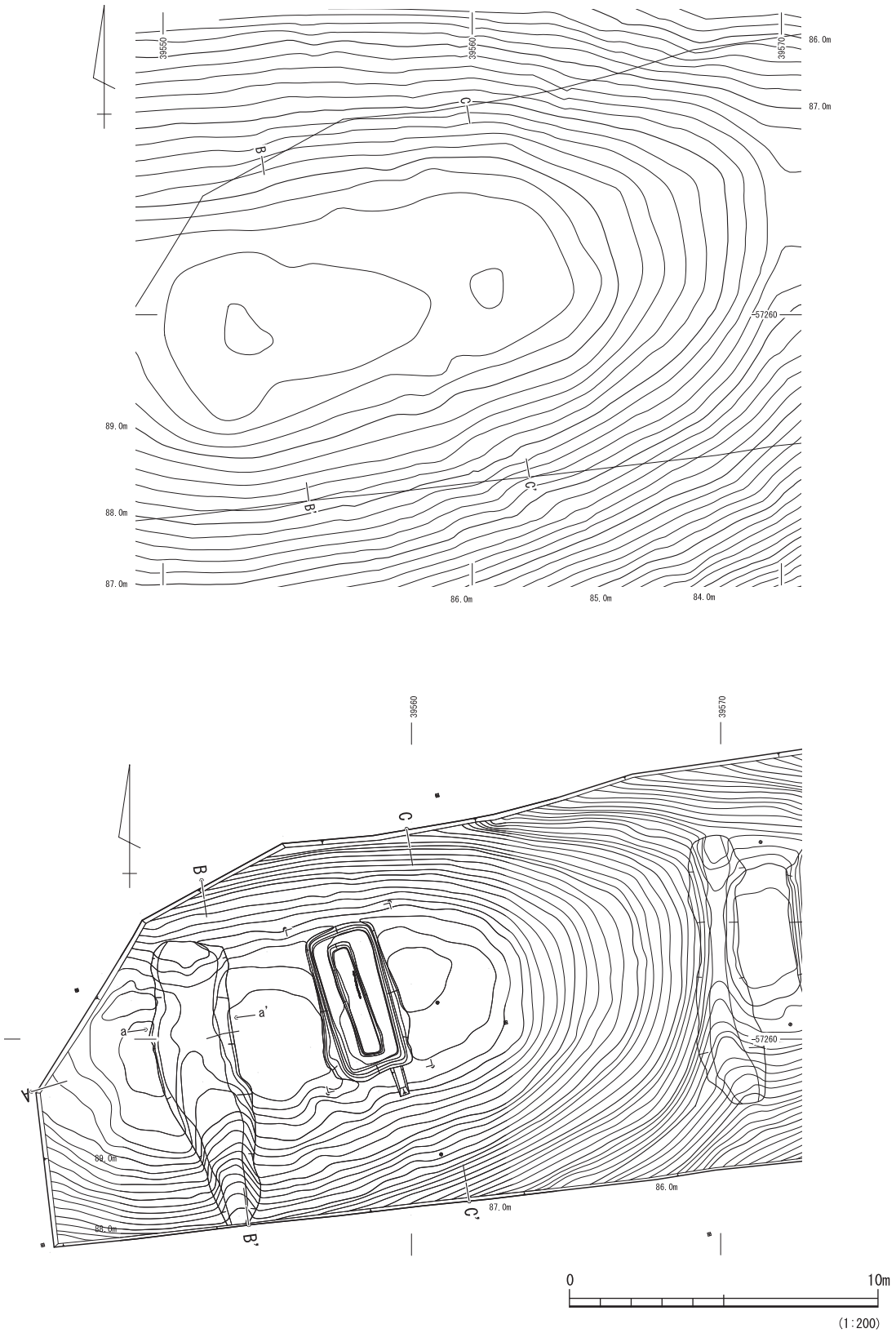
１．表土（腐植土）
２．7.5YR3.6/2 灰褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む．やや粘質．
　　地山岩盤土壌化層に腐植土が混じった層．
３．7.5YR6/6 橙色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径 10 ㎝大の軟質大礫を 25％程度含む．粘質で軟質の岩盤．
３’7.5YR5.2/6 明褐色 軟質岩盤．
４．２号墳区画溝埋土．
５．２号墳主体部墓壙．
６．7.5YR3.4/2 黒褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を含む．粘質．３号墳区画溝埋土．
７．7.5YR4/2 灰褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂～極粗粒砂を含む．粘質．第２層とほぼ同じ．
８．３号墳主体部墓壙．
９．10YR4.4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を少量含む．やや粘質．
　　４号墳区画溝埋土．
10．7.5YR3.6/2 灰褐色 極細粒砂で細粒砂を多く含み中粒砂～細礫を少量含む．
　　地山岩盤土壌化層に腐植土が混じった層．
11．４号墳主体部墓壙．
12．8YR4/2 灰褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．やや粘質．５号墳区画溝埋土．
13．9YR4/2 灰黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を含み直径１㎝大の中礫を微量含む．やや粘質．
　　５号墳区画溝埋土．
14．10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を含む．５号墳区画溝埋土．
15．10YR5.7/4 にぶい黄橙色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．粘質砂層に近い．５号墳区画溝埋土．
16．10YR5.4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で極粗粒砂～直径１㎝大の中礫を少量含む．
　　５号墳区画溝埋土．
17．10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～極粗粒砂を少量含む．粘質．第２層とほぼ同じ．
18．５号墳主体部墓壙．
19．10YR4.8/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を多く含む．粘質．６号墳区画溝埋土．
20．2.5Y4/3.5 オリーブ褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径５㎝大の中礫を含む．やや粘質．６号墳区画溝埋土．
21．旧 17 層 不明．
22．2.5Y6/4 にぶい黄色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂が混じる．中粒砂～細礫を少量含む．粘質砂層に似る．
23．10YR5/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．粘質．
24．10YR5/2.6 にぶい黄褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．粘質．６号墳ＳＸ３６１墓壙埋土．
25．６号墳ＳＸ３６１墓壙埋土．
26．６号墳ＳＸ３６２墓壙埋土．
27．2.5Y6/3 にぶい黄色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂が混じる．中粒砂～細礫を含む．粘質砂層に似る．
28．2.5Y6/2 灰黄色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂が混じる．中粒砂～直径５㎝大の中礫を含む．岩盤風化土．
29．極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中礫を多く含む．やや粘質．岩盤風化土．
30．7.5YR4/2.8 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．地山と腐植土が混じり合った層．粘質．
31．7.5YR4.6/7.5 明褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．粘質．地山の土壌化層．
32．5YR4.6/7.5 明赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径１㎝大の中礫を少量含む．粘質．地山．
33．7.5YR4/5 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を含む．粘質．
34．6YR4/7 赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径５㎜大の中礫を少量含む．炭化物を多く含む．粘質．
　　土坑状落ち込み埋土．

第８図　３区東西畔土層名

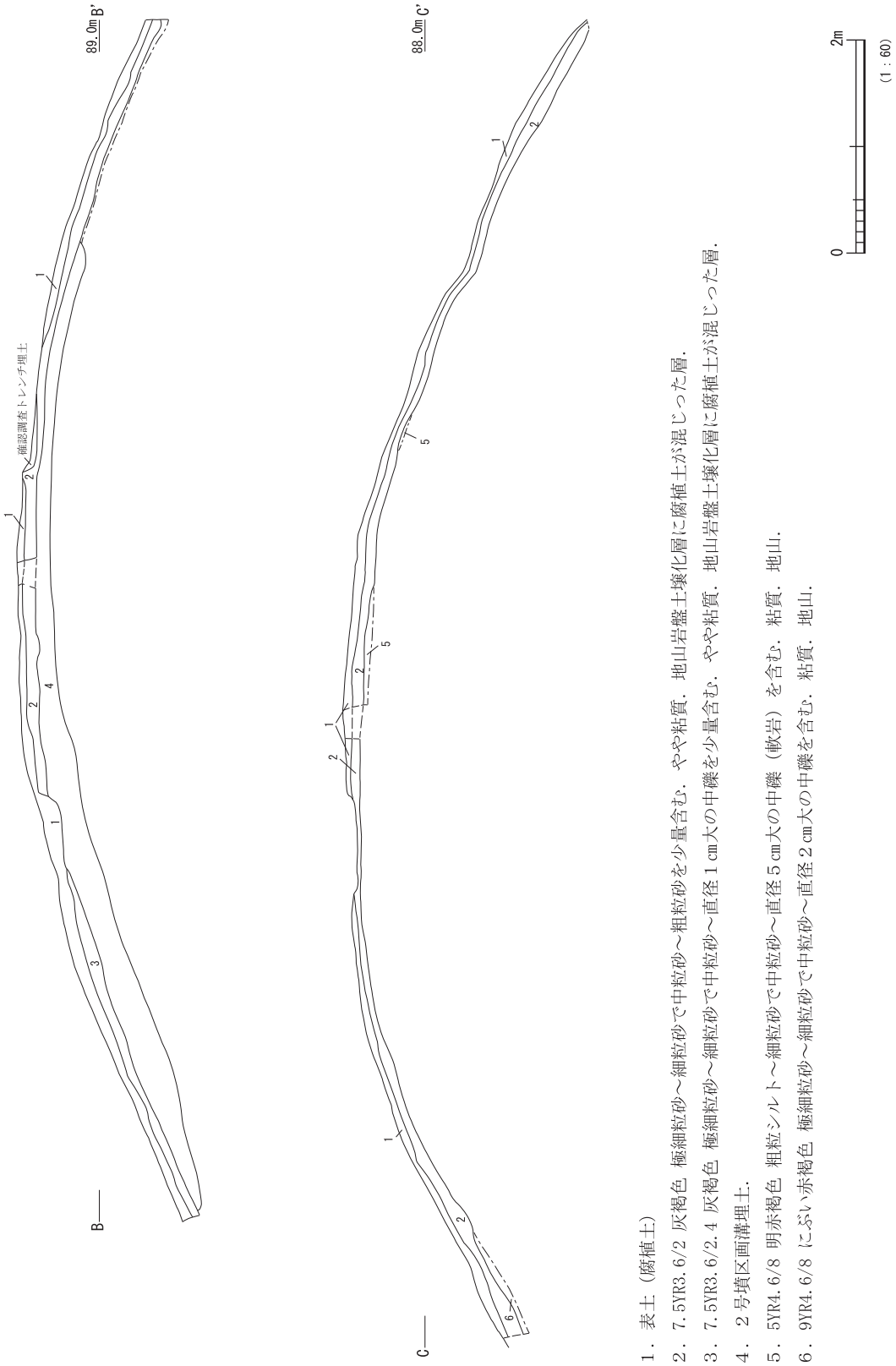
は約 9.4 ｍにわたって遺存していたが、溝端は斜面とつながり自然消滅している。

埋葬施設

埋葬施設は墳頂平坦面のほぼ中央に位置する単一の木棺直葬墓で、これを埋葬主体部としている。墓壙の平面は長方形を呈し、南北長 5.1 ｍ、東西幅 2.85 ｍで、南北方向は墳頂平坦面の幅ほぼいっぱいである。検出面からの最大深は 84 ㎝で、底はほぼ平坦である。

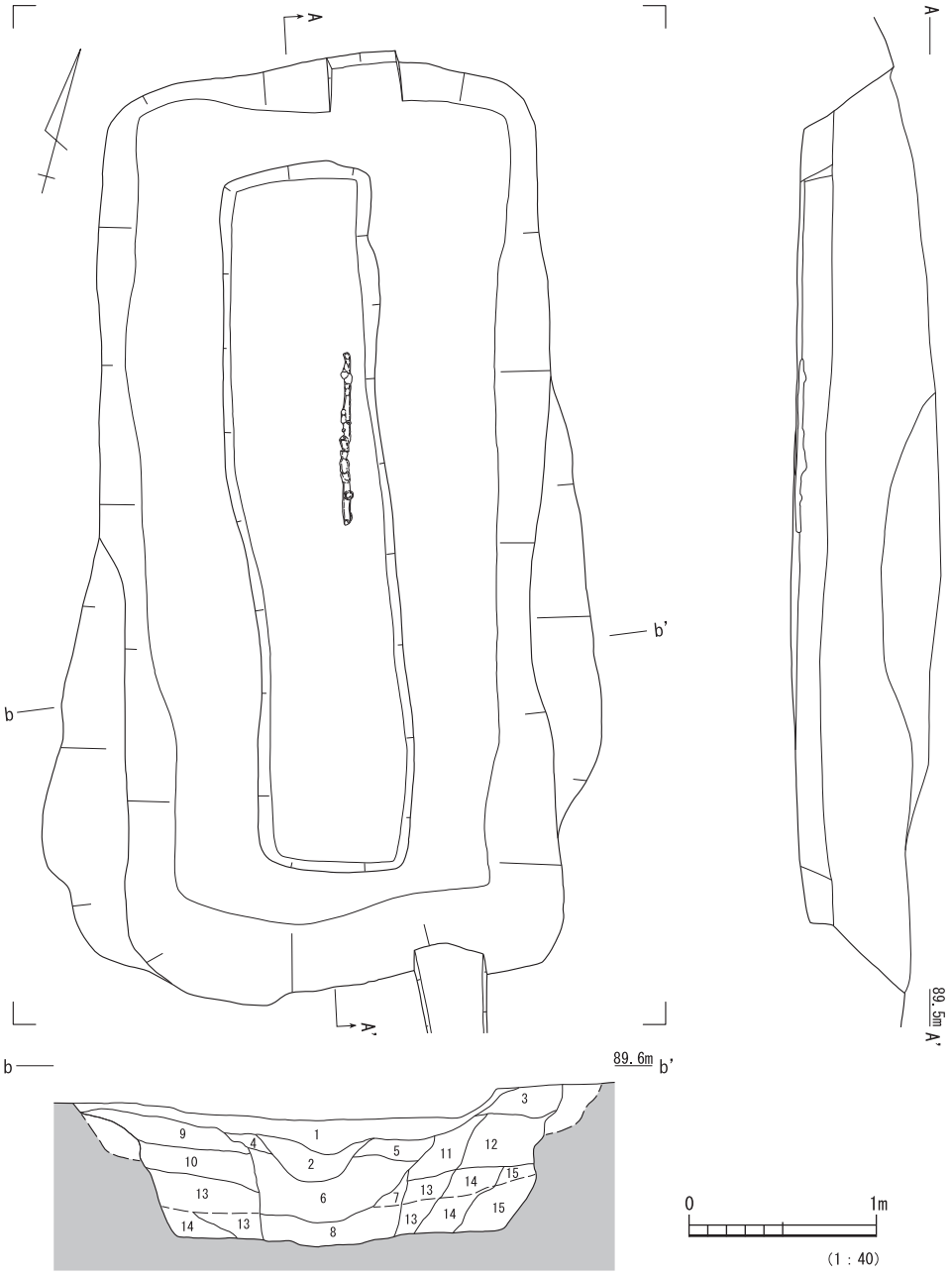


第９図　３区２号墳墳丘（調査前・後）



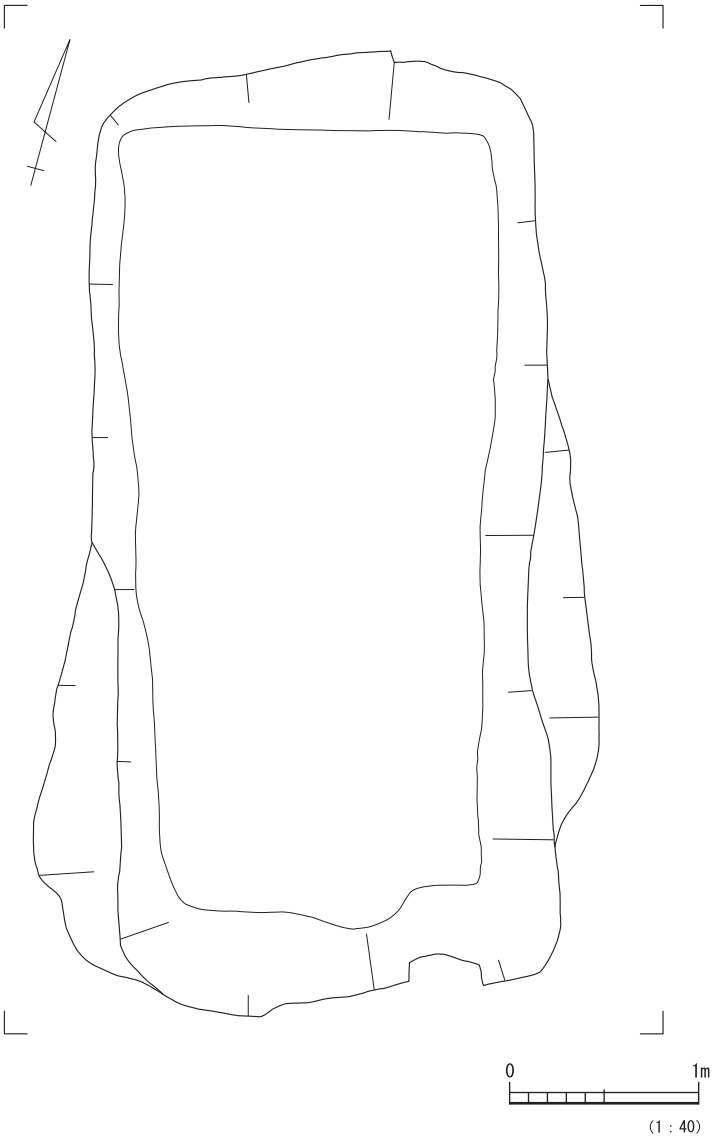
1．表土（腐植土）
2．7.5YR3.6/2 灰褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む．やや粘質．地山岩盤土壌化層に腐植土が混じった層．
3．7.5YR3.6/2.4 灰褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径１cm大の中礫を少量含む．やや粘質．地山岩盤土壌化層に腐植土が混じった層．
4．２号墳区画溝埋土．
5．5YR4.6/8 明赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径５cm大の中礫（軟岩）を含む．粘質．地山．
6．9YR4.6/8 にぶい赤褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２cm大の中礫を含む．粘質．地山．

第 10 図　３区２号墳墳丘土層断面



１．10YR4/4 褐色 中粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
２．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～３㎝大の中礫を少量含む．やや粘質でやや締まる．
３．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
４．10YR4/6 褐色 細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎝大の中礫をごく微量含む．粘質でやや軟質．
５．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～３㎝大の中礫を中量含む．やや粘質でやや締まる．
６．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～５㎝大の中礫を多量に含む．粘性あり．
７．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～３㎝大の中礫を少量含む．粘質で軟質．
８．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルトで直径１～３㎝大の中礫を多量に含む．粘性あり．軟質．
９．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径１～３㎝大の中礫を中量含む．粘性あり．軟質．
10．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径0.５～１㎝大の中礫を中量含む．粘性あり．軟質．
11．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径１～２㎝大の中礫を中量含む．粘性あり．締まる．
12．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり細粒砂～中粒砂で直径１～３㎝大の中礫を多量に含む．やや粘性あり．締まる．
13．7.5YR5/6 明褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～６㎝大の中礫多量に含む．やや粘性あり．締まる．
14．5YR4/6 赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を含む．直径３㎝大の中角礫を35％程度含む．粘質．
15．5YR4/7 赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を含む直径１～２㎝大の中角礫を15％程度含む．粘質．

第11図　２号墳埋葬施設



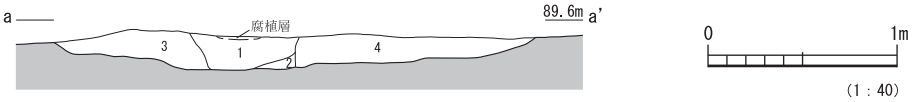
第 12 図　２号墳埋葬施設墓壙

墓壙内のほぼ中央に箱形木棺の痕跡があり、長さ約 3.8 m、幅は約 80 ㎝と均一である。棺底は北部が南部よりも約３㎝高くなっている。棺痕跡は最大で高さ 25 ㎝を検出したが、土層断面をみると約 50 ㎝遺存していたようである。また、墓壙埋土の中位付近でやや硬化した面があることから、棺を組み合わせた後のこの面が埋葬時の面であったと推定される。棺内は上部から落ち込んだ土で充満しており、調査前現況で若干窪んでいたのはそのためであろう。

棺底中央北寄りの東側棺側に沿った位置で鉄刀１点を検出した。切先は北側に向けた方向で、棺底の高さとは異なるが、被葬者は南側頭位で葬られ、刀は右体側に副葬されていたと推測している。鉄刀は検出時点では長さ約 93 ㎝を測ったが、清掃時に切先部分を紛失してしまった。

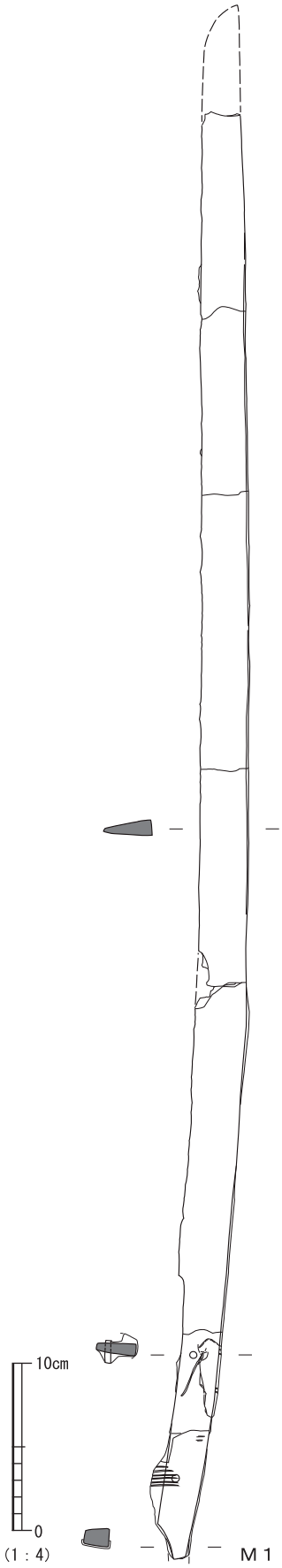
出土遺物（第 14 図、巻頭図版 12、写真図版 66）

鉄刀　２号墳の棺内からは鉄刀が１点出土した。切先部分を折損しており、残存長は 86.6 ㎝である。全体が内反りし、刃部は残存長 69.7 ㎝、関部での幅 3.0 ㎝、厚さ９㎜ほどで、断面が楔形を呈する平造りの刃部である。茎部は長さ 16.4 ㎝、関付近での幅 2.5 ㎝程度、厚さ７㎜程度で、関部は深さ約３



１．7.5YR4/4 褐色 中粒砂～粗粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．粘質弱く固く締まる．
２．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．やや粘性があり固く締まる．
３．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎝大の中角礫を微量含む．やや粘性があり固く締まる．西部では 5YR4/6 赤褐色を呈する．
４．10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～５㎝大の中礫（地山礫）を中量含む．やや粘性があり締まる．直下の岩盤（直径１～ 30 ㎝大の中礫～巨礫）由来の礫の隙間に入り込む部分あり．

第 13 図　２号墳区画溝埋土土層断面



第 14 図　２号墳出土鉄刀

㎜の弧状に抉られる形態である。茎部は若干弯曲しながら茎尻に向かってのび、やや幅を狭める。茎断面は台形に近い形状を呈するが、茎尻部分では厚さを増し、1.0 ㎝程度となっている。茎尻は隅を浅く抉るもので、その幅は７㎜程度である。目釘孔はＸ線透過写真による観察では二つを確認できる。茎の中央よりも腹側に偏った位置に穿たれており、その直径は４㎜程度で、関側では目釘も遺存している。茎部には有機質が部分的に遺存する。把装具は木製と思われ、把握部には巻き付けた組紐が部分的に遺存する。

３．３号墳（第 15 ～ 18 図、写真図版９～ 11）

位置と検出状況

３区西部の尾根稜線上に列状に並んだ２号墳と４号墳の間に存在する。隣接する古墳との間には尾根稜線部分のみ区画溝を設けている。調査前から古墳であることは判断できたが、区画溝についてはほとんど埋まっていたため調査前には認識できなかった。表土掘削の結果、山側に区画溝を有する木棺直葬墳であることが判明した。３号墳墳頂最高所は調査前で標高 87.4 ｍを測り、西側斜面上に隣接する２号墳墳頂部よりも約 2.4 ｍ低く、東側斜面下に隣接する４号墳墳頂部よりも約 1.2 ｍ高い。

形態・規模

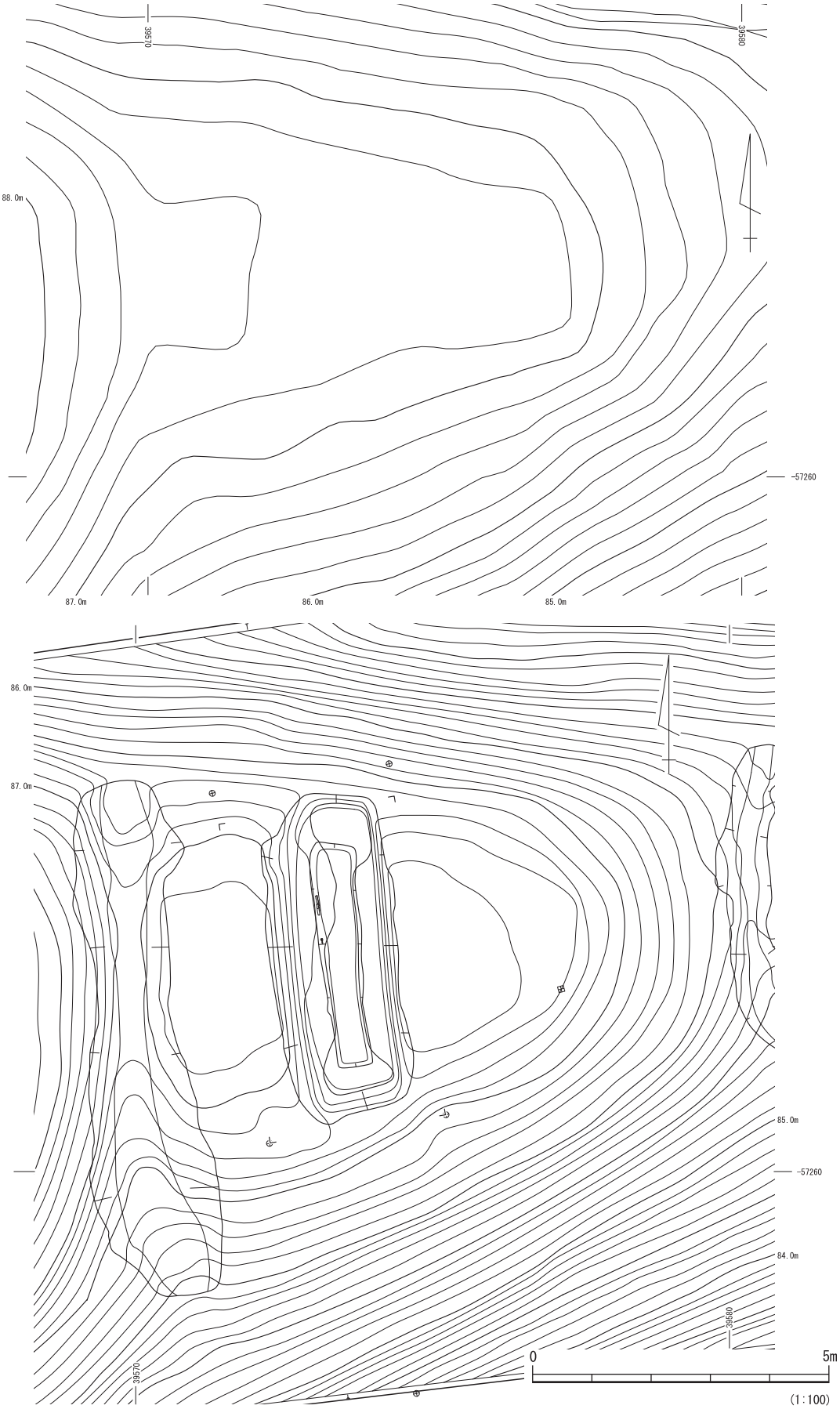
墳頂部は若干東側に傾斜する平坦面で、平面の調査後形状は三角形に近く東西約７ｍ、南北は２号墳側で約７ｍ、４号墳側では約 4.5 ｍであるが、等高線の形状から、台形状を意識したことが窺える。墳形も台形に近いが、斜面の加工はほとんどなされておらず、２・４号墳との境にあたる区画溝以外では墳裾の位置は明確ではない。３号墳の区画溝底東端から４号墳区画溝西端までの距離は約 10.0 ｍである。

区画溝は尾根稜線と直交方向で、少し弧状を呈し、溝中央部での最大幅は 1.5 ｍ、検出面からの深さ約 35 ㎝で、長さは約 8.8 ｍにわたって遺存していたが、溝端は傾斜面に連続して自然消滅している。

埋葬施設

埋葬施設は墳頂平坦面のほぼ中央に木棺直葬墓があり、これが主体部である。墓壙の平面は長方形を呈し､検出面での規模は南北長約 5.5 ｍ、東西幅約 2.2 ｍを測り、墳頂平坦部の南北幅ほぼいっぱいに構築されていた。検出面からの墓壙の最大深は 70 ㎝で、底はほぼ平坦である。

墓壙内のほぼ中央に箱形木棺の痕跡があり、長さ約 3.7 ｍ、幅は北側で約 75 ㎝、南側では約 60 ㎝と北側が約 15 ㎝幅広くなっている。棺痕跡は最大で深さ 13 ㎝検出したが、土層断面では約 25 ㎝遺存して



第 15 図　３区３号墳墳丘（調査前・後）

いたようである。棺底のレベルは北部が南部よりも約９㎝高くなっている。また、墓壙埋土の中位以下はやや締まった土層となっていたことから、埋葬時の面であったことが想定される。棺内は主として斜面上側から落ち込んだ土で埋まっていた。

遺物出土状況

埋葬施設掘削時に棺の北寄りにあたる位置で土師器の高坏や壺の破片が出土した。棺検出面よりも約15㎝上であったことから、棺上に置かれていた土器と思われる。一方、棺底では中央北寄りの西側棺側で鉄刀片・鉄鏃・鉄刀子片が出土した。鉄刀は把を北側にしており、棺の幅や棺底の高さから、被葬者が北側頭位で埋葬され、被葬者の右体側に鉄刀が副葬されていたと判断できる。鉄鏃は６点以上出土しているが、棺内掘削の際にかなり散逸してしまったため、Ｍ５・６が中央付近に遺存していた以外は原位置が不明となっている。また、鉄刀子片も茎付近の一部のみ遺存しているが、出土位置は不明である。

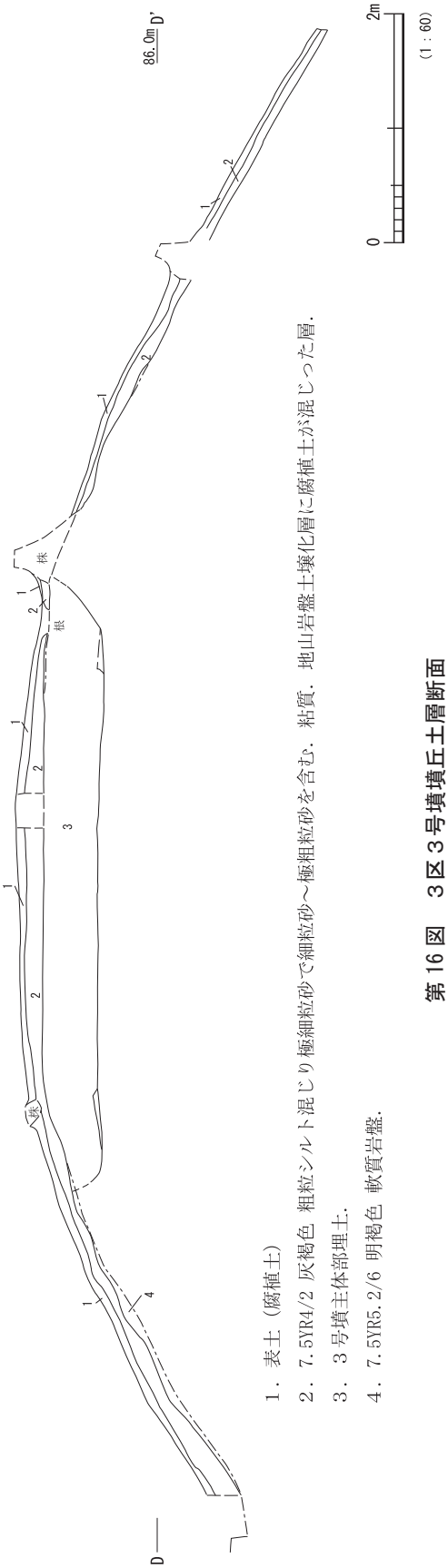
出土遺物（第19図、巻頭図版12、写真図版63・64・66・67）

土師器高坏　（１・２）は土師器高坏である。（１）は脚端部を欠失し、（２）は脚裾部の破片である。同一個体の可能性があるが、接合しなかった。（１）の坏部は埦形を呈し、口径は14.4㎝を測る。端部は丸くおさめ、内面はヘラミガキ調整のようである。脚柱部は中実に近く、内面には成形具の痕跡を残している。坏部･脚柱部ともに外面の調整は不明である。（２）の脚部は径10.7㎝で、端部は丸くおさめているようである。

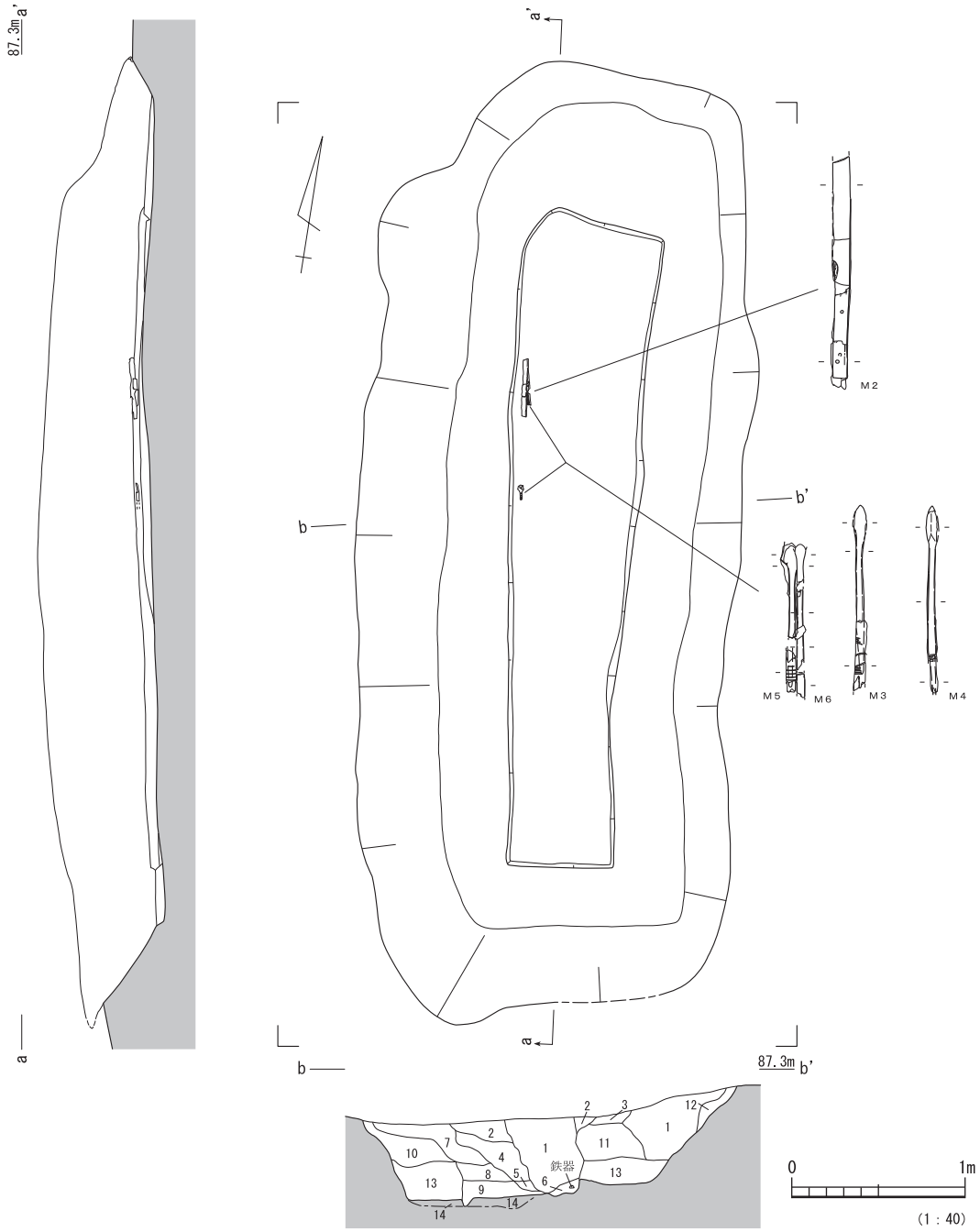
（１・２）ともに棺上北部の墓壙検出面から出土し、同一個体の可能性が非常に高い。復元すると、12.5㎝程度の高さの高坏となろう。

詳細な時期は検討を要するが、南但馬の加都遺跡で出土した高坏に類似例があり、須恵器ＴＫ73～ＴＫ216型式期併行とされる古墳３期にあたる。

土師器壺　（３）の壺は口縁部と底部を欠失する。球形に近い体部で、最大径は13.6㎝を測る。外面の調整はナデのようで、内面には指頭圧痕が残る。

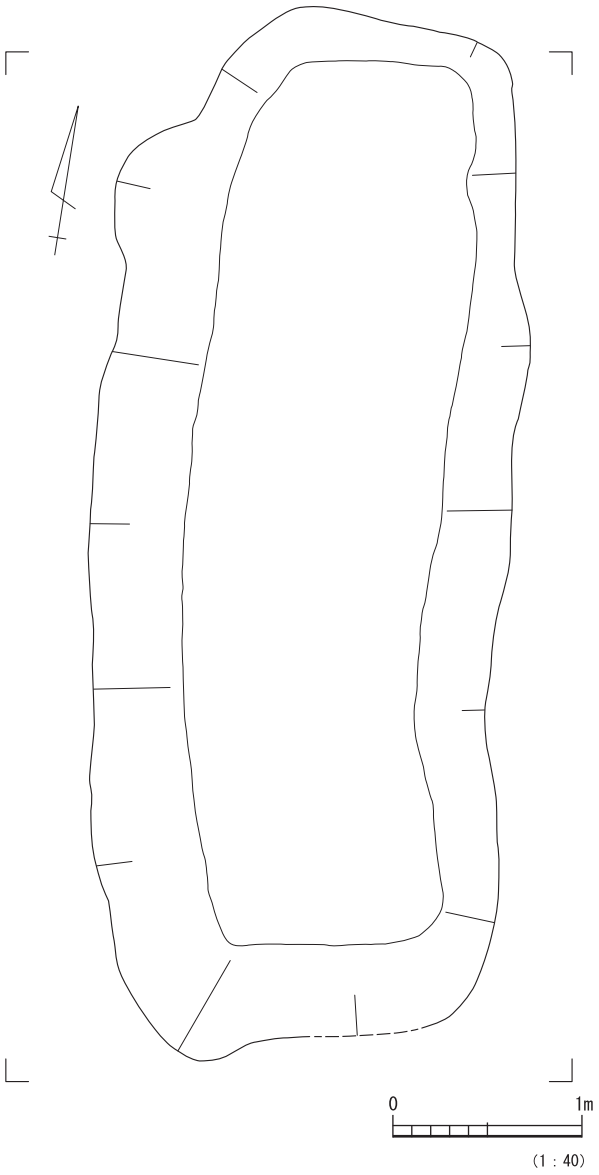


第16図　３区３号墳墳丘土層断面



１．10YR3/3 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１㎝大の中礫をごく微量含む．軟質で空隙あり．
２．10YR5/4 にぶい黄褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト．締まる．
３．10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルト．僅かに粘性あり．締まる．
４．10YR3/3 暗褐色 細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎝大の中角礫を微量含む．やや粘性あり．やや締まる．
５．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂．軟質で空隙あり．
６．10YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．やや粘性あり．やや締まる．第 14 層に類似．
７．7.5YR5/4 にぶい褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～４㎝大の中角礫を微量含む．やや粘性あり．やや締まる．
８．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎝大の中角礫をごく微量含む．やや粘性あり．やや軟質で空隙あり．
９．10YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中角礫をごく微量含む．やや粘性あり．やや軟質で空隙わずかにあり．
10．7.5Y5/4 にぶい褐色 粗粒シルトで直径１㎝大の中角礫を多量に含む．粘性あり．やや締まる．第 13 層に類似するが中礫量が少ない．
11．10YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎝大の中角礫を少量含む．やや粘性あり．やや締まる．
12．10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径４㎝大の中角礫をごく微量含む．やや粘性あり．軟質．空隙あり．
13．10YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎝大の中角礫を多量に含む．粘性あり．やや締まる．
14．10YR4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂．やや粘性あり．やや締まる．岩盤．

第 17 図　３号墳埋葬施設



第 18 図　３号墳埋葬施設墓壙

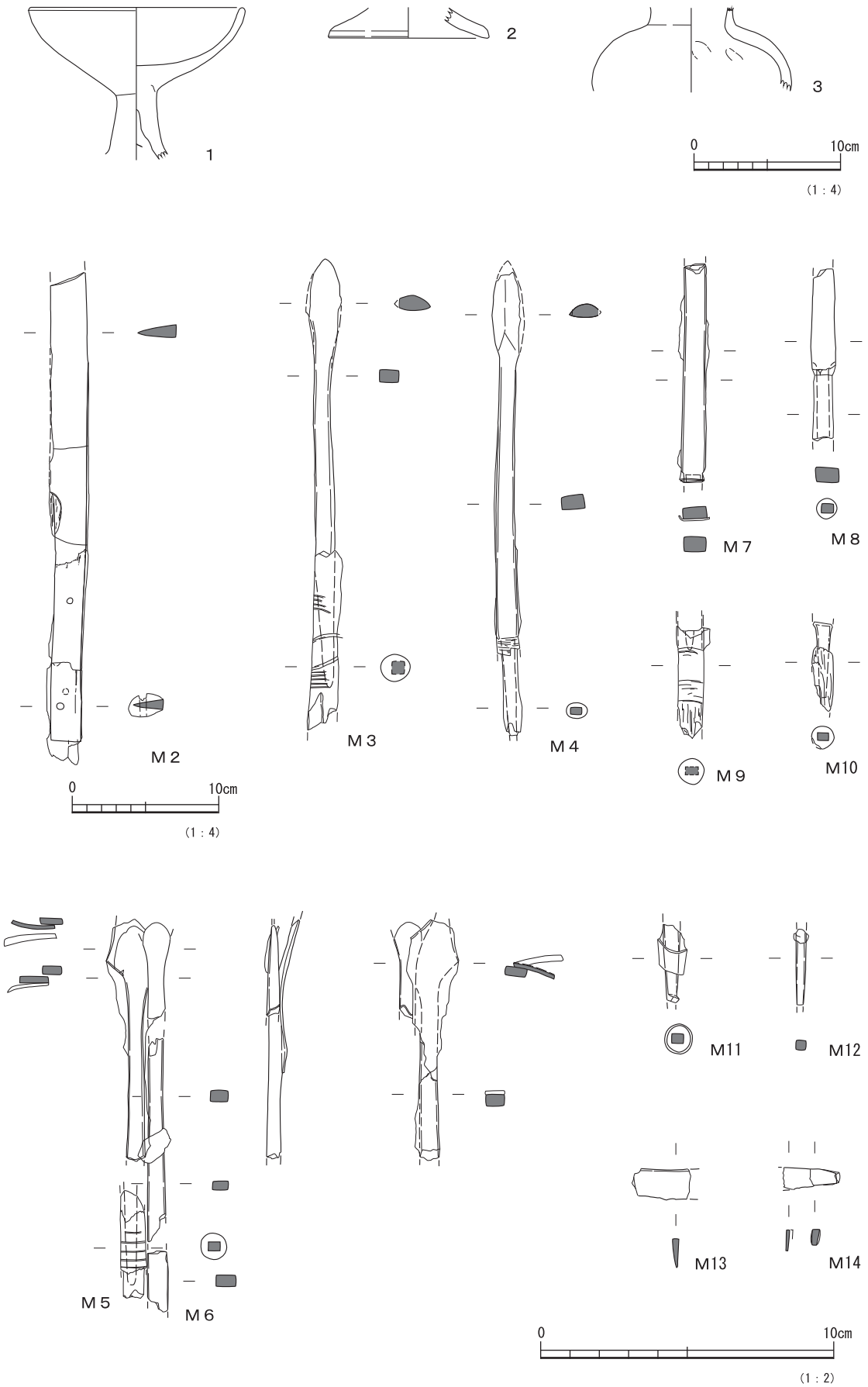
（１～３）は主体部棺上北部の墓壙検出面から出土しており、高坏とともに棺の位置にあたる墓壙上の供献土器であった可能性がある。

鉄刀　Ｍ２は刃部中央付近から切先までを欠損しており、刀本体の残存長は 31.5 ㎝である。わずかに内反りし、刃部の残存長は 14.1 ㎝、関部での幅 2.7 ㎝、厚さ９㎜程度で、断面が楔形を呈する平造りの刃部である。茎部は長さ 17.0 ㎝、関付近での幅は 2.3 ㎝程度、厚さ８㎜ほどで、関部は深さ約３㎜の弧状に抉られる形態である。茎部は茎尻に向かってわずかに弯曲しながらのび、やや幅を狭めている。茎断面は楔形を呈する。茎尻は隅をわずかに切るもので、幅は約 2.0 ㎝である。目釘孔は茎尻側のものは把装具を含めて径５㎜の孔が開いており、Ｘ線透過写真観察によれば、関側にも目釘孔が確認できる。また、茎尻側の目釘孔の近くにもう１つ存在するようであるが、貫通の程度などは不明である。それらの目釘孔の直径は４㎜である。Ｘ線で確認できるものは茎の中央に穿たれているが、肉眼で観察できる茎尻側のものは茎の中央よりも腹側に存在している。

茎部には木質が多く遺存しており、木製の把装具と判断されるが、紐は遺存していない。また、背側には木質が付着していないことから、把装具の方側側面に溝を彫り込んでそこに茎をはめる「落とし込み式」の把であったと思われる。なお、茎尻付近の側面から把頭方向にかけて別の鉄器が銹着しており、断面の形状から鉄鏃の頸部である可能性が高い。

鉄鏃　図示したＭ３～Ｍ 12 のすべてが尖根式の長頸鏃である。Ｍ３・４の鏃身部は長い三角形を呈する。Ｍ３は全長 14.7 ㎝で、遺存している矢柄を合わせた長さは 16.2 ㎝となっている。頸部と鏃身部・茎部の境界が不明確で、明確な関部を造り出していないようであるが、頸部の長さは 6.5 ㎝程度であろう。片丸造で鎬は認められない。Ｍ４の鏃身部は片丸造でにぶい鎬が認められる。Ｍ４の頸部下端の幅は 7.5 ㎜程度で、関部は片側の幅約１㎜の段を有し、茎部の幅は関部で５㎜程度となるが、表裏面の段差の有無は確認できない。Ｍ３・４ともに茎部の横断面は四角である。Ｍ３には矢柄の木質が遺存しており、樹皮による口巻が観察できる。

Ｍ５・６はともに鏃身部先端を欠失するが、長三角形の刃部を有する可能性がある。Ｍ５は下面のほ



第 19 図　３号墳埋葬施設出土遺物

ぼ全体に皮革状のものが薄く付着しており、鏃身部下面は銹により反り返っている。頸部は幅５～８㎜程度、厚さ４㎜程度で、中央部が細く上下方向に徐々に幅を増している。頸部の長さはＭ５がＭ６よりも短く、頸部長に差があると判断している。関部の状況は不明である。Ｍ５には矢柄の一部が遺存しており、表面に口巻も認められる。

Ｍ７は頸部から関部、Ｍ８は頸部から茎部にかけての破片で、関部は頸部の幅を両側から斜めにそれぞれ２㎜程度､Ｍ７ではそれぞれ１㎜程度狭めている。Ｍ７では表裏面も 0.5 ㎜程度狭めている。Ｍ７・８の頸部幅は７～８㎜程度、厚さは５㎜程度で、ともに関部に向かって幅を少し広げている。Ｍ７には皮革状の有機質が付着し、Ｍ８には矢柄の木質が一部遺存しているが、矢柄の表面は残っていない。Ｍ９～Ｍ 12 は茎部の破片で、断面は四角い。茎端に向かって徐々に幅・厚さを減じている。Ｍ９～Ｍ 11 には矢柄木質の一部が残存しており、Ｍ９やＭ 11 では表面の口巻が観察できる。

鉄刀子　Ｍ 13 は身部、Ｍ 14 は茎部の破片である。Ｍ 13 は幅１㎝、残存長２㎝で断面は楔形で、背部の厚さは２㎜である。切先付近の可能性がある。Ｍ 14 は残存長 3.9 ㎝で､茎端の背部の厚さは５㎜で、断面は台形を呈する。関側は側面の約半分が剥落している。残存部の背側の厚さは２㎜で断面は楔形に近い。目釘孔は認められない。

４．４号墳（第 20 ～ 23 図、写真図版 12・13）

位置と検出状況

３区中央部の尾根稜線上で、列状に並んだ３号墳と５号墳の間に存在する小規模な古墳である。３号墳との間には尾根稜線部分のみ平坦面の西端に区画溝を設けている。調査前の地形から、古墳であることは明確に認識できたが、区画溝はほぼ埋没していた。表土掘削の結果、山側に区画溝を有する木棺直葬墳であることが判明した。４号墳墳頂最高所は調査前で標高 86.2 ｍを測り、西側斜面上に隣接する３号墳墳頂部よりも約 1.2 ｍ低く、東側斜面下に隣接する５号墳墳頂部よりも約 1.5 ｍ高い。

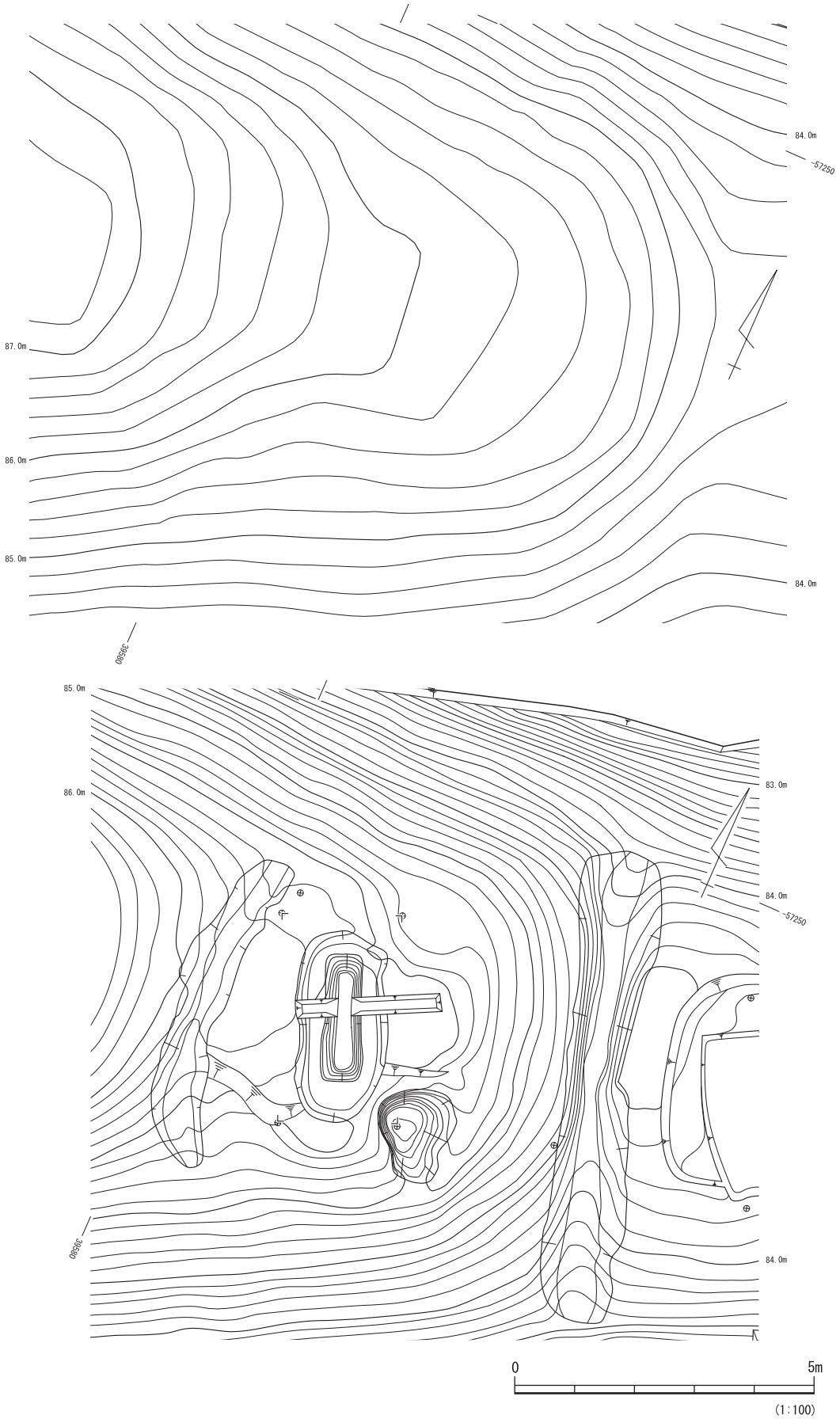
形態・規模

墳頂部は東側に緩く傾斜する平坦な面で､その傾斜は 13%ほどである。墳頂部平坦面の調査後形状は、一辺約 4.5 ｍの正方形に近いが、北東・南東の隅部分は株等の攪乱等により改変を受けている。墳形も隅が丸い台形に近いが、斜面の加工はほとんどなされておらず、３・５号墳との境にあたる区画溝以外では墳裾の位置は明確ではない。４号墳の区画溝底東端から５号墳区画溝西端までの距離は約 6.1 ｍである。

区画溝は尾根稜線と直交方向に近いものの、少し南東方向に振れている。区画溝の平面形は、３区内では最も弧状に近い形状を呈し、溝中央部での最大幅は 0.9 ｍ、検出面からの深さ約 25 ㎝で、長さは約 5.3 ｍにわたって遺存していたが、溝端は傾斜面に連続して自然消滅していた。

埋葬施設

墳頂平坦面のほぼ中央に南北方向の木棺直葬の埋葬施設があり、これが主体部である。墓壙の平面は長楕円形に近く、検出面での規模は南北長約 3.2 ｍ、東西幅約 1.5 ｍを測り、３区内では最も小規模である。なお、墳頂平坦部の南北両端には余裕があり、墓壙長は 4.5 ｍ程の規模まで可能であるが、小規模としている。墓壙の検出面からの最大深は約 65 ㎝で、落ち込む傾斜は緩い。底は二段墓壙状になっているが、ほぼ平坦である。なお、墓壙下部では岩盤が極めて軟質になっていたため、墓壙南部や棺底部分を少し掘りすぎている。



第 20 図　３区４号墳墳丘（調査前・後）

墓壙内のほぼ中央に箱形木棺の痕跡があり、長さ約 2.2 m、幅は北端・南端ともに約 60 ㎝であるが、中央部では少し狭くなっている。棺が腐朽して、土圧に押されて内側へ倒れ込んだためと思われる。棺痕跡は、土層断面をみると深さ約 40 ㎝遺存しており、墓壙検出面のほぼ上面で棺痕跡を検出できたと思われるが、実際には墓壙埋土を 10 ～ 15 ㎝掘削した後に検出した。棺底のレベルは北部が南部よりも少し高くなっているが、頭位方向を判断できる状態ではない。

なお、４号墳では棺内や墓壙内も含めて遺物は出土しなかった。

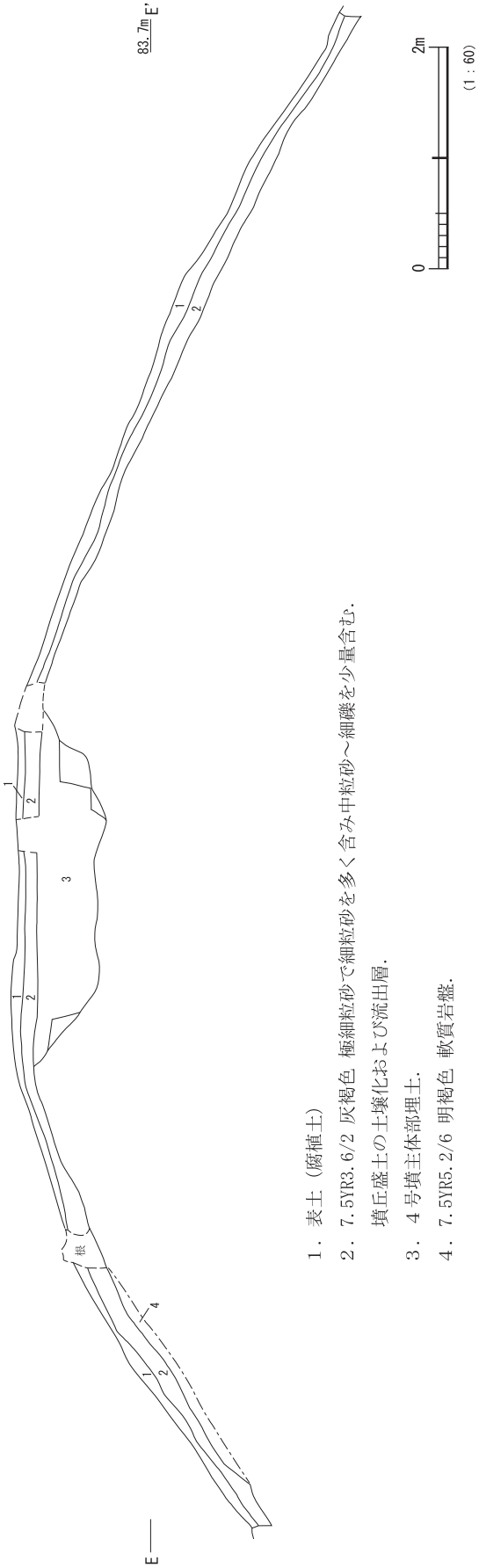
５．５号墳（第 24 ～ 27 図、写真図版 14・15）

位置と検出状況

３区の尾根稜線上で、列状に並んだ５基の古墳のうち東部に所在し、４号墳と６号墳の間に存在する。５号墳平坦面西端には、４号墳との間に区画溝を設けている。この溝は調査前の現況において若干の窪みが認められていた。調査の結果、山側に区画溝を有する木棺直葬墳であることが判明した。５号墳墳頂最高所は調査前で標高 84.7 m を測り、西側斜面上に隣接する４号墳墳頂部よりも約 1.5 m低く、東側斜面下に隣接する６号墳墳頂部よりも約 1.3 m高い。

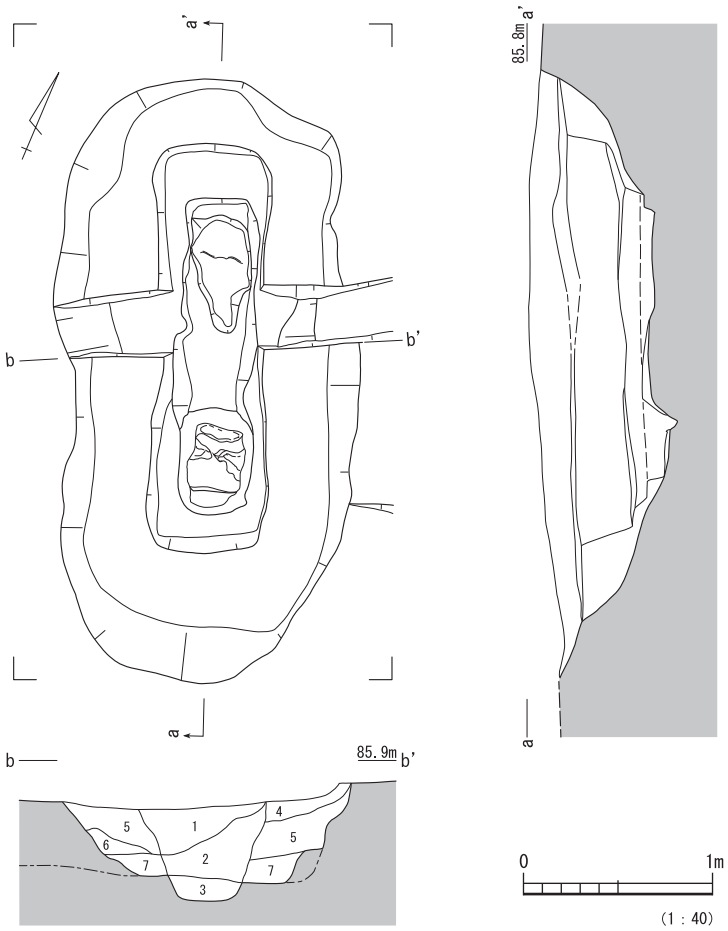
形態・規模

墳頂部は若干東側に傾斜するものの、ほぼ水平な面となっている。墳頂部平坦面の調査後形状は、南北約６m、東西約５m で、東側の隅部はやや丸くなっているものの、概ね矩形を呈している。墳形は東側がやや短い台形状を呈するが、斜面の加工はほとんどなされておらず、４・６号墳との境にあたる区画溝以外では墳裾は明確にしていない。東西方向の墳丘規模のうち、５号墳の区画溝底東端か



１．表土（腐植土）
２．7.5YR3.6/2 灰褐色　極細粒砂で細粒砂を多く含み中粒砂～細礫を少量含む．
　墳丘盛土の土壌化および流出層．
３．４号墳主体部埋土．
４．7.5YR5.2/6 明褐色　軟質岩盤．

第 21 図　３区４号墳墳丘土層断面



１．10YR5/8 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中礫を少量含む.
２．10YR6/3 にぶい黄橙色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中礫を５％程度含む.
　　粘質で粘質砂層に近い.
３．10YR6/4 にぶい黄橙色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．粘質.
４．10YR5.4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中角礫を含む．粘質.
５．10YR6/3.5 にぶい黄橙色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中角礫を含む．粘質.
６．10YR5/3.5 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中角礫を少量含む．粘質.
７．2.5Y6.4/4 にぶい黄色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中角礫を少量含む．粘質.

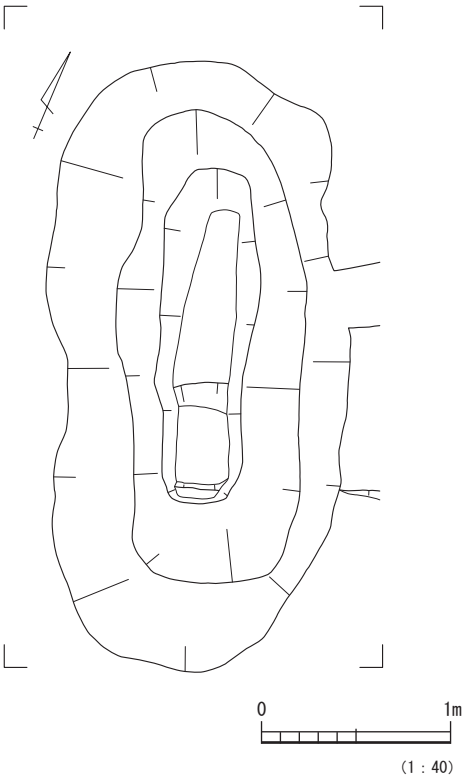
第 22 図　４号墳埋葬施設

ら６号墳区画溝西端までの距離は約 7.5 ｍである。

区画溝は尾根稜線とほぼ直交方向に掘削されている。区画溝の平面形は、長さ約８ｍのほぼ直線で、溝中央部での最大幅は約 1.1 ｍ、検出面からの最大深は約 52 ㎝で、溝端は傾斜面に連続して自然消滅していた。

埋葬施設

５号墳の埋葬施設は、墳頂平坦面の中央東寄りで検出した南北方向の木棺直葬墓で、これが主体部である。主体部付近の地山は軟質で土壌化が著しく、墓壙の検出・確定は容易ではなかったため、広範囲を徐々に掘削しながら墓壙を確定していった。検出した墓壙の平面はほぼ長方形で、検出面での規模は南北長約 3.1 ｍ、東西幅約 1.5 ｍを測る。墓壙は二段に掘り込まれており、下段の平面は長楕円形を呈し、その規模は南北長約 1.7 ｍ、東西幅約 45 ㎝で、下段の側面は棺の幅とほぼ一致する。上段の傾斜は緩いが、下段はほぼ垂直である。なお、墳頂平坦部の南北両端には南北各１ｍほどの余裕がある。墓



第 23 図　４号墳埋葬施設墓壙

壙の検出面から上段底までの最大深は約 22 ㎝で、下段は上段底から約 33 ㎝掘り込まれている。検出面から下段底までの深さは約 50 ㎝を測る。墓壙の底はほぼ平坦であるが、南側が北側よりも約７㎝高くなっている。

下段墓壙内に箱形木棺の痕跡があり、長さ約 1.5 ｍ、幅は約 40 ㎝であるが、南部で数㎝幅広くなっていた。墓壙底と棺痕跡幅から埋葬方向が南側頭位であった可能性があるが、判断には躊躇される。

棺痕跡は、中央部での土層断面をみると深さ約 40 ㎝遺存しており、下段墓壙上面から約 20 ㎝上側まで観取できた。棺底はやや歪な面となっており、棺底面の全体を平面的に検出することができなかったため、棺底の状態を正確に把握することができなかった。

５号墳の棺内・墓壙内や区画溝等も含めて遺物は出土しなかった。

６．６号墳（第 28 ～ 35 図、巻頭図版４、写真図版 16 ～ 18）

位置と検出状況

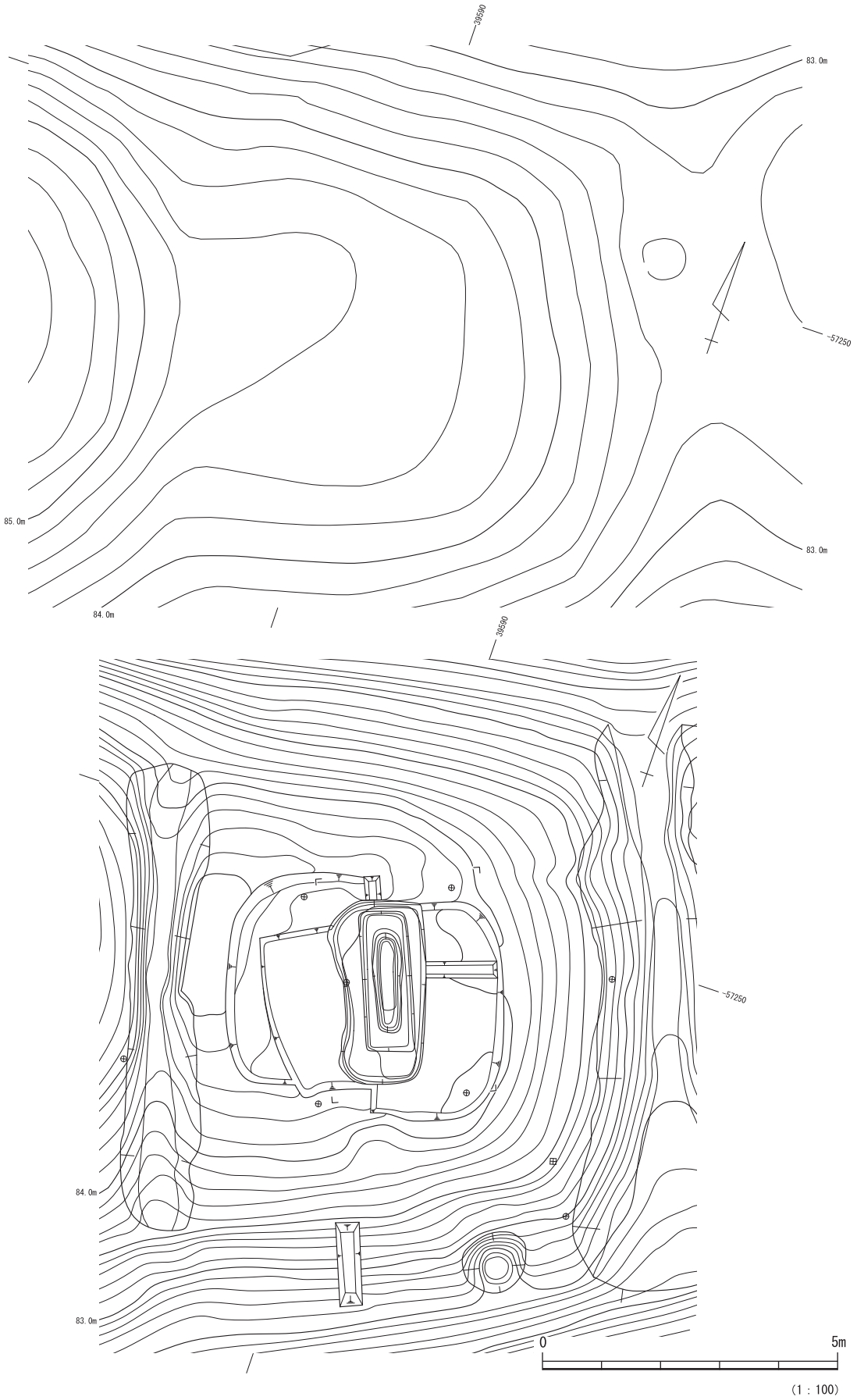
６号墳は３区の列状に存在する５基のうち東端に位置しており、５号墳と墳端を接し、５号墳との間には尾根稜線部分のみ区画溝を設けている。３区内で最も広い平坦面を有し、調査前から古墳であることは判断でき、区画溝についても５号墳との境界である平坦面西端部分がやや窪んでいたことから、調査前にその存在を予想できた。表土掘削の結果、６号墳墳頂部は地山の岩盤がきわめて軟質で、土壌化もしていたことから、調査前の表面から約 35 ㎝の深さまで掘削して、埋葬施設の検出をおこなった。

調査の結果、山側に区画溝を有し、２基の木棺直葬墓を埋葬施設としていることが判明した。６号墳の調査前の墳頂最高所は標高 83.4 ｍを測り、西側斜面上に隣接する５号墳墳頂部よりも約 1.3 ｍ低い。また、東側斜面下には約 26 ｍの距離を置いて７号墳が調査区外に存在しており、７号墳墳頂部の標高は 72 ｍほどであることから、７号墳は６号墳よりも約 11.4 ｍ下方に築造されている。このような間隔をおいて築造されている理由には、６～７号墳間の尾根稜線の傾斜が急であったことがあげられよう。

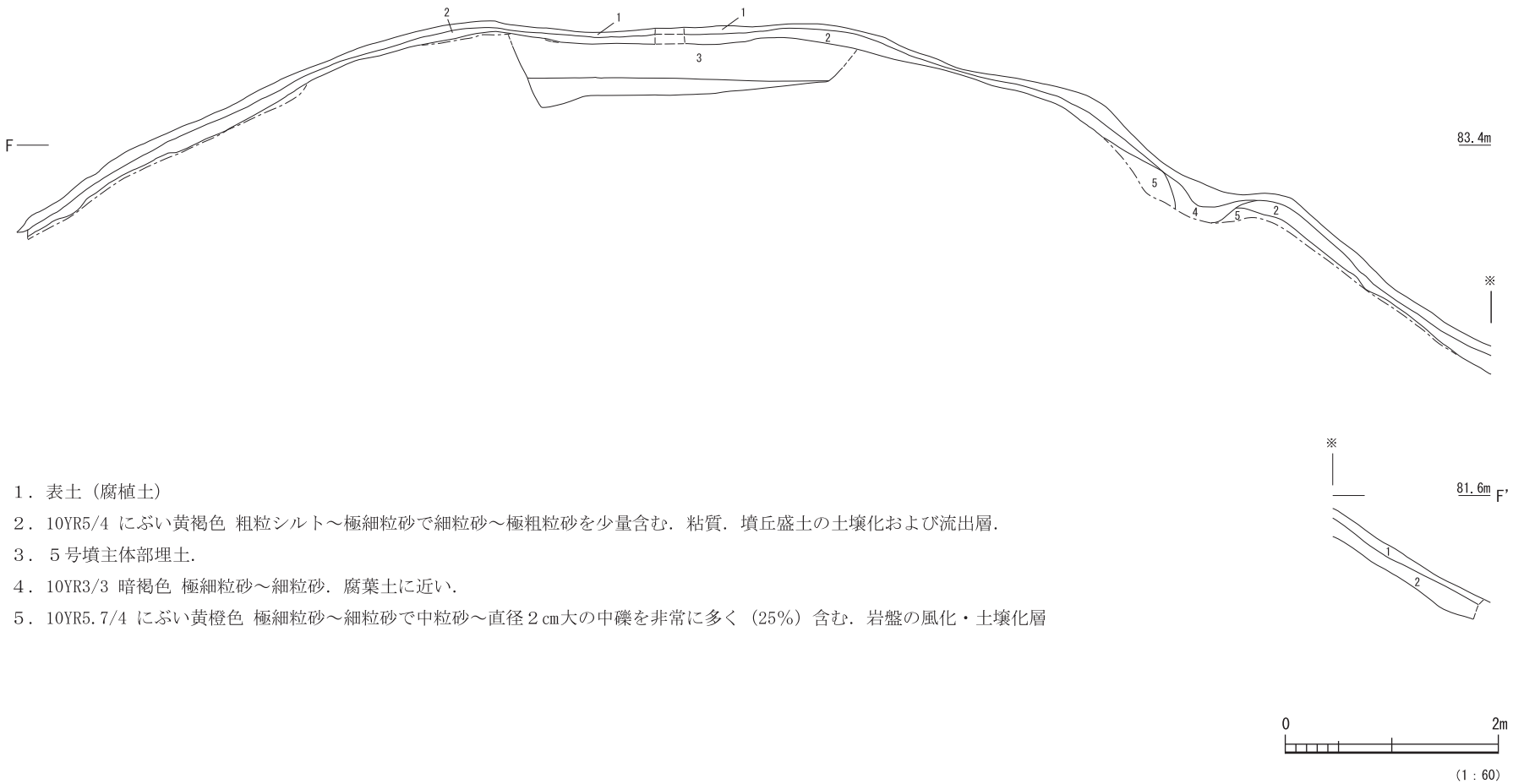
形態・規模

墳頂部の平面形は東側が弧状をなすが長方形に近く、墳頂部はほぼ水平な平坦面で、東西長約 11 ｍ、南北幅は広い所で約８～ 8.5 ｍを測る。南側の墳丘斜面部は弧状に近いが、墳形としては全体的に矩形を意識していたものと推察している。ただし、斜面の加工はほとんどなされていないと判断され、特に東側については自然の弧状地形をそのまま残している。このため、５号墳との境になる区画溝以外では墳裾の位置は不明である。６号墳の区画溝底東端から６号墳墳頂平坦面東端までの距離は約 12 ｍである。

区画溝は尾根稜線とほぼ直交方向で、直線的である。溝中央部での最大幅は約２ｍ、検出面からの深さ約 55 ㎝で、長さは約 9.8 ｍにわたって遺存していたが、溝端は傾斜面に連続して自然消滅している。区画溝の南端では溝幅が大きくひろがっている。

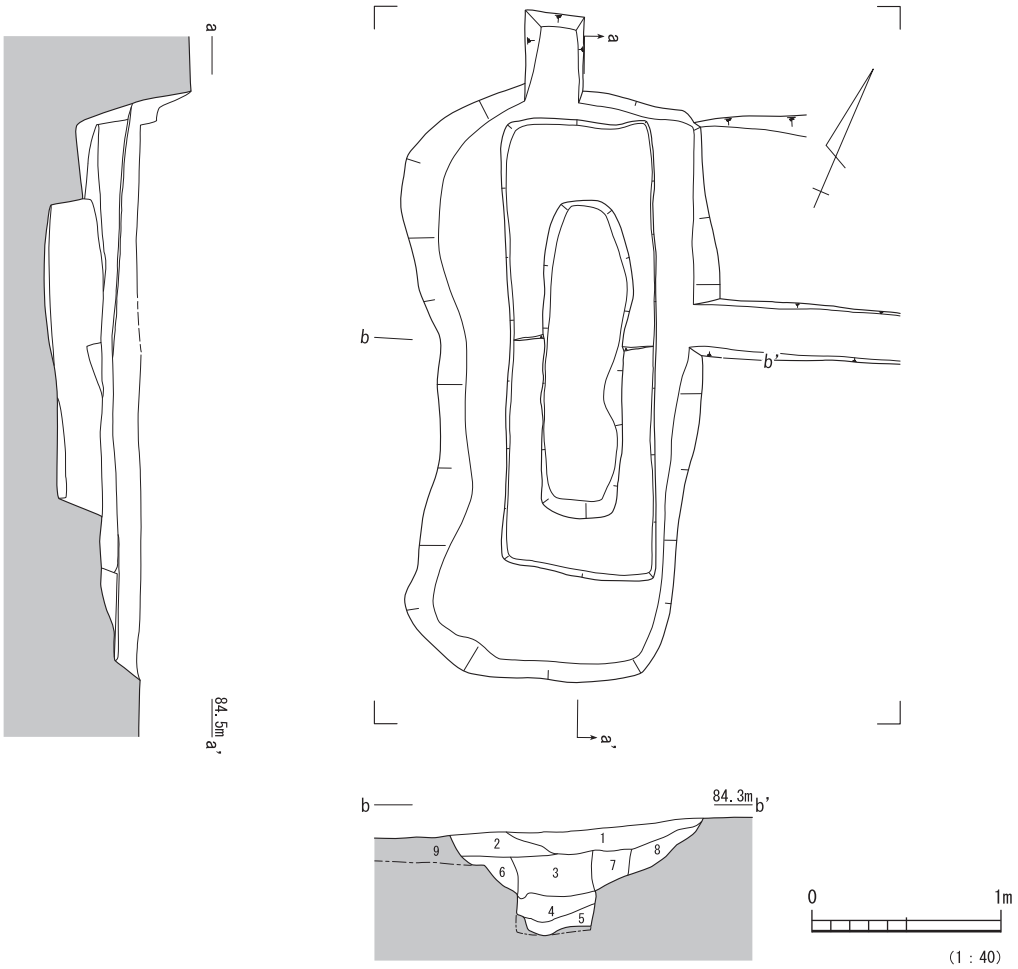


第 24 図　３区５号墳墳丘（調査前・後）



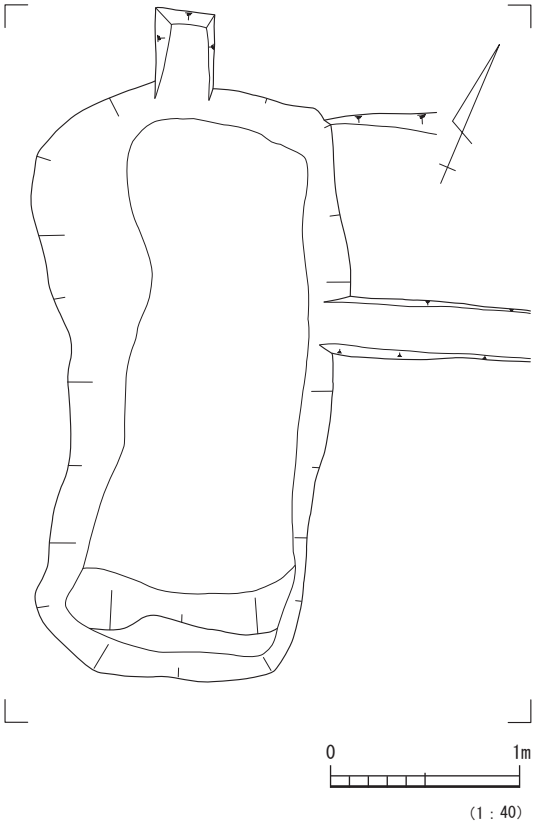
１．表土（腐植土）
２．10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～極粗粒砂を少量含む．粘質．墳丘盛土の土壌化および流出層．
３．５号墳主体部埋土．
４．10YR3/3 暗褐色 極細粒砂～細粒砂．腐葉土に近い．
５．10YR5.7/4 にぶい黄橙色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２cm大の中礫を非常に多く（25%）含む．岩盤の風化・土壌化層

第25図　３区５号墳墳丘土層断面



１．10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２㎝大の中角礫をごく微量含む．粘性あり．
　　やや軟質で空隙あり．
２．10YR4/6 褐色 粗粒シルトで直径１～２㎝大の中角礫を少量含む．粘性あり．やや締まる．
３．10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～３㎝大の中角礫を微量含む．粘性あり．
　　軟質で空隙あり．
４．10YR5/4 にぶい黄褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎝大の中角礫を含む．粘性あり．
　　やや軟質で空隙あり．
５．10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂．粘性あり．やや締まる．
６．10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎝大の中角礫を少量含む．粘性あり．軟質で空隙あり．
７．10YR4/6 褐色 粗粒シルトで直径１㎝大の中角礫を少量含む．粘性あり．やや軟質で空隙あり．
８．10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１㎝大の中角礫を少量含む．やや粘性あり．やや軟質．
９．10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂．やや粘性あり．締まる．地山．

第 26 図　５号墳埋葬施設



第 27 図　５号墳埋葬施設墓壙

なお、墳頂部東端のほぼ中央部で、長さ約 41 ㎝、幅約 25 ㎝の溶岩礫が１点、表土上面から確認できる状態で存在していたが、古墳に伴うことの可否も含め不明である。

埋葬施設

墳頂平坦面のほぼ中央と東端部に各１基の木棺直葬墓があり、埋葬施設としている。平坦面中央部のＳＸ３６１は長大な木棺墓であることから、この古墳の埋葬主体部と判断される。平坦面東端のＳＸ３６２は中心主体の約半分の規模である。

ＳＸ３６１　主軸方向は尾根稜線直交方向からかなり振れており、北方向からも離れる方向に傾いている。仮に主軸を尾根稜線直交方向に置いたとしても余裕があるが、あえて斜め方向としているようである。南北端に各１ｍ強の平坦面が必要であったためかもしれない。

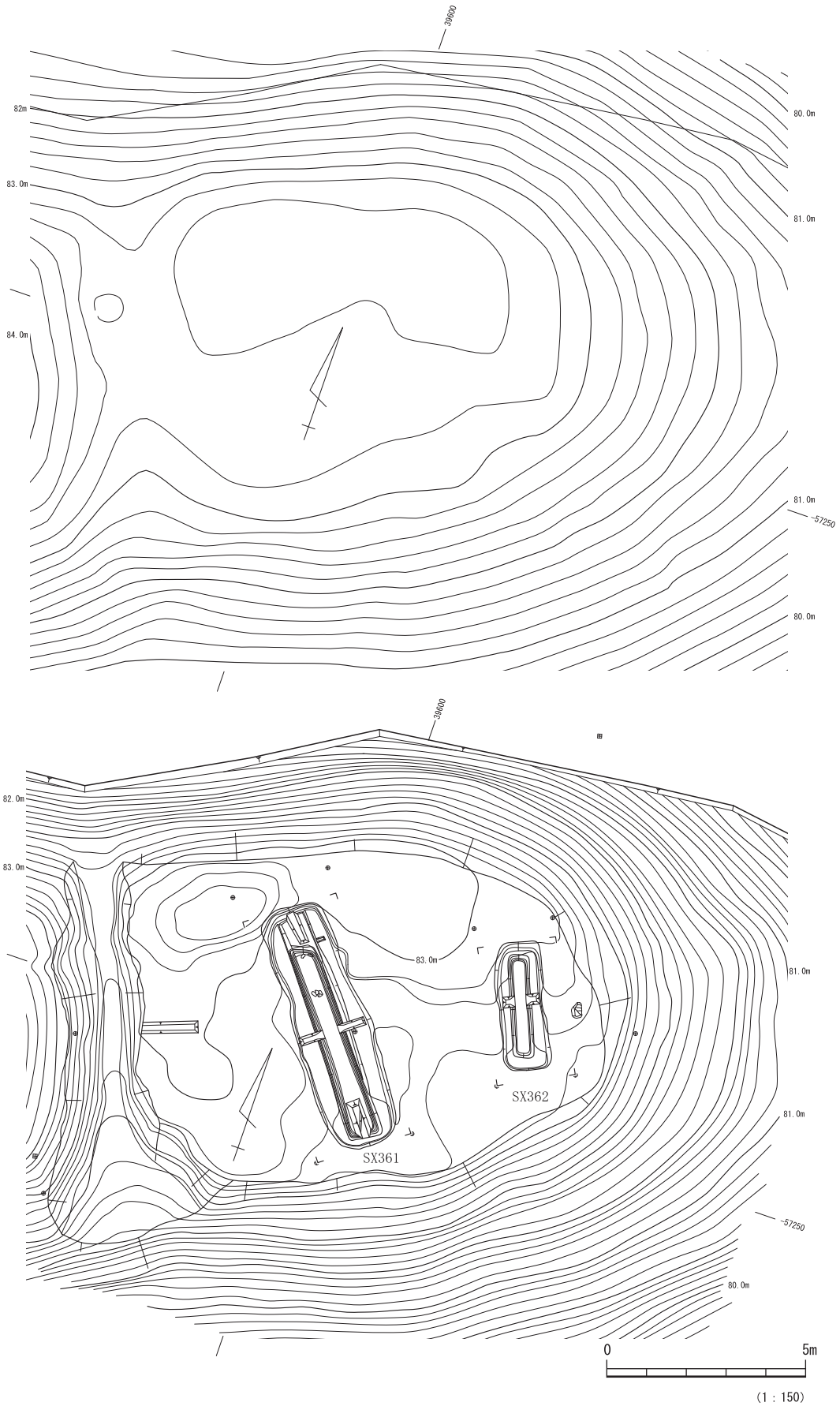
墓壙の平面は長方形に近いが、短辺はやや丸くなっている。検出面での規模は南北方向の長さ約 6.3 ｍ、中央部での東西方向の幅は約 1.95 ｍを測り、３区内では最も規模の大きいものである。検出面からの最大深は 108 ㎝で、墓壙中央部はやや窪んでおり、北側の墓壙底は南側よりも約４㎝深く掘り込まれている。

墓壙内のほぼ中央にＨ形組合せ式木棺の痕跡があり、棺本体の部分で長さ約 4.1 ｍ、幅は約 80 ㎝で幅の変化はほとんど見られない。なお、長側板の突出部も含めた棺長は約 5.8 ｍである。突出部の長さは南北でほぼ同じである。ただし、棺の北側突出部での墓壙底は底から約 30 ㎝高くなっており、棺底まで掘り込まれていない。したがって、北側突出部の長側板の高さは約 30 ㎝浅いものとなる。このようにしている理由がどこにあるのか模索中である。

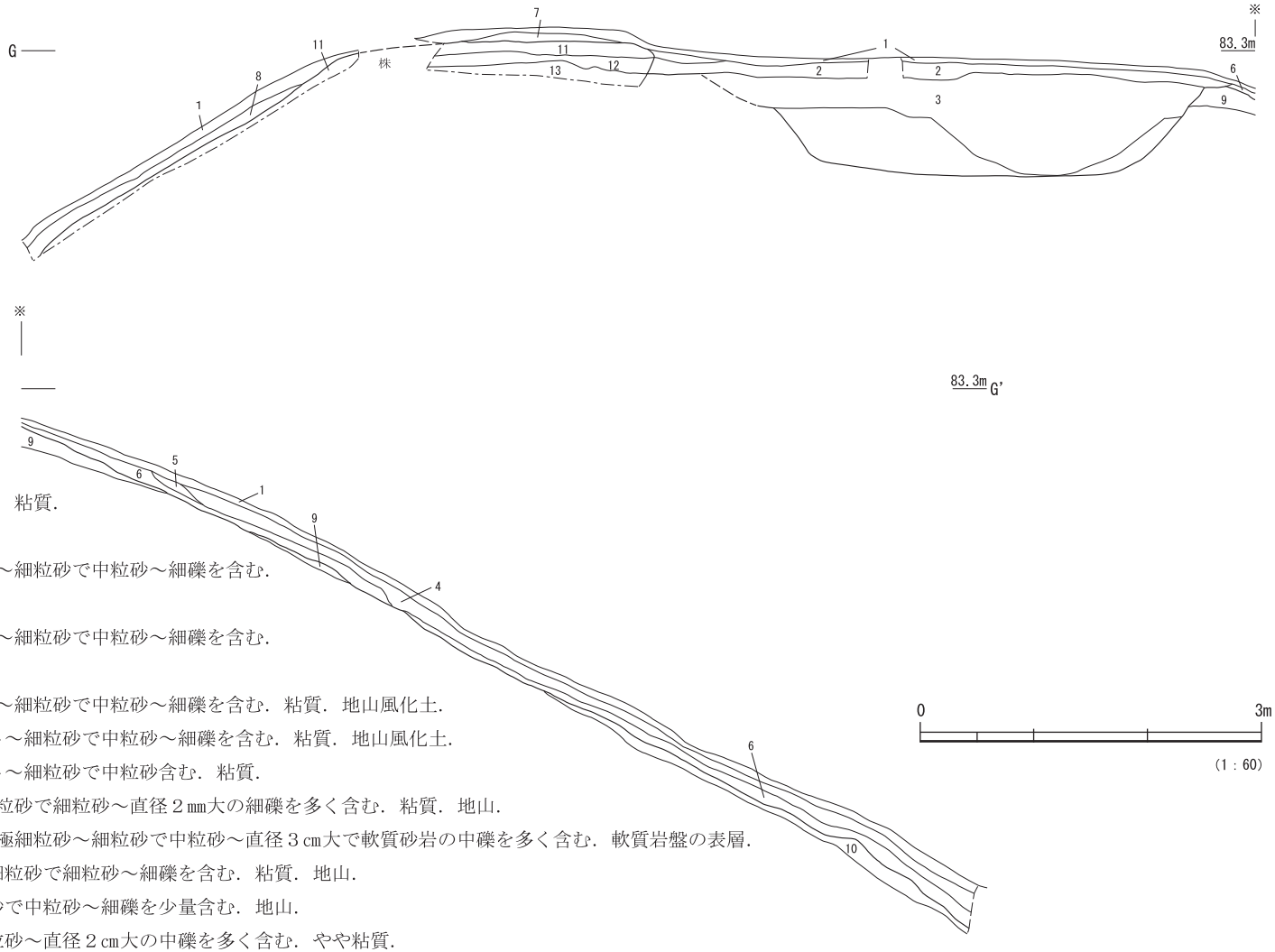
棺痕跡は最大で深さ 55 ㎝検出し、土層断面でもほぼ同じ数値となっている。これは墓壙検出面からわずか約 10 ㎝の深さであり、調査前現況表面から約 40 ㎝下がった位置にあたることから、構築時の墓壙上面は検出面よりも少なくとも 10 ㎝以上高かったことが推察される。

棺底は、墓壙底の凹凸が多く面的に検出できなかったが、ほぼ水平であったようである。棺底から約 25 ㎝上までの棺側墓壙埋土は締まった土となっていることから、土層断面図の第９・12 層上面が被葬者の棺埋納時の面、すなわち埋葬面であったと推定している。また、土層断面をみると、棺内が埋まる過程は、底部分が棺側や棺上部から徐々に流入して堆積した後、棺側上部が大きく崩壊して棺内に堆積し、その後棺内中央部に棺上部から流入した土砂により堆積したことが明らかであり、箱形木棺内部の典型的な埋まり方を示している。

ＳＸ３６１の棺底北寄り部分で角礫３点が横に並んだ状態で検出された。この礫は一辺 14 ㎝程度、幅 10 ㎝程度の自然礫であるが、接していることや上下端の高さがほぼ揃うことなどから、被葬者の枕として置かれたものと判断される。この石枕の位置や、後述する鉄鎌の出土位置から、被葬者は北側頭



第 28 図　３区６号墳墳丘（調査前・後）



１．表土（腐植土）
２．10YR5/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト
　～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．粘質．
３．６号墳ＳＸ３６１埋土．
４．10YR3.8/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．
　粘質．地山風化土．
５．10YR4.5/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．
　粘質．地山風化土．
６．10YR5/3.8 にぶい黄褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．粘質．地山風化土．
７．7.5YR5.4/4.9 にぶい褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．粘質．地山風化土．
８．7.5YR5.6/4.9 にぶい橙色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂含む．粘質．
９．10YR4.7/6 黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径２㎜大の細礫を多く含む．粘質．地山．
10．10YR4.8/7 黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径３㎝大で軟質砂岩の中礫を多く含む．軟質岩盤の表層．
11．7.5YR5/5.2 明褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を含む．粘質．地山．
12．7.5YR4.4/6 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．地山．
13．岩盤風化土．極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中礫を多く含む．やや粘質．

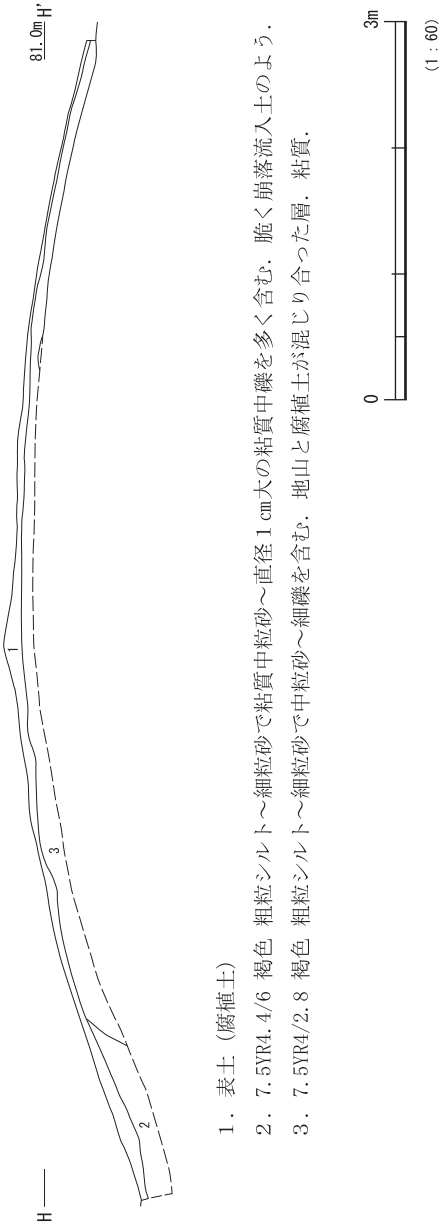
第29図　３区６号墳墳丘土層断面

位で埋葬されたと判断できる。

ＳＸ３６２　平坦面東端部に存在するが、主軸方向は尾根稜線直交方向で、稜線中央部に位置している。墓壙の平面はほぼ長方形で、隅部分はやや丸い。検出面での規模は南北方向が長さ約 3.2 ｍ、幅は南部で約 1.2 ｍ、北部では 1.1 ｍ前後を測り、北側がやや幅狭くなっている。検出面からの最大深は 48 ㎝で、墓壙底はやや丸くなっているが、ほぼ水平で、南側が２～３㎝深くなっている程度である。墓壙底部でも南側の幅が北側よりも広くなっている。

墓壙内のほぼ中央に箱形木棺の痕跡があり、長さ約 2.5 ｍ、幅は南側で約 50 ㎝、北側は約 45 ㎝で南側が広くなっている。また、底は南側が北側よりも３㎝ほど深くなっている。棺痕跡の高さは最大で 30 ㎝検出したが、墓壙や棺の検出面が調査前現況表面から深く下がった位置であったことから、埋葬時の棺の高さは 40 ㎝以上あったものと推測される。棺底は少し丸みがある。

棺や墓壙底の高さは北側が若干高いものの、墓壙底や棺痕跡の幅は北側が狭く南側が広い。断定的ではないが、被葬者の埋葬方向が南側頭位であった可能性がある。



第 30 図　３区６号墳東部土層断面

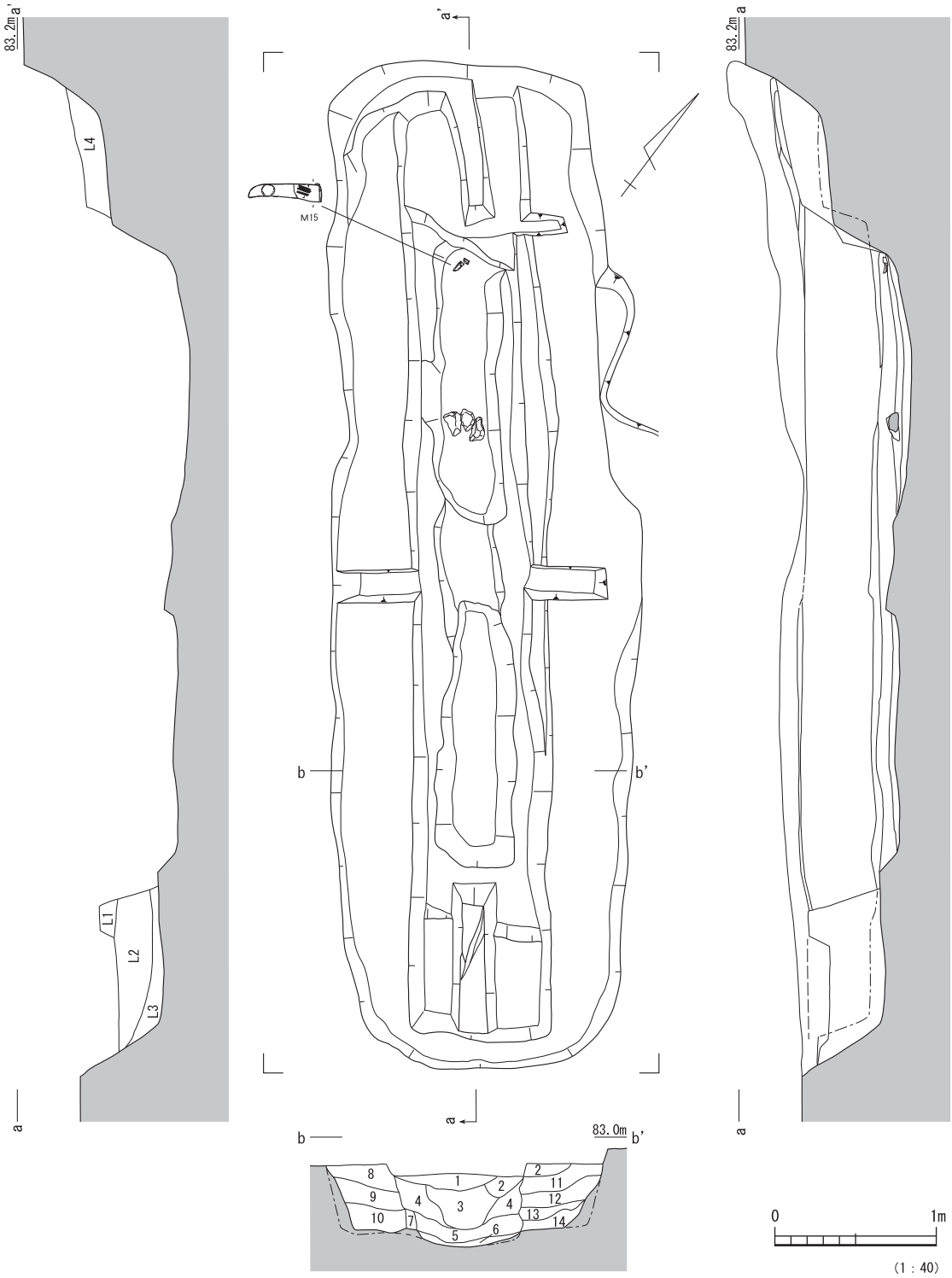
遺物出土状況

ＳＸ３６１の棺内北端部分で、石枕底面の棺底より約７㎝高い位置で鉄鎌を検出した。鉄鎌は 1.5 ㎝の間隔をおいて基部付近と刃部の２片に分かれて出土した。刃部は先端が南西方向で、背部は南東側を向け、基部付近は刃部の北東側で出土した。石枕から約 85 ㎝の間隔があり、棺の北端に接する位置にあたる。棺上に置かれていた可能性も残るが、棺内副葬品と判断しておきたい。

出土遺物（第 36 図、巻頭図版 12、写真図版 66）

鉄鎌　Ｍ 15 は曲刃鎌で、基部の一部を欠失する。全長 11.3 ㎝、基部の幅は 2.6 ㎝を測り、基部端の全体を折り返している。刃部の曲線は緩やかで、背の先端近くが弯曲しているが、大きな弯曲ではない。典型的な曲刃鎌へ移行する過渡期の形態といえるかもしれない。（魚津氏の８期〔TK73 ～ TK216〕頃）基部の木質は遺存していない。

身部の基部に近い部分に横櫛の歯のような形で扁平な木質が６本平行に銹着しており、先端部の小片も１点認められる。この木質は厚さ約 0.8 ㎜、幅 2.5 ㎜ほどで、先端は両側から幅を減じてやや尖らせている。基部側は折損しており、残存長は 2.2 ㎝ほどである。有機質の製品が銹の浸透により遺存したものであるが、その種類は不明である。木質は竹のようにも見えるが、分析していないので何ともいえ



Ｌ１．7.5YR5/4 にぶい褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含み直径１～２㎝大の中角礫を少量含む．やや粘質で締まる．

Ｌ２．7.5YR5/4 にぶい褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３㎜の細礫と直径１～２㎝大の中角礫を少量含む．粘質で締まる．

Ｌ３．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３㎝大の中角礫を少量含む．粘質で締まる．

Ｌ４．7.5YR5/4 にぶい褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径２～３㎜の細礫を微量含み直径１～２㎝大の中角礫を少量含む．やや砂質でやや軟質．

第 31 図　６号墳埋葬施設　ＳＸ３６１

１．10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎝大の中角礫をごく微量含む．粘性あり．
　　やや軟質で空隙あり．
２．2.5Y4/4 オリーブ褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１㎝大の中角礫を微量含む．砂質で粘性弱い．
　　やや軟質で空隙あり．
３．10YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルトで直径１～３㎝大の中角礫を微量含む．やや粘性あり．
　　やや締まる．
４．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～２㎝大の中角礫をごく微量含む．砂質でやや締まる．
５．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１～２㎝大の中角礫をごく微量含む．わずかに粘性あり．
　　やや締まる．
６．10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．やや砂質．やや軟質．
７．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルト．やや粘性あり．やや軟質．
８．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂で直径１㎝大の中角礫をごく微量含む．砂質で締まる．
９．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径５㎜大の細角礫をごく微量含む．砂質で締まる．
10．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎝大の中角礫を微量含む．粘性あり．締まる．
11．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～２㎝大の中角礫を少量含む．やや粘性あり．
　　やや軟質で空隙あり．
12．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径１～２㎝大の中角礫を微量含む．やや砂質でやや締まる．
13．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり細粒砂で直径１㎝大の中角礫をごく微量含む．やや砂質でやや締まる．
14．10YR5/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～２㎝大の中角礫を微量含む．
　　やや砂質でやや締まる．

第 32 図　６号墳埋葬施設　ＳＸ３６１土層名

ない。また、遺物取上げ時には、他の有機質の存在も含めて気付いていない。

７．小結

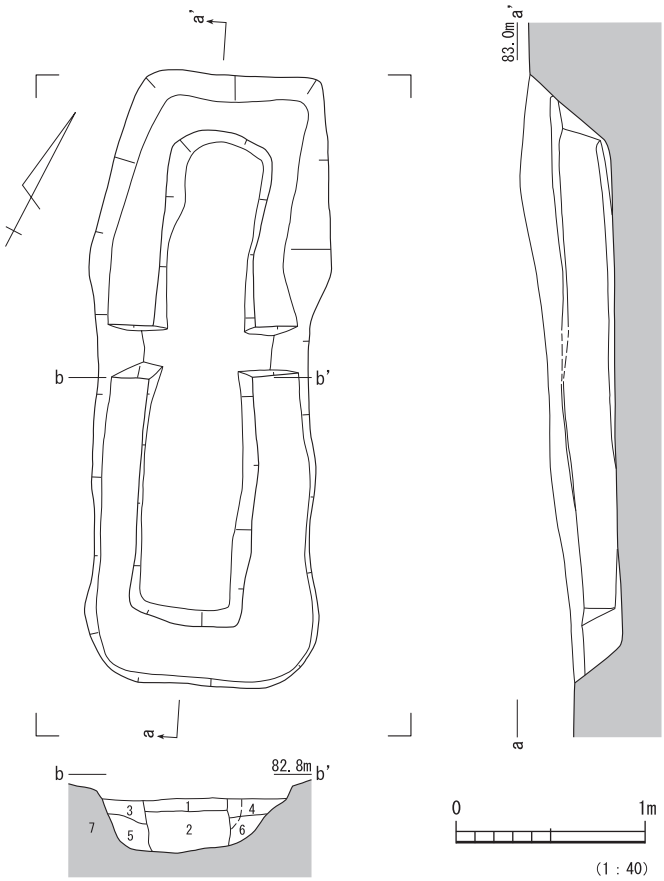
３区の調査の結果、２～６号墳の５基が区画溝で区画しながらも連続して存在していたことから、一つの群として成り立っていた可能性が高いことが判明した。尼ヶ宮古墳群全体からすれば、支群ととらえる方法もあると思われる。また、調査区外に存在する７号墳についても、地形的制約からやや離れて存在しているものの、同一尾根稜線上に存在することや、７号墳の周囲にはほかに古墳が存在していないこと、古墳の形態からも同一群を構成する古墳と考えてよいと思われる。

調査を実施した各古墳は、６号墳を除きすべて単一埋葬で、６号墳のみ２基の埋葬施設であったが、長大な木棺のＳＸ３６１が埋葬主体であることがわかり、複数埋葬の集団墓的様相ではなく、むしろ単一埋葬の原則に近いと思われる。

副葬品は２号墳で鉄刀、３号墳で鉄刀・鉄鏃・刀子のほかに土師器、６号墳で鉄鎌が出土したにとどまる。特に、６号墳では長大な木棺でありながら、鉄鎌にほぼ限られる点は、埋葬施設の規模と副葬品の質や量とが必ずしも正比例するとは限らないという点で注意が必要であろう。

各古墳の時期は、出土品から見れば、３号墳出土土器が古墳時代中期前半～中葉、実年代では５世紀前半～中頃と考えられ、同時に出土した長頸鏃も年代的には齟齬がない。６号墳出土鉄鎌は、魚津氏によれば、須恵器のＴＫ 73 ～ＴＫ 216 型式期にあたり、５世紀前半～中頃の年代が与えられる。

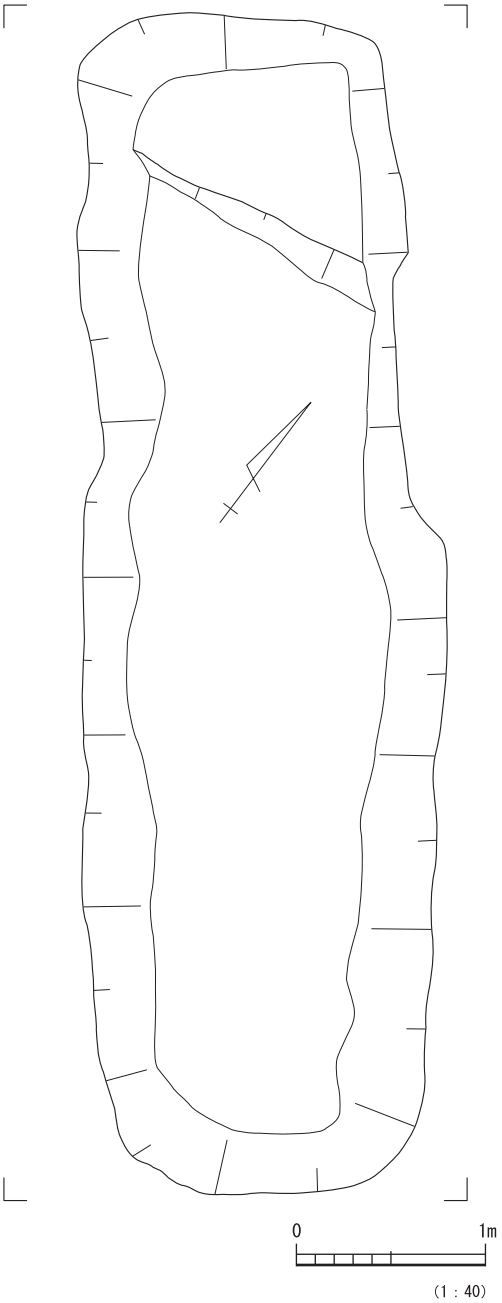
以上のことから、３・６号墳が古墳時代中期中葉頃に築造されており、各古墳の配置状況から、２～６号墳のすべてがほぼ同時期に築造されたもので、時代を追って順に築造されたものではないと考えられる。すなわち、単一の小規模集団の長が世代順に埋葬された結果ではなく、複数の集団を含むより大きな集団が同一墓域を設定し、そこに小規模な各集団の長が葬られたと考えている。より大きなその集



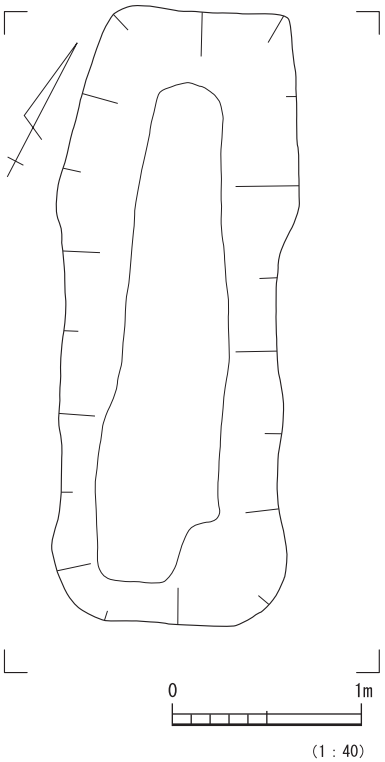
１．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．ごくわずかに粘性あり．
２．7.5Y4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～６㎝大の中角礫を含む．粘性あり．締まる．
３．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径２～３㎝大の中角礫を微量含む．やや粘性あり．
　やや軟質で空隙多い．
４．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎝大の中角礫を微量含む．粘性あり．やや軟質．
５．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂．下部に直径５㎝大の中角礫が１点あり．
６．7.5YR4/3 褐色 中粒砂～粗粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂が直径１～５㎝大の中角礫の間隙に入る．
　やや粘性あり締まる．
７．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり細粒砂～中粒砂で直径１～３㎝大の中角礫を少量含む．やや粘性ありやや
　締まる．地山．

第 33 図　６号墳埋葬施設　ＳＸ３６２

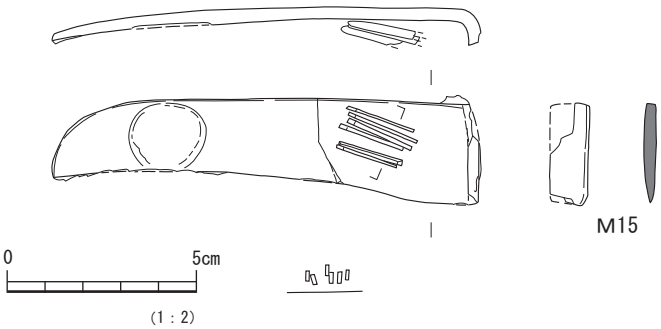
団は血縁を紐帯とした同族集団と推定され、その中に含まれる家族的な小規模血縁集団が各古墳単位を示していると推定している。



第 34 図　６号墳埋葬施設　ＳＸ３６１墓壙



第 35 図　６号墳埋葬施設　ＳＸ３６２墓壙



第 36 図　６号墳ＳＸ３６１出土鉄鎌

第２節　２区（８～10 号墳）の遺構と遺物

１．概要（第 37 ～ 40 図、巻頭図版５、写真図版 19・20）

２区は３箇所の調査区のうちの中央に位置し、３地区のなかでは最も標高が低い。地形的には、１区と同様に、南北に存在する尾根に挟まれた谷部の扇状地状の部分で、３区の丘陵尾根の南側裾部にあたり、１区とは幅約 15 ｍの谷部を挟んで北東側に位置している。この扇状地形は、後世の大きな地形改変を考慮しない場合、東側に尾根状に変化して続いてゆくが、この尾根も含めて、周囲の丘陵よりも等高線の間隔がかなり広くなっており、地滑りをおこした後の地形と推察している。

２区の地形を微視的にみると、１区との間にある谷ぎわ部分で緩く細長い尾根状地形を示し、この尾根稜線上にのるように古墳が築造されている。この尾根の北東側は傾斜がやや緩く大きな谷状地形であり、東方向に開析している。

２区の古墳は３基検出した。確認調査時においてすでに２基の古墳の存在が指摘され、山側の８号墳の墳頂部には箱式石棺の側壁上部が露出しており、９号墳もその墳丘は明確であった。本発掘調査では９号墳の南東側で区画溝状の周溝を確認したことから、古墳が１基追加（10 号墳）となったが、墳丘の大半が失われており、埋葬施設は検出されなかった。

調査前の標高は 71.6 ｍを最高とし、調査区南側の 10 号墳南東側で尾根稜線の標高が 66.5 ｍ、調査区東端の谷状地形部分が最も低く、64.7 ｍであった。３基の古墳は周溝状の区画溝を有し、２～数ｍの間隔を空けて一列に並んでおり、10 号墳以外は尾根稜線上側よりも墳頂部が高くなっていた。

埋葬施設は８号墳で箱式石棺１基、９号墳では２基の小竪穴式石室で、埋葬施設の主軸はいずれも尾根稜線とは直交する方向に営まれている。

調査は全体的に表土から 20 ㎝程度の深さに掘削し、その面で周溝や埋葬施設等の遺構を検出した。その際にすべての古墳を縦方向に横断する北西－南東方向と、各古墳を横断する方向に土層観察用畦を設けて調査を進めた。埋葬施設の調査後は、墳丘盛土を地山面まで除去して古墳の構築法の検討をおこなった。なお、９号墳の北側周溝外側で小規模な箱式石棺の一部を検出し、８号墳北東側から安山岩製の加工痕のある剝片、８号墳の北側周溝埋土から砥石が出土している。また、９号墳の北側周溝中央部の埋土からは磨石状のものが出土しているが、縄文時代のものと思われ、１区で同時期と推定しうる陥し穴に加えて磨石が２点出土していることと無関係ではなかろう。

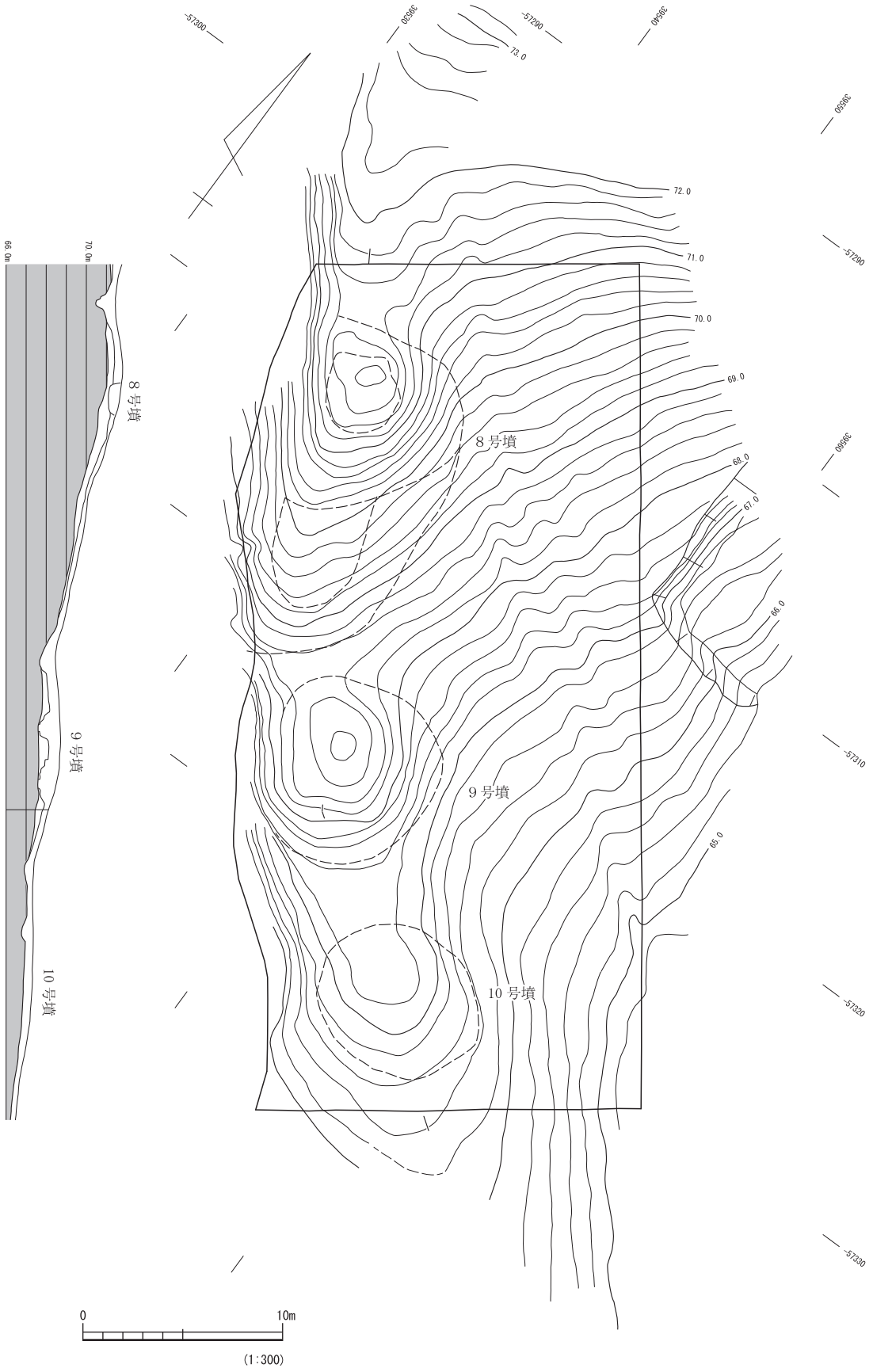
土器についても古墳に伴うものは出土しなかったが、調査区内北東部の掘削中に平安時代末頃の須恵器・土師器片が出土している。

出土遺物　（第 41・118 図、写真図版 20・64・68）

土器　（４・５）は須恵器埦の口縁部片である。口縁端部は丸くおさめ、（５）の口縁部外面には重ね焼きの痕跡である変色部分がみられ、火襷も認められる。（４・５）の口径はそれぞれ 14.8 ㎝、16.6 ㎝を測り、（５）は体部にやや丸みがみられる。（４）は表土直下にあたる北側壁の第３層上部、（５）は排土中から出土した。どちらも平安時代後期～末期の 11 世紀～ 12 世紀代のものであろう。

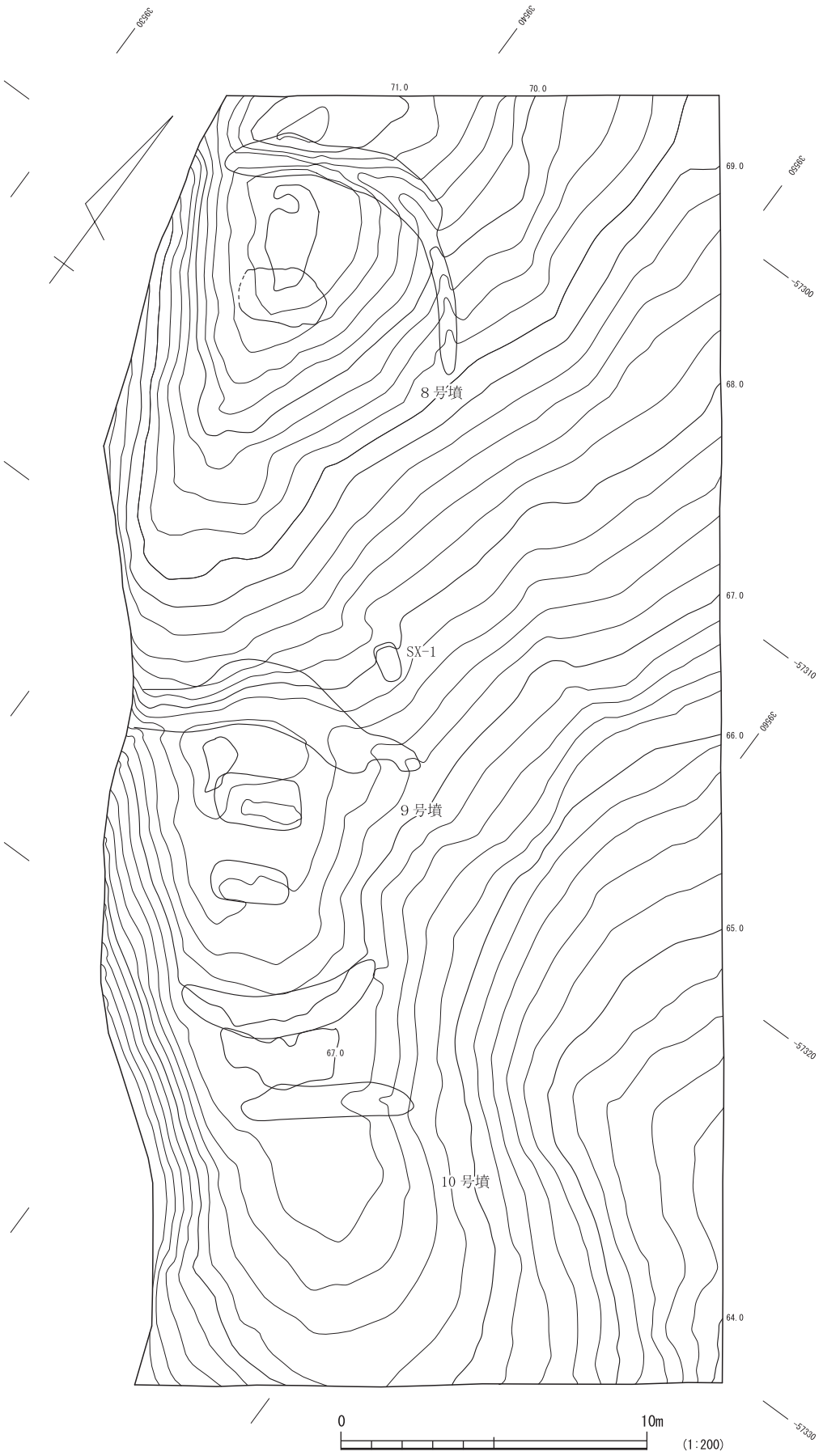
（６）は平底土師器の底部である。底面はヘラキリ、側面および内面はヨコナデのようである。器種は埦のような器形と思われ、弥生土器ではない。２区の南東調査区外の表土層に露出していたものである。須恵器埦の時期に近いものと思われる。

石製品　Ｓ１は２区北東部の第７層上面で出土した。サヌカイト（ガラス質安山岩）製の加工痕のあ

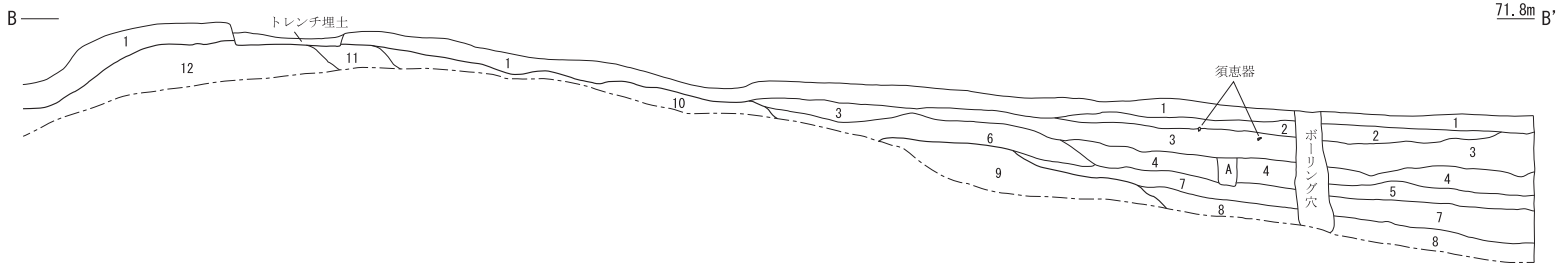


第 37 図　２区調査前地形

第 38 図　２区調査後地形



第 39 図　２区墳丘盛土除去後地形



1．表土（腐植土）10YR3/2 黒褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～中粒砂を多く含む．粗粒砂～細礫を少量含む．
2．10YR3/3 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．
3．7.5YR3/1.5 黒褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．やや粘質．須恵器片を含む．
4．7.5YR3/2.2 黒褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．やや粘質．
5．8YR3/1.5 黒褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を多く含む．
6．8YR3/2 黒褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫をやや多く含む．やや締まる．
7．7.5YR3.4/3 暗褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．締まる．
8．9YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を多く含む．締まる．
9．8YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～細礫を多く含む．締まる．地山．
10．7.5YR4/5 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～粗粒砂を少量含む．粘質．地山．
11．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径10㎝大の岩盤ブロック大礫を含む．岩盤崩落層．
12．岩盤．岩盤が崩落して固結したもの．
A．7.5YR3/1.2 黒褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．柱穴の可能性もあり．

（1：80）

第40図　2区北西壁土層断面

第 41 図　２区包含層出土土器

る剥片で、一側縁に細かい剥離がみられ、刃部を形成しているようで、スクレイパー様に見える。長さ 60.9㎜、幅 79.2㎜、厚さ 9.1㎜で、重量は 36.8 ｇである。

Ｓ２は輝石片を含む凝灰岩製の砥石で、長さ 131.7㎜、幅 52.0㎜、厚さ 50.0㎜の直方体に近い形状であるが、使用面が確認できるのは幅が最も狭い部分に限られる。使用により凹面を呈し、擦痕も認められる。他の面は自然面または割れ面である。重量は 715.6 ｇである。８号墳の北側周溝埋土から出土した。

Ｓ３は９号墳の北側区画溝埋土から出土した安山岩製と思われる敲石で、長さ 135.2㎜、幅 47.3㎜、厚さ 41.0㎜で棒状に近い。敲打痕が残るのはやや太い側の下面に限られる。重量は 347.1 ｇである。

２．８号墳（第 42 ～ 49 図、巻頭図版５、写真図版 21 ～ 23・67）

位置と検出状況

２区の北西端部に位置し、調査前にはすでに墳頂部にある箱式石棺の側壁上部が露出していた。表土掘削の結果、山側から北東の谷方向へかけて周溝を有する単一埋葬の古墳であることが判明した。

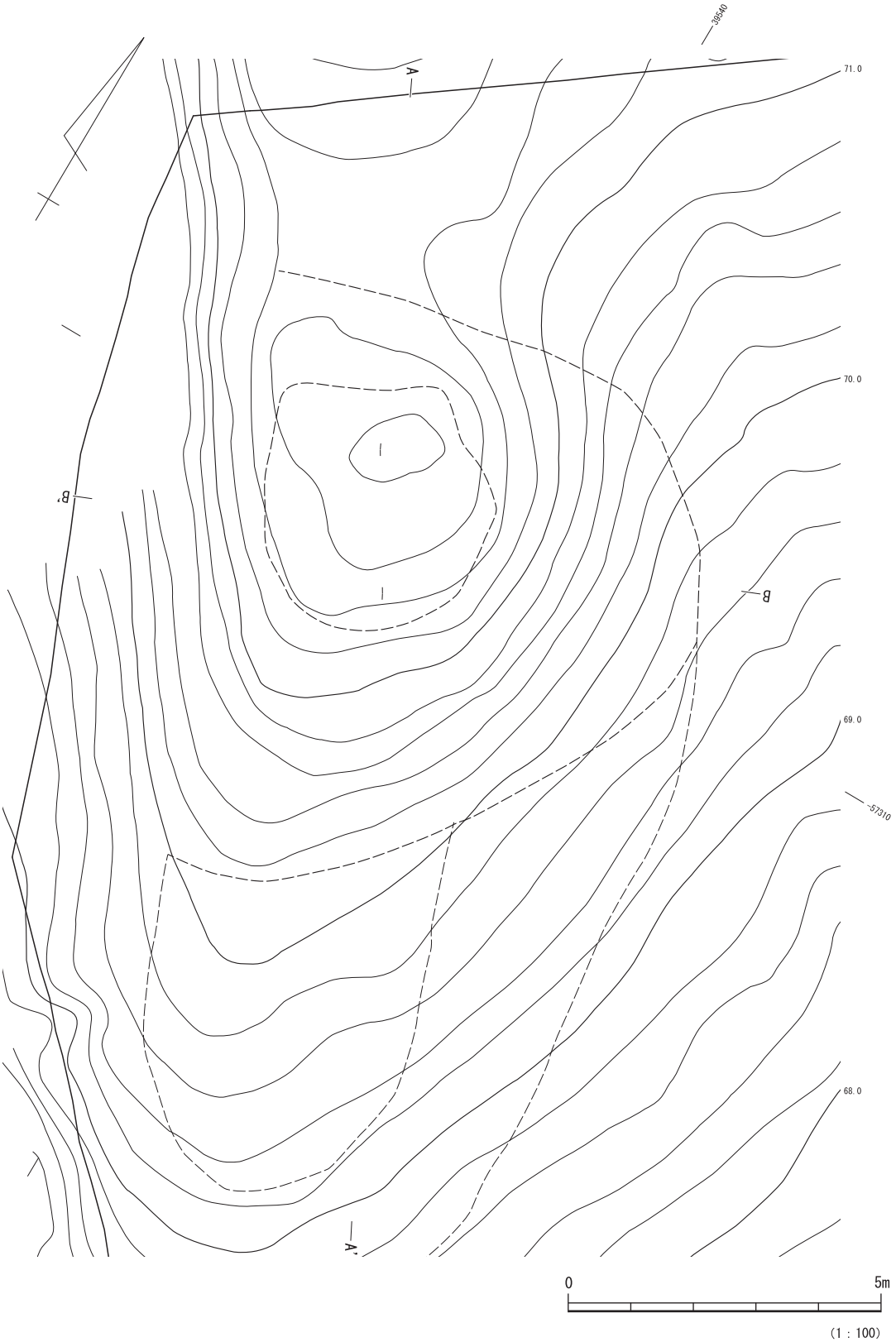
８号墳墳頂最高所は 71.8 ｍ、古墳外側の山側の標高が 71.5 ｍ程度であることから、山側古墳裾よりも墳頂部が高い形態の古墳である。

形態・規模

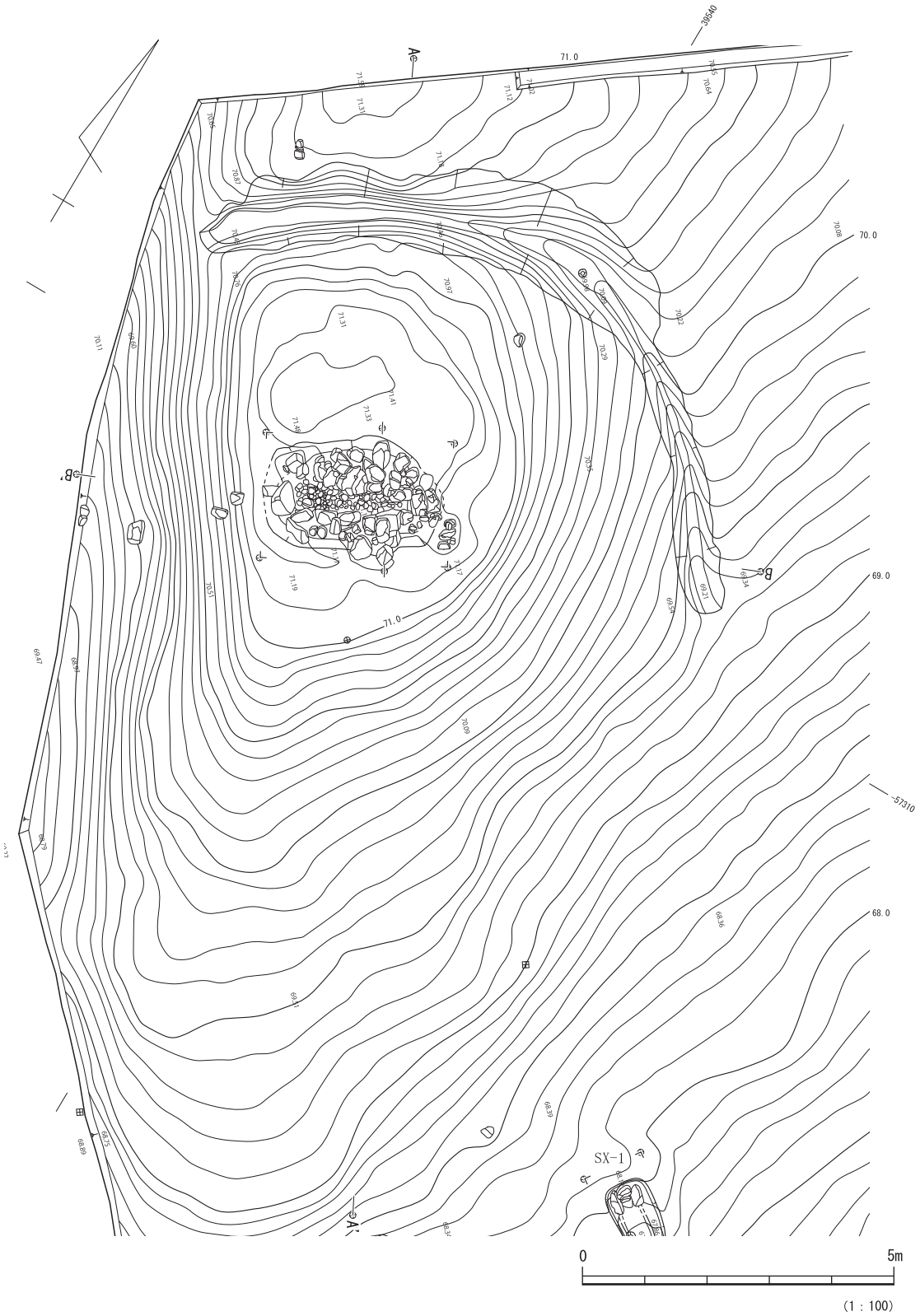
墳頂部は緩やかな丸みをもった平坦面で、尾根稜線方向では約 5.5 ｍ、尾根直交方向は西側が大きく削られているが、現状では４ｍ程度の規模である。墳頂部の形態は明瞭であるにもかかわらず、墳裾は特に南東側の尾根筋において不明確である。ただし、標高 70.0 ｍと 70.2 ｍの等高線の間が開いており、しかも、そこを境として上方と下方で等高線の間隔が異なり、下方の等高線間隔が幅広くなっていて、傾斜が緩くなっていることにより、かろうじて墳裾と判断できると思われる。調査前にはこの緩い傾斜部分に明確な墳丘を持たずに埋葬施設を設けている可能性を考えて、平坦面と傾斜面を分離して、地形整形の痕跡を見出そうとした。しかし調査の結果、この部分には埋葬施設や区画溝などの遺構は全く検出されず、人為的な整形を伴わない自然地形であることが判明した。

８号墳の南東側墳裾は調査前で標高 70.2 ｍの等高線付近となり、調査後では 69.8 ｍの等高線付近であろう。また、北東部での墳裾は、調査前で 69.6 ｍ、調査後は 69.3 ｍ付近となろう。したがって、墳形は円形と思われ、その規模は南北方向で直径約 11.4 ｍとなる。東西方向の規模は、墳丘の西側が大きく崩落していることから、確定は難しいが、埋葬施設が墳丘の中心に存在していると仮定すれば、10.8 ｍの直径を推定することができる。調査後では、墳頂最高所の標高が 71.48 ｍで、墳裾最下部から墳頂までの高さは約 2.3 ｍを測り、北西側周溝底から墳頂部まで約１ｍ、北西側の周溝外から墳頂部までの高さは約 30㎝である。いずれも調査後の値であり、古墳築造時にはそれよりも 40㎝以上は高かったと推察される。

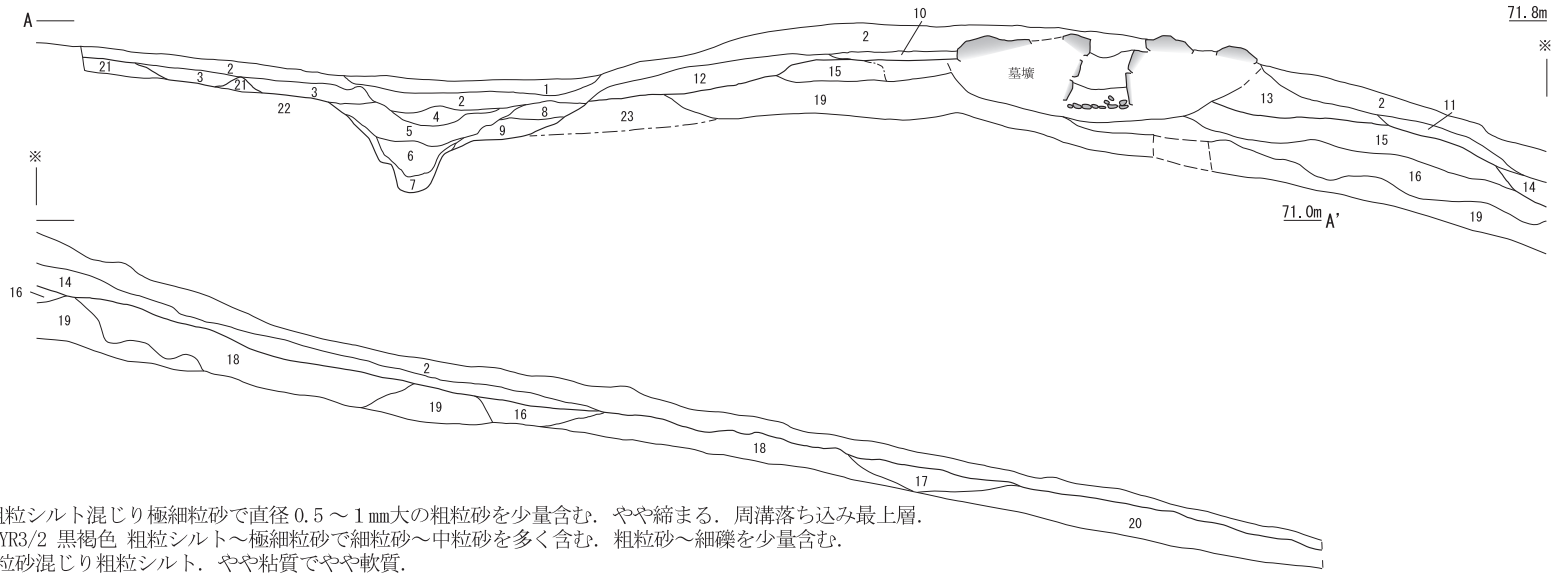
周溝は北側を中心に墳丘外周の４分の１程度の部分に残存し、最も残りがよかった北側では最大幅約 1.5 ｍ、検出面からの深さは最深で約 70㎝である。底幅は 30㎝前後で、横断面は底がやや丸いＶ字形に近い。周溝底は東部側に低くなり、標高 69.2 ｍのところで周囲の地形とつながって自然消滅している。



第 42 図　２区８号墳調査前墳丘



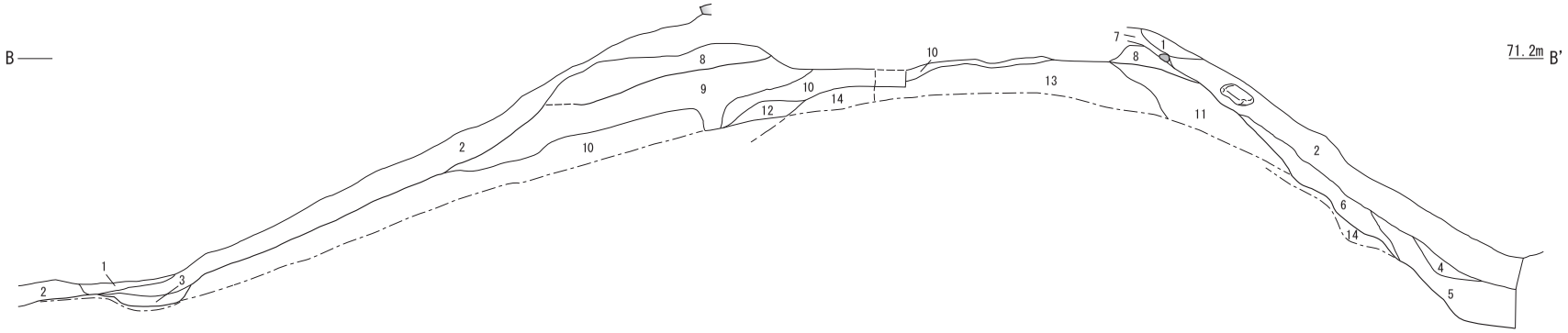
第 43 図　２区８号墳調査後墳丘



１．10YR3/3 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径 0.5 ～ 1 ㎜大の粗粒砂を少量含む．やや締まる．周溝落ち込み最上層．
２．表土（腐植土）10YR3/2 黒褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～中粒砂を多く含む．粗粒砂～細礫を少量含む．
３．7.5YR4/3 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト．やや粘質でやや軟質．
４．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～ 1 ㎜大の粗粒砂を含む．やや締まる．
５．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～ 1 ㎜大の粗粒砂を中量含む．直径 1 ㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．第６層と同質で第６層が土壌化した層．
６．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで 0.5 ～ 1 ㎜大の粗粒砂を中量含む．直径 1 ㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．
７．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルトで細粒砂がごく微量混じる．やや粘質でやや軟質．
８．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～ 1 ㎜大の粗粒砂を少量含む．やや締まる．
９．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトのブロックと地山由来の 7.5YR2/2 黒褐色の風化礫混じる．
10．10YR3/4 暗褐色 細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～ 1 ㎜大の粗粒砂を少量含む．やや締まる．
11．7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～ 1 ㎜大の粗粒砂を微量含む．やや粘質で締まる．
12．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫と直径１～２㎝の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
13．7.5YR4/3 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含む．やや粘質でやや締まる．東西方向の第８層と同一．
14．7.5YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～ 1 ㎜大の粗粒砂と直径１～２㎝大の中礫を微量含む．やや粘質で締まる．
15．10YR3/3 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～ 1 ㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．暗色化強い．旧表土．東西方向の第９層と同一．
16．7.5YR4/3 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～ 1 ㎜大の粗粒砂を中量含む．直径１～３㎝大の中礫をごく微量含む．
　やや粘質で締まる．やや暗色化．旧表土直下の土壌化層．東西方向の第 10 層と同一．
17．5YR3/2 暗赤褐色 直径５～ 10 ㎝大の風化中礫の間隙に 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトが入る．固く締まる．
18．7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～６㎝大の中礫を中量含む．やや粘質でやや締まる．
19．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～６㎝大の中礫を含む．やや粘質で締まる．東西方向の第 13 層と同一．
20．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルトで直径１～５㎜大の極粗粒砂・細礫を少量含む．やや軟質で粘性あり．
21．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径 10 ㎝大の岩盤ブロック大礫を含む．岩盤崩落層．
22．7.5YR4/4 暗褐色 風化礫の間隙に 7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂が入る．岩盤．
23．岩盤．

0　2m
（1：50）

第 44 図　２区８号墳墳丘土層断面(1)



１．腐植土層．10YR3/3 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で極粗粒砂を微量含む．軟質．

２．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎜大の粗粒砂を微量含む．直径３～４㎝大の地山由来風化中礫を微量含む．やや締まる．上部は樹根により空隙多い．

３．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．粘性あり．軟質．

４．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎜大の粗粒砂を微量含む．やや締まる．

５．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～５㎝大の中角礫をごく微量含む．やや軟質で空隙多い．

６．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～２㎝大の地山風化中礫を少量含む．やや軟質で空隙多い．

７．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎜大の粗粒砂を少量含む．固く締まる．

８．7.5YR4/3 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含む．やや粘質でやや締まる．南北方向の第 13 層と同一．

９．10YR3/3 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．暗色化強い．旧表土．南北方向の第 15 層と同一．

10．7.5YR4/3 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～１㎜大の粗粒砂を中量含む．直径１～３㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質で締まる．やや暗色化．旧表土直下の土壌化層．南北方向の第 16 層と同一．

11．7.5YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１～２㎝大の中礫を中量含み直径４～５㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質．やや軟質で空隙多い．

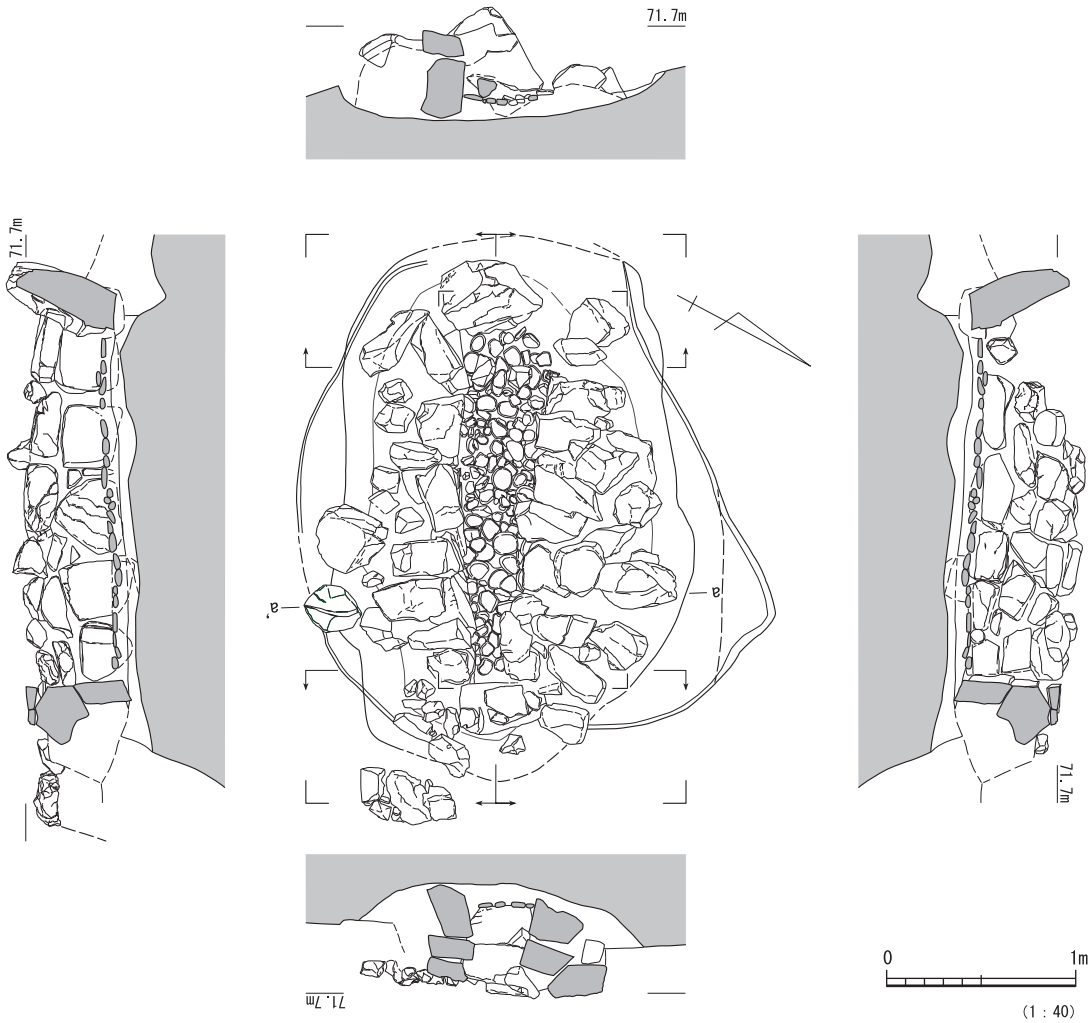
12．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～１㎜大の粗粒砂を多量に含む．粘質で締まる．僅かに暗色化．

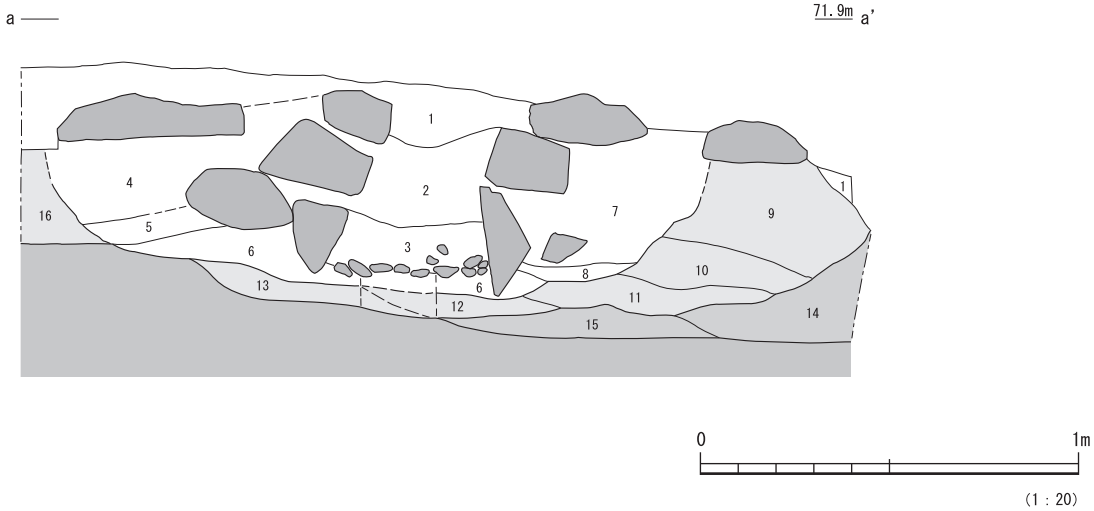
13．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～６㎝大の中礫を含む．やや粘質で締まる．南北方向の第 19 層と同一．

14．直径５～ 10 ㎝大の風化中礫・大礫の間隙に 10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂が入る．

0　2m
（1：50）

第 45 図　２区８号墳墳丘土層断面(2)

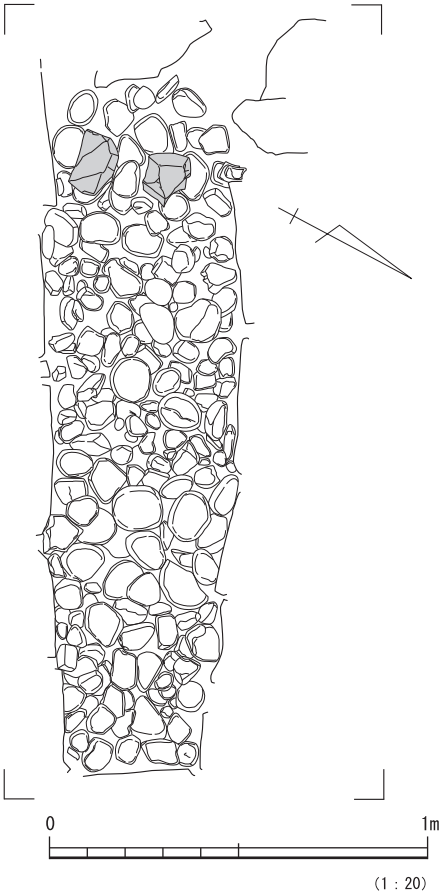




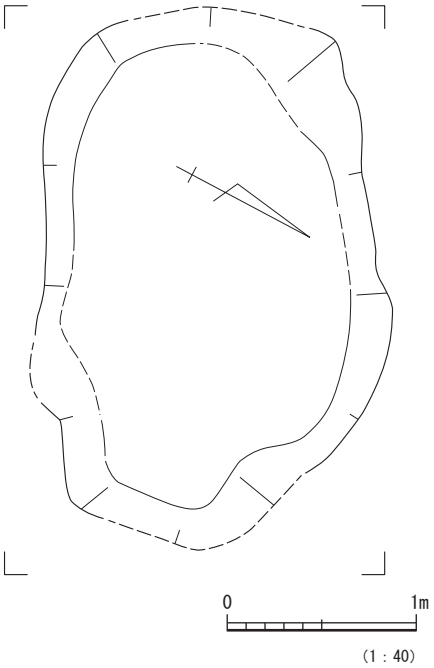
第 46 図　８号墳埋葬施設

１．腐植土 10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径５㎜大の中礫をごく微量含む．やや軟質で空隙多い．
２．7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～５㎜大の極粗粒砂・細礫・中礫を中量含む．やや締まる．
３．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルトで直径２～５㎜大の細礫・中礫を微量含む．やや軟質．
４．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎜大の粗粒砂をごく微量含む．粘質で締まる．
５．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径 0.5 ～２㎜大の粗粒砂・極粗粒砂を微量含む．やや粘質でやや締まる．
６．10YR3/3 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～２㎜大の粗粒砂・極粗粒砂を少量含む．
　やや粘質でやや締まる．
７．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径 0.5 ～４㎜大の粗粒砂～細礫を少量含む．
　直径１㎝大の中礫をごく微量含む．やや砂質で締まる．
８．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎜大の粗粒砂を微量含む．やや砂質で締まる．
９．7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～３㎜大の粗粒砂～細礫を少量含む．
　直径２～３㎝大の中礫をごく微量含む．砂質で締まる．
10．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径 0.5 ～２㎜大の粗粒砂・極粗粒砂を微量含む．やや砂質でやや締まる．
11．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の極粗粒砂・細礫を微量含み直径２㎝大の
　中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる..
12．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の極粗粒砂・細礫をごく微量含む．粘質でやや締まる．
13．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで 7.5YR5/4 にぶい黄褐色 中粒砂～粗粒砂の地山ブロックを多量に含む．
　粘質でやや締まる．
14．7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで 0.5 ～１㎜大の粗粒砂を微量含む．やや粘質でやや締まる．
15．7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルト．やや粘質で締まる．
16．7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．
　やや粘質でやや締まる．

第 47 図　８号墳埋葬施設土層名



第 48 図　８号墳埋葬施設礫床



第 49 図　８号墳埋葬施設墓壙

埋葬施設

埋葬施設は墳頂平坦面の南東寄りに位置する箱式石棺で、塊石を積み上げて構築したもので、調査前から墳頂部に露出しており、内部には土砂が充満し、蓋石は遺存していなかった。他に埋葬施設は検出していない。石棺の北西側長側壁は３段、南東側では２段の石積みが遺存しており、周囲にも壁体に使用されていたと想定される塊石が散乱していた。北西側の壁は特に上部が内側にせり出しており、土圧により押されたものと思われる。残存高は最大で 55cm である。石棺の内幅は南西端で 47cm、北東端の底では 34cm である。石棺の主軸は南西－北東方向に近く、厳密にはＳ 62°Ｗである。石棺の北東側短側部分は２石残存し、ほぼ直立していたが、南西側は高さ約 60cm の１石が残存し、外側に傾いていた。底面での石棺内法長は 1.84 ｍで、底には円板状の礫が敷き詰められていた。これらの礫は「どら焼き」に似た円板状を呈する亜円～円礫が多く、直径 12cm 程の大型のものも多く認められた。川原石と思われ、石材も凝灰岩・安山岩・流紋岩・閃緑岩・砂岩などさまざまであるが、火山砕屑岩や火山岩がやや多いようである。棺底の高さは南西側が北東側よりも６cm 程度高くなっており、南西側短側石から 20cm 程度内側で礫敷上に角礫２点が検出された。自然礫の石枕と思われるが、その間隔は約８cm で、原位置から若干動いている可能性が高い。石棺の内幅の差、石枕の存在、棺底の高さから、被葬者は西南西頭位であったと判断できる。また、頭部側の短側石には大型のもの１枚、足側は小型のもの２枚を使用している。

石棺内から遺物は検出されなかった。

墓壙は平面小判形で、長径約 2.8 ｍ、短径約 1.8 ｍで、底は丸みを持ち、検出面からの深さは最大で 45cm 程度であった。石棺を構築しながら埋められたと思われ、やや粘質の土を使用している。

３．９号墳（第 50 ～ 57 図、巻頭図版６、写真図版 24 ～ 30）

位置と検出状況

９号墳は２区の列状に存在する３基のうち中央に位置しており、北西側の８号墳とは約８ｍ離れた位置で、南東側の 10 号墳とは周溝間隔約２ｍの距離を置いて存在している。調査前には、標高約 68.8 ｍの墳頂最高所が、山側墳裾よりも 40cm 以上高くなっていたことから古墳と認識でき、等高線の形状から円形の墳丘であることも想定できた。８号墳ほどではないが、９号墳も南西側が谷状地形となっており、それに伴って墳丘も一部崩落していたため、南西側の残存墳丘ラインは直線的である。

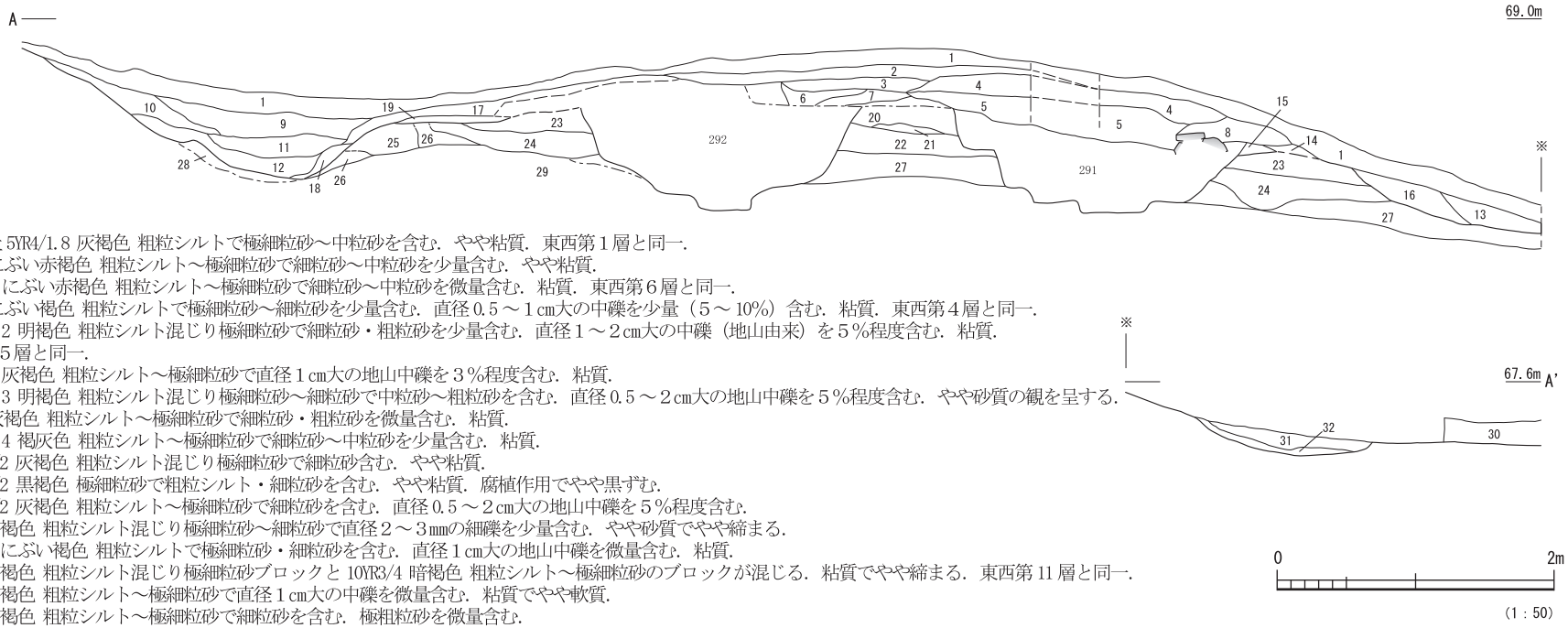
形態・規模

調査の結果、８号墳がある尾根上側と 10 号墳の尾根下側に尾根稜線直交方向の弧状の区画溝を有し、現状は楕円形に近い墳丘を有する円墳であることが判明した。尾根稜線方向の長径は約 9.5 ｍ、短径は現状で９ｍほどであるが、もとは 10 ｍ程度であった可能性が高い。調査後の尾根稜線下側から墳頂までの高さは約1.5ｍで、北東部の墳裾は明確ではないが、標高67.0ｍの等高線付近と判断している。なお、９号墳の北側、墳裾から約 2.5 ｍ離れた位置で小型の箱式石棺墓（ＳＸ－１）を検出した。

墳頂部平坦面は６ｍ× 5.5 ｍでやや丸みがある。

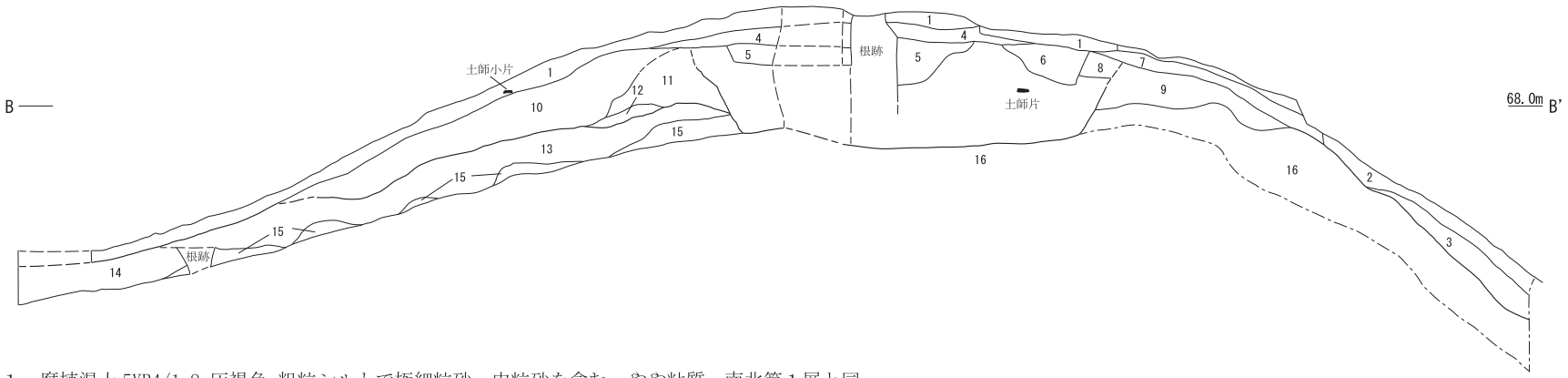
区画溝のうち、尾根稜線上側のものは長さ 9.5 ｍを検出したが、南西側は谷部に削られ、北東側は標高 67.2 ｍのあたりで地形の傾斜により自然消滅している。この溝の最大幅は約 2.3 ｍ、検出面からの深さは最深部で約 80cm、断面形状は上部が開くＵ字形に近く、底は北東方向に傾斜している。尾根稜線下側の区画溝は長さ約 6.5 ｍ検出した。幅は 1.2 ｍ程度で変化は少ないが、検出面からの深さは 20cm 程度と浅い。底は丸みがある。両端とも傾斜面に連続して自然消滅している。

第 50 図　２区９号墳墳丘（調査前・後）



1．腐植混土 5YR4/1.8 灰褐色 粗粒シルトで極細粒砂～中粒砂を含む．やや粘質．東西第１層と同一．
2．6YR4/3 にぶい赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～中粒砂を少量含む．やや粘質．
3．6YR4/3.5 にぶい赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～中粒砂を微量含む．粘質．東西第６層と同一．
4．7YR5/4 にぶい褐色 粗粒シルトで極細粒砂～細粒砂を少量含む．直径 0.5～１cm大の中礫を少量（５～10%）含む．粘質．東西第４層と同一．
5．7.5YR5/5.2 明褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂・粗粒砂を少量含む．直径１～２cm大の中礫（地山由来）を５%程度含む．粘質．東西第５層と同一．
6．7YR4/1.6 灰褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１cm大の地山中礫を３%程度含む．粘質．
7．7.5YR5/5.3 明褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む．直径 0.5～２cm大の地山中礫を５%程度含む．やや砂質の観を呈する．
8．7YR4/2 灰褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂・粗粒砂を微量含む．粘質．
9．7.5YR4/1.4 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～中粒砂を少量含む．粘質．
10．7.5YR4.5/2 灰褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂含む．やや粘質．
11．7.5YR3.4/2 黒褐色 極細粒砂で粗粒シルト・細粒砂を含む．やや粘質．腐植作用でやや黒ずむ．
12．7.5YR3.6/2 灰褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を含む．直径 0.5～２cm大の地山中礫を５%程度含む．
13．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３mmの細礫を少量含む．やや砂質でやや締まる．
14．7.5YR5/4 にぶい褐色 粗粒シルトで極細粒砂・細粒砂を含む．直径１cm大の地山中礫を微量含む．粘質．
15．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂ブロックと 10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂のブロックが混じる．粘質でやや締まる．東西第 11 層と同一．
16．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１cm大の中礫を微量含む．粘質でやや軟質．
17．7YR4.4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を含む．極粗粒砂を微量含む．
18．5YR3.7/4 にぶい赤褐色 細粒砂で粗粒シルト・極細粒砂を含む．
19．7YR4.4/5 褐色 粗粒シルトで極細粒砂を多く含む．粘質．
20．7.5YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３mm大の細礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
21．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで粗粒砂～極粗粒砂をごく微量含む．粘質でやや締まる．東西第 12 層と同一．
22．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３mm大の細礫と直径１～２cm大の中礫を微量含む．やや砂質で締まる．
23．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３mm大の細礫をごく微量含む．やや粘質でやや軟質．旧表土．東西第 13 層と同一．
24．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２cm大の中礫を少量含む．粘質でやや締まる．旧表土直下の土壌化層．
25．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径 0.5～１mm大の粗粒砂を微量含む．やや粘質でやや締まる．
26．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～２cm大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
27．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～中粒砂で直径２～４mm大の細礫と直径１～２cm大の中礫を少量含む．やや粘質で締まる．
28．5YR5/7 明赤褐色 粗粒シルトで極細粒砂・細粒砂を少量含む．直径 0.5～５cm大の軟質中角礫を 30%程度含む．軟質岩盤層．
29．岩盤．
30．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5～１mm大の粗粒砂を微量含む．やや軟質で空隙あり．
31．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２mm大の極粗粒砂を微量含む．やや粘質でやや締まる．
32．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１mm大の粗粒砂と直径１～２cm大の地山中礫を微量含む．やや軟質で空隙あり．やや粘性あり．

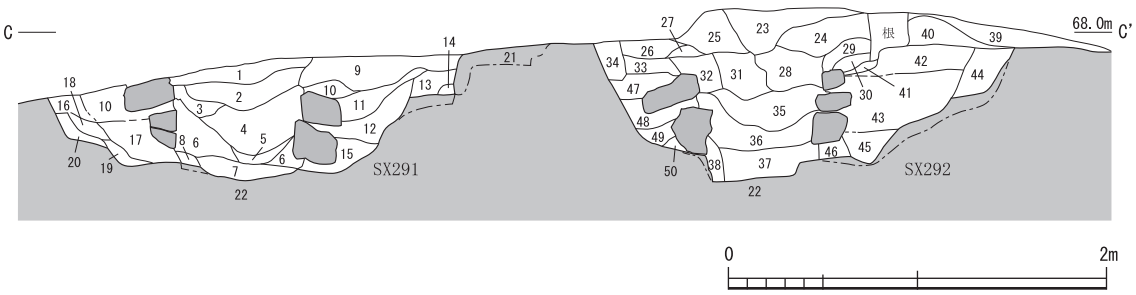
第 51 図　２区９号墳墳丘土層断面(1)



１．腐植混土 5YR4/1.8 灰褐色 粗粒シルトで極細粒砂～中粒砂を含む．やや粘質．南北第１層と同一．
２．6YR4/3 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂を含む．脆い．
３．6YR4.5/3 にぶい赤褐色 粗粒シルトで極細粒砂～細粒砂を含む．中粒砂～中礫を少量含む．脆い．
４．7YR5/4 にぶい褐色 粗粒シルトで極細粒砂～細粒砂を少量含む．直径 0.5 ～１㎝大の中礫を少量（５～ 10%）含む．粘質．南北第４層と同一．
５．7.5YR5/5.2 明褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂・粗粒砂を少量含む．直径１～２㎝大の中礫（地山由来）を５％程度含む．粘質．南北第５層と同一．
６．6YR4/3.5 にぶい赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～中粒砂を微量含む．粘質．南北第３層と同一．
７．7YR4.6/3.5 にぶい褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を少量含む．粘質．盛土崩落層．
８．6YR4.5/4.4 にぶい赤褐色 粗粒シルトで極細粒砂～細粒砂を含む．細礫を７％程度含む．やや粘質．
９．7.5YR4/3 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎝の中礫を微量含む．やや砂質でやや軟質．
10．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや軟質．
11．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂ブロックと 10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂のブロックが混じる．粘質でやや締まる．南北第 15 層と同一．
12．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで粗粒砂～極粗粒砂をごく微量含む．粘質でやや締まる．南北第 21 層と同一．
13．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや粘質でやや軟質．旧表土．南北第 23 層と同一．
14．7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量含む．粘質で締まる．
15．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜の細礫を微量含む．粘質で締まる．
16．岩盤．

0　2m
（1：50）

第 52 図　２区９号墳墳丘土層断面(2)



１．5YR4/4 にぶい赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径１cm大の中礫を多く含む.
２．5YR4/4.8 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径１cm大の中礫を非常に多く含む．やや軟質.
　地山ブロックを含む.
３．5YR4/2.6 にぶい赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径４mm大の細礫を含む．やや軟質.
４．6YR4/3 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～直径５mm大の中礫を非常に多く含む．軟質で地山ブロックを含む.
５．6YR4/4 にぶい赤褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む．やや軟質で地山ブロックを微量含む.
６．7YR4/3.5 褐色 粗粒シルト～極細粒砂．やや粘質でやや軟質.
７．7.5YR4/4 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂．粘質で締まる．棺床とした粘土か.
８．5YR4/6 赤褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．粘質．地山土壌化層．棺を安定させるための置土か.
９．7YR3.4/3 暗赤褐（紫褐）色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径１cm大の中礫を少量含む．やや粘質.
10．6YR4/4 にぶい赤褐色 細粒砂混じり極細粒砂で細粒砂～細礫を少量含む．やや砂質.
11．5YR4/4 にぶい赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～粗粒砂を微量含む．やや粘質.
12．5YR3/3.5 暗赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～直径１cm大の中礫を少量含む．やや粘質.
13．7.5YR4/3.5 褐色 極細粒砂～細粒砂で粗粒シルトを微量含む．やや砂質．中粒砂流～粗粒砂はほとんど含まない.
14．6YR4/4 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂～粗粒砂を微量含む．やや粘質.
15．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 cm大の中礫を少量含む．やや粘質でやや締まる.
16．6YR3/4 暗赤褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～粗粒砂を微量含む．やや砂質.
17．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～１cm大の中礫をごく微量含む．やや砂質でやや軟質.
18．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径 0.5 ～１mm大の粗粒砂を微量含む．やや粘質でやや締まる.
19．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂のブロックを含む.
　極粗粒砂を微量含む．やや砂質でやや軟質.
20．5YR4/4 にぶい赤褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３mmの細礫を微量含む．やや粘質でやや締まる.
21．7YR3/3 暗褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～粗粒砂と炭化物を少量含む.
22．5YR4/4.7 赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂．軟質岩盤と呼んでいる砂岩小礫を含んだ赤土層.
23．5YR3.4/3 暗黄褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．やや粘質.
24．5YR3.4/4 暗赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を少量含む．やや粘質.
25．7YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径５mm大の中礫を多く含む.
26．7.5YR3/2.4 黒褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を多く含む．中粒砂～細礫を微量含む.
27．4YR4/4 にぶい赤褐色 極細粒砂～細粒砂～直径５mm大の中礫を含む.
28．7YR3.6/4 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～直径５mm大の中礫を含む．やや軟質.
29．7YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を多く含む．やや砂質.
30．8YR3/8 暗褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂流～粗粒砂を含む．やや砂質.
31．7YR3.8/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径１cm大の中礫を非常に多く含む．やや粘質でやや軟質.
　地山ブロックを少量含む.
32．7.5YR3.6/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径５mm大の中礫を微量含む.
33．7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫をごく僅かに含む．やや砂質.
34．7YR3/3 暗褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む．やや軟質.
35．7.5YR4/5 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～直径１cm大の中礫を微量含む．地山ブロックを微量含む.
36．7.5YR3.3/3 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂．軟質で地山ブロックを含む.
37．8YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．粘質でやや軟質．棺底の埋め立て粘土か.
38．6YR4.4/7 赤褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．粘質．地山土壌化層で軟質岩礫を含む．棺側の埋め立て層か.
39．7YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を少量含む．やや粘質.
40．7YR4/5 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を含む．やや粘質.
41．6YR3/4 暗赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂流～細礫を微量含む．粘質.
42．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．やや粘質でやや締まる.
43．7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルトで粗粒砂～極粗粒砂を微量含む.
　5YR4/8 赤褐色 中粒砂混じり粗粒シルトのブロックを含む.
44．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３mm大の細礫をごく微量含む．やや粘質で締まる.
45．7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで 7.5YR4/4 褐色 粗粒砂混じり極細粒砂～細粒砂のブロックを含む.
46．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３mm大の細礫をごく微量含む．粘質で締まる.
47．5YR4/4 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～中粒砂で直径２～３mm大の細礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる.
48．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで 7.5YR5/8 明褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒ブロックを含む.
　0.5 ～１mm大の粗粒砂を微量含む．やや粘質でやや締まる.
49．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂～細粒砂のブロックを含む．やや粘質でやや軟質.
50．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルトで直径２mm大の細礫を微量含む．粘質でやや軟質.

第 53 図　９号墳埋葬施設埋土土層断面

埋葬施設

墳頂平坦面に北東－南西方向に長軸をもつ竪穴式石室が２基並列して存在していた。検出順に南東側のものをＳＸ２９１、北西側はＳＸ２９２と呼称する。共に天井石は遺存しておらず、石室内は土砂で充満していた。２基の石室規模はほとんど差が認められないことから、この２基が主体部と判断できる。

ＳＸ２９１　主軸方向は尾根稜線方向に直交し、西南西－東北東方向で、厳密にはＳ 62°Ｗと８号墳の埋葬施設と同じ方向である。石室はやや扁平に近い自然石を積み上げたもので、２～３段程度残存していた。また、長側壁体の上部には小さな石が多く認められることから、石室の壁は天井石下面に近い高さまで残存している可能性が高い。なお、残存高は最大で 53cm を測る。石室の内幅は西南西端の床で 70cm、東北東端の床では 50cm であることから、西南西側が 20cm 幅広い。石室の短側壁は幅広い西南西側が、幅の狭い東北東側よりも使用石材が大きく、東北東側は３段に積まれ、２段目以上は小ぶりの石を積んでいたのに対し、西南西側では２段目も比較的大きな石を積み上げていた。石室床面での内法長は約 1.9 ｍを測る。棺痕跡は墓壙底をさらに深く掘り下げた部分があり、その上端と石室壁のラインがほぼ合致することから、墓壙底を掘り下げた部分がほぼ棺の大きさを示していると思われ、箱形木棺であったと推定される。そうすると、棺は石室壁にほぼ接した状態であったことになる。この前提で判断した棺の規模は、長さ約 1.9 ｍ、西南西の幅約 55cm、東北東での幅約 45cm となる。これらのことから、埋葬された被葬者の頭位は西南西であったと判断される。また、石室側壁の残存上面のレベルは西南西側が東北東側よりも５～ 10cm 高くなっていることから、かつて朝来市若水古墳で検討したように、棺の高さも頭側が足側よりも高かった可能性がある。

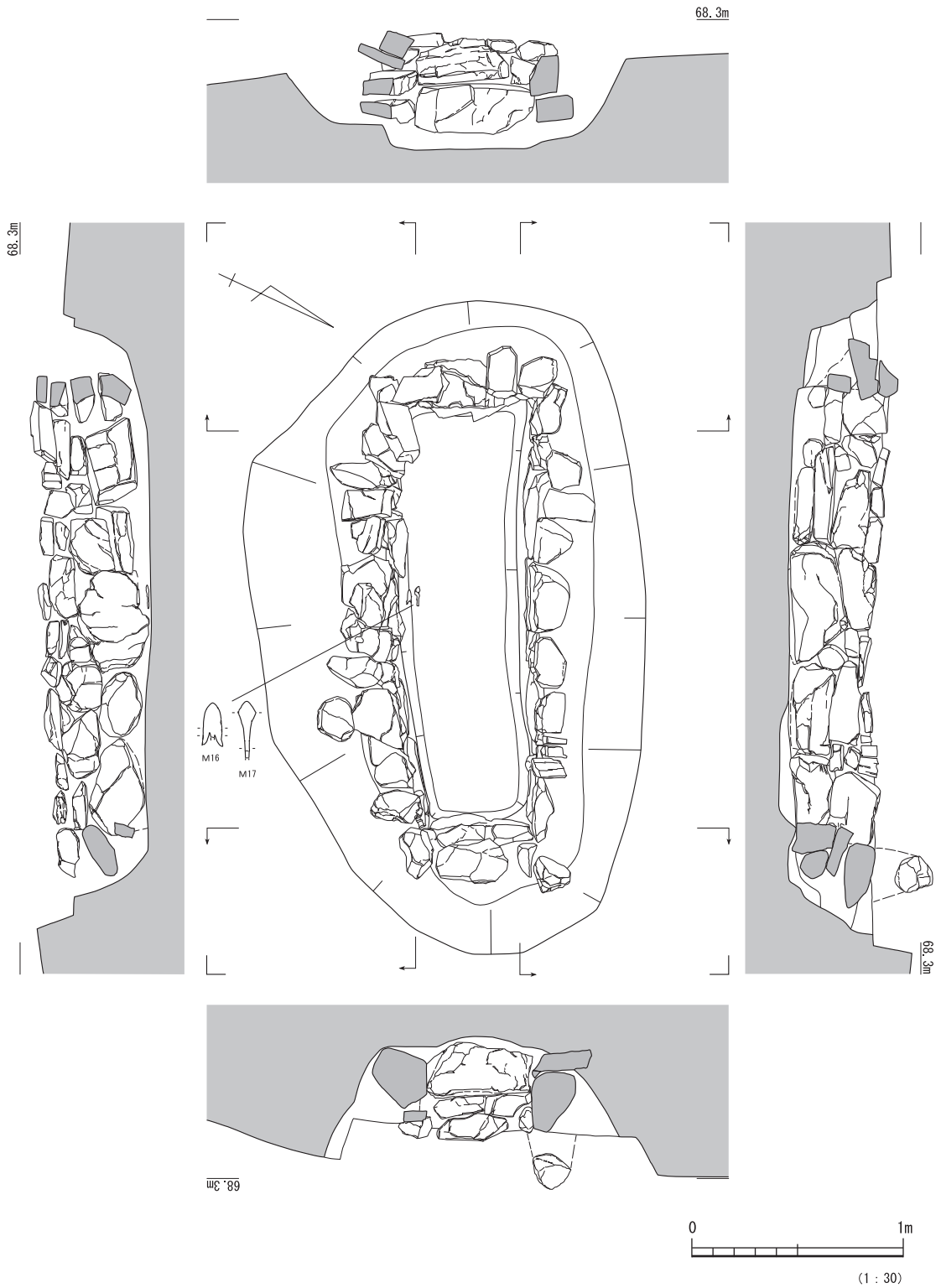
墓壙は平面楕円形に近く、長径約 3.1 ｍ、短径約 1.8 ｍ、検出面からの深さ 50cm 程度で、先述のように底の中央部を棺の形に合うようにさらに 10cm 程度掘り込んでいる。石室内の土層断面観察から、墓壙中央部をさらに掘り込んだのち、石室床や棺底が平坦になるように土を埋めているようであった。

墳丘を含めた土層断面では、ＳＸ２９１がＳＸ２９２よりも先行して構築されているようにみえるが、天井石等の石材抜き取り時の後世の攪乱土の可能性もあり、断定は避けておく。なお、墳丘表面から石室壁石上端までの深さは、ＳＸ２９１が約 60cm、ＳＸ２９２が 54cm 程度であった。

ＳＸ２９２　主軸ＳＸ２９１の山側西隣で検出した竪穴式石室で、墓壙の間隔は約 1.2 ｍ離れており、石室壁での間隔は約2.1ｍである。ＳＸ２９２の主軸方向は東北東－西南西方向で、厳密にはＮ 64°Ｅで、石室の幅は東北東端の床で約 70 ㎝、西南西端の床では約 48cm を測り、東北東端が 22cm ほど幅広い。また、短側壁についても東北東側が大きな石材を使用しており、後述するように、棺幅においても東北東側が広い。これらの点から、被葬者の頭位が東北東方向であったと判断され、ＳＸ２９１とは逆方向となる。

石室はやや扁平に近い自然石を積み上げたもので、２～３段程度残存していた。また、上部ほど石のサイズが小さくなっているが、長側壁体の上端にはさらに小さな石が多く認められることから、石室の壁は天井石下面に近い高さまで残存している可能性が高い。石室残存高は東北東側が最大で約 50cm を測る。石室の短側壁は幅広い東北東側が幅約 55cm、高さ約 35cm で長側壁２段分の高さの大きな石を使用しているのに対し、西南西側では幅 20 ～ 25cm、高さ 10 ～ 15cm 程度の小ぶりの石を３段に積み上げていた。石室床面での内法長は約 2.2 ｍを測る。

棺痕跡は墓壙底をさらに深く掘り下げた部分があり、その形状から箱形木棺であったと推定される。幅については、その上端と石室壁のラインがほぼ合致することから、墓壙底を掘り下げた部分がほぼ棺の幅を示していると思われる。一方、棺長は約 1.8 ｍで石室の長さよりも短い。棺の幅は石室壁にほぼ

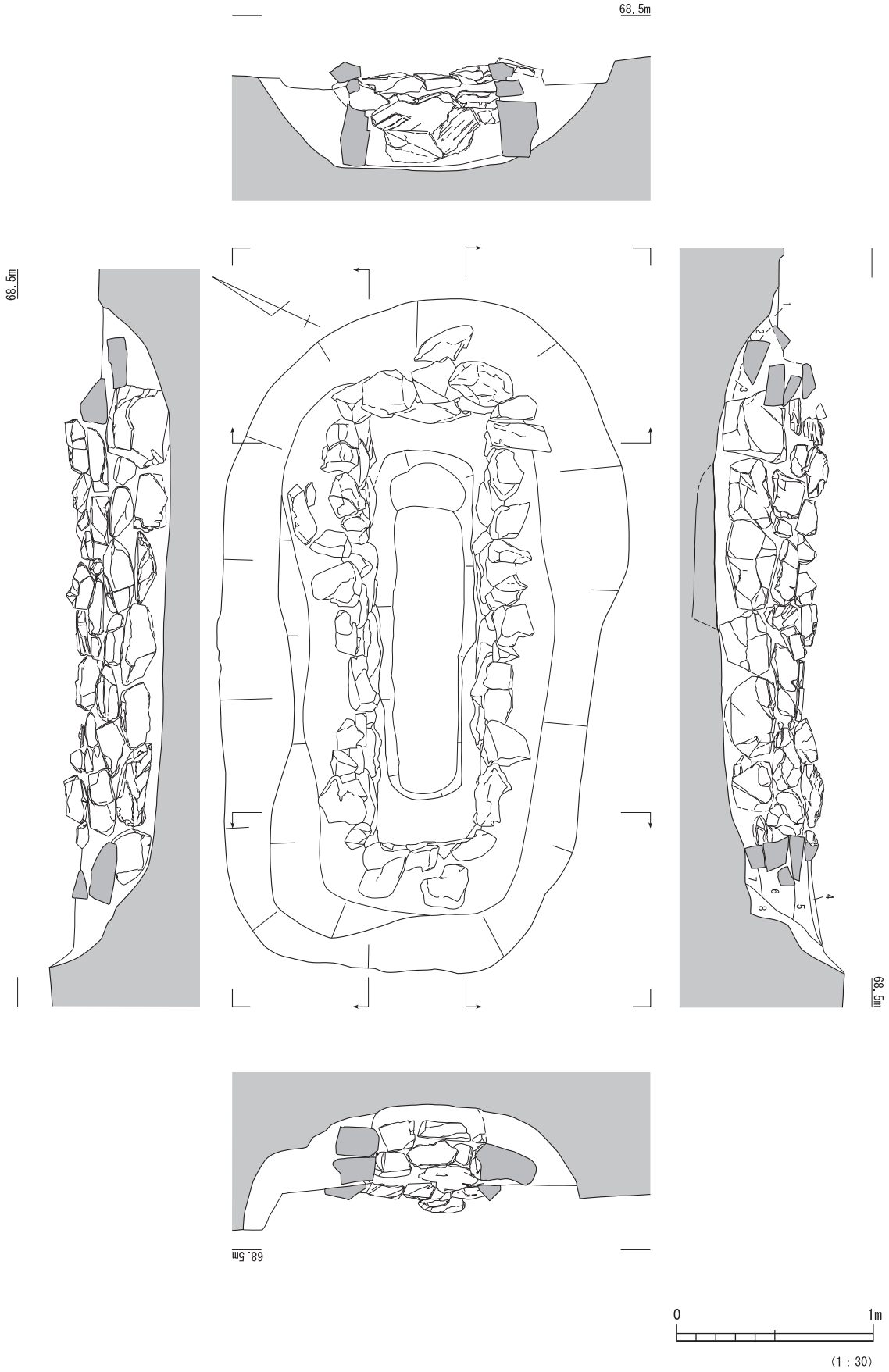


第 54 図　９号墳埋葬施設　ＳＸ２９１

接した状態であったが、棺小口側では石室短側壁との間に東北東側で約 15cm、西南西側で約 25cm の空間が存在していたようである。棺の幅は東北東側で約 55cm、西南西側では約 40cm で東北東側が 15cm 幅広くなっている。なお、棺部分での墓壙底の高さは、東北東側が西南西側よりも５cm程度低くなっていた。

なお、石室内から遺物は検出されなかった。

墓壙は平面長楕円形に近く、長径約 3.4 m、短径約 1.95 m、検出面からの深さ 60cm 程度で、先述の



第 55 図　９号墳埋葬施設　ＳＸ２９２

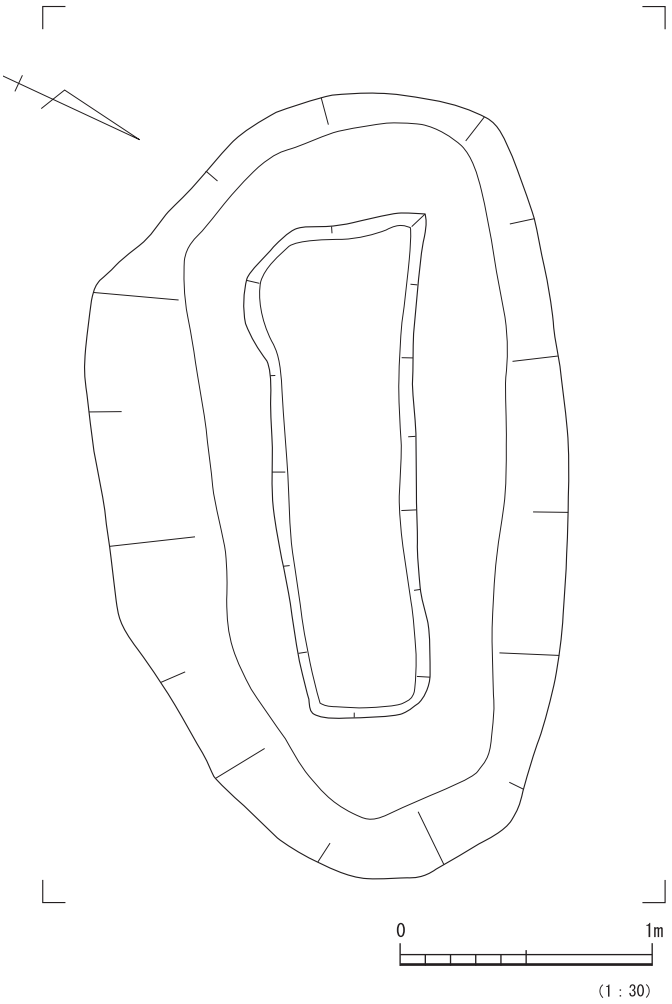
ように底の中央部を棺の形に合うようにさらに10cm程度掘り込んでいる。石室内の土層断面観察から、墓壙中央部を掘り込んだのち、石室壁体下面まで棺底が平坦になるように土を埋めているようであった。

遺物出土状況

ＳＸ２９１において、石室南側壁のほぼ中央で鉄鏃２点が、底から1.5cm、壁体から4.9cm離れた位置で検出された。出土位置から、棺内副葬品と判断している。鉄鏃２点は鏃身先端を西南西方向に向けており、矢柄を伴った矢として副葬されていた場合、矢の先端は頭側に向けて右体側に置かれていたことになる。

出土遺物（第58図、巻頭図版12、写真図版66）

鉄鏃　Ｍ16は平根の短茎鏃で、長三角形を呈し、逆刺が深いものである。茎部端を折損している。全長は6.9cm、幅3.2cmで、刃部先端はふくらを有し、逆刺端は外反する。鏑はほとんど認められず、根挟みの痕跡も遺存していない。



第56図　９号墳埋葬施設　ＳＸ２９１墓壙

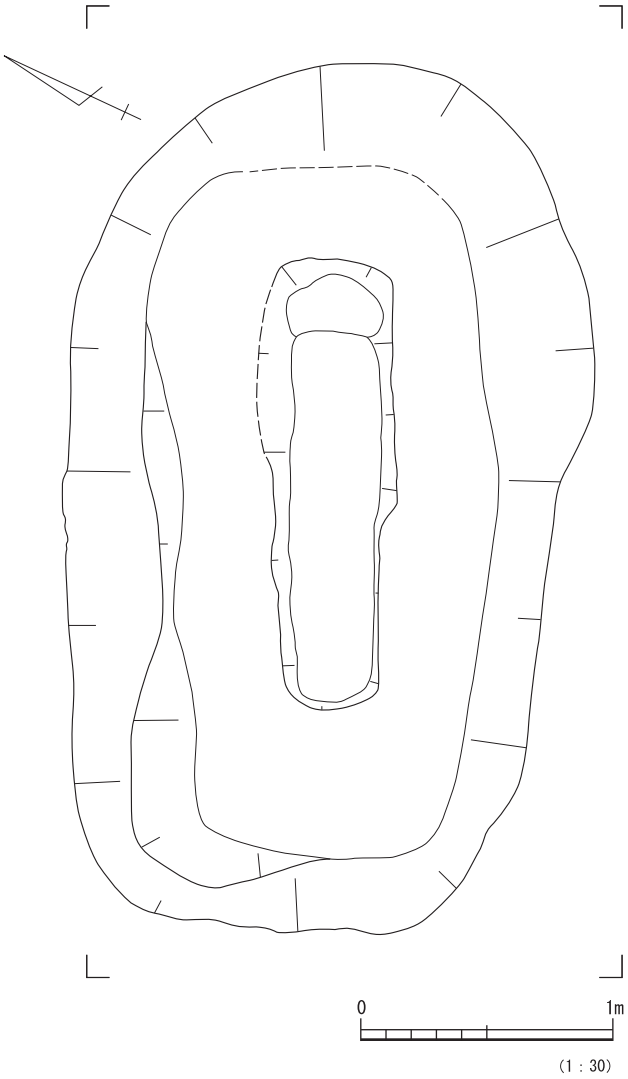
本形態の逆刺が深いものは、須恵器のＴＫ23～ＴＫ47型式よりも新しい段階では認められないようであることから、ＳＸ２９１の埋葬時期も中期末～後期初頭以前ととらえられよう。

Ｍ17は平づくりの圭頭鏃に分類されるもので、茎端は折損しているが尖根の可能性が高い。残存長9.0cmで、頸部は鏃身部からやや反りながら斜行する。関部は周囲から若干狭められて小さな段となっている。関部では幅６mm、厚さ4.5mmである。茎部には木質が遺存している。刃部は銹化が進んでいるため遺存状況は良くないが、刃部幅は2.7cmである。

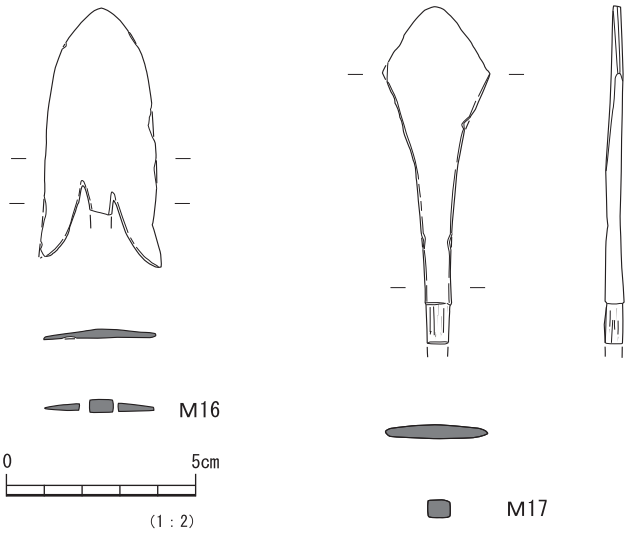
４．10号墳（第59・60図、写真図版31）

位置と検出状況

10号墳は２区の列状に存在する３基のうち南東端に位置しており、北西側の９号墳とは周溝間隔約２ｍの距離を置いて存在している。調査前の地形測量により、尾根稜線が水平に近い平坦面となり、丸みを帯びた形状を示していたことから、古墳の可能性を考えて、土層断面観察用の畔を設定するなどして調査にあたった。その結果、埋葬施設は検出されなかったものの、尾根山側に区画溝を検出した。



第 57 図　９号墳埋葬施設　ＳＸ２９２墓壙



第 58 図　９号墳埋葬施設　ＳＸ２９１出土鉄鏃

形態・規模

調査前には径８ｍほどの円墳とみられたが、調査の結果、山側に区画溝が認められたものの、その他の部分では墳丘端を明確にした施設が検出されず、墳丘も低平で、ほぼ流出していたと判断された。したがって、10 号墳の規模は明確にできなかったが、径７ｍ程度の円墳であったと推定している。

区画溝は直線的で、長さ約５ｍを検出した。検出面での溝幅は最大で1.2ｍ、ほぼ１ｍ幅のもので、検出面からの深さは約 20cm であった。溝の両端は斜面とつながって自然消滅している。

埋葬施設が検出されなかったことから、すでに流失や削平などによるものと思われる。また､遺物も出土しなかった。

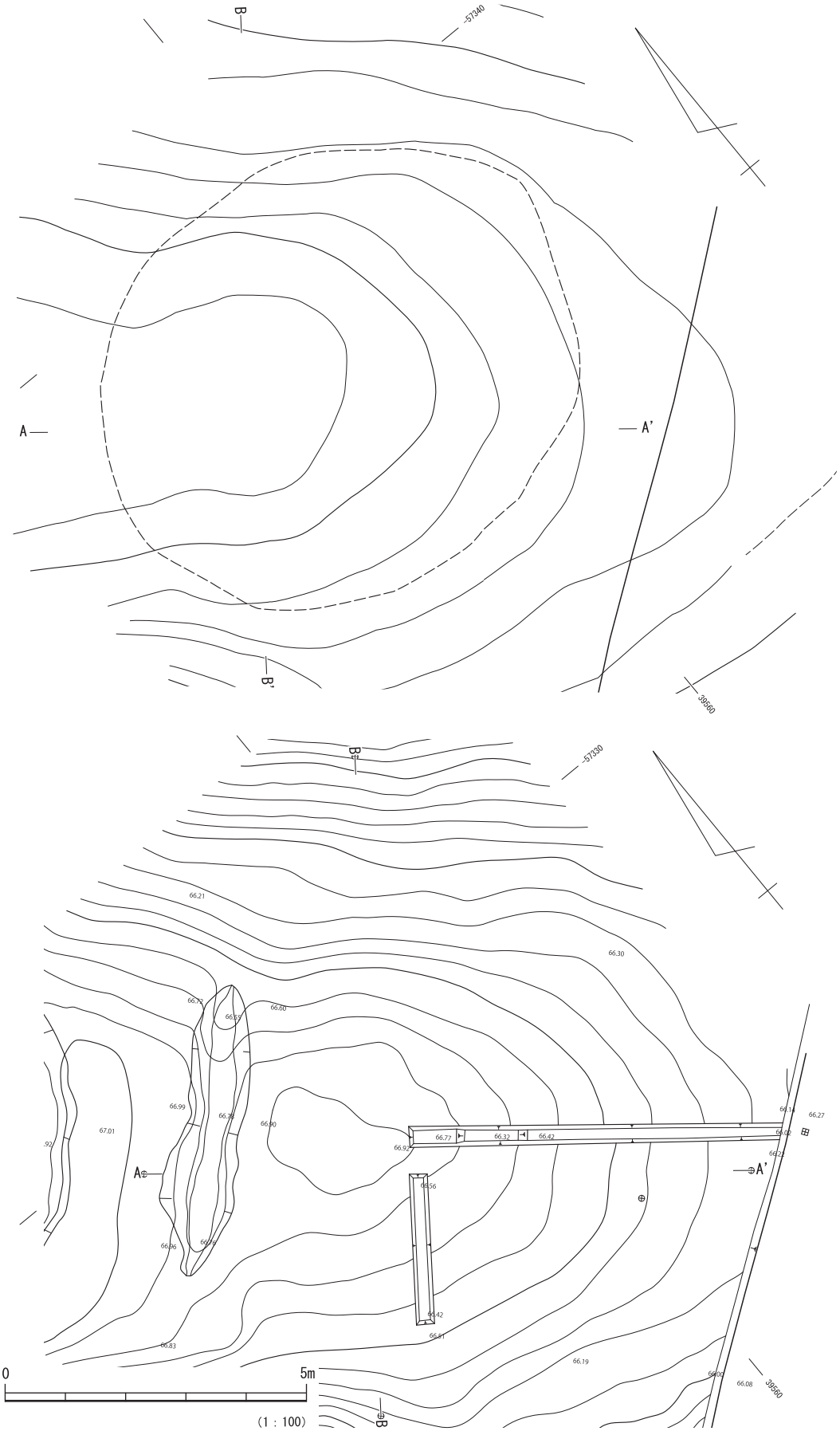
５．ＳＸ－１（第 61 図、写真図版 31・32）

位置と検出状況

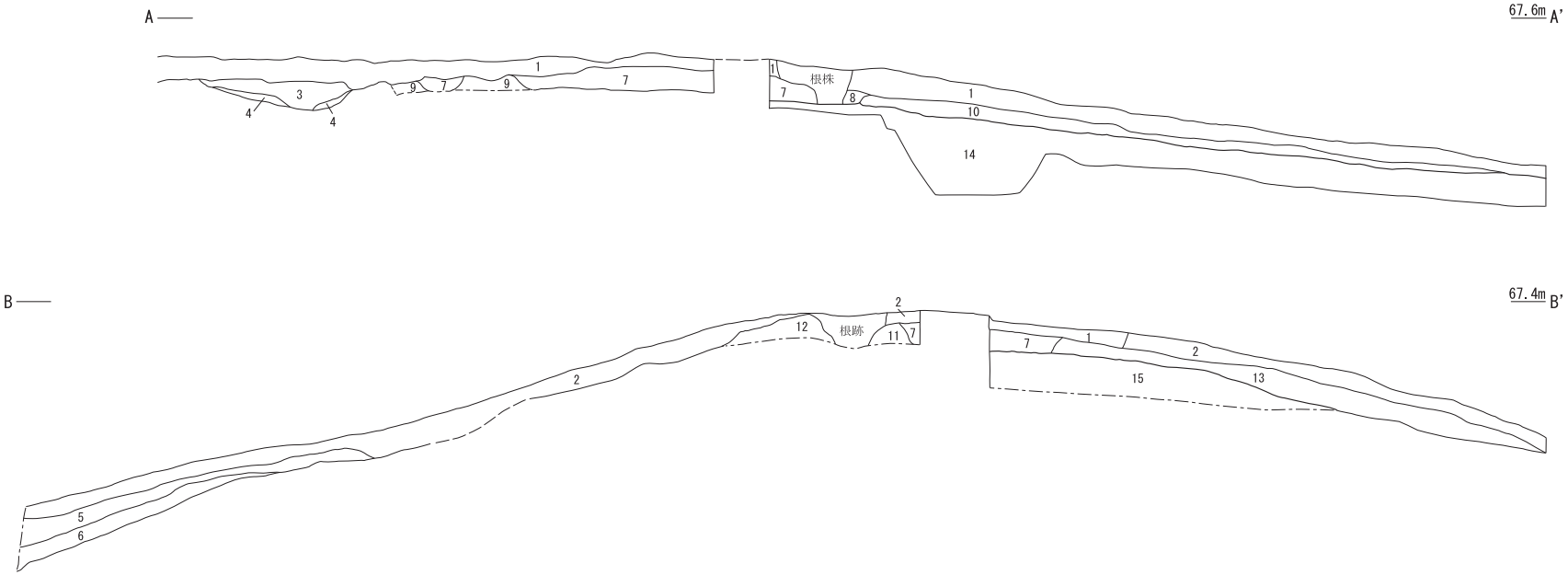
９号墳の北側墳丘外で検出した小型の箱式石棺で、調査前の地形観察においても墳丘は認められなかった。表土掘削の過程で検出したものであるが、遺存状況は良好ではなかった。標高は 67.8 ～ 68.0 ｍに位置している。

形態・規模

検出した箱式石棺は、一方の小口付近に限られたが、精査の結果、石材抜き取り穴等を検出したことから、内法長は 80cm 程度であったと推定している。石組が遺存していたのは北西部で、長側のそれぞれ１石、小口の１石と底石である。残存内法長は 30cm 程度、残存高は 20cm 程度で、棺底での幅は 21cm ほどである。長側壁は３～４石で構成されていたものと思われる。底石には厚



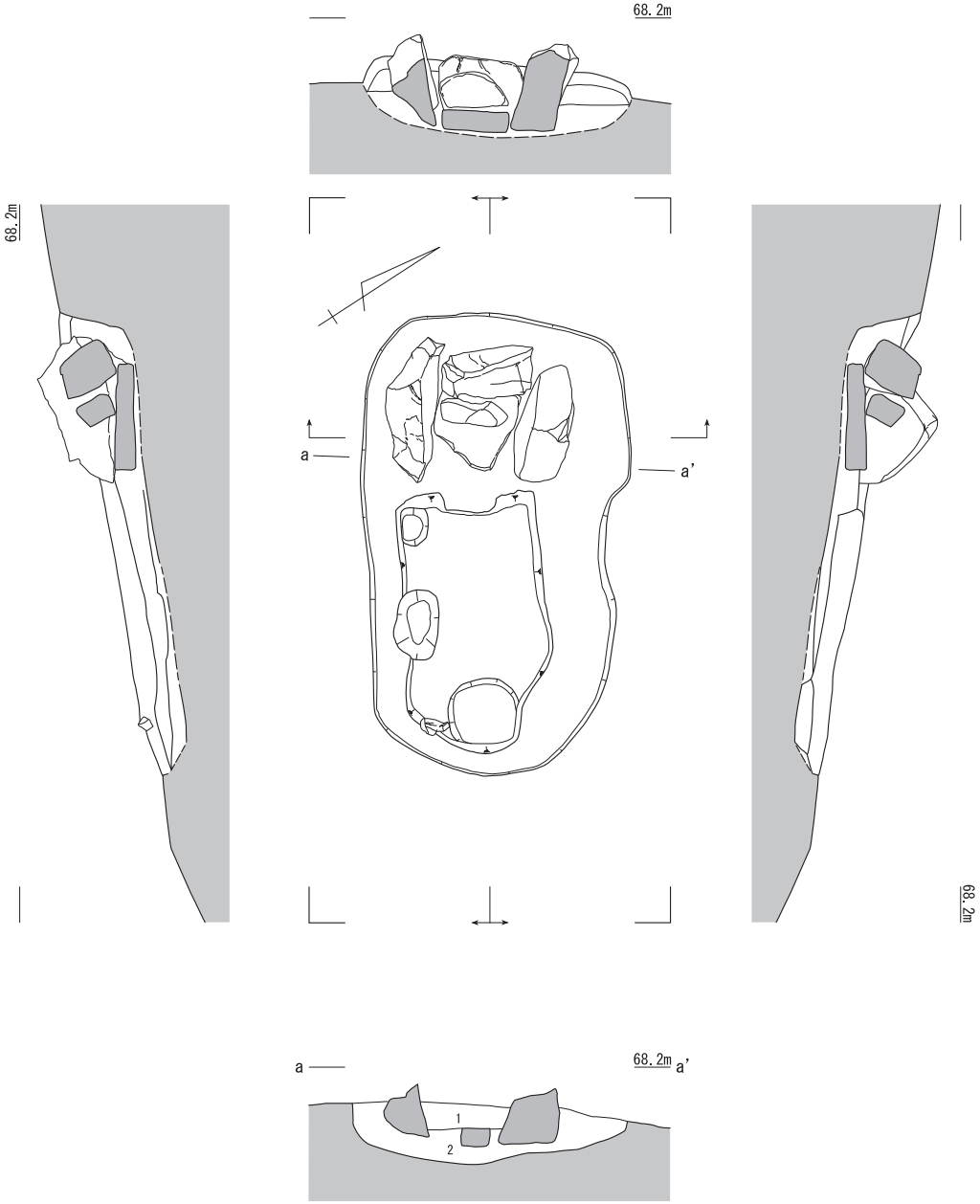
第 59 図　２区 10 号墳墳丘（調査前・後）



１．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～ 1 ㎜大の粗粒砂を微量含む．やや軟質で空隙あり．
２．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒砂～極粗粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂．やや締まる．
３．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～３㎜大の極粗粒砂～細礫と直径１㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．
４．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径１㎝大までの中礫を少量含む．やや軟質で空隙あり．
５．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．やや軟質で空隙あり．
６．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎝の中礫を微量含む．やや軟質で空隙あり．
７．7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎜大の粗粒砂と直径２～４㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．空隙あり．
８．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．やや締まる．
９．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎝の中礫を少量含む．やや締まる．空隙あり．
10．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎜大の粗粒砂と直径１～２㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．
11．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～ 1 ㎜大の粗粒砂を微量含む．直径１㎝大の中礫をごく微量含む．やや軟質で空隙あり．
12．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルトで粗粒砂をごく微量含む．やや締まる．空隙あり．
13．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．やや軟質でやや粘性あり．
14．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～ 10 ㎝大の中礫～大礫を含む．地山．
15．5YR4/8 赤褐色 粗粒シルトで直径５～ 20 ㎝の中礫～大礫を含む．地山．

（1：50）

第 60 図　２区 10 号墳墳丘土層断面



１．7.5YR3/2.8 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を含む．やや粘質．
２．6YR3/2.5 暗赤褐色 粗粒シルトで極細粒砂を多く含み細粒砂を少量含む．粘質．

0　1m
（1：20）

第 61 図　２区ＳＸ－１

さ６cm ほどの板石を使用して水平に置かれており、その上に長さ 19cm、幅７cm 程度の角礫が存在していたが、高さが 10cm 程度もあることから、石枕ではなく、小口側壁として積んであったものが棺内に落ち込んだ結果と判断している。石棺の規模から、子供を埋葬したものと判断される。遺物は出土しなかった。

墓壙は不確実ながらも楕円形に近い形状のものを検出した。長径約 1.3 ｍ、短径 0.7 ｍ程度で、底はやや丸みを持っている。

６．小結

２区では８～10 号墳の３基の古墳が存在した。１区との間は谷となっており、８・９号墳の墳丘谷側が削られていることから、後世に谷幅が広がったと判断されるが、もともと谷地形が存在していた可能性は高い。いずれも円形を基調とした墳形であるが、墳裾は明確にされておらず、整った形とはなっていなかった。

埋葬施設は８号墳で箱式石棺１基、９号墳では竪穴式石室２基で、いずれも尾根稜線直交方向の東北東－西南西を長軸としている。埋葬頭位は８号墳では西南西、９号墳ではＳＸ２９１とＳＸ２９２が全く逆方向になっており、８号墳に近い側のＳＸ２９２が東北東、ＳＸ２９１は西南西で、ＳＸ２９１は８号墳と同一頭位方向となっていた。頭側の小口石・短側壁は足側に較べて大きな石を使用し、石棺・石室幅も頭側が幅広くなっていたことは２区での共通点である。なお、埋葬頭位を単一方向に揃えない点は、３区においても認められたことである。

８号墳の箱式石棺の形態は、石を立てて長側壁としたものではなく、塊石を積み上げたものであった。経験的には、２区で検出されたＳＸ－１のように、石材を立てて長側壁としている場合は箱式石棺、石を横積みに積み上げているものは石室と呼称されることが多い。しかし、８号墳の場合は幅が足側で 34cm、頭側でも 47cm しかなく、幅の狭いものであったことに加えて、底に円礫を敷き詰め、石枕を置いていたことから、被葬者は直接石組内に入れられ、木棺を伴っていなかったと判断したためである。木棺直葬の場合、底に円礫を敷くものや、自然石の石枕を伴うものが但馬地域で多数見られ、板石の箱式石棺にも石枕が伴う例が多い。一方、但馬では石室と石棺の区別が難しいものが多いうえに、石室幅が広く明らかな竪穴式石室は但馬ではあまり例が多くないが、底に礫を敷くものは極めて少ない。

９号墳の竪穴式石室は最大幅 70cm で長さは 1.9・2.2 ｍと小規模ではあるが、床に礫を敷かず石枕も認められないうえに、石室床には一段深く掘り込んだかたちで木棺の痕跡が認められた。このような例は近年の調査により増加している。

９号墳の築造時期は、決め手になる遺物は出土しなかったものの、出土した鉄鏃２点が古墳時代中期末～後期初頭以前と位置付けることができる。可能性として、９号墳の築造時期は中期末頃と推定している。なお、８号墳は築造時期を示す遺物は出土していない。

９号墳の北側で検出した小型の箱式石棺ＳＸ－１は、片方の小口部分が遺存していたにすぎないが、推定で 80cm の内法であったことから、子供が埋葬された墓とすることができよう。墳丘を有しないことから、古墳には葬られず、埋葬頭位も９号墳のものと大きく異なっているが、古墳のすぐ脇に位置していることから、９号墳の被葬者との関係があったものと推測できよう。小型の箱式石棺であるにもかかわらず、その長軸を等高線とは直交する方向に置いていることは特異である。斜面に小型箱式石棺を構築する場合、ほとんどが長軸を等高線と並行方向に置くのであるが、そうしなかった理由は現在不明である。

なお、調査区内包含層や溝埋土から剥片や敲石が出土しているが、１区で検出した陥し穴や１区出土の磨石・敲石も含めて、１・２区に縄文時代の遺物が散布しており、生活の痕跡が散在していた可能性がある。平安時代末頃の土器についても、２区・１区で小片が出土しており、その時代に緩傾斜を利用して何らかの営みがあった可能性がある。

第３節　１区（11 ～ 17 号墳）の遺構と遺物

１．概要（第 62 ～ 65 図、巻頭図版７・８、写真図版 33 ～ 37）

１区は３箇所の調査区のうちの最も南に位置し、３地区のなかでは最も範囲が広い。地形的には２区と同様に、南北に存在する尾根に挟まれた谷部の扇状地状地形の部分であるが、２区との間には幅約 15 ｍの谷部を挟んでいる。この扇状地形は、２区でも述べたように、西側の丘陵斜面までは傾斜が極めて緩やかで、地図では示されていないが、緩斜面と丘陵斜面との変換点付近は、湿地状の凹地となっている。また、11･13･15 号墳が存在する部分は平坦に近くなっているが、畑地であった可能性がある。

この部分も含めて、後世の何らかの地形改変を考慮しない場合、２区も含めたこの部分の等高線が急に幅広くなっていることから、地滑りをおこした後の地形と推察している。このことは、１区の南西から東側にかけては深い谷が入り込んでおり、かつて水田であったようであることから、水に恵まれていたことからも推測されよう。地滑りの場合、それが起こった時期は、この地形に１区の古墳群が築造されていることから、古墳築造以前であったと判断できる。

１区に古墳が築造されているのは台地上の部分を原則としており、急傾斜面や南側の谷に近いやや凹面の部分には存在していない。なお、17 号墳の南東側にある畑跡の部分が突端のように張り出しているが、確認調査の結果、古墳の存在は認められなかった。

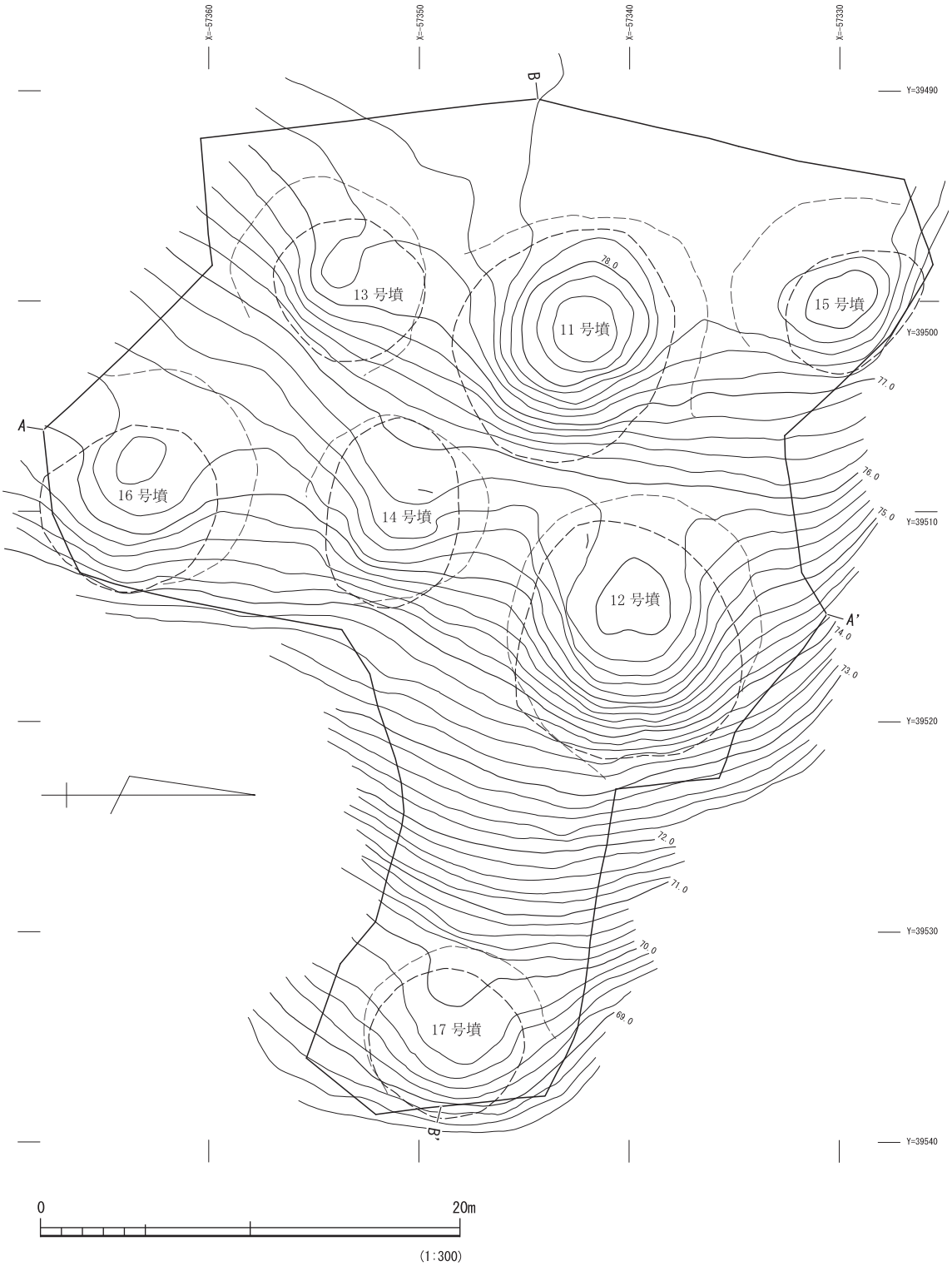
１区にあたる部分の確認調査では、本線予定地部分に対してトレンチによる調査が行われ、11 号墳では墳丘の中央部分、12 号墳では墳頂部北側の用地境界線に沿ってトレンチが設定され、石室の一部が露出していた 13 号墳部分についても実施された結果、確認調査で古墳と判断されたのは 11 号墳～ 13 号墳の３基であった。

本発掘調査において、残土置場も含めた範囲の樹木伐採が行われた後に地形を観察すると、11 号墳と 13 号墳のそれぞれ南東側に古墳状隆起を認めた。この部分はすでに確認調査のトレンチが及んでいた部分ではあったが、改めてトレンチ調査を実施した結果、14 号墳と 16 号墳の周溝を確認した。斜面地に築造された小規模古墳の場合、周溝は斜面下側まで及ぶことは稀で、斜面上側～墳丘中央部分までで自然消滅するため、墳丘を半周程度めぐるかたちになる。周溝が確認された場合、その斜面下側に古墳状隆起があれば、その古墳の周溝と判断できる。このことにより、14 号墳･16 号墳の存在が確定した。また、12 号墳の南東側斜面下においても古墳状隆起があり、トレンチ調査を実施したところ、17 号墳の周溝を確認した。いっぽう、工事用道路設置部分には小型石組の一部が露出した 15 号墳が存在していた。したがって、調査開始直後に、以上の 14 ～ 17 号墳も含めた部分も調査の範囲として変更し、本発掘調査を実施した。古墳番号が整然としていないのは、発見の順に番号を付したためである。

１区と呼称した部分では、両側を小谷で挟まれた台地上に存在する古墳について、道路の本線部分と工事用道路付設部分を含めてすべての古墳を調査したことになり、11 号墳～ 17 号墳の７基が築造されていた。それらは標高 77 ｍあたりと 75 ｍを中心とした部分に 11 号墳・13 号墳・15 号墳と、12 号墳・14 号墳・16 号墳がそれぞれ３基ずつ等高線と平行に列状に存在しており、17 号墳のみ単独で東方に位置している。

また、周囲には連続して築造された古墳が認められないことから、ひとつの古墳群（支群）としてとらえられる。なお､西側尾根稜線上には､約 50 ｍ離れて低墳丘の古墳状隆起（18 号墳）が存在している。

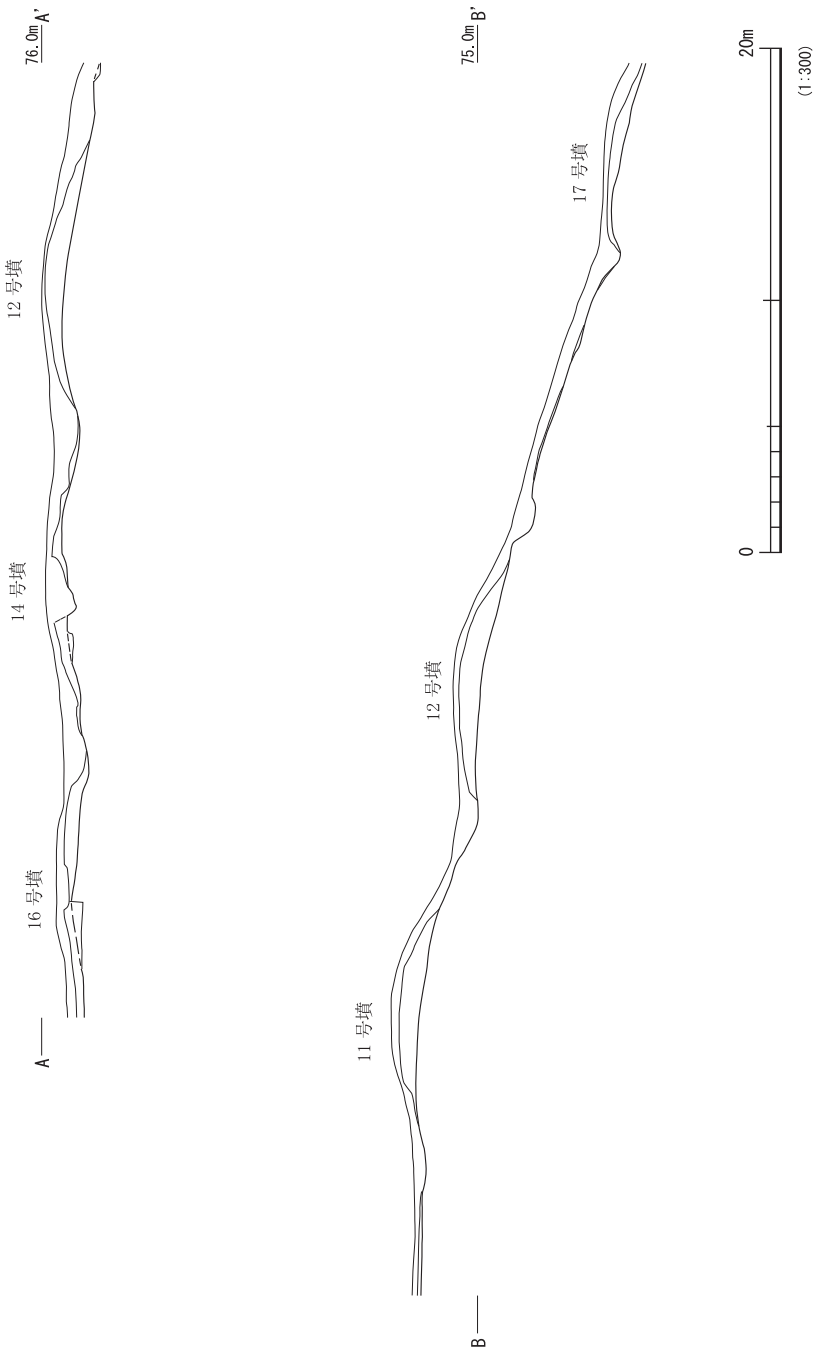
調査の結果、少し離れて存在する 17 号墳以外、埋葬施設が判明した５基すべてが竪穴式石室や竪穴



第 62 図　１区調査前地形

式石室状の石棺であったことが判明した。

調査は全体的に表土から 20 ㎝程度の深さに掘削し、その面で周溝や埋葬施設等の遺構を検出した。その際にすべての古墳を縦方向に横断する北西－南東方向と、各古墳を横断する方向に土層観察用畦を設けて調査を進めた。埋葬施設の調査後は、墳丘盛土を地山面まで除去して古墳の構築法の検討をおこなった。また、16 号墳の北側周溝肩部で小規模な箱式石棺の一部を検出したが、ほかに、古墳に伴わ



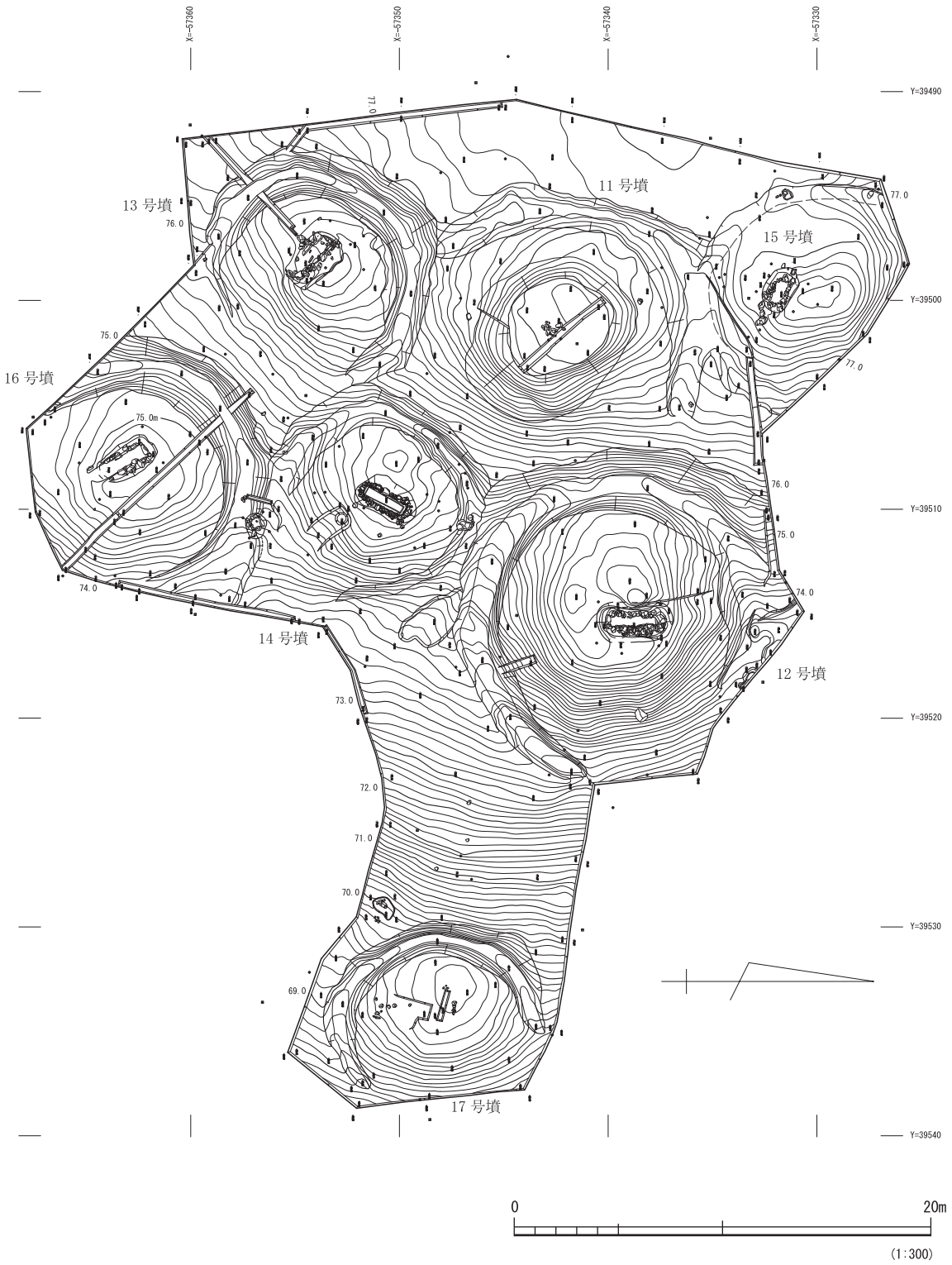
第 63 図　１区地形断面

ないものとして、15 号墳墳丘下で陥し穴を検出した。縄文時代と推定される遺物には、11 号墳の墳丘・15 号墳の墳裾・16 号墳の墳丘下から出土した敲石・磨石がある。なお、２区と同じ平安時代末頃の土器が 11 号墳・15 号墳で出土し、飛鳥～奈良時代頃の須恵器も 13 号墳から出土している。

出土遺物（第 66・118 図、写真図版 64・65・68）

土器　（７）は須恵器埦の底部である。糸切りの平高台で、高台径は 6.7 ㎝、高台の高さは 5 ㎜である。内面見込み部分に段は認められない。平安時代末の 12 世紀前半～中頃の所産と思われる。11 号墳南側墳裾の表土層直下の暗褐色土層から出土した。

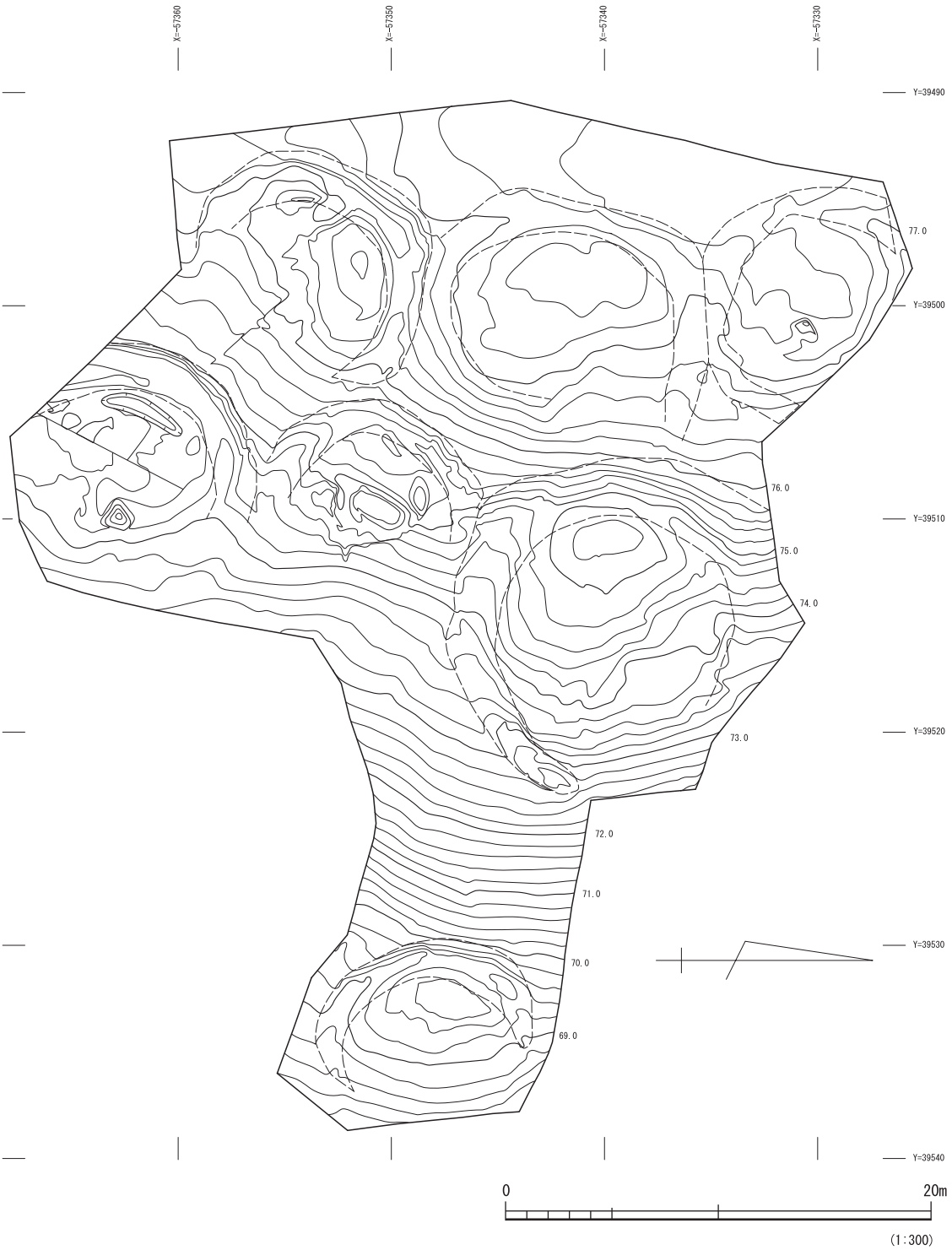
（８）は平安時代後期、11 世紀後半頃の須恵器埦底部片で、平高台の径は 4.8 ㎝、高台の高さは 6 ㎜程度である。内面には段を有しないが、高台側面にヨコナデを施している。15 号墳の北東側から出土した。



第 64 図　１区調査後地形

（９）は須恵器坏Ｂの底部片である。貼り付け輪高台の径は 7.6 ㎝で、高台内面は回転ヘラキリ後ナデを加えている。内面は非常に平滑になっていることから、使用痕または転用硯の可能性がある。13 号墳東側墳丘の表土層直下の茶褐色土層から出土した。飛鳥～奈良時代のものである。

石製品　Ｓ４は 11 号墳墳丘表土直下から出土した砂岩製の敲石である。長さ 109.2㎜、幅 67.2㎜、厚さ 32.8㎜の小判形を呈し、図の下部や左側側縁に敲打痕が残るが、下部が著しい。重量は 314.4 ｇである。



第 65 図　１区墳丘盛土除去後地形

Ｓ５は安山岩製の磨石で、長さ 96.1㎜、幅 82.8㎜、厚さは 58.1㎜ である。重量は 706.8 ｇを測る。15 号墳南側墳裾表土直下から出土したものである。

Ｓ６は 16 号墳墳丘盛土下層の旧表土直上から出土した。凝灰岩製の磨石・敲石で、平面小判形を呈し、長側面は平坦となっている。短側面には敲打痕も認められ、使用痕跡がよく残る製品である。長さ 110.7㎜、幅 77.0㎜、厚さ 46.7㎜ で、重量は 568 ｇである。表裏とも新しい欠損部分が多く認められる。

第 66 図　１区表土直下出土須恵器

２．11 号墳（第 67 ～ 70 図、写真図版 37 ～ 39）

位置と検出状況

１区の北西部中央に位置し、調査前には斜面下方から約 2.6 m、斜面上方からでも約 0.9 mの比高があり、12 号墳とともに盛土は比較的よく残っていた。調査前の最高所は標高 78.6 mで、東側墳裾の標高は 76.0 mあたりに存在していると想定していた。

確認調査のトレンチは墳頂部に存在していたが、埋葬施設の確認までは到っていなかった。

形態・規模

１区内では墳丘の遺存状況も良好で、墳頂部の標高は１区内で最も高い。調査前の墳頂部は緩やかな丸みをもっており、墳丘は等高線の形状から南北短径 10 m、長径 12 m程度のやや楕円形の円墳で、墳丘遺存状況も良好と思われた。調査により、墳丘の西側半分に周溝を検出した結果、墳丘西半部の周溝に近い墳丘盛土がかなり削平されていたことが判明した。南北方向での周溝内側で計測した 11 号墳の規模は約 12.8 mで、12 号墳よりも若干大きく、１区で最も規模が大きかったことが確認された。11 号墳の南東側墳裾は不明確であるが、北西－南東方向での規模が南北と同じ 12.8 mとすれば、標高 75.7 mの等高線前後付近が墳裾となろう。

遺存していた周溝は、最大幅 3.2 mであるが、平均的な幅は 1.6 m程度である。検出面からの深さは約 45cm で、溝底の高さは西側が最も高く、南西や北東方向に傾斜している。溝の端は傾斜面とつながって自然消滅している。周溝は 15 号墳の周溝と重複関係にあり、15 号墳の項で述べているが、土層断面観察の結果、15 号墳の周溝が 11 号墳のそれよりも新しいことが判明した。また、周溝南西端は 13 号墳の周溝につながっているが、前後関係を確認できるほどの重複とはなっていない。ただし、周溝はさらに東方向に伸びていたようで、13 号墳周溝との重複関係を調べるために設置した畔の土層観察の結果、11 号墳の周溝は、13 号墳の周溝が 60cm 程度埋没した後に 13 号墳の周溝を一部切る形で新しく掘削されていたと判断できた。

埋葬施設・遺物出土状況

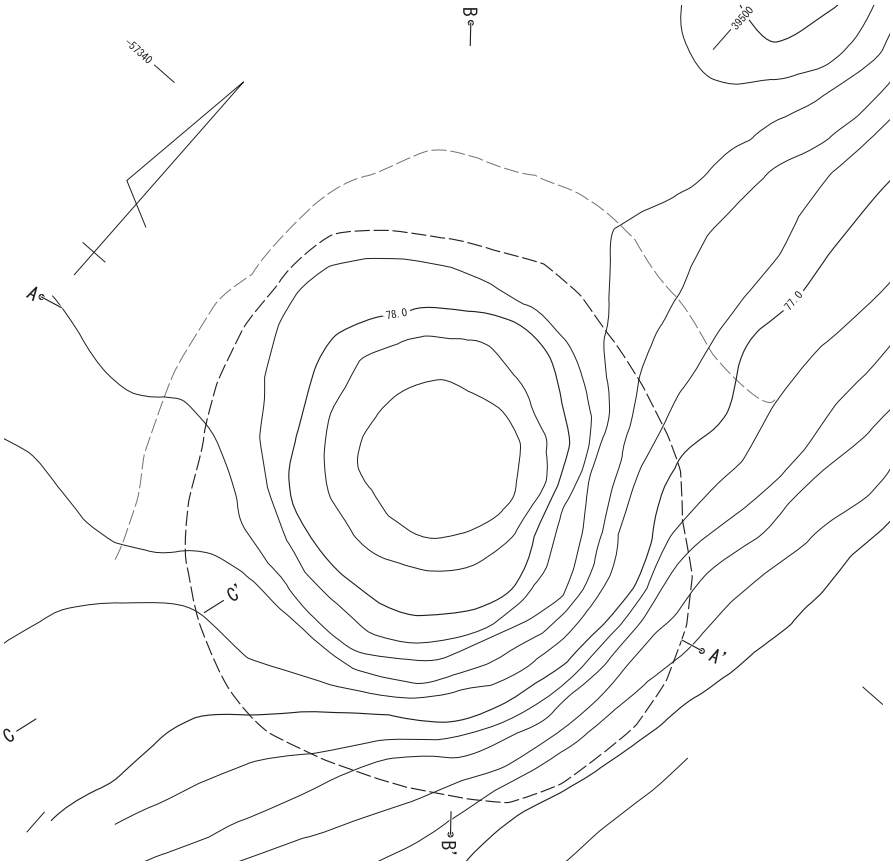
11 号墳を調査した結果、埋葬施設は検出されなかった。ただし、墳頂部から西側墳丘斜面にかけての表土直下で多数の礫を検出した。

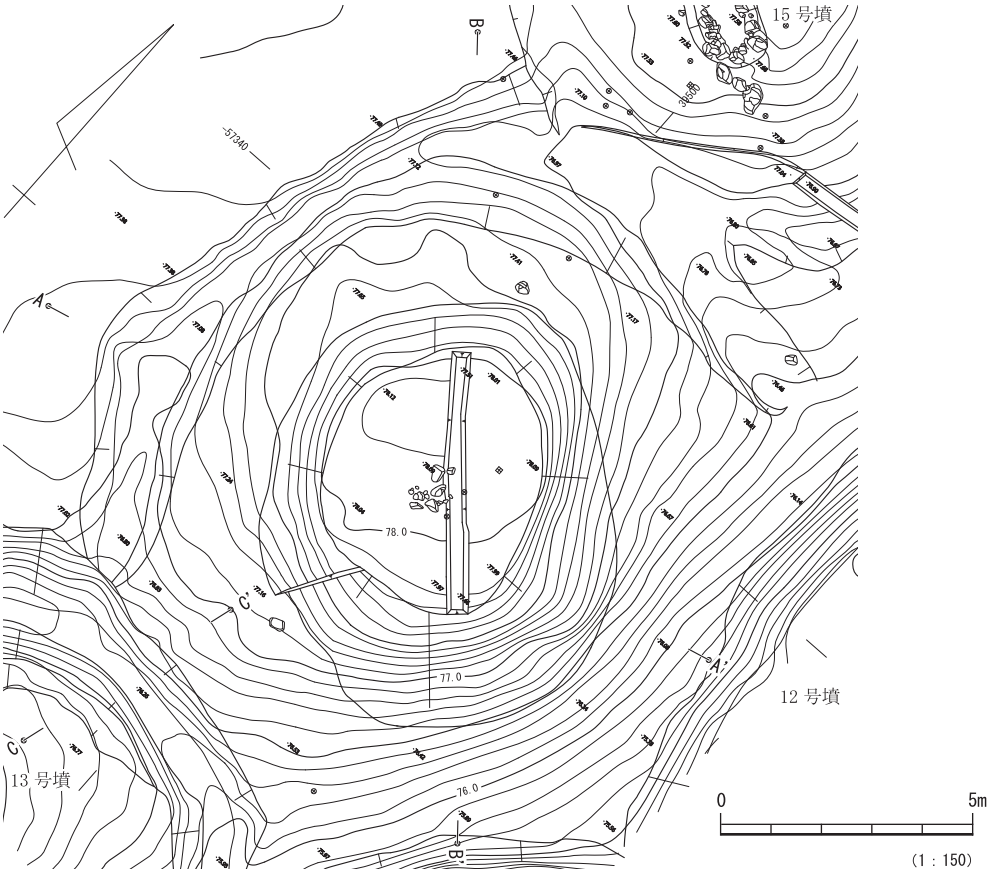
礫は、10 ～ 20cm 大の塊状のものは墳頂部から墳丘西斜面にかけて 50 点以上散乱し、一辺 30 ～ 40cm で厚さ 10cm 前後の板状礫も周溝ぎわで数点検出した。また、墳頂部では礫に混じって須恵器甕片が多数出土し、須恵器甕口縁部片は東側墳裾でも存在していた。いずれも表土直下である。

11 号墳では、墳丘盛土部分の高さが最大約 96cm あったにもかかわらず、そこに埋葬施設を設けておらず、墳丘断面の検討においても墓壙や大きな攪乱は認められなかった。いっぽう、11 号墳の墳丘土層Ａ－Ａ’断面下部において、攪乱されていない状態で旧表土が認められたが、旧表土下の地山面で若干色・質が異なる部分が認められた。念のためサブトレンチを設けて掘削したが、埋葬施設は検出されなかった。

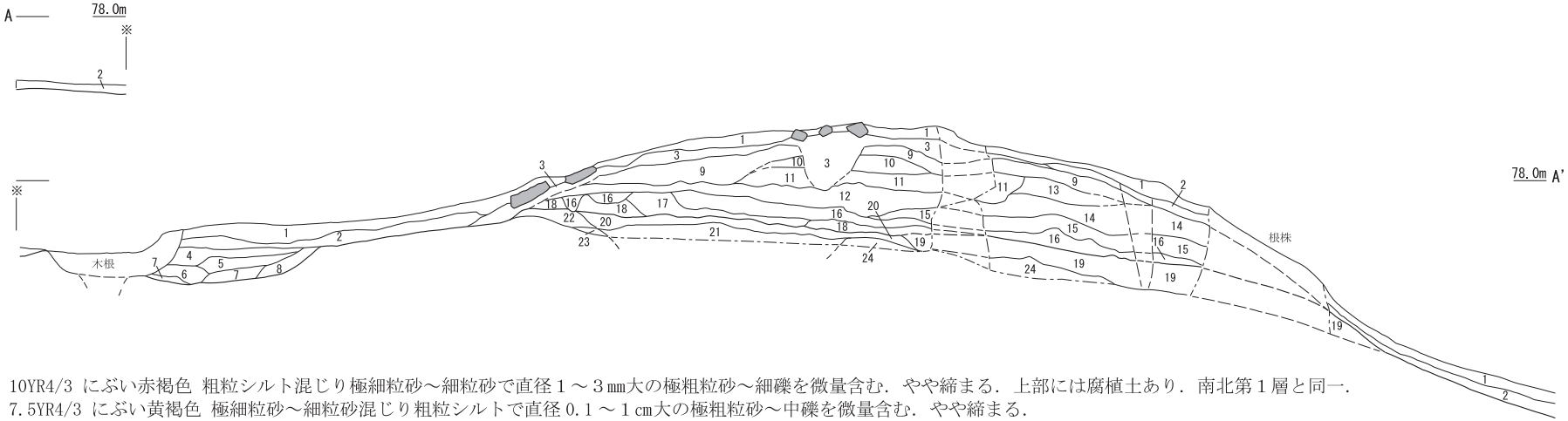
出土遺物（第 71 図、巻頭図版 12、写真図版 64）

土器　（10・11）は須恵器甕の口縁部片である。（10）の口径は 20.4cm、（11）は 22.2cm を測る。口

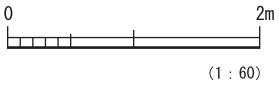




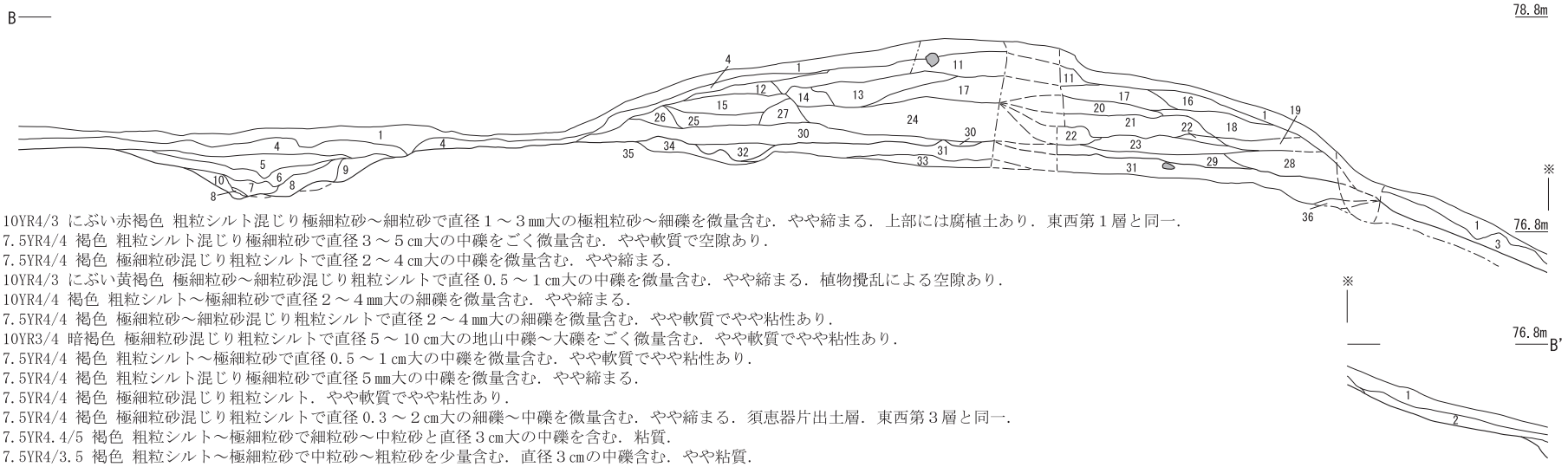
第 67 図　１区 11 号墳墳丘（調査前・後）



１．10YR4/3 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～３㎜大の極粗粒砂～細礫を微量含む．やや締まる．上部には腐植土あり．南北第１層と同一．
２．7.5YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.1 ～１㎝大の極粗粒砂～中礫を微量含む．やや締まる．
３．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.3 ～２㎝大の細礫～中礫を微量含む．やや締まる．須恵器片出土層．南北第 11 層と同一．
４．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径 0.2 ～１㎝大の細礫～中礫を少量含む．やや締まる．
５．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～３㎜大の細礫を微量含む．やや軟質．土壌化が進行して暗色化．
６．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルトで直径１～２㎜大の極粗粒砂を微量含む．やや軟質．やや粘性あり．暗色化．
７．10YR4/6 褐色 粗粒シルトで直径１～３㎝大の中礫を少量含む．軟質で粘性あり．
８．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～６㎝大の中礫を少量含む．やや締まる．
９．6YR4/4 にぶい赤褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を含む．南北第 17 層と同一．
10．7YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．
11．5YR4.4/4.9 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～中粒砂．やや砂質でやや軟質．南北第 20 層と同一．
12．5YR3.4/6 暗赤褐色 粗粒シルト～細粒砂．やや軟質．赤褐色系の地山ブロックを多く含む．南北第 21 層と同一．
13．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～２㎜大の極粗粒砂を中量含む．直径 0.5 ～１㎝大の中礫を微量含む．やや砂質で締まる．
14．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂で 7.5YR4/4 褐色 の粗粒シルト混じり細粒砂～中粒砂のブロックが微量混じる．直径 0.5 ㎝大の中礫を少量含み直径４㎝大の地山由来中角礫を微量含む．
15．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂で直径１～３㎝大の地山由来中角礫を微量含む．砂質でやや締まる．旧表土混じりの土壌化層．南北第 22 層と同一．
16．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～５㎝大の中亜角礫を中量含む．やや砂質で締まる．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂のブロックを微量含む．南北第 29 層と同一．
17．10YR3/3 暗褐色 極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや砂質で締まる．
18．10YR4/4 褐色 極細粒砂～中粒砂で直径 0.5 ㎝大の中礫をごく微量含む．砂質でやや締まる．
19．10YR3/4 暗褐色 中粒砂混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３㎜の細礫を少量含む．直径４～６㎝大の地山由来の中角礫を微量含む．やや砂質でやや締まる．南北第 31 層と同一．
20．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．砂質でやや締まる．
21．10YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～２㎝大の中礫をごく微量含む．やや砂質で締まる．
22．10YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎝大の地山由来の中亜角礫をごく微量含む．やや砂質で締まる．
23．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径４㎝大の地山由来の中角礫をごく微量含む．やや粘質で締まる．
24．20　7.5YR4/6 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～５㎝大の中角礫を少量含む．やや粘質で締まる．



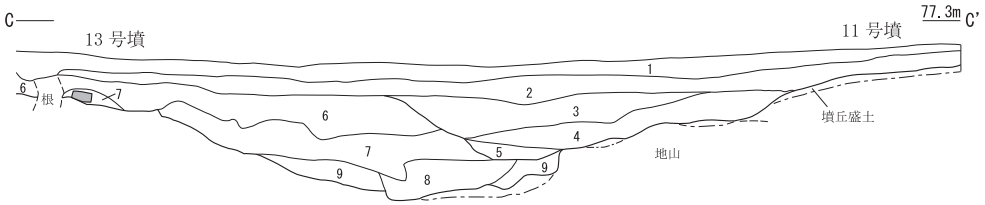
第 68 図　１区 11 号墳墳丘土層断面(1)



1．10YR4/3 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～３㎜大の極粗粒砂～細礫を微量含む．やや締まる．上部には腐植土あり．東西第１層と同一．
2．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径３～５㎝大の中礫をごく微量含む．やや軟質で空隙あり．
3．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～４㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．
4．10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．植物攪乱による空隙あり．
5．10YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を微量含む．やや締まる．
6．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～４㎜大の細礫を微量含む．やや軟質でやや粘性あり．
7．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径５～ 10 ㎝大の地山中礫～大礫をごく微量含む．やや軟質でやや粘性あり．
8．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫を微量含む．やや軟質でやや粘性あり．
9．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径５㎜大の中礫を微量含む．やや締まる．
10．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．やや軟質でやや粘性あり．
11．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.3 ～２㎝大の細礫～中礫を微量含む．やや締まる．須恵器片出土層．東西第３層と同一．
12．7.5YR4.4/5 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～中粒砂と直径３㎝大の中礫を含む．粘質．
13．7.5YR4/3.5 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む．直径３㎝の中礫含む．やや粘質．
14．7.5YR3.8/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で赤褐色の地山ブロックと直径３㎝大の中礫を若干含む．を含む．やや砂質．
15．6YR4/3 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～直径３㎝大の中礫を少量含む．やや軟質で腐植のような灰色に近い部分あり．
16．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.3 ～２㎝大の細礫～中礫を微量含む．やや締まる．
17．6YR4/4 にぶい赤褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を含む．東西第９層と同一．
18．7YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．
19．7.5YR4/4 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径５㎜大の中礫を少量含む．やや粘質でやや締まる．
20．5YR4.4/4.9 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～中粒砂．やや砂質でやや軟質．東西第 11 層と同一．
21．5YR3.4/6 暗赤褐色 粗粒シルト～細粒砂．やや軟質．赤褐色系の地山ブロックを多く含む．東西第 12 層と同一．
22．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂で直径１～３㎝大の地山由来中角礫を微量含む．砂質でやや締まる．旧表土混じりの土壌化層．東西第 15 層と同一．
23．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり細粒砂～中粒砂で 5YR4/6 にぶい赤褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトのブロックを少量含み 10YR4/2 灰黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂のブロックを微量含む．砂質でやや締まる．
24．6YR4/5.1 赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径５㎝大の中礫を含む．やや粘質だがやや軟質．
25．7YR4/4.5 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径 0.5 ㎜大の中礫を少量含む．やや軟質．
26．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～細粒砂．やや粘質でやや締まる．
27．7.5YR4.4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で礫を微量含む．やや軟質．
28．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂のブロックと 7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂のブロックが混じる．直径１～４㎝大の地山由来中角礫を微量含む．
29．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～５㎝大の中亜角礫を中量含む．やや砂質で締まる．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂のブロックを微量含む．東西第 16 層と同一．
30．10YR4.5/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂．やや粘質．旧表土か．
31．10YR3/4 暗褐色 中粒砂混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３㎜の細礫を少量含む．直径４～６㎝大の地山由来の中角礫を微量含む．やや砂質でやや締まる．東西第 19 層と同一．
32．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルト．やや粘質でやや軟質．空隙多い．やや暗色化．
33．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．砂質でやや締まる．
34．10YR4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂．やや砂質で締まる．
35．7.5YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂で直径１～３㎝大の中礫を少量含む．砂質でやや締まる．
36．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルト．やや粘質でやや締まる．

0　2m
（1：60）

第 69 図　１区 11 号墳墳丘土層断面(2)



１．10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を微量含む．やや締まる．空隙あり．上部は植物による攪乱を受ける．

２．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂と直径２～３㎜大の細礫を少量含む．締まる．やや空隙あり．

３．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎜大の極粗粒砂と直径 0.5 ～３㎝大の中礫を少量含む．やや締まる．やや空隙あり．

４．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量含む．やや締まる．やや空隙あり．少し暗色化．

５．7.5YR3/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を微量含む．やや軟質．僅かに粘性あり．やや黄色化．

６．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～中粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含む．直径１㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．

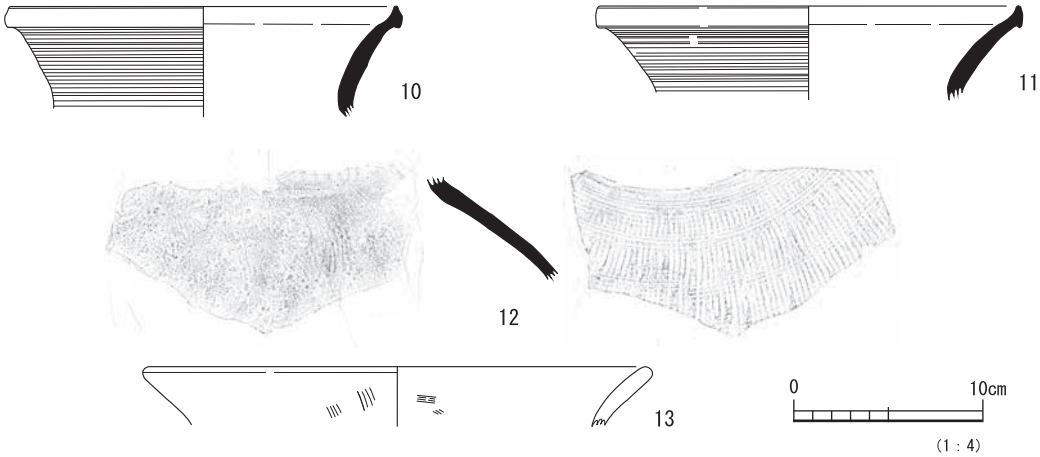
７．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じりシルトで直径２～３㎜大の細礫と直径１～３㎝大の中礫を微量含む．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂～細粒砂のブロックを含む．やや締まる．わずかに空隙あり．

８．10YR3/3 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．やや軟質で空隙あり．暗色化強い．

９．7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫と直径１～２㎝大の地山中礫を微量含む．やや軟質でやや空隙あり．わずかに粘性あり．

0　2m
（1：40）

第 70 図　１区 11 号墳周溝埋土土層断面



第 71 図　11 号墳墳丘出土土器

縁端部は上下に少し拡張し、内面はヨコナデにより凹面をなす。外面にはカキ目を施している。(12) は須恵器甕の肩部である。外面は平行タタキの後、横方向のカキ目を施し、内面は同心円タタキに平行タタキを重ねた後、ナデを加えている。３点は同一個体と思われ、ＭＴ 15 型式期～ＴＫ 10 型式期の６世紀前半の所産と思われる。

（10）は東側墳裾の表土直下の褐色土層、（11）は墳頂部付近の確認調査トレンチ埋土、（12）は墳頂部の表土直下からそれぞれ出土しており、（10）と（11）の口径は異なるが、これら３点は同一個体と思われる。

（13）は土師器の甕と思われる口縁部片で、口縁部と体部の境目で欠損している。口径は 26.2 ㎝とやや大きく、口縁端部の器高はやや厚く、丸くおさめる。外面には左斜め上方向のタテハケ、内面にはヨコハケを施しているが、遺存状況は良くない。

墳丘西側の堆積土層の散在する礫の下から出土した。時期は不明である。

３．12 号墳（第 72 ～ 79 図、巻頭図版９、写真図版 40 ～ 47）

位置と検出状況

１区の中央部北端に位置し、調査前墳丘の最高点は標高 76.2 ｍで、東側墳裾の標高は 73.2 ｍあたりと想定しており、調査前には斜面下方から約 3.0 ｍ、斜面上方からでも約 0.3 ｍの比高があり、11 号墳とともに盛土は比較的よく残っていた。

確認調査のトレンチは墳頂部に存在していたが、埋葬施設の確認までは到っていなかった。

形態・規模

１区内では墳丘の遺存状況も良好で、ほぼ同じ等高線上に並ぶ 14 号墳・16 号墳のなかでは最も規模が大きい。調査前の墳頂部は平坦に近いが、緩やかな丸みをもっており、墳丘は等高線の形状から南北短径 10.8 ｍ、長径 11.4 ｍ程度のほぼ円形を呈し、墳丘遺存状況も良好と思われた。調査の結果、墳丘の東側を除いた部分に周溝を巡らしていることが判明した。周溝外側北端肩部は斜面の傾斜とともに自然消滅し、墳丘北端も一部流失していたが、墳丘はほぼ完存しているとみられた。

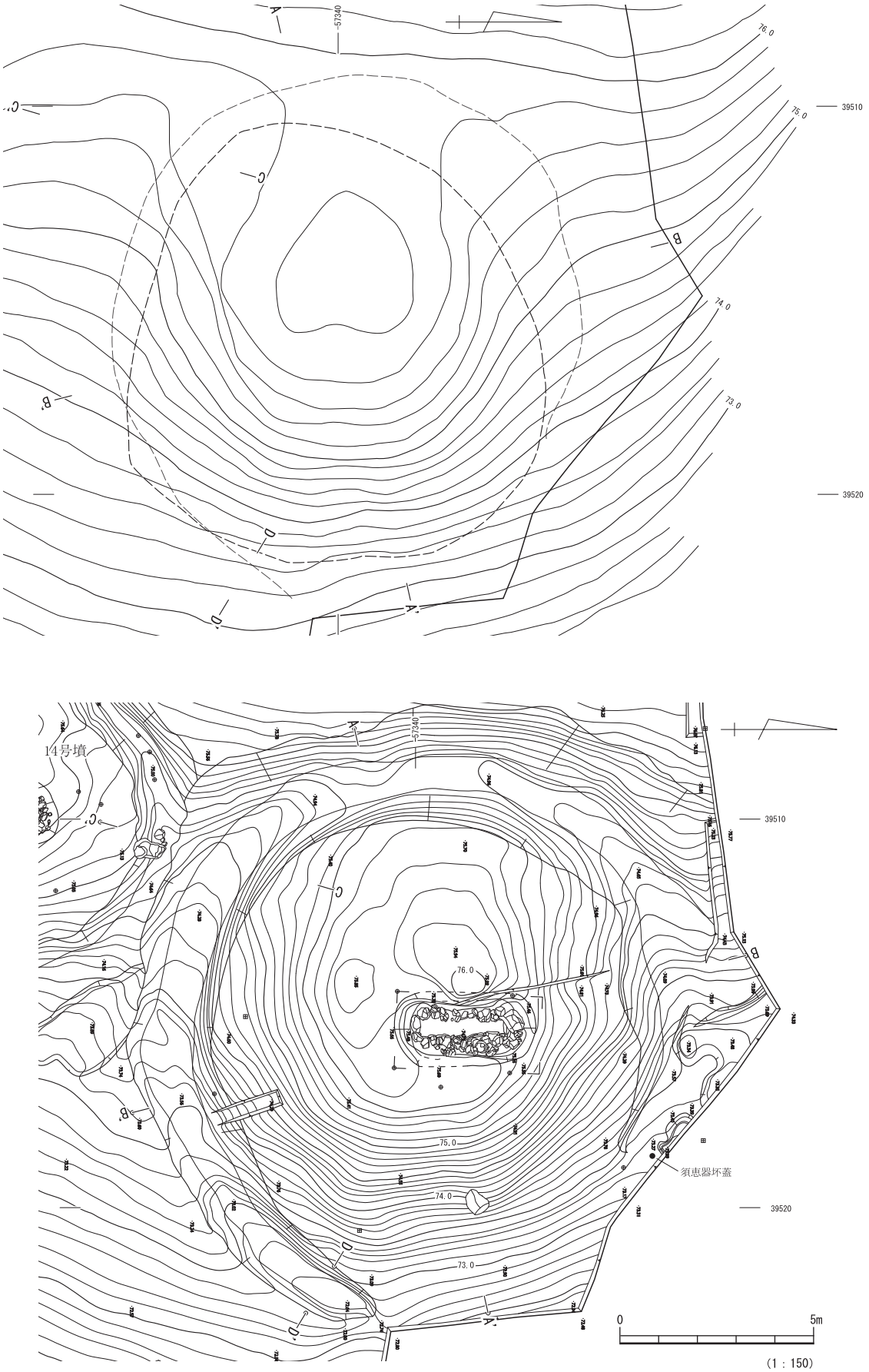
調査の結果、南北方向での周溝内側で計測した 12 号墳の規模は約 12.2 ｍを測る。東西方向では、やや不正確であるが、墳裾は標高 72.7 ｍ付近と判断すれば 13.1 ｍとなる。11 号墳よりも若干小さいものの、１区では規模の大きなものの一つである。

周溝は、北端部で斜面地形とともに変形している以外は、斜面山側が最も広く最大幅約 4.0 ｍであるが、南側では 2.1 ｍ前後のほぼ同じ幅で巡っている。周溝底の幅は 0.9 ｍ程度で大きな差はほとんど見られない。最も深い部分では検出面からの深さは約 1.0 ｍで、溝底の高さは西側が最も高く、南西や北東方向に傾斜している。周溝は 14 号墳の周溝北側と重複関係にあり、土層断面観察の結果、12 号墳の周溝が 14 号墳のそれよりも新しいことが判明した。

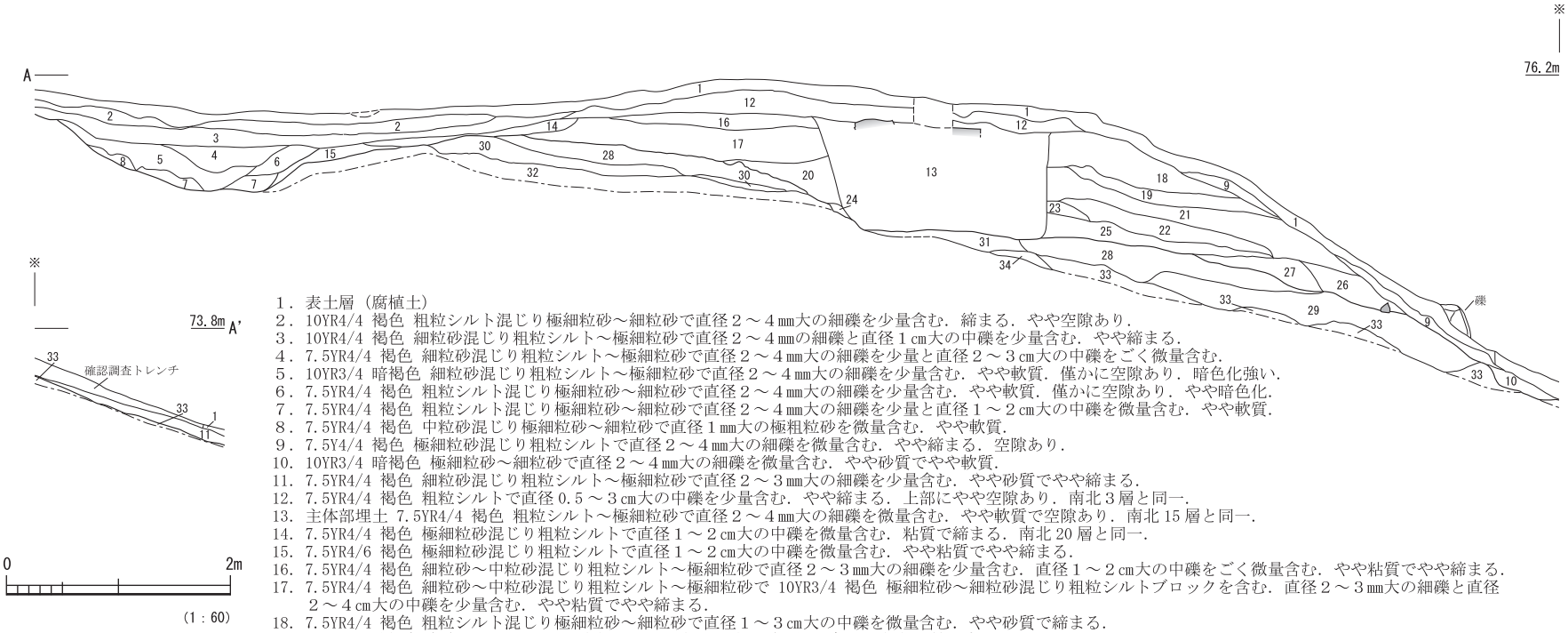
埋葬施設

墳丘の中央のやや北寄りで南北を長軸とした石組の埋葬施設を検出した。この埋葬施設は、長さは 2.2 ｍ、高さは 60㎝ 前後で、塊礫を４段程度積み上げた石室状の施設であるが、その幅は 50 ～ 60㎝ と狭いうえに北端で 53㎝、南端で 60㎝ のように両端で幅が異なり、底に石枕が置かれ、被葬者の頭側が幅広く、足側が狭くなっていた。さらに、木棺の痕跡が認められなかったことから、内部に棺を入れずに直接石組内に埋葬したと考えられる。したがって、石室ではなく、石棺である。ただし、板状石材を１段のみ立てて組んだような箱式石棺と区別する必要があることから、石室系石棺と呼称する。石室系石棺は本例のように塊石で積み上げたものと、板石を積み上げたものの２者があることから、本例を塊石積石棺、平石積石棺と呼んで区別しておく必要がある。

12 号墳埋葬施設の主軸は南北方向に近く、頭位は石枕がある南側で、厳密にはＳ４°Ｅである。小

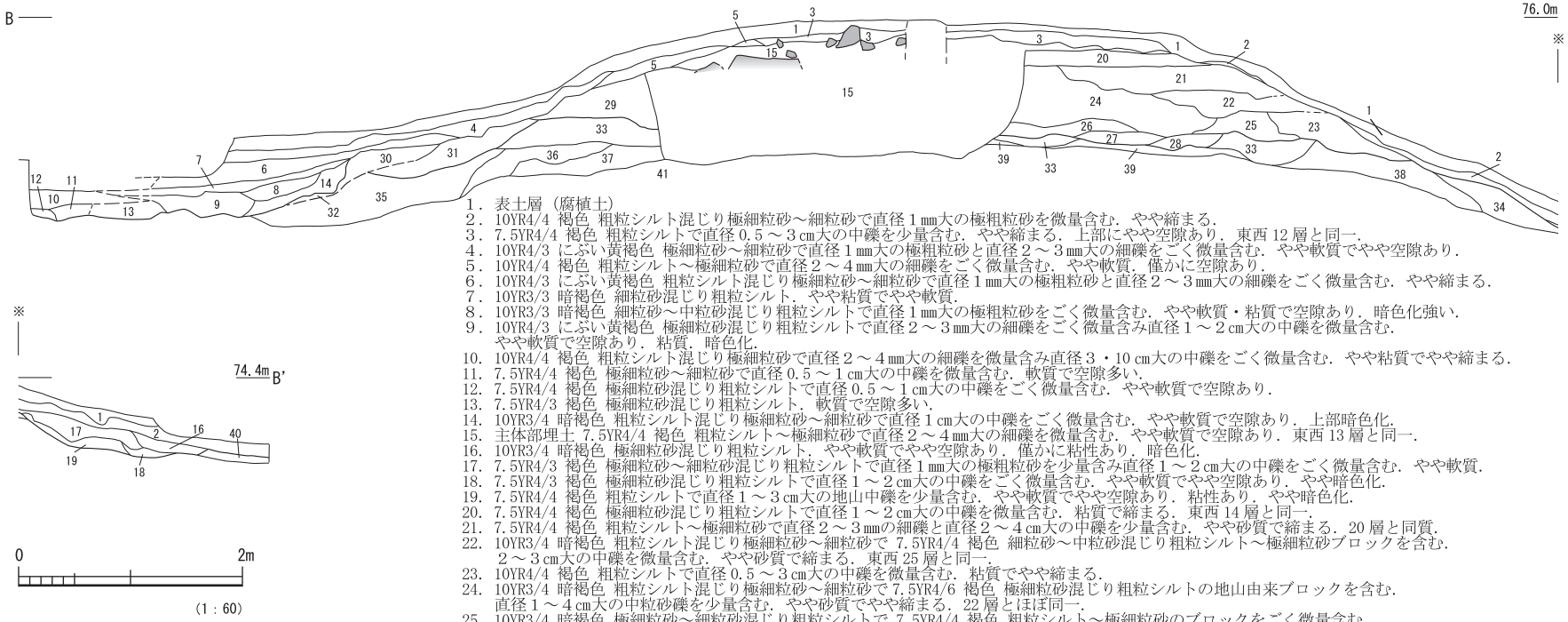


第 72 図　１区 12 号墳墳丘（調査前・後）



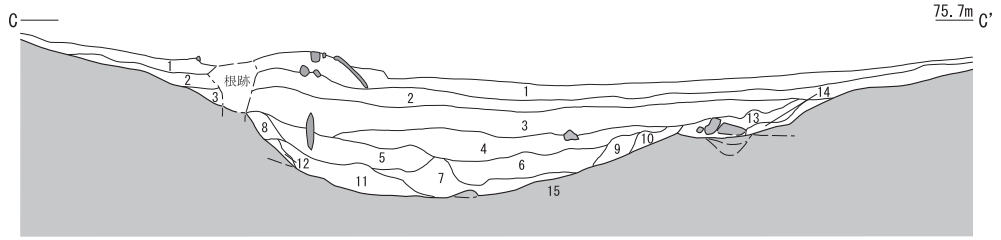
１．表土層（腐植土）
２．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を少量含む．締まる．やや空隙あり．
３．10YR4/4 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４㎜の細礫と直径１㎝大の中礫を少量含む．やや締まる．
４．7.5YR4/4 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を少量と直径２～３㎝大の中礫をごく微量含む．
５．10YR3/4 暗褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を少量含む．やや軟質．僅かに空隙あり．暗色化強い．
６．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を少量含む．やや軟質．僅かに空隙あり．やや暗色化．
７．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を少量と直径１～２㎝大の中礫を微量含む．やや軟質．
８．7.5YR4/4 褐色 中粒砂混じり極細粒砂～細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂を微量含む．やや軟質．
９．7.5Y4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～４㎜大の細礫を微量含む．やや締まる．空隙あり．
10．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を微量含む．やや砂質でやや軟質．
11．7.5YR4/4 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含む．やや砂質でやや締まる．
12．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径0.5～３㎝大の中礫を少量含む．やや締まる．上部にやや空隙あり．南北３層と同一．
13．主体部埋土 7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を微量含む．やや軟質で空隙あり．南北 15 層と同一．
14．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎝大の中礫を微量含む．粘質で締まる．南北 20 層と同一．
15．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
16．7.5YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含む．直径１～２㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．
17．7.5YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で 10YR3/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトブロックを含む．直径２～３㎜大の細礫と直径２～４㎝大の中礫を少量含む．やや粘質でやや締まる．
18．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～３㎝大の中礫を微量含む．やや砂質で締まる．
19．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～中粒砂で直径１～３㎝大の中礫をごく微量含む．やや砂質で締まる．
20．10YR4/3 にぶい黄褐色で粗粒シルト～極細粒砂ブロックと 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトブロックが混じる。直径 0.5～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．南北 26 層と同一．
21．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで 10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂ブロック含む．直径２～４㎝大の中礫を少量含む．やや粘質でやや締まる．
22．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～中粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含み直径 0.5～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや砂質でやや締まる．
23．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂ブロックと 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトブロックが混じる．直径 0.5～１㎝大の中礫を少量含む．やや砂質でやや軟質．
24．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．やや粘質でやや締まる．
25．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 7.5YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂ブロックを含む．２～３㎝大の中礫を微量含む．やや砂質で締まる．南北 22 層と同一．
26．墳丘盛土
27．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３㎝大の中礫をごく微量含む．やや砂質でやや締まる．
28．10YR3/4 暗褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．旧表土．南北 33 層と同一．
29．10YR3/4 暗褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径１～６㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．旧表土．
30．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．南北 38 層と同一．
31．10YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5～１㎜大の粗粒砂を微量含む．粘質でやや締まる．南北 39 層と同一．
32．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径３～６㎜大の細礫・中礫と直径６～ 10 ㎝の中礫・大礫を少量含む．やや粘質で締まる．
33．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～中粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．直径２～４㎝大の中礫を少量含む．やや砂質でやや締まる．
34．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．やや砂質でやや締まる．

第 73 図　１区 12 号墳墳丘土層断面(1)



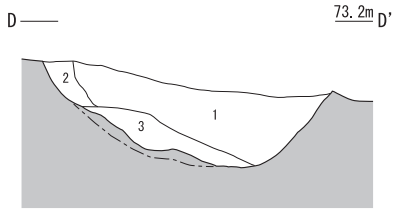
１．表土層（腐植土）
２．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂を微量含む．やや締まる．
３．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径0.5～３㎝大の中礫を少量含む．やや締まる．上部にやや空隙あり．東西12層と同一．
４．10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂と直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや軟質でやや空隙あり．
５．10YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４㎜大の細礫をごく微量含む．やや軟質．僅かに空隙あり．
６．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂と直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや締まる．
７．10YR3/3 暗褐色 細粒砂混じり粗粒シルト．やや粘質でやや軟質．
８．10YR3/3 暗褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎜大の極粗粒砂をごく微量含む．やや軟質・粘質で空隙あり．暗色化強い．
９．10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫をごく微量含み直径１～２㎝大の中礫を微量含む．
やや軟質で空隙あり．粘質．暗色化．
10．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を微量含み直径３・10㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．
11．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂で直径0.5～１㎝大の中礫を微量含む．軟質で空隙多い．
12．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径0.5～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや軟質で空隙あり．
13．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．軟質で空隙多い．
14．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１㎝大の中礫をごく微量含む．やや軟質で空隙あり．上部暗色化．
15．主体部埋土 7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を微量含む．やや軟質で空隙あり．東西13層と同一．
16．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．やや軟質でやや空隙あり．僅かに粘性あり．暗色化．
17．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎜大の極粗粒砂を少量含み直径１～２㎝大の中礫をごく微量含む．やや軟質．
18．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎝大の中礫をごく微量含む．やや軟質でやや空隙あり．やや暗色化．
19．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径１～３㎝大の地山中礫を少量含む．やや軟質でやや空隙あり．粘性あり．やや暗色化．
20．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎝大の中礫を微量含む．粘質で締まる．東西14層と同一．
21．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜の細礫と直径２～４㎝大の中礫を少量含む．やや砂質で締まる．20層と同質．
22．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 7.5YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂ブロックを含む．
２～３㎝大の中礫を微量含む．やや砂質で締まる．東西25層と同一．
23．10YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径0.5～３㎝大の中礫を微量含む．粘質でやや締まる．
24．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトの地山由来ブロックを含む．
直径１～４㎝大の中粒砂礫を少量含む．やや砂質でやや締まる．22層とほぼ同一．
25．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで 7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂のブロックをごく微量含む．
直径0.5～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．
26．10YR4/3 にぶい黄褐色で粗粒シルト～極細粒砂ブロックと 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトブロックが混じる。
直径0.5～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．東西20層と同一．
27．10YR3/4 暗褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂ブロックと 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトブロックが
混じる．直径２～６㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
28．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 10YR4/2 灰黄褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトのブロックを含む．直径１㎝大の
中礫をごく微量含む．やや砂質でやや締まる．
29．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトブロックと 10YR4/2 灰黄褐色
粗粒シルトブロックを含む．地山ブロックは少ない．直径２～４㎜大の細礫を少量含む．やや砂質でやや締まる．
30．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～細粒砂．やや締まる．僅かに空隙あり．
31．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．やや軟質でやや空隙あり．
32．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎝大の地山中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．
33．10YR3/4 暗褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．旧表土．東西28層と同一．
34．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫と直径３～４㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．旧表土．
35．10YR3/4 暗褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径１～６㎝大の中礫を少量含む．やや粘質でやや締まる．
36．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルトで直径10～15㎝大の大礫を少量含む．粘質で締まる．旧表土直下土壌層．
37．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２㎜大の細礫を少量含む．やや砂質でやや締まる．41層の土壌化層．
38．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．東西30層と同一．
39．10YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径0.5～１㎜大の粗粒砂を微量含む．粘質でやや締まる．東西31層と同一．
40．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎜大の極粗粒砂をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．
41．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含む．

第74図　１区12号墳墳丘土層断面(2)



１．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎜大の極粗粒砂を微量含む．やや締まる．空隙あり．
２．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を微量含み直径１～２㎝大の中礫をごく微量含む．やや締まる．やや空隙あり．粘性あり．
３．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜の細礫を少量含み直径２～３㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．空隙あり．粘性あり．
４．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎝大の中礫を少量含む．直径 50 ㎝の巨礫１点あり．軟質で空隙多い．やや粘性あり．やや暗色化．
５．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～２㎝大の中礫を少量含む．軟質で空隙多い．やや粘性あり．
６．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルトで直径 0.5 ～２㎝大の中礫を少量含む．軟質で空隙多い．粘性あり．暗色化強い．
７．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～４㎝大の中礫を微量含む．軟質で空隙多い．やや粘性あり．
８．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２㎜大の細礫と直径５㎜大の中礫をごく微量含む．軟質で空隙あり．
９．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．軟質で空隙あり．やや粘性あり．
10．10YR3/3 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎜大の極粗粒砂と直径１㎝大の中礫をごく微量含む．やや締まる．やや空隙あり．やや粘性あり．
11．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量と直径１～３㎝大の中礫をごく微量含む．軟質でやや粘質．
12．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．やや軟質．僅かに粘性あり．
13．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１～２㎜大の極粗粒砂・細礫を微量含み直径３㎝大の中礫をごく微量含む．直径５・20 ㎝大の中礫・大礫を数点含む．やや軟質で空隙あり．
14．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～４㎜大の細礫を微量含む．やや締まる．粘性あり．
15．地山 7.5YR4/6 褐色 直径１～ 10 ㎝大の中礫～大礫混じり粗粒シルト～極細粒砂．締まる．粘性あり．

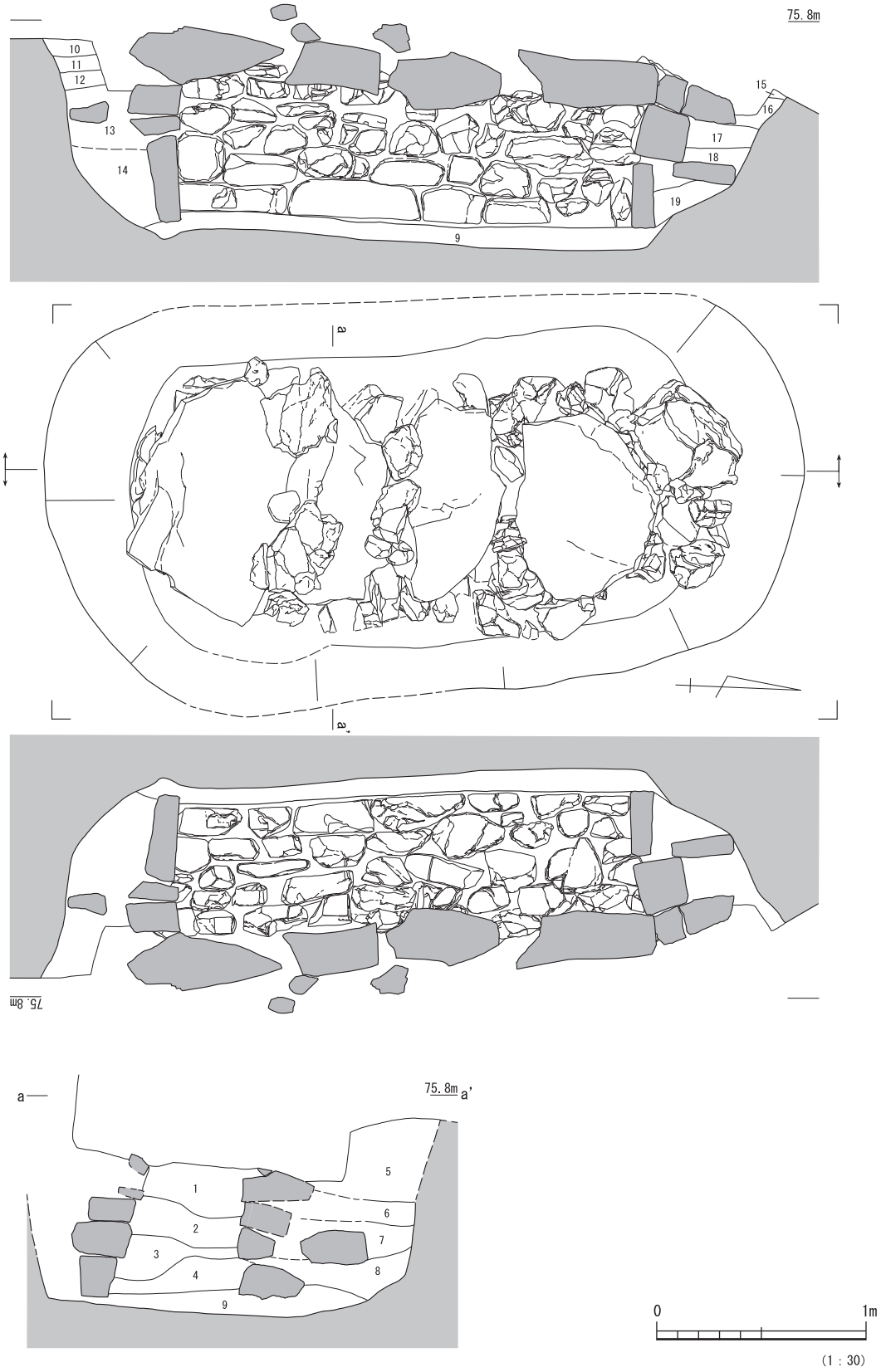
0　2m
（1：50）



0　1m
（1：30）

１．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト質極細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂をごく微量含む．やや軟質でやや空隙あり．粘質．暗色化．
２．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫と直径１～２㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
３．10YR4/6 褐色 細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜の細礫をごく微量含む．やや軟質．粘性あり．

第 75 図　１区 12 号墳周溝埋土土層断面



第 76 図　12 号墳埋葬施設(1)

１．7.5YR4/2.4 灰褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～細礫を含む．軟質．
２．7YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．やや粘質．
３．6YR4/4 にぶい赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を含む．粘質．
４．6YR3.8/3.5 にぶい赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径１㎝大の中礫を少量含む．粘質．
５．7YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～細礫を含む．粘質．
６．10YR4/2 灰黄褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．やや粘質で腐植土に近い．
７．7.5YR3.6/3.2 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂を多く含み粗粒砂～細礫を少量含む．
８．8YR4/1.6 灰褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．粘質．
９．7YR4.4/5 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径 1.5 ㎝大の中礫を少量含む．粘質．埋葬施設底の整地層．
10．5YR4.6/7 明赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径２㎝大の中礫を含む．粘質．
11．7YR4/4 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．軟質で腐植土に近い．
12．5YR4.4/6 赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径１㎝大の中礫を含む．粘質．
13．7.5YR4/1.8 灰褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を少量含む．直径１㎝大の中礫を含む．
14．7YR4/2 灰褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中礫を含む．腐植土に近く軟質．
15．7.5YR4/2.4 灰褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．やや粘質．
16．7.5YR4.3/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径１㎝大の中礫を含む．
17．10YR4.5/2 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～直径１㎝大の中礫を微量含む．砂質粘土に似る．
18．9YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．やや粘質．
19．18 層とほぼ同一だが 中粒砂～極粗粒砂をほとんど含まない．

第 77 図　12 号墳埋葬施設土層名

口部南側は３段、北小口は２段積みとし、１段目は厚さ 10㎝ 強で、棺幅いっぱいの石材を立てて構築している。小口石１段目の高さは約 30㎝ で、石棺内の半分程度の高さになっていた。なお、特に西側の壁石組は土圧により東側に傾いていた。

蓋石は長さ１ｍ強の自然石４枚を横架し、蓋石の間隙は小ぶりの塊石で充填していたが、粘土は使用されていなかった。なお、調査前墳頂部表面から蓋石までの盛土は約 40㎝ の厚さであった。

棺底は平坦で、頭部にあたる南側が足部の北側よりも８㎝ 高くなっていた。石枕は長さ 10・15㎝ 程度の自然石２点が約 16㎝ の間隔で置かれ、石室南端から 10・15㎝ 内側の位置であった。なお、蓋石上面の高さも南側が北側よりも約 15㎝ 高くなっていた。

墓壙は平面小判形に近く、長径約 3.6 ｍ、短径推定 1.9 ｍで、検出面から底までの深さは最大で約１ｍである。一部大型株の存在により確認できなかったが、墓壙横断面では傾斜が急で、南北端のうち、北端は傾斜が最も緩くなっていた。墓壙内は塊石で石室系石棺を構築しながら、墓壙との間を埋めていった様子が土層断面から看取でき、石を積み上げる際には北側を墓壙内への出入口にしていた可能性がある。

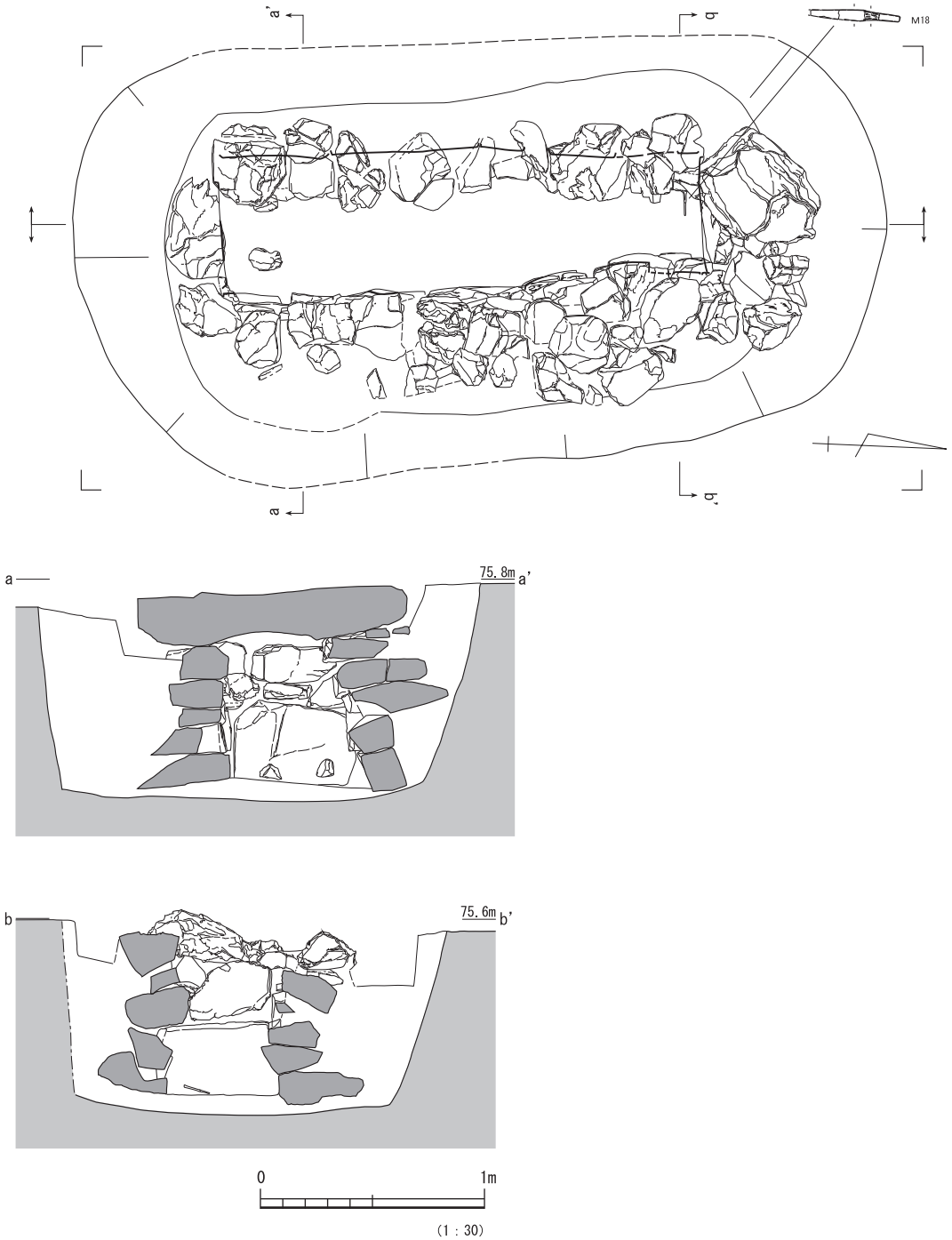
遺物出土状況

棺内では北端中央部の西寄りで鉄刀子１点を検出した。北小口と平行方向で、６㎝ 離れ、刃部を北方向、茎は西に向けた状態で棺底から３㎝ 高く、身部先端は底に密着して出土した。刃部は中央で折れ、切先部分は折損している。

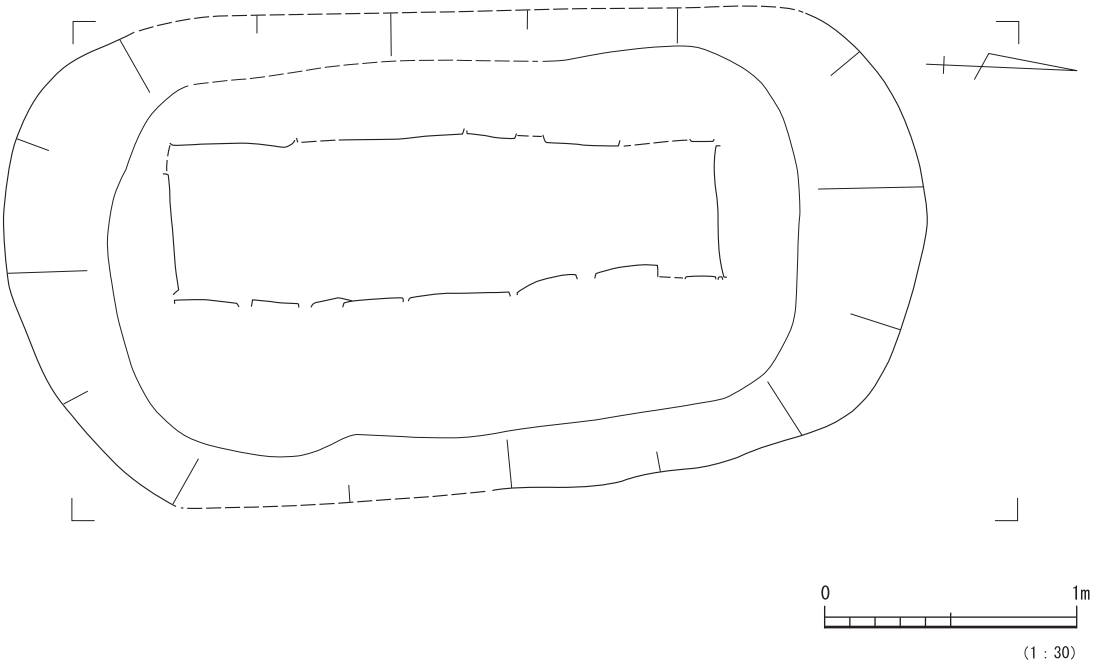
周溝部分北東端では、須恵器坏蓋が周溝埋土中の礫際で出土し、周溝北北西部分の周溝内埋土から須恵器坏身が出土した。これら須恵器が本来置かれていた場所は不明である。また、墳丘北側の土層観察用畔部分で、旧表土の直下から土師器高坏の脚部が出土した。

出土遺物（第 80・81 図、巻頭図版 12、写真図版 63・66）

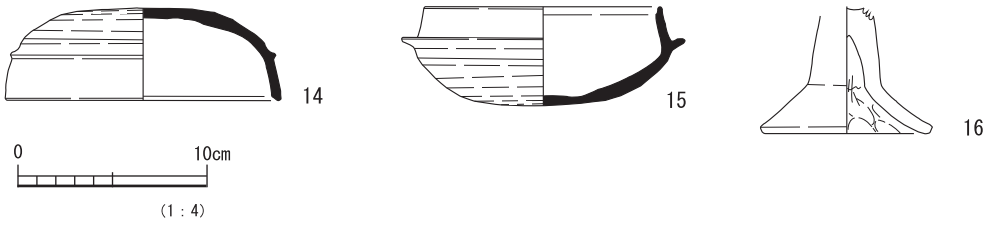
須恵器坏　(14) は坏蓋、(15) は坏身で、２点は蓋と身のセットである。



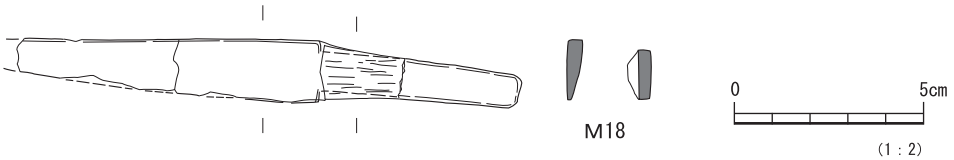
第 78 図　12 号墳埋葬施設(2)



第 79 図　12 号墳埋葬施設墓壙



第 80 図　12 号墳墳丘出土土器



第 81 図　12 号墳埋葬施設出土鉄刀子

（14）の口径は 14.4 ㎝、器高は 4.9 ㎝で、口縁端部にはややあまいが面をもつ。口縁部と天井部の境の稜はややあまいが突出度は高い。天井部内面には同心円タタキを施し、仕上げナデを加えている。ロクロ回転方向は左である。東側墳裾の周溝内より出土した。

（15）は口径 12.4 ㎝、器高 5.3 ㎝で、たちあがり部は 1.8 ㎝程度と高い。端部はわずかに内面に凹面を有する。受け部は外側に張り出し、水平に近く外側に張り出す。体部から底部の回転ヘラケズリの範囲は広く、ロクロ回転方向は左である。底部内面には同心円タタキの後、仕上げナデを施している。

北側墳裾の周溝埋土と思われる暗褐色土層から出土しており、（14）とは出土位置が異なるが、セット関係であり、セットにした場合の高さは 8.5 ㎝である。

ＭＴ 15 型式期で、６世紀前葉の時期である。

土師器高坏　（16）は土師器高坏の脚部である。中空の脚柱部から稜をもって下外方に短く開く裾部となる。脚端部は面をもつ。脚端径は 8.4 ㎝、残存高は 6.8 ㎝である。器表が荒れているため調整痕等は残存していないが、内面にはユビオサエ痕が残り、脚柱部外面は縦方向のヘラミガキの可能性がある。

墳丘盛土を除去した面から出土した。時期的には 12 号墳とほぼ同じか、直前と思われる。

鉄刀子　M 18 は刃部中央付近で折れ、切先は折損している。残存長は 13.3cm で、茎部長は 5.4cm、身部は 8.0cm 遺存している。身部の関部での幅は 1.6cm、茎部の幅は 1.0cm で、約３mm ずつの両関のものである。背の厚さは４mm、茎は厚さ 3.5mm である。目釘は認められず、関から茎部にかけて鹿角と思われる有機物が付着しており、鹿角装の把であったと判断される。鹿角は最大厚約３mm で茎の片面にのみ遺存しており、表面は残存していない。茎の中央付近で直線的に途切れているようにみえるが、明確ではない。

４．13 号墳（第 82 ～ 86 図、巻頭図版 10、写真図版 48 ～ 50）

位置と検出状況

１区の南西端に位置し、調査前墳丘の最高点は標高 77.3 ｍで、調査前には標高 76 ｍの等高線あたりを斜面下の南東側墳裾と判断して、北西－南東方向の規模は 6.6 ｍ程度としていた。墳頂部には、埋葬施設が破壊された部分にあったと思われる石材が散乱しており、確認調査時に列石状の石組とされたことにより本発掘調査前に古墳と判断されていたものである。北東－南西方向での規模はその地形から、6.9 ｍ程度とみられた。斜面下側の墳裾から墳頂部までの高さは約 1.3 ｍで、11･12 号墳と比較すると、かなり低平であることから、内部施設はすでに上部が破壊され、墳丘も削平を受けたものと推定できた。

形態・規模

１区内では、ほぼ同じ等高線上に並ぶ 11 号墳・15 号墳のなかで、15 号墳と並んで墳丘の遺存状況が悪く、11 号墳に比べて規模も小さい。

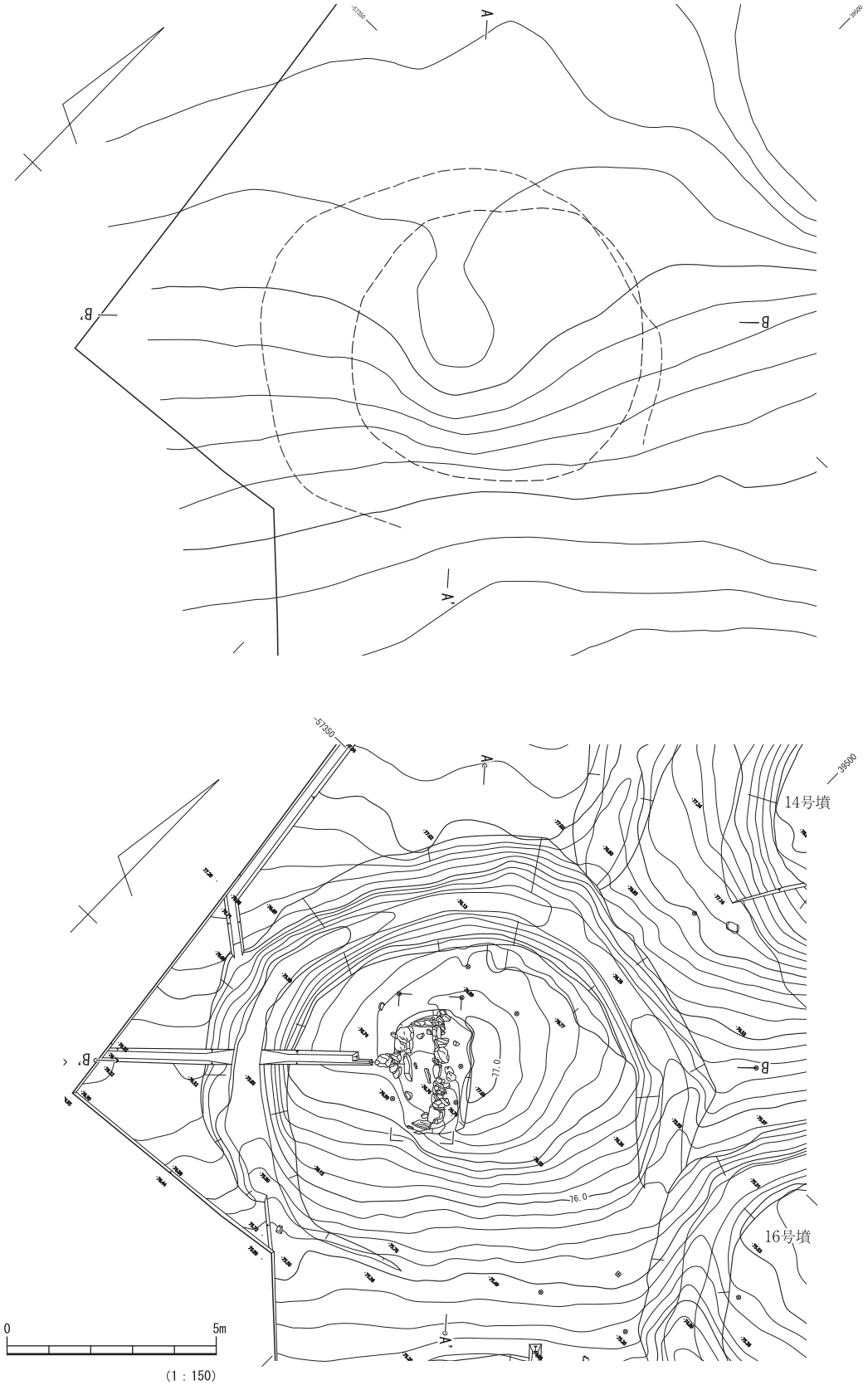
調査の結果、斜面下側にあたる墳丘東側を除いた部分に周溝を巡らした円墳で、頂部や東半部の墳丘が削平や流出などにより、かなり失われていることが判明した。北東－南西方向での周溝内側で計測した 13 号墳の規模は約 9.8 ｍで、北西－南東方向での規模は、南東側墳裾を標高 75.5 ｍの等高線付近と推定して、約９ｍとなる。

検出面での周溝幅は北西側が最も広く約 2.5 ｍ、南西側では約 2.1 ｍ、北側では約 1.5 ｍで、周溝底の幅は 0.4 ｍ～ 0.7 ｍを測る。東側周溝端は斜面地形と接して自然消滅している。周溝の検出面からの深さは、最も深い部分で 90cm である。前述のように、周溝は 11 号墳と重複しており、11 号墳の周溝が新しい。

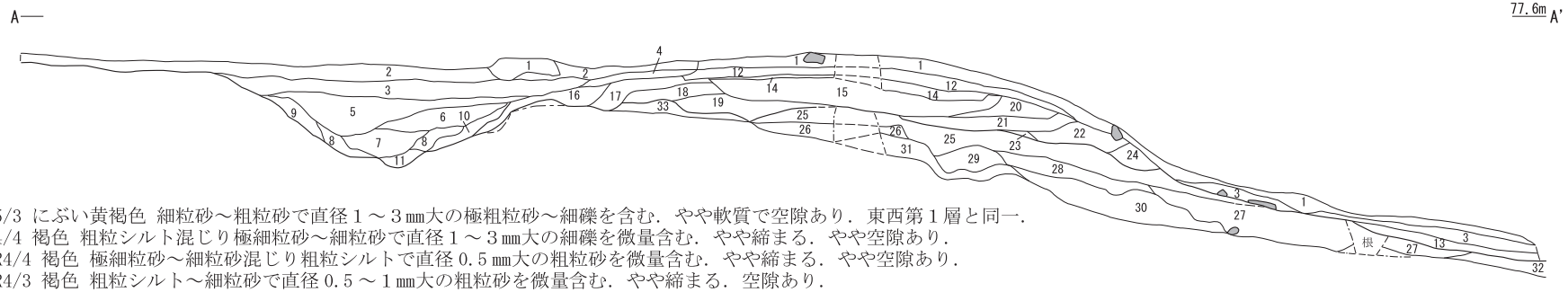
埋葬施設

墳丘の中央から南西に約１ｍ偏った位置で、北西－南東を長軸とした石組の埋葬施設を検出した。埋葬施設は上部や南西側壁の約半分および蓋石が失われているが、長さ 2.2 ｍ、北西端の幅 60cm、南東側は小口石の端までで幅 54cm の規模で、12 号墳とほぼ同じ大きさである。底からの高さは最大 42cm 遺存しており、北西端近くの底面上には自然礫が２点検出されたことから、石枕と判断している。また、石組内には木棺の痕跡は認められなかった。したがって、本墳の埋葬施設も石室系石棺と呼称しておく。本埋葬施設の場合は、比較的平らな礫岩を平積みして側壁を構築している部分が多いが、北東壁のように立てて使用している部分もある。平石積みの石室系石棺であるが、部分的に板石組となる。

北東側壁のうち、板石を立てていた部分は土圧により内側に大きく傾いていた。南西側壁は２段のみ遺存するにとどまる。小口石は北西側・南東側のどちらも板石を立てており、北西のものは長さ 65cm、南東のものは長さ 60cm で、南東のものが少し小ぶりである。北西側小口石は若干外側に傾斜していたが、



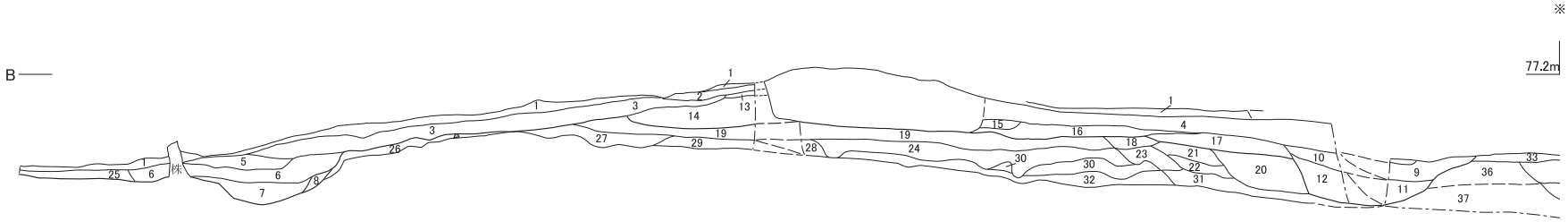
第 82 図　１区 13 号墳墳丘（調査前・後）

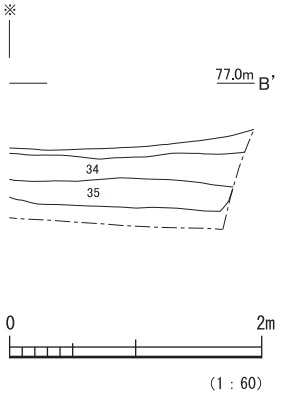


１．10YR5/3 にぶい黄褐色 細粒砂～粗粒砂で直径１～３㎜大の極粗粒砂～細礫を含む．やや軟質で空隙あり．東西第１層と同一．
２．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～３㎜大の細礫を微量含む．やや締まる．やや空隙あり．
３．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径0.5㎜大の粗粒砂を微量含む．やや締まる．やや空隙あり．
４．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径0.5～１㎜大の粗粒砂を微量含む．やや締まる．空隙あり．
５．10YR3/4 暗褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径５㎜大の中礫を微量含み直径２㎝大の中礫をごく微量含む．やや軟質。やや空隙あり．
６．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトのブロックが混じる．直径0.5～１㎝大の地山中礫少量含む．炭化物あり．
７．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径0.5～１㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．空隙少ない．
８．7.5Y3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～中粒砂で直径0.5～１㎝大の地山中礫を微量含む．やや軟質で空隙あり．
９．7.5YR4/4 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径５㎜大の中礫を微量含む．僅かに粘性あり．やや締まる．
10．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径５㎜大の中礫をごく微量含む．やや砂質でやや軟質．
11．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径５㎜大の中礫をごく微量含む．やや軟質．やや粘性あり．
12．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．空隙あり．東西第２層と同一．
13．7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎝大の地山中礫をごく微量含む．やや締まる．
14．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂のブロックを含む．直径１㎝大の地山中礫をごく微量含む．やや締まる．東西第13層と同一．
15．5YR4/4 にぶい赤褐色 細粒砂～中粒砂流混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径0.5～４㎝大の中礫を中量含む．やや砂質やや締まる．東西第14層と同一．
16．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径0.5～１㎝大と直径２～３㎝大の地山中礫を少量含む．
17．7.5YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや粘質で締まる．
18．7.5YR4/4 褐色 細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～４㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．
19．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルトで直径１～２㎝大の中礫を微量含む．粘質でやや軟質．
20．5YR4/4 にぶい赤褐色 細粒砂～中粒砂流混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径0.5～４㎝大の中礫を中量含む．やや砂質やや締まる．
21．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１～２㎝大の中礫を微量含む．やや砂質でやや締まる．
22．5YR4/4 にぶい赤褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎝大の中礫を微量含む．粘質でやや軟質．
23．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂．粘質で軟質．
24．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや粘質だがやや軟質．
25．7.5YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含む．直径２～４㎝大の中礫を微量含む．やや砂質でやや軟質．旧表土．東西第19層と同一．
26．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１～２㎜大の極粗粒砂を微量含み 7.5YR5/2 灰褐色 粗粒シルトブロックを微量含む．東西第29層と同一．
27．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４㎜大の細礫と直径１～４㎝大の中礫を少量含む．直径20㎝大の大礫を１点含む．やや粘質でやや締まる．
28．7.5YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや砂質でやや締まる．
29．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径0.5～１㎝大の中礫を少量含む．やや粘質でやや軟質．
30．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫と直径0.5～４㎝大の中礫を少量含む．粘質で締まる．
31．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径１～５㎝大の中礫を少量含む．やや粘質で締まる．
32．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径２～４㎝大の中礫をごく微量含む．粘質で締まる．粘質で締まる．
33．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径４㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．

0　2m
(1：60)

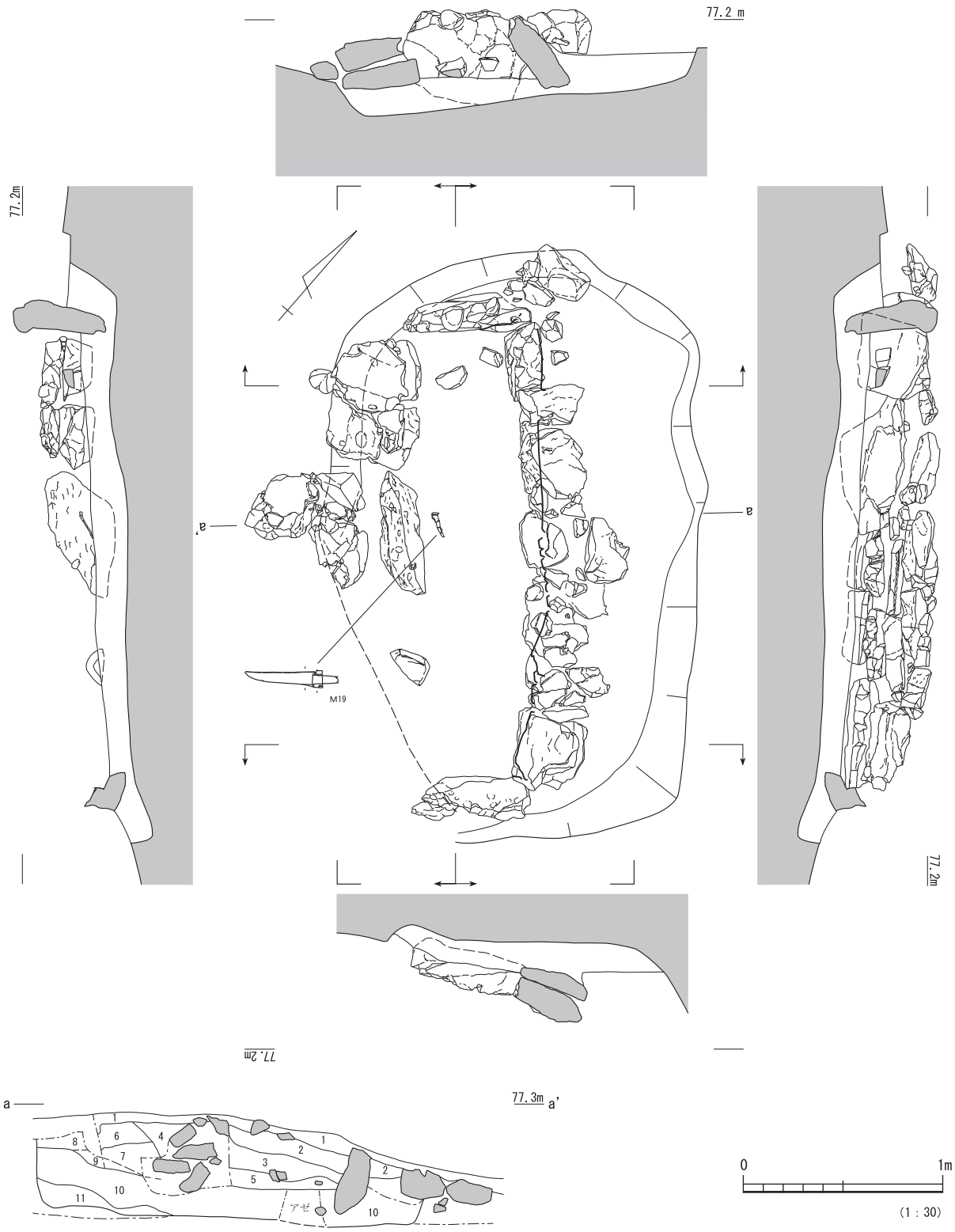
第83図　１区13号墳墳丘土層断面(1)





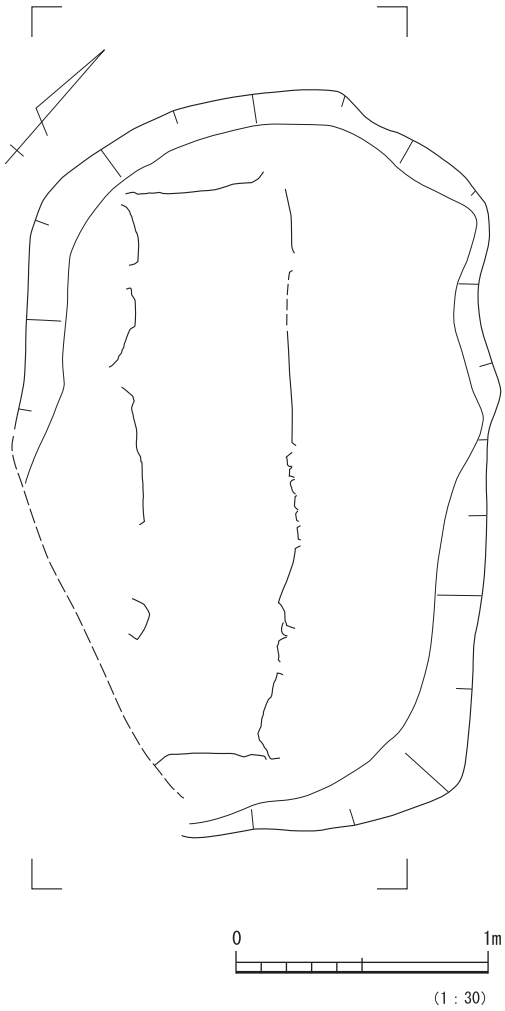
１．10YR5/3 にぶい黄褐色 細粒砂～粗粒砂で直径１～３㎜大の極粗粒砂～細礫を含む．やや軟質で空隙あり．南北第１層と同一．
２．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．空隙あり．南北第 12 層と同一．
３．7.5YR4/2.4 灰褐色 極細粒砂混じり細粒砂．やや粘質．
４．7.5YR4/1.6 灰褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂を含む．やや粘質．
５．7.5YR4.4/3.5 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む．やや粘質．
６．7YR4.4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を少量含む．細礫～直径５㎜大の中礫を 10％程度含む．粘質．
７．7YR4/3.5 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～細礫をやや多く（７％程度）含む．粘質でやや軟質．
８．5YR4/4 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂を多く含み細礫～直径５㎜大の中礫を含む．粘質．
９．7.5YR3.8/2 灰褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を 10％程度含む．やや粉っぽい．
10．5YR4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～粗粒砂を含む．細礫～直径１㎝大の中礫を少量含む．粘質．
11．7.5YR3/1.5 黒褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～細礫を 10％程度含む．やや粉っぽい．
12．7.5YR3/2.4 黒褐色 極細粒砂～細粒砂．やや粘質で腐植土に近い．
13．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂のブロックを含む．直径１㎝大の地山中礫をごく微量含む．やや締まる．南北第 14 層と同一．
14．5YR4/4 にぶい赤褐色 細粒砂～中粒砂流混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～４㎝大の中礫を中量含む．やや砂質やや締まる．南北第 15 層と同一．
15．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり細粒砂～中粒砂で直径５～６㎝大の中礫を中量含む．やや砂質で軟質．
16．4YR4.4/7.5 赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を含み細礫～直径２㎝大の中礫を含む．地山を削り出した盛土．粘質．
17．6YR4/6 赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～粗粒砂を含む．極粗粒砂～直径１㎝大の中礫が５％程度混じる．粘質．
18．7YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で細礫～中礫を微量含む．粘質．
19．7.5YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含む．直径２～４㎝大の中礫を微量含む．やや砂質でやや軟質．旧表土．南北第 25 層と同一．
20．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～４㎜大の細礫を少量含む．粘質でやや軟質．
21．7YR4.4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で細礫～中礫を微量含む．粘質．
22．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を微量含み直径１～２㎝大の中礫をごく微量含む．粘質でやや軟質．空隙あり．
23．10YR4/6 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～４㎜大の細礫を少量含み直径１～２㎝大の中礫を微量含む．やや粘質で締まる．
24．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量含む．粘質でやや軟質．やや暗色化．
25．5YR4.6/7 明赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径５㎝大の中礫を少量含む．軟質．
26．5YR4.5/3.5 にぶい赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径５㎝大の中礫を含む．粘質．地山風化土壌層．
27．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含み直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．暗色化．
28．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫を少量含む．やや粘質でやや軟質．
29．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１～２㎜大の極粗粒砂を微量含み 7.5YR5/2 灰褐色 粗粒シルトブロックを微量含む．南北第 26 層と同一．
30．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径２～４㎝大の中礫を微量含む．粘質でやや締まる．やや暗色化．
31．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を中量含む．粘質で締まる．
32．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量含む．直径３～４㎝大の中礫を微量含む．粘質で締まる．
33．7.5YR3.6/2 灰褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～細礫を７％程度含む．粉っぽい．旧表土か．
34．8YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を５％程度含む．やや粉っぽいがやや粘質．
35．8YR5/4.4 にぶい褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を５％程度含む．直径 0.5 ～５㎝大の中礫を少量含む．やや粘質．
36．7.5YR4.6/4 にぶい褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～直径３㎝大の中礫を少量含む．やや粉っぽい．
37．5.5YR5/6 明赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径 10 ㎝大の大礫を含む．粘質．基盤層で礫混じりの固結層．

第 84 図　１区 13 号墳墳丘土層断面(2)



１．表土（腐植土）.
２．7.5YR4.5/2.4 灰褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂混じる．腐植土層．軟質で粉っぽい.
３．6YR4/4 にぶい赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～粗粒砂を含む．やや粘質.
４．木の根による攪乱層.
５．5YR4/3.8 にぶい赤褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂．粘質でやや締まる.
６．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～４cm大の中礫を微量含む．やや締まる．空隙あり.
７．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂のブロックを含む．直径１cm大の地山中礫をごく微量含む．やや締まる.
８．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１mm大の粗粒砂を微量含む．粘質.
９．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．粘質.
10．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～３cm大の中礫を少量含む．粘質でやや締まる.
11．7.5YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１～３cm大の中礫を少量含む．やや粘質でやや軟質.

第 85 図　13 号墳埋葬施設



第 86 図　13 号墳埋葬施設墓壙

南東側小口石は大きく外側に傾いた状態で、下半部のみ残存していた。

棺内北西小口部に近いところで検出した石枕２点は、砂岩あるいは凝灰質砂岩の自然礫であるが、石棺壁体に使用された石材は殆どが礫岩であることから、石枕と判断した。南西側のものは長さ 15cm、幅９㎝の礫で、小口石から 17cm、南西側壁から７㎝、北東側のものは小口石から９㎝、北東側壁から 19cm それぞれ離れた位置にあり、長さ 12cm、幅７㎝である。２点は９㎝の間隔で、南西のものは長軸が北方向に近く、北東側のものは東西に近い長軸方向となっていた。２点の長軸方向が大きく異なっていたことから、原位置は保っていないと判断される。

被葬者の埋葬頭位は北西側で、厳密にはＮ 42°Ｗである。棺底は平坦で、埋葬頭位側が足側よりも 15cm 高くなっていた。

墓壙は平面小判形に近いが、南側は墳丘がえぐられているため墓壙壁は残存していない。検出面での長径は約 2.9 ｍ、短径約 1.9 ｍで、深さは最大で 47cm 遺存しており、底は南東側に傾斜していた。

遺物出土状況

棺内では中央部の南西壁に近い部分で鉄刀子１点を検出した。側壁から６㎝離れた位置で、切先を足側の南東方向に向け、刃部は側壁側に向いていた。出土状況が原位置を保っているとすれば、被葬者の右体側で手の付近に副葬されていたことになるが、切先は棺底に接していたものの、茎は棺底より６㎝上であったことから、副葬時の位置から少し動いている可能性が高い。あるいは被葬者の上に置かれていたのかもしれない。

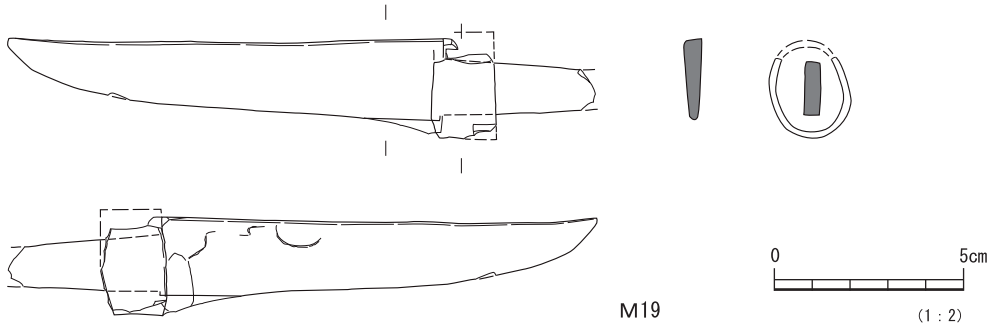
ほかに、須恵器・土師器片が墳丘の表土直下から出土しており、棺内や棺上などに副葬されていたものと考えられる。

出土遺物（第 87・88 図、巻頭図版 12、写真図版 65・66）

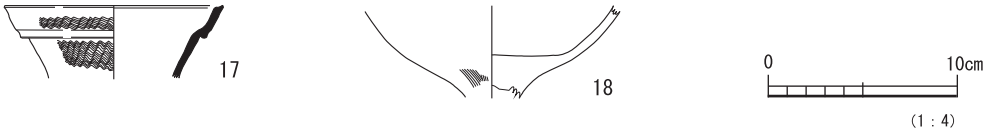
鉄刀子　Ｍ 19 は茎端を欠失する、残存長 15.5cm、身部長 11.5cm、身部最大幅 2.15cm とやや大型の刀子である。両関で、背側で５㎜、刃部側で約 1.5㎜ 狭くなり、幅 1.5cm の茎となる。茎断面は厚さ約４㎜の長方形で、身部の厚さは背部で約５㎜ある。

把縁には厚さ 1.5㎜、長さ 1.7cm の鉄製の把縁金具が遺存しており、現形状では長径 2.6cm、短径 2.1cm の楕円形である。茎表面には木質が遺存している。茎部に目釘は認められない。現重量は 30.9 ｇである。

須恵器瑳　(17) は須恵器瑳の口縁部片で、口径は 11.5 ㎝を測る。端部には凹面をもち、外面には櫛描波状文を施す。上段の波状文は８条、下段は 15 条の波状文である。墳丘東半部の表土直下第 12 層か



第 87 図　13 号墳埋葬施設出土鉄刀子



第 88 図　13 号墳墳丘出土土器

ら出土したと判断される。焼成は良好で、端部に明瞭な面をもつことから、ＴＫ 208 型式期～ＴＫ 23 型式期の所産と判断され、５世紀後半の時期が与えられよう。

土師器高坏　(18) は土師器高坏の破片である。坏部は椀形を呈するものと思われる。坏部下端の外面にはハケ目が残る。墳丘北半部の表土直下層である第２層から出土した。

５．14 号墳（第 89 ～ 93 図、巻頭図版 10、写真図版 51 ～ 53）

位置と検出状況

１区の中央部に位置し、ほぼ同じ等高線上に並ぶ 12 号墳・16 号墳の中央に存在する。調査前には墳丘の盛り上がりがなく、平坦に近い緩い傾斜部分があり、その幅も狭かったが、古墳である可能性は十分判断できた。

確認調査では、トレンチが設定されていたが、周溝を検出することなく、古墳ではないと判断されていた。しかし、前記の理由から、本発掘調査において、11 号墳からのびる土層観察用畔を少し延長して遺構面を精査したところ、14 号墳の周溝を検出したことから、古墳と確定した。

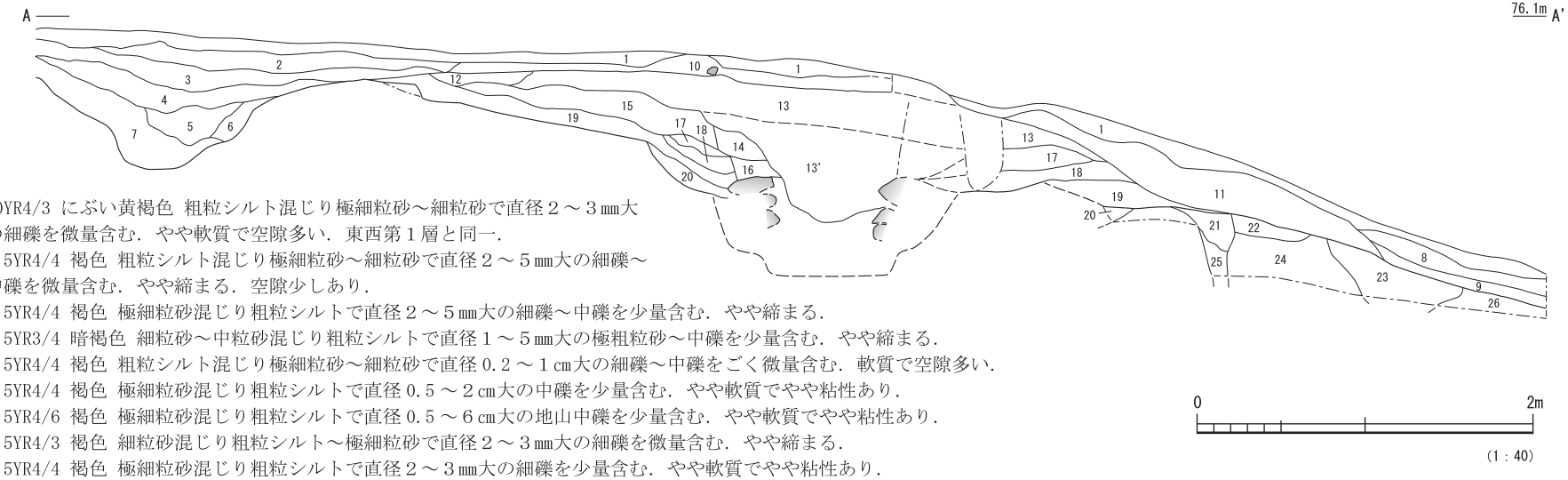
調査前の墳丘最高点は標高 75.9 ｍで、西側周溝が埋没している部分よりも 10cm 程度低くなっていた。調査前の東側墳裾は標高 74.1 ｍの等高線付近と思われ、東西約９ｍと推定できたが、南北方向には径約 6.3 ｍの高まりが認められたにすぎない。

形態・規模

調査の結果、14 号墳は周溝を巡らす円墳であることが判明した。周溝は全周せず、斜面下側の南東側にはなく、周溝端は斜面地形に合わせるように自然消滅している。墳丘規模は、周溝が存在しない部分では墳裾が明確ではないため確定しにくいが、周溝内側ラインの状況から、標高 74.0 ｍの等高線付近を墳裾と推定できる。したがって、14 号墳の墳丘規模は北東－南西方向で約 8.7 ｍ、北西－南東方向で約 8.8 ｍとすることができる。ほぼ同じ等高線に並ぶ３基のなかで最も小規模である。

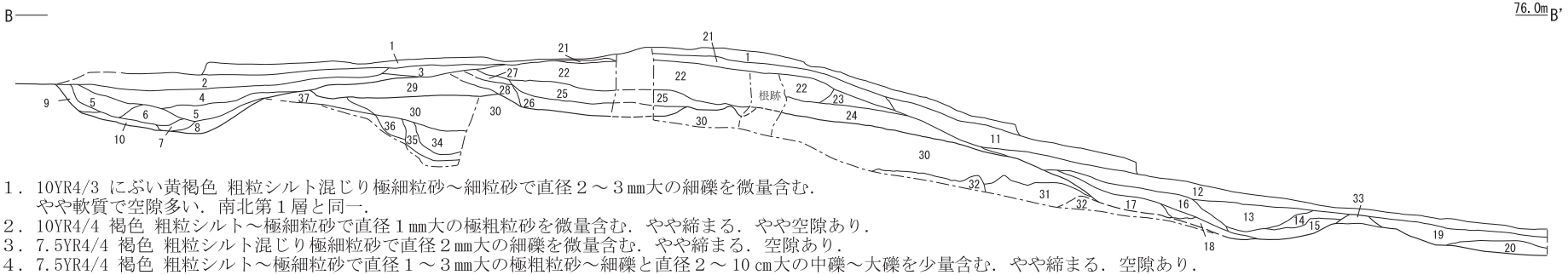
周溝幅は最も広いところで約２ｍであるが、ほぼ 1.8 ｍ～ 1.5 ｍ程度となっており、検出面からの深さは最も深いところで約 60cm、周溝底は最も深いところでの幅は 35cm を測り、南部では徐々に浅くな

第 89 図　１区 14 号墳墳丘（調査前・後）



１．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．やや軟質で空隙多い．東西第１層と同一．
２．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～５㎜大の細礫～中礫を微量含む．やや締まる．空隙少しあり．
３．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～５㎜大の細礫～中礫を少量含む．やや締まる．
４．7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルトで直径１～５㎜大の極粗粒砂～中礫を少量含む．やや締まる．
５．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径 0.2 ～１㎝大の細礫～中礫をごく微量含む．軟質で空隙多い．
６．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～２㎝大の中礫を少量含む．やや軟質でやや粘性あり．
７．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～６㎝大の地山中礫を少量含む．やや軟質でやや粘性あり．
８．7.5YR4/3 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．やや締まる．
９．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量含む．やや軟質でやや粘性あり．
10．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや締まる．僅かに粘性あり．
11．10YR3/4 暗褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．直径５～７㎝大の地山中礫～大礫をごく微量含む．やや締まる．
12．7.5YR5/4.9 にぶい褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径２㎝大の中礫を少量含む．粘質．
13．5YR5/7 明赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含み直径５㎝大までの中礫を少量含む．東西第 22 層と同一．
13'．5YR5/7 明赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含み直径５㎝大までの中礫を少量含む．空隙多く軟質．
14．7.5YR5.4/4.9 にぶい褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含み直径３㎝大までの中礫を含む．粘質．第 15 層がずり落ちた部分．
15．7.5YR5.6/4.9 にぶい橙色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含み直径３㎝大までの中礫を含む．粘質．
16．5YR4.5/3 にぶい赤褐色 粗粒シルト～細粒砂．やや粘質．
17．7.5YR4/2 灰褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む．軟質で砂質に近い．第 19 層に似る．東西第 25 層と同一．
18．4.5YR4/4 にぶい赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を含む．直径２㎝大の中礫を少量含む．粘質．東西第 26 層と同一．
19．7YR3.8/2 灰褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む．粘質．動かされた旧表土のよう．
20．5.5YR4/4 にぶい赤褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を含む．細礫～直径２㎝大の中礫を含む．やや砂質．
21．5YR4/3.5 にぶい赤褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～細礫を多く含む．やや砂質．
22．7YR4/2 灰褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径５㎜大の中礫を含む．粘質．
23．5YR5/3.5 暗赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．直径５㎝大の中礫も含む．
24．5YR3.4/2 暗赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を微量含む．マンガン粒含む．
25．7YR4/3 褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～細礫を多く含み直径１㎝大までの中礫を含む．マンガン粒を多く含む．
26．7YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．下層は 9YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む層．

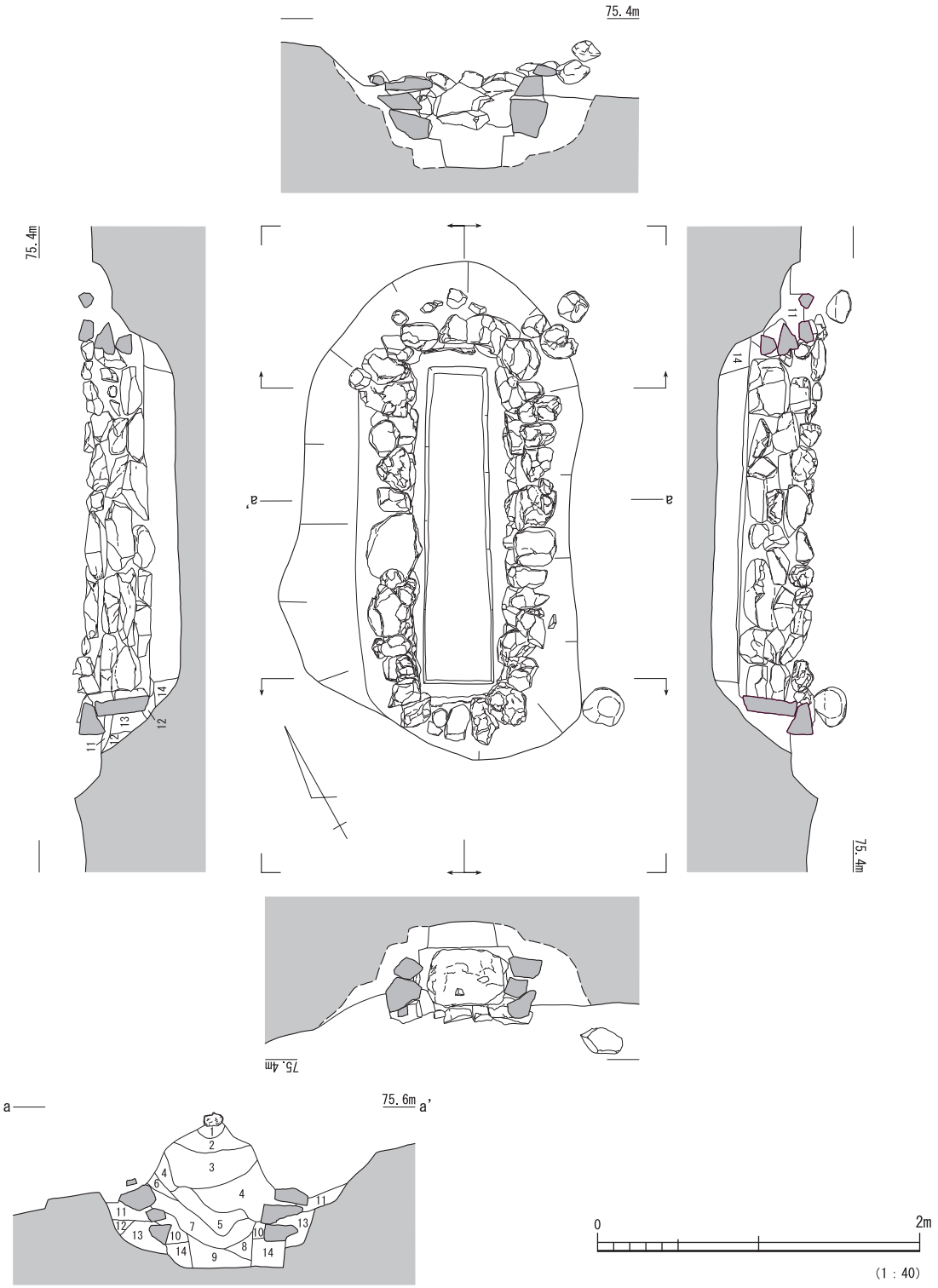
第 90 図　１区 14 号墳墳丘土層断面(1)



１．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．
　やや軟質で空隙多い．南北第１層と同一．
２．10YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂を微量含む．やや締まる．やや空隙あり．
３．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径２㎜大の細礫を微量含む．やや締まる．空隙あり．
４．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１～３㎜大の極粗粒砂～細礫と直径２～10㎝大の中礫～大礫を少量含む．やや締まる．空隙あり．
５．7.5YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２㎜大の細礫を含む．やや軟質で空隙あり．
６．7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～６㎜大の細礫～中礫を少量含む．やや軟質で空隙あり．粘性あり．
７．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径３～４㎜大の細礫をごく微量含む．軟質で空隙あり．粘性あり．
８．7.5YR4/2 灰褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む．軟質で砂質に近い．
９．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～４㎝大の中礫を少量含む．軟質で空隙あり．やや粘性あり．
10．5YR4/4 にぶい赤褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．やや締まる．空隙少ない．やや粘性あり．
11．7.5YR4/3 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．やや締まる．
12．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量含む．やや軟質でやや粘性あり．
13．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．やや締まる．空隙あり．
14．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径２～４㎜大の細礫亜角礫を微量含む．やや締まる．空隙あり．
15．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径２～４㎜大の細礫亜角礫と直径１㎝大の中礫亜角礫を少量含む．締まる．やや空隙あり．
16．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１～２㎜大の極粗粒砂と直径５㎝大の中礫をごく微量含む．やや締まる．空隙あり．
17．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～４㎜大の細礫を微量含む．やや軟質でやや空隙あり．
18．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径0.５～２㎝大の中礫亜角礫を微量含む．やや締まる．空隙少ない．
19．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎜大の極粗粒砂を少量と直径１～２㎝大の中礫をごく微量含む．やや軟質．
20．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径１～３㎝大の地山中礫を少量含む．やや軟質でやや空隙あり．粘性あり．
21．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや締まる．僅かに粘性あり．
22．5YR5/7 明赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含み直径５㎝大までの中礫を少量含む．南北第13層と同一．
23．7.5YR3.8/3 褐色 粗粒シルト～細粒砂せ中粒砂～直径１㎝大の中礫を少量含む．粘質．
24．7.5YR4/3.5 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～直径１㎝大の中礫を少量含む．やや粘質．
25．7.5YR4/2 灰褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む．軟質で砂質に近い．第19層に似る．南北第17層と同一．
26．4.5YR4/4 にぶい赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を含む．直径２㎝大の中礫を少量含む．粘質．南北第18層と同一．
27．7.5YR5.6/4.9 にぶい橙色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含み直径３㎝大までの中礫を含む．粘質．
28．4.5YR4/4 にぶい赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を含む．直径２㎝大の中礫を少量含む．粘質．
29．7.5YR4/3.5 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～直径１㎝大の中礫を少量含む．やや粘質．
30．7YR3.8/2 灰褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む．粘質．旧表土か．
31．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中礫を少量含む．やや粘質．
32．5YR4/4.9 にぶい赤褐色 極細粒砂で粗粒シルトと細粒砂を含み中粒砂～細礫を微量含む．
33．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫亜角礫をごく微量含む．やや軟質で粘性あり．空隙少ない．
34．8YR5/4 にぶい褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径１㎝大中礫を10％程度（やや多く）含む．マンガン粒含む．
35．5YR4/3.5 にぶい赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂で粗粒砂を含む．直径1.５㎝大までの中礫を少量（５％程度）含む．
36．7.5YR4/5 褐色 極細粒砂～細粒砂で粗粒シルトを少量含む．中粒砂～細礫を含み直径１㎝大までの中礫を微量含む．
37．7YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂で粗粒シルトを少量含む．中粒砂～直径２㎝大までの中礫を非常に多く（25％）含む．

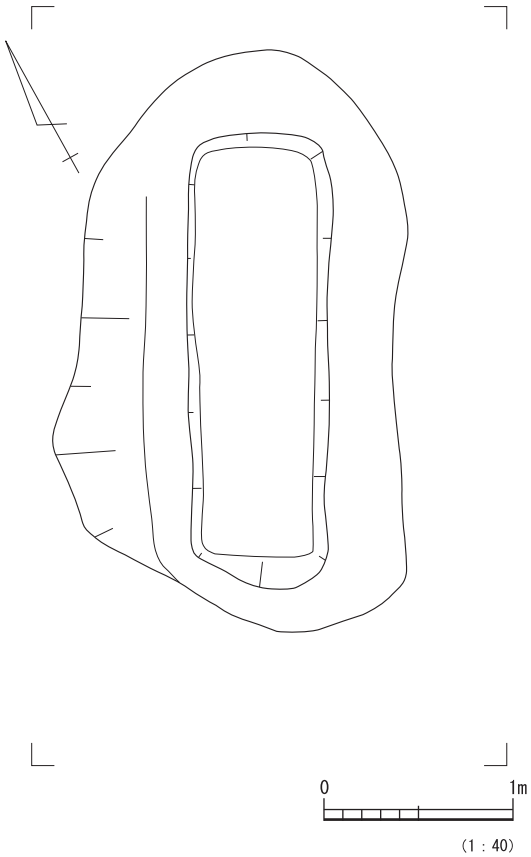
（1：60）

第 91 図　１区 14 号墳墳丘土層断面(2)



１．5YR4/4.4 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．落ち込み上層埋土．
２．5YR4/5.8 赤褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径１㎝大の中礫を多く含む．
３．5YR4.6/5.8 明赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径１㎝大の中礫を非常に多く（15％程度）含む．
４．7YR4/6 褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～直径１㎝大の中礫を少量含む．赤褐色土も細長いブロック状に含む．
５．5YR3.4/6 暗赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中礫を少量含む．暗黄褐色土もブロック状に含む．
６．5YR4/3.5 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径１㎝大の中礫を少量含む．
７．5YR4/4.4 にぶい赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中礫を含む．細長いブロック状に赤褐色土を含む．
８．7.5YR4/3.5 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径５㎜大の中礫を微量含む．
９．7.5YR3.6/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～直径５㎜大の中礫を微量含む．
10．7.5YR4/2 灰褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂を多く含み粗粒砂～細礫を少量含む．
11．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．粘質．
12．2.5Y4/1 黄灰色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．粘質．粘土のような灰色呈す．
13．7.5YR3.4/3 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を多く含む．やや粘質．
14．7.5YR3/3 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を含む．直径１～３㎝大の中礫を少量含む．粘質で締まる．

第 92 図　14 号墳埋葬施設



第 93 図　14 号墳埋葬施設墓壙

るとともに底幅も広がって、南東端では約１ｍとなっている。

なお、前述のように、周溝は 12 号墳と重複しており、12 号墳の周溝が 14 号墳よりも後に掘削されていることが判明している。また、後述するが、16 号墳の周溝とも重複しており、14 号墳の周溝が後に掘削されたと判断できた。

埋葬施設

調査前の墳丘が低平で、かなり変形を受けていることから、墳丘上部はすでに削平・流出し、内部施設は遺存していないと思われた。しかし、残存墳頂から約 70cm 下がったかなり深い位置で竪穴式石室を検出した。平面的には墳丘のほぼ中心にあたる。

石室の天井石は失われていたが、土層断面観察では、Ａ－Ａ’の第 13 層やＢ－Ｂ’の第 22 層が石室上部に認められ、攪乱層とも解釈できるため、後世に抜き取られたと判断したいが、石室上部で検出した土器が第 13 層に含まれることになるため、判断を下せない。

竪穴式石室は床面での長さ 2.1 ｍで、南南西－北北東方向に長軸をとり、厳密にはＳ 29°Ｗ方向である。床面での石室幅は北側の端付近で 50cm、南側端付近では 54cm で、南側が北側よりも僅かに４cm 幅広い。長側壁はやや扁平な自然塊石を３段に積み上げて、床面からの高さは最大で 48cm となっており、基底石はやや大ぶりの石材を使用している。短側壁は南側では幅約 50cm で高さ 35cm 程度、厚さ９cm 程度の平らな礫岩を１枚立てて、その上に塊石を乗せて、高さ約 40cm の壁を構築している。北短側面は、長側とほぼ同じ大きさの塊石で３段積みとしている。なお、北短側壁体下端は長側壁下端よりも 10cm 程度上にある。石室床面は水平となっている。また、石室の北東と南東の隅に近い外側で、石室上端よりも少し高い位置で球形に近い礫がそれぞれ１点検出された。位置と高さからは標石のようにもみえるが、墳丘中央に埋葬施設を配置した単一埋葬墳であることからやや疑問が残るものの、不明である。

石室床面には木棺を収めるために、18cm 程度深くなった部分があり、その形状から棺は箱形木棺であったことがわかる。棺の長さは約 1.9 ｍ、南側での小口幅は約 40cm、北側では約 30cm で、南小口が北小口よりも 10cm 程度幅広くなっていることから、埋葬頭位が南側であったと判断でき、石室南短側幅や石室南短側石が北側のものより大きいことからも首肯できる。なお、棺底はほぼ平坦であるが、頭側が足側よりも５cm 低くなっていた。

墓壙は平面小判形を呈し、長径約 3.1 ｍ、短径約 1.7 ｍで、西側で最大 72cm の深さがあった。墓壙壁は下部で傾斜が変わって二段墓壙状を呈している。下段の深さは 15cm 程度で、その上端は石室壁体下端よりもやや深い位置である。墓壙底面は棺底面より一回り大きな平坦面で、平面は長方形に近く、長さ約 2.2 ｍ、幅約 65cm である。

石室･墓壙の埋土横断面を観察すると、石室構築は棺を据えた後に行われたと想定される。すなわち、墓壙底に木棺身を据え、その周囲を高さ 15 ～ 17cm 程度埋めた後、その土の上に石室基底石を乗せて、石室裏込めも行いながら石材を積み上げていったと推定できる。

遺物出土状況

石室内および棺内からは遺物は検出されなかったが、石室壁上端よりも約 40cm 上で土師器の壺が正立状態で出土した。この壺は底部を欠失するが、口縁部～体部は完形に近い。平面的な位置は石室中央部分にあたる。

出土位置と石室内に落ち込んだ土砂分も考慮すると、棺上や石室蓋よりもさらに上部の、墳丘上に置かれていたものと想定でき、石室蓋が木製の場合にその腐朽により下方に落ち込んだことも考えられるが、壺底部付近が存在していないことや正立状態であったことはやや不自然な感がある。例えば、石室蓋石抜き取り後に置かれたことも想定しておく必要があるようにも思われる。

北側周溝の底から 10 ～ 15cm 上で土師器３点が出土した。器種は高坏と鉢で、高坏は坏部と脚部に分かれて鉢とともに 50 ～ 70cm 程度の間隔をあけて一列に並んだ状態であった。南西端の鉢、中央の高坏脚部、北東端の高坏坏部の順にａ～ｃの番号を付して取り上げている。

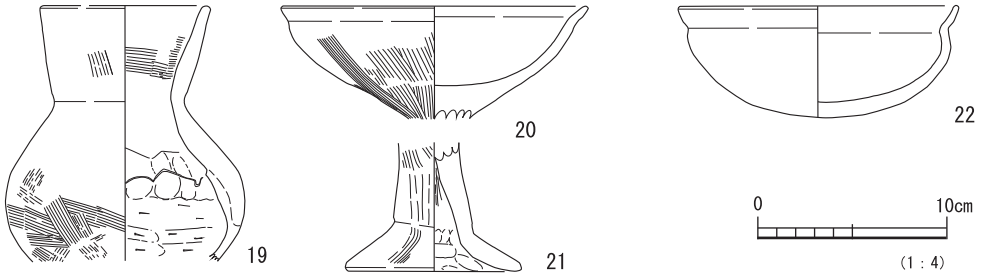
これらの土器の出土位置は周溝底中央より北西側に寄った位置であったが、周溝の墳丘側肩のラインと同じカーブを描くように一列になっていたことから、14 号墳の墳丘から転落したものと思われる。前述の壺とセットで墳頂部に置かれていたものかもしれない。

出土遺物（第 94 図、巻頭図版 12、写真図版 63）

土師器壺　(19) は石室上部から出土した土師器直口壺で、厚手のつくりである。丸みのある体部から上方にのびる口縁部で、端部は丸くおさめる。口径は 8.6 ㎝、口縁部の高さは 5.1 ㎝で、外面は縦、内面には横方向のハケを施し、外面にはヨコナデを加える。底部を欠失するが、体部最大径 12.6 ㎝で、最大径は下方にある。体部上半の器壁が非常に厚く、最も厚い所で 1.5 ㎝を測る。外面は不定方向のハケ調整で、上半部はヨコナデを加える。内面には粘土紐接合痕とユビオサエ痕が多く残り、下半部には横方向のヘラケズリを施している。残存高は 13.6 ㎝である。

類似例がなく、時期判断が難しいが、器形変化のなかで捉えると古墳時代中期末～後期前半になると思われ、須恵器型式編年ではＴＫ 23 型式期～ＭＴ 15 型式期の５世紀後葉～６世紀前葉のうちにおさまると思われる。

土師器高坏　(20) と (21) は土師器高坏である。接合はしなかったが同一個体の可能性が高い。(20) の坏部は口縁端部を外上方に曲折させ、端部は丸くおさめている。口径は 16.0 ㎝で、坏部の高さは約６㎝である。外面には縦方向のハケを施し、内面はヘラミガキの可能性がある。周溝の底付近から出土



第 94 図　14 号墳墳丘・周溝内出土土師器

し、土器ｃ（北東端）として取り上げたものである。

（21）は脚部で、中空に近い脚柱部から曲折して下外方に開く裾部をもつ。端部は丸くおさめている。外面は縦方向のヘラミガキ、裾部内面はユビオサエが著しく、脚柱部内面にはシボリ目が認められる。脚端径は 8.8 ㎝で、残存高は 7.9 ㎝である。北側周溝内で検出した土師器のうち、中央の土器ｂで取り上げたものである。（20）と接合した場合、12.5 ㎝程度の器高となる。

坏部が比較的浅く、口縁端部を外反させ、脚部が外下方に屈折してのびるものはＴＫ 23 型式期～ＭＴ 15 型式期にみられるものである。５世紀の後葉～６世紀前葉の時期が与えられよう。

土師器鉢　（22）は土師器の鉢で、丸みのある体部から外反して外上方に短くのびる口縁部となる。口縁部はやや内傾し、端部は丸い。やや薄手のつくりで、口縁部のひずみが著しい。体部下半には静止ヘラケズリを施しているが、単位・方向は不明確である。口径 14.6 ㎝、器高 6.0 ㎝を測る。焼成は良好である。北側周溝の底より約 15 ㎝上で出土した。西端出土のもので、土器ａとして取り上げた。

所属年代は、類例に乏しく限定しにくいが、須恵器のＴＫ 47 型式期前後の可能性が高く、５世紀末～６世紀初頭を中心とした時期と判断している。

６．15 号墳（第 95 ～ 101・103・104 図、巻頭図版 11、写真図版 54 ～ 57）

位置と検出状況

１区の北西隅に位置し、ほぼ同じ等高線上に並ぶ 11 号墳・13 号墳の北端に存在する。調査前には墳丘の盛り上がりが非常に少なく、谷部に面した台地端に位置していたため、一見して古墳とは判断できなかったが、樹木伐採終了後に観察すると、埋葬施設の石組の一部が露出していたため、古墳と判断できた。

15 号墳が存在する部分は、道路の本線部分から外れていたため、確認調査は行われなかったが、後に工事用道路が敷設されることになり、本発掘調査時点で古墳と確認できたため調査範囲に含めた。

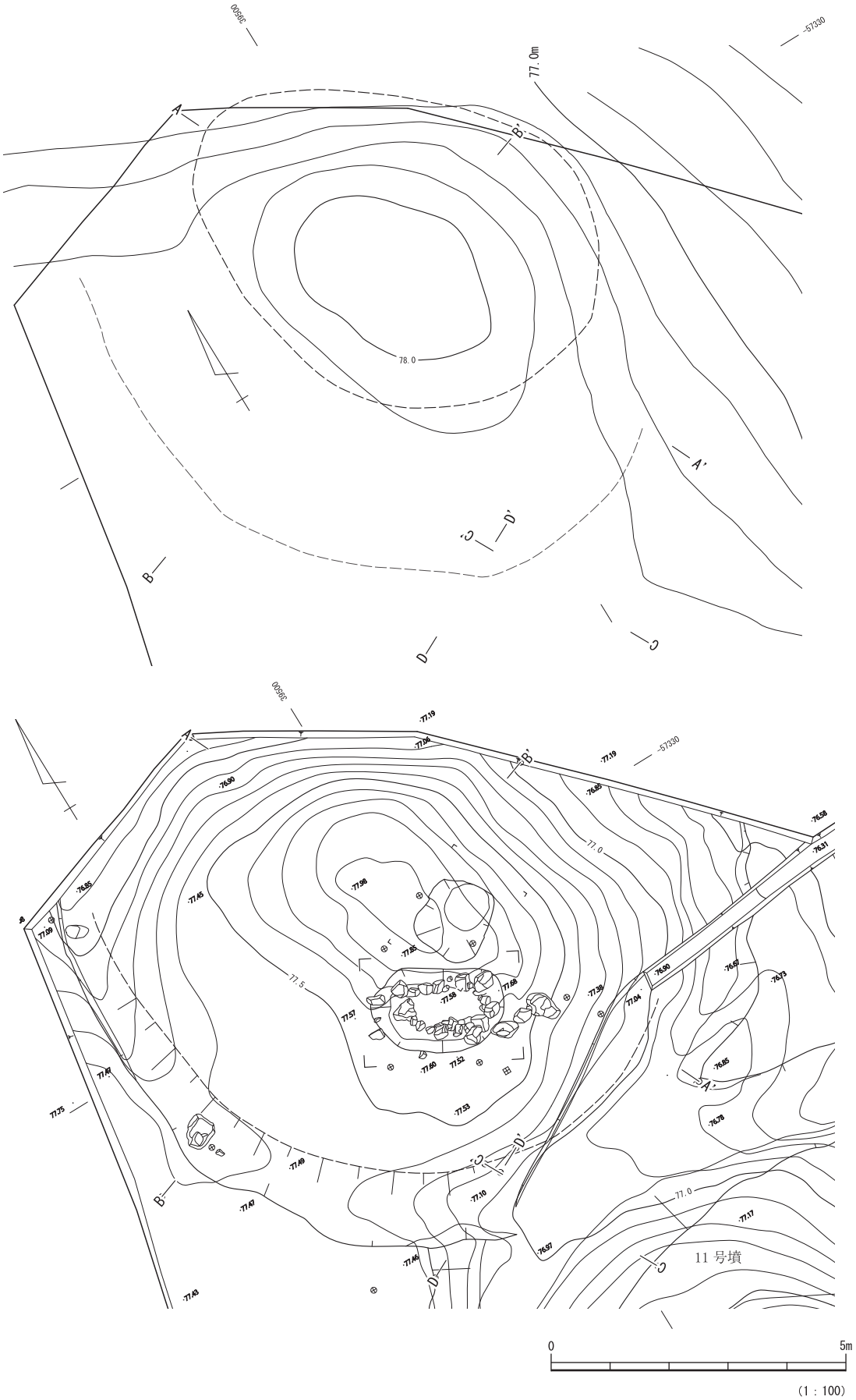
調査前の墳丘最高点は標高 78.1 ｍで、北東側は谷部と接していたため、急傾斜となっていた。墳丘の南西側は水平に近い平坦面で、その標高は 77.6 ｍであった。調査前墳丘は、斜面上側からの盛り上がりはわずかに約 50㎝で、北西－南東方向に長い卵形を呈しており、長軸約７ｍ、短軸約５ｍの残存墳丘を想定していた。ところが、調査の結果、墳丘の西半分が削平されていたことが判明した。

墳頂部の最高所から北西側に 1.5 ｍ程度の表土中および表土直下に角礫の集積が認められた。礫は 20 点ほどで、一辺 20 ㎝までのもので、畑として利用されていた際に集積したものであろう。大半は 15 号墳の埋葬施設の壁体であった可能性が高い。

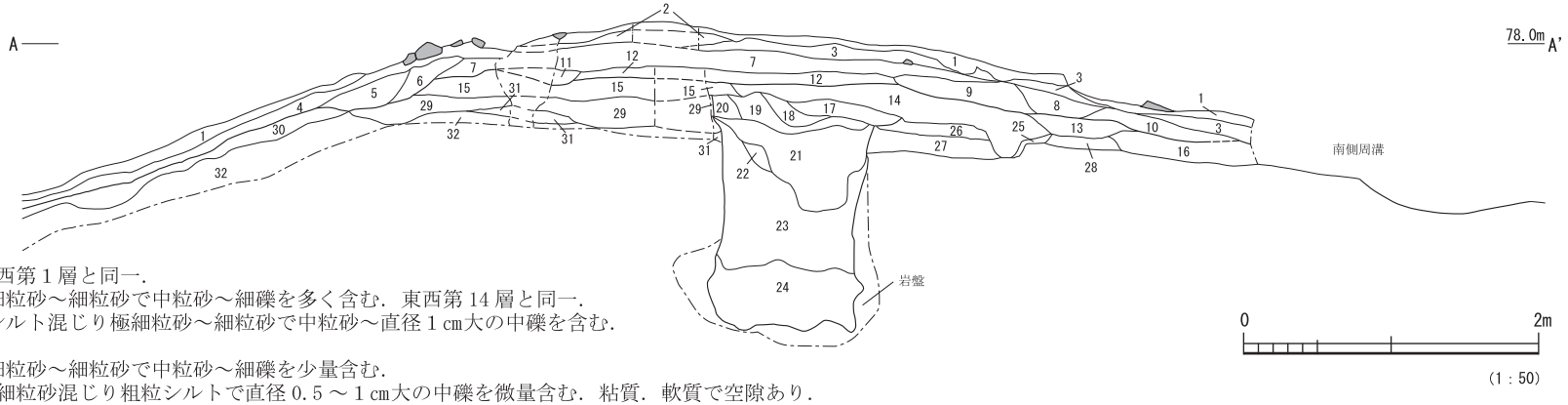
形態・規模

調査の結果、15 号墳も周溝を巡らす円墳であることが判明した。周溝は墳丘の南半分を巡り、谷部側は、傾斜変換線付近で自然消滅している。墳丘規模は、周溝が存在しない部分では墳裾が明確ではないため確定しにくいが、周溝内側ラインの状況から、北西－南東方向の長径が約 10 ｍ、短径は 7.5 ｍ以上である。したがって、15 号墳の墳丘規模は、ほぼ同じ等高線に並ぶ３基のなかで、長径は 13 号墳とほぼ同じで規模である。

周溝幅は最も広いところで約 1.5 ｍであるが、1.1 ｍ前後の部分が多い。検出面からの深さは最も深いところでも約 30㎝と浅く、墳丘南西側が畑地として利用されたため、削平を受けたものと思われる。検出した周溝が浅かったことから、周溝底の幅は明確にし得なかった。なお、15 号墳と 11 号墳の周溝重複部分の周溝断面Ｃ－Ｃ’の土層堆積状況を検討した結果、15 号墳の周溝が 11 号墳よりも後に掘削

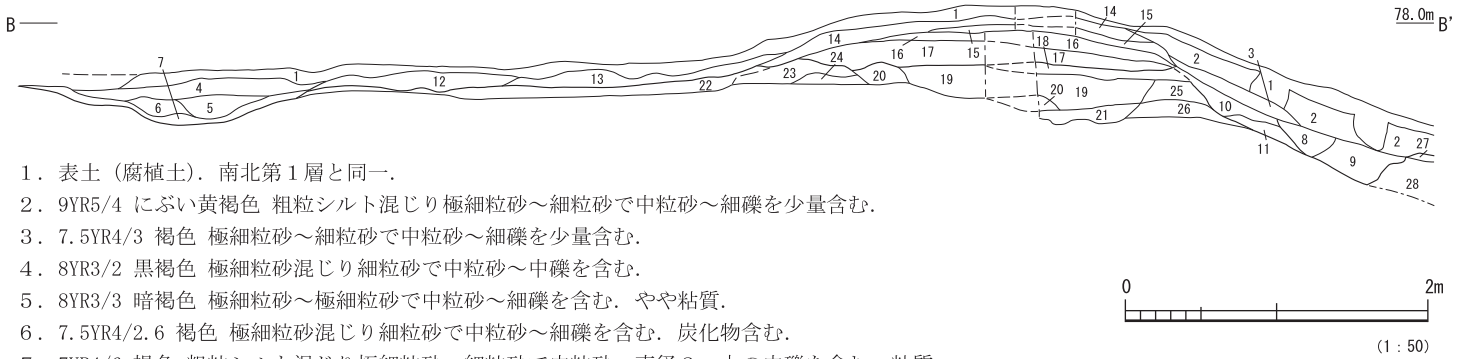


第 95 図　１区 15 号墳墳丘（調査前・後）



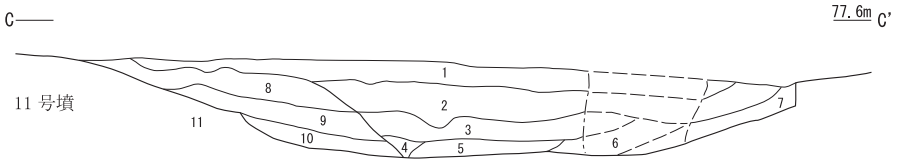
１．表土（腐植土）．東西第１層と同一．
２．9YR4/2 灰褐色 極細粒砂～細礫で中粒砂～細礫を多く含む．東西第 14 層と同一．
３．7YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径１㎝大の中礫を含む．
　東西第 15 層と同一．
４．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．
５．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎝大の中礫を微量含む．粘質．軟質で空隙あり．
６．10YR4/4 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト．粘質でやや締まる．
７．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を微量含む．粘質でやや軟質．東西第 16 層と同一．
８．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～１㎜大の粗粒砂を微量含む．砂質でやや軟質．
９．10YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや粘質で締まる．
10．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径３～４㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質で締まる．
11．10YR4/6 褐色 中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～２㎝大の中礫を微量含む．やや粘質で締まる．
12．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．やや粘質でやや軟質．炭化物含む．東西第 17 層と同一．
13．7.5YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂．やや砂質でやや軟質．植物根による攪乱激しい．
14．10YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫を微量含む．軟質でやや締まる．
15．10YR4/4 褐色 粗粒シルト～細粒砂．僅かに粘質でやや締まる．旧表土．
16．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～２㎝大の中礫を含む．やや粘質でやや締まる．
17．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～２㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
18．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルト．やや粘質で締まる．
19．10YR4/4 褐色 粗粒シルト．粘質で締まる．
20．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．粘質でやや軟質．
21．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．粘質でやや軟質．空隙あり．
22．10YR4/6 褐色 粗粒シルト．粘質で締まる．
23．10YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．粘質で締まる．
24．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルトブロックが密に堆積．粘質で締まる．ブロックはグライ化で変色．
25．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂．やや砂質でやや締まる．
26．10YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２㎝大の中礫をごく微量含む．粘質でやや締まる．
27．10YR5/3 にぶい黄褐色 粗粒シルトブロックと 10YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトブロックが混じる．直径２㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質で締まる．
28．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト．粘質でやや締まる．
29．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～２㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや軟質．東西第 19 層と同一．
30．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径２～４㎝大の中礫を微量含む．粘質で軟質．
31．10YR5/6 黄褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎜大の粗粒砂をごく微量含む．やや粘質で締まる．東西第 21 層と同一．
32．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～６㎝大の中礫を微量含む．粘質でやや軟質．

第 96 図　１区 15 号墳墳丘土層断面(1)

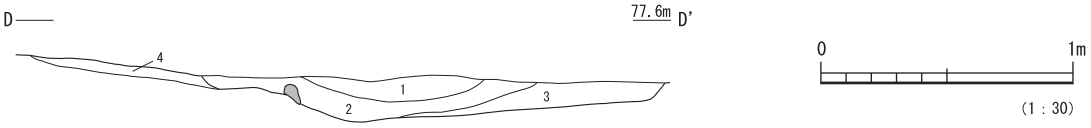


１．表土（腐植土）．南北第１層と同一．
２．9YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．
３．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．
４．8YR3/2 黒褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～中礫を含む．
５．8YR3/3 暗褐色 極細粒砂～極細粒砂で中粒砂～細礫を含む．やや粘質．
６．7.5YR4/2.6 褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～細礫を含む．炭化物含む．
７．7YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２cm大の中礫を含む．粘質．
８．10YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３mm大の細礫を微量含む．やや粘質で締まる．
９．7.5Y4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～３cm大の中礫を少量含む．粘質で締まる．
10．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３mm大の細礫を微量含む．やや砂質でやや軟質．
11．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．僅かに粘質で軟質．
12．9YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂流～細礫を含む．
13．9YR4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を含む．
14．9YR4/2 灰褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を多く含む．南北第２層と同一．
15．7YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径１cm大の中礫を含む．
16．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３mm大の細礫を微量含む．粘質でやや軟質．南北第７層と同一．
17．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．やや粘質でやや軟質．炭化物含む．南北第 12 層と同一．
18．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～中粒砂．砂質でやや締まる．
19．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～２cm大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや軟質．
20．10YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１mm大の粗粒砂を微量含む．やや粘質で締まる．
21．10YR5/6 黄褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１mm大の粗粒砂をごく微量含む．やや粘質で締まる．
22．7.5YR4.4/5 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径２cm大の中礫を含む．粘質．
23．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径２～３mm大の細礫をごく微量含む．粘質でやや軟質．
24．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．粘質でやや締まる．
25．10YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～４mm大の細礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
26．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３mm大の細礫を微量含み直径１～２cm大の中礫を微量含む．粘質でやや締まる．
27．7YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径１cm大の中礫を含む．やや粘質．
28．7.5YR5/6 明褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１～ 10 cm大の中礫～大礫を多量に含む．砂質で締まる．

第 97 図　１区 15 号墳墳丘土層断面(2)



１．7.5YR4.5/1.6 灰褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む.
２．7.5YR4/5 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．やや粘質.
３．7.5YR2.5/2 黒褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．やや砂質．有機物腐植土.
４．7.5YR3.2/3 暗褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂．やや粘質でやや軟質.
５．7.5YR3.8/5 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～極粗粒砂を少量含む．地山土壌化流入土.
６．6YR4/6 赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を含み中粒砂～直径１㎝大の中礫を少量含む．地山崩落流入土.
７．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～中粒砂を含む．粘質．マンガン粒含む．粘質．地山土壌化層.
８．7.5YR4/3.5 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径５㎜大の中礫を含む．11 号墳周溝埋土.
９．7.5YR3.4/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．11 号墳周溝埋土.
10．7YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を含む．中粒砂～細礫を微量含む．やや粘質．11 号墳周溝埋土.
11．6YR5/8 明赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径 10 ㎝大の大礫を 15％程度含む．岩盤風地山.



１．7.5YR3.6/3.2 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を含む．中粒砂～細礫を少量含む．粘質.
２．7.5YR4/2.8 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．やや粘質．地山ブロック混じる.
３．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～中粒砂を含む．粘質．マンガン粒含む．粘質．地山土壌化層.
４．4YR5/8 明赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径 10 ㎝大の大礫を 15％程度含む．岩盤風地山.

第 98 図　１区 15 号墳周溝埋土土層断面

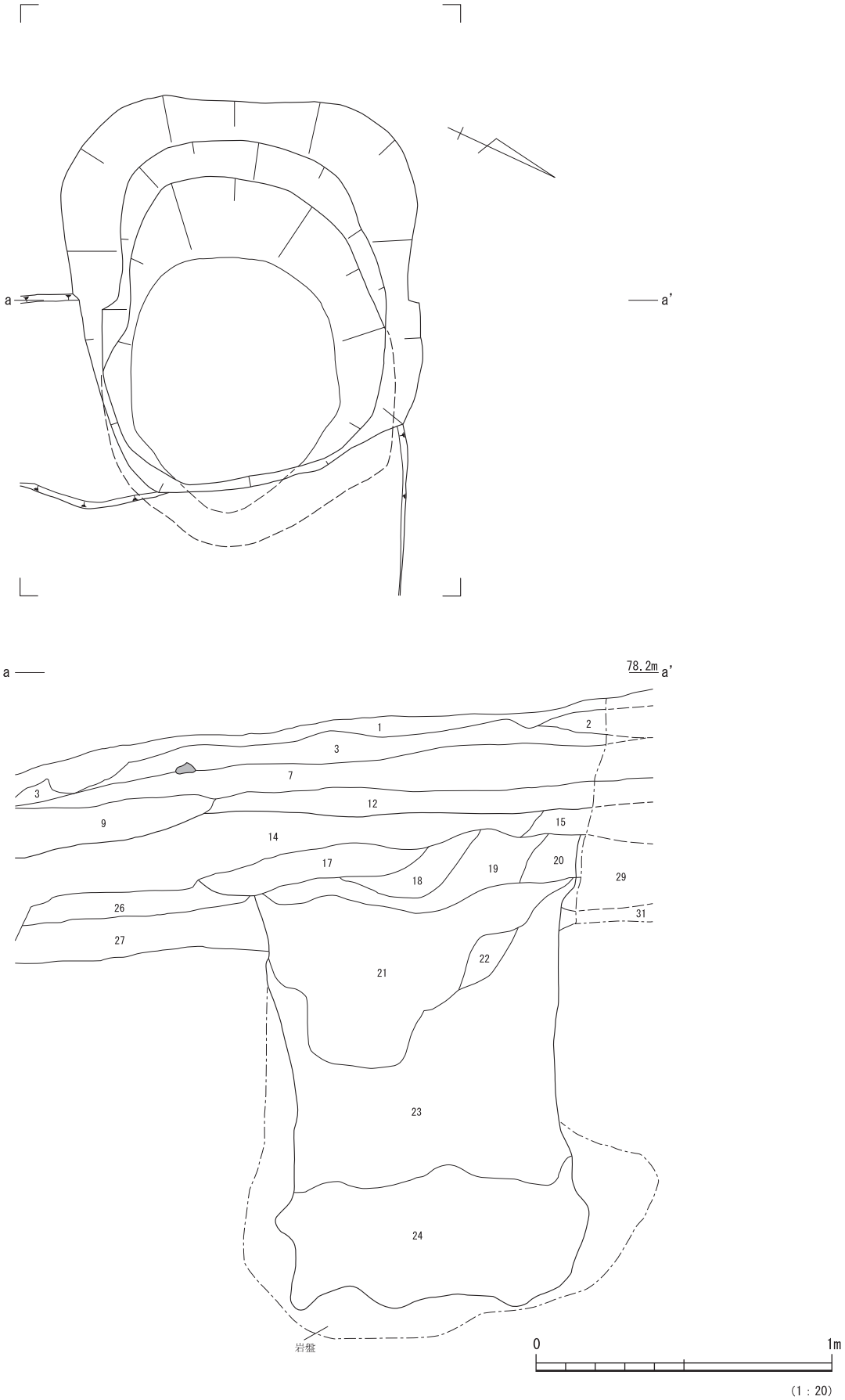
されていることが判明した。

なお、墳頂部付近、埋葬施設の北東側で陥し穴を１基検出した。検出面は古墳構築時の旧表土下で、陥し穴上端は方形に近く、1.3 ｍ× 1.2 ｍで、中央部は長径 1.2 ｍ、短径 0.9 ｍ程度の楕円形となり、北東側に少し偏っている。底はやや丸みをもつが､底には杭穴等は検出されなかった。深さは 1.6 ｍで、縄文時代のものと推定している。埋土から遺物は出土しなかった。

埋葬施設

調査前の墳丘が低平であったが､調査前には埋葬施設の一部とみられる礫の露出がみられたことから、埋葬施設は遺存していた。ただし、墳丘の中心からかなり南西に寄った位置にあり、調査区の端を墳丘の北東端とした場合でも、埋葬施設の中心は墳丘の中心から南西に約１ｍ、南東に約１ｍずれた位置である。埋葬施設内には、蓋石と思われる横架された長さ 80 ㎝程度、幅 50 ㎝程度で厚さ 20 ㎝程度の板状の礫と、主軸と平行方向の長さ約 90 ㎝で、幅約 60 ㎝、厚さ 20 ㎝程度の板状礫がともに埋葬施設内に落ち込んだ状態で検出された。蓋石下面から底までは 10 ㎝程度の隙間しか残っていなかった。

石組の埋葬施設は、南東側壁の遺存状況が悪かったものの、北東隅部分の石組が原位置を保っている可能性が高いと判断した。石組の埋葬施設は幅約 45 ㎝、長さ 1.1 ｍ程の規模であることから、石棺と判断し、長側の壁が塊石を使用したものであることから、塊石積の石室系石棺とすることができる。北西側の小口石は幅・高さともに約 40 ㎝の礫岩で、外側に大きく傾いている。正立すれば、約 35 ㎝の棺



第 99 図　１区 15 号墳下層陥し穴

１．表土（腐植土）.
２．9YR4/2 灰褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を多く含む.
３．7YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径１㎝大の中礫を含む.
７．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を微量含む．粘質でやや軟質.
９．10YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや粘質で締まる.
12．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．やや粘質でやや軟質．炭化物含む.
14．10YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫を微量含む．軟質でやや締まる.
15．10YR4/4 褐色 粗粒シルト～細粒砂．僅かに粘質でやや締まる．旧表土.
17．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～２㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる.
18．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルト．やや粘質で締まる.
19．10YR4/4 褐色 粗粒シルト．粘質で締まる.
20．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．粘質でやや軟質.
21．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．粘質でやや軟質．空隙あり.
22．10YR4/6 褐色 粗粒シルト．粘質で締まる.
23．10YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．粘質で締まる.
24．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルトブロックが密に堆積．粘質で締まる．ブロックはグライ化で変色.
26．10YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２㎝大の中礫をごく微量含む．粘質でやや締まる.
27．10YR5/3 にぶい黄褐色 粗粒シルトブロックと 10YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトブロックが混じる．直径２㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質で締まる.
29．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～２㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや軟質.
31．10YR5/6 黄褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎜大の粗粒砂をごく微量含む．やや粘質で締まる.

第 100 図　１区 15 号墳下層陥し穴埋土土層名

内高を確保できるかたちとなる。南東側の小口石は 15 ㎝程度の塊石を積み上げていたようで、２段遺存していた。南東小口での棺幅は 40 ㎝弱で、北西側の幅が５㎝程度広く、大きな石材を使用していることから、埋葬頭位は北西側であったと判断できる。厳密にはＮ 62°Ｗ方向になる。

長側壁は 10 ～ 25 ㎝大の礫を使用し、部分的に２段遺存している部分があるが、棺底からの高さは約 30 ㎝である。構築時はもう少し高さがあったものと思われるが、北西小口石の高さからすると、棺内高はあまり高くなかった可能性が高い。

墓壙は小判形に近く、長さ約 2.2 ｍ、幅約 1.4 ｍで、深さは約 40 ㎝遺存していた。墓壙底はほぼ平坦で、ほぼ水平である。

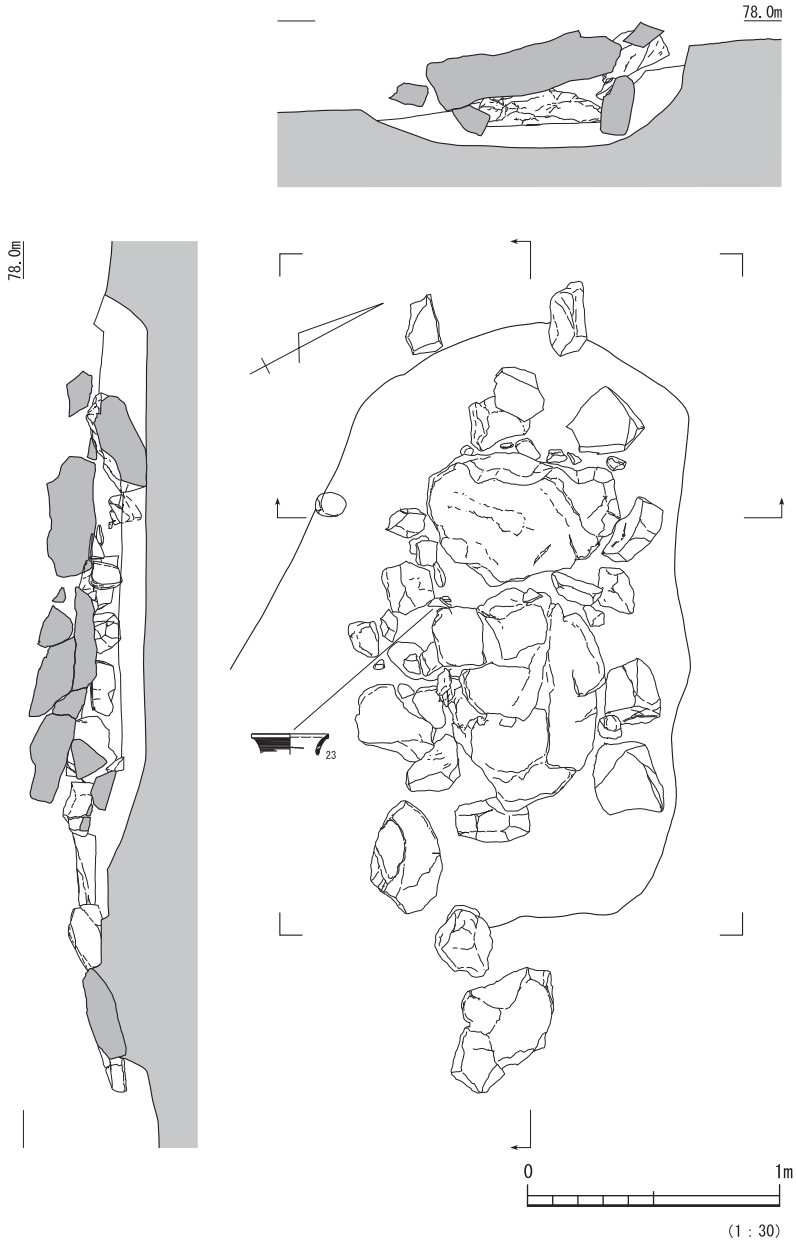
埋葬施設の位置が墳丘中心部からやや偏った位置で、棺の長さもやや短いものであったが、埋葬施設は他には検出されなかった。

遺物出土状況

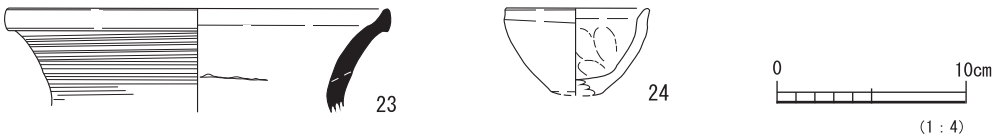
棺底から石枕や副葬品は発見されなかったが、棺内に落ち込んだ蓋石の南西部隙間で表土層に近い層から須恵器甕の口縁部片が出土した。また、Ｂ－Ｂ’断面のＢ点から 1.2 ｍの周溝内埋土より土師器の小型鉢が天地逆の状態で出土した。埋土の第６層中の出土である。

出土遺物（第 102 図、巻頭図版 12、写真図版 63・65）

須恵器甕　(23) は口径 20.0 ㎝の口縁部片で、端部は上下に少し拡張している。外面にはカキ目を施す。11 号墳出土須恵器甕と調整や色調がよく似ていることから、11 号墳出土須恵器と接合はしないが、同一個体の可能性が高い。同一個体とすれば、15 号墳から出土した須恵器はこの１点に限られることと、落ち込んだ蓋石の間隙から出土している点から、もとは 11 号墳に伴うものであった可能性が高い。そうすると、ＭＴ 15 型式期～ＴＫ 10 型式期の６世紀前半となろう。

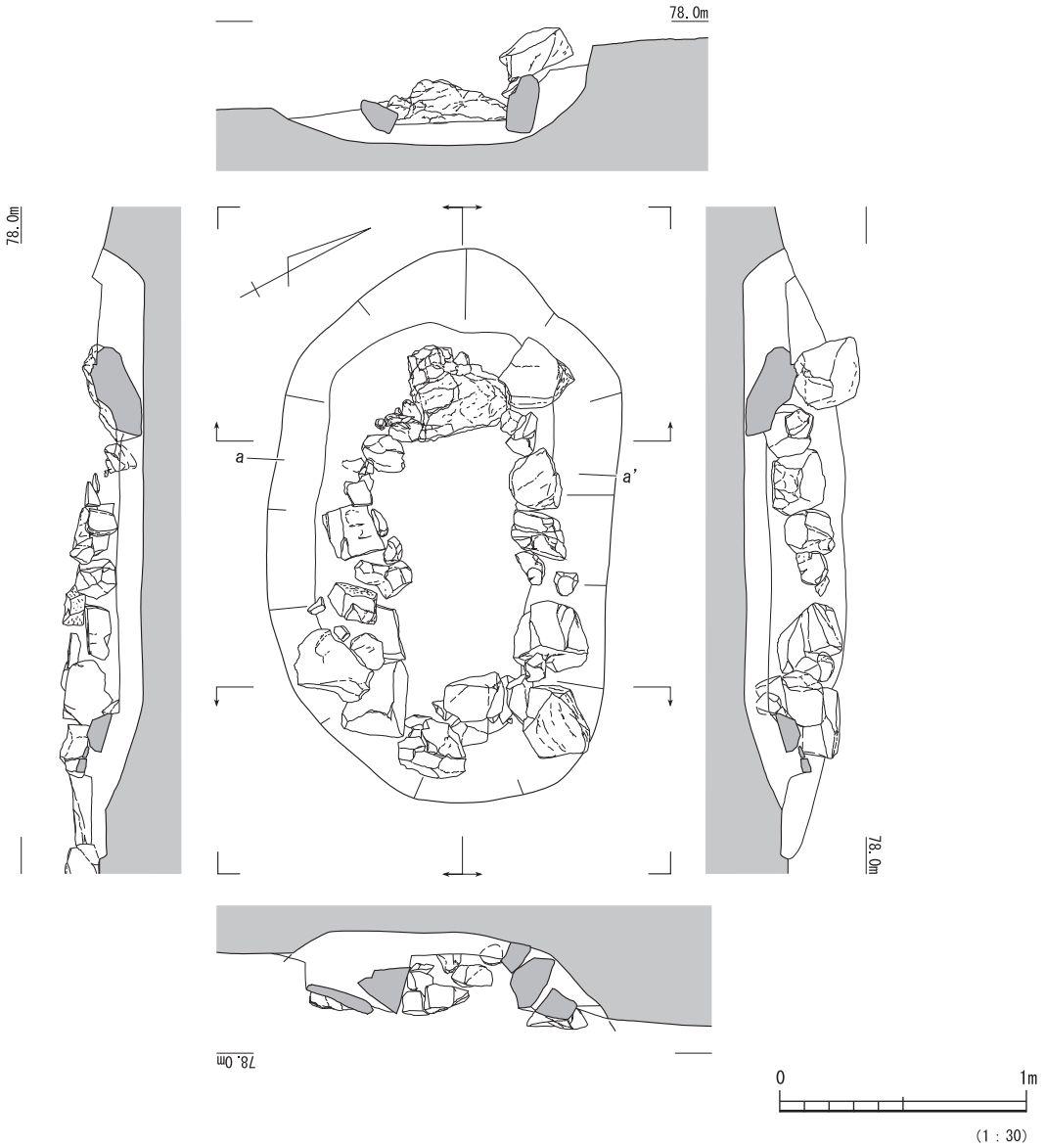


第 101 図　15 号墳埋葬施設蓋石検出状況



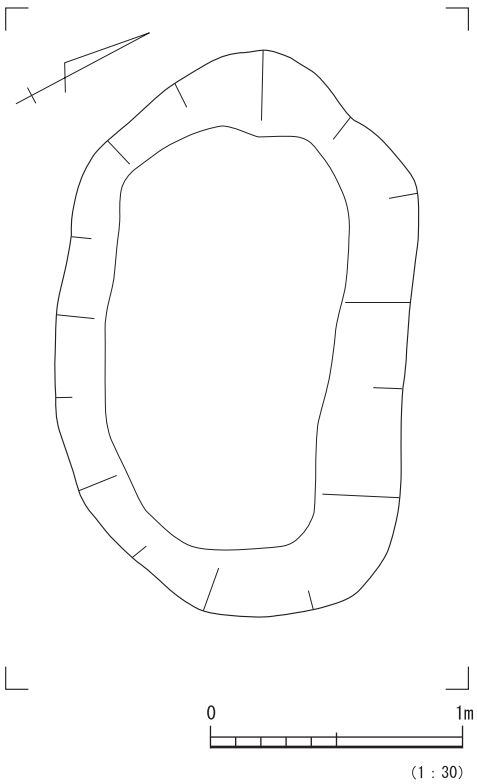
第 102 図　15 号墳出土土器

土師器鉢　(24) は西側周溝内から出土したもので、口縁端部をわずかに外反させ、平底と思われる小型鉢である。口径 7.5 ㎝、現状での高さは 4.6 ㎝である。器表が荒れているため調整痕が遺存している部分が少ないが、口縁部はヨコナデ、体部内面にはユビオサエのような痕跡が残っている。時期は不明であるが、古墳時代後期前葉と判断している。



１．10YR5/3.5 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を含む．粘質．腐植土に似る．
２．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む．粘質．底．
３．7.5YR3.7/4 褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．
４．7.5YR4/2.3 灰褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．
５．7.5YR4/3.5 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．粘質．
６．5YR4.5/4.9 にぶい赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を少量を含む．地山．

第 103 図　15 号墳埋葬施設



第 104 図　15 号墳埋葬施設墓壙

7．16 号墳（第 105 ～ 110 図、巻頭図版 11、写真図版 58・59）

位置と検出状況

１区の南端に位置し、ほぼ同じ等高線上に並ぶ 12 号墳・14 号墳の南端に存在し、14 号墳とは周溝を接している。前年度に実施された確認調査では墳頂部付近までトレンチが設定されていたが、古墳とは判断されていなかった。しかし、調査前の墳丘は低平であったが、東方向への張り出しが認められたことから、古墳の可能性が高いと判断した。そこで、古墳群の調査に入った直後に墳丘中央部トレンチを設定して掘削した。その結果、墳丘西側で周溝を検出し、前年度の確認調査では周溝を検出していなかったことが判明した。

調査前墳丘の最高所は標高 75.4 ｍで、斜面上側からの盛り上がりはほとんど見られない状態であった。

調査前の地形測量図を作成した際には直径 5.5 ｍ程度の円墳と判断し、墳丘裾西側の斜面上側に周溝を有していることが想定できたが、調査の結果、墳丘は想定よりも大きくなった。

形態・規模

調査の結果、16 号墳も周溝を巡らす円墳であることが判明した。古墳の規模が調査前の想定よりも大きくなったことから、西側周溝の南端や墳丘南端部といった一部の調査は行えなかったものの、北東側周溝の南東端の状況から、調査区南東端のコーナー部分で、トレンチの南東端にあたる部分は、ほぼ墳裾にあたると想定できる。したがって、周溝内側下端で計測した南西－北東方向の規模は約 10.2 ｍ、南東側墳裾を標高 74.0 ｍの等高線とした場合の北西－南東方向の規模も約 10.2 ｍとなり、全体の形状から円墳となる。

周溝幅は最も広い斜面山側で約 2.85 ｍであるが、その他の部分も 2.4 ｍ前後の幅であることから、均一的な周溝幅であることがわかる。検出面から最も深いところで約 80 ㎝、底の幅は 45 ㎝～ 90 ㎝程度で北東側が幅広くなっている。

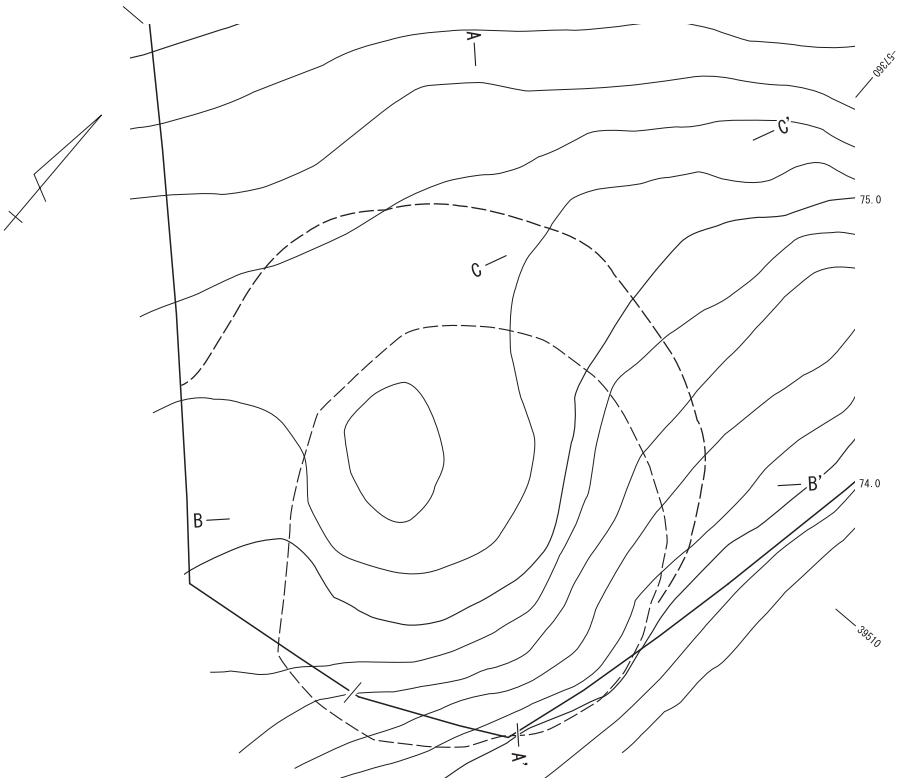
また、周溝は 14 号墳と重複しており、周溝の前後関係を確認するための畔で土層を検討した結果、13 号墳の周溝が 50 ㎝以上埋まった段階で 14 号墳の周溝が掘削されていることが判明した。

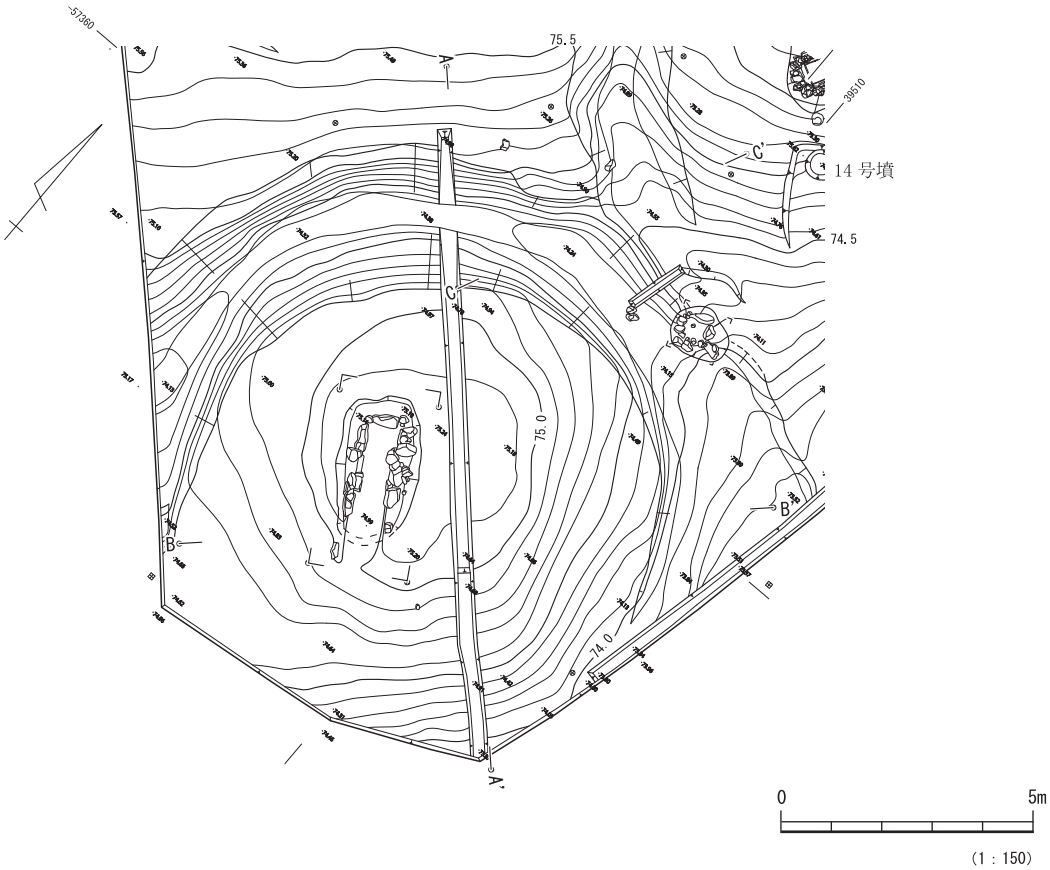
なお、14 号墳周溝との重複部分、16 号墳の周溝北側肩上で、周溝を切るかたちで周溝と重複して小石棺（小型箱式石棺）が営まれていた。周溝がある程度埋まってから構築されたものである。

墳丘盛土を除去した後、その面を精査すると、長さ約４㎝、最大幅 90 ㎝の三日月形の溝が墳丘盛土下の山側で発見された。最大深は中央部で 18 ㎝である。溝の機能は不明である。

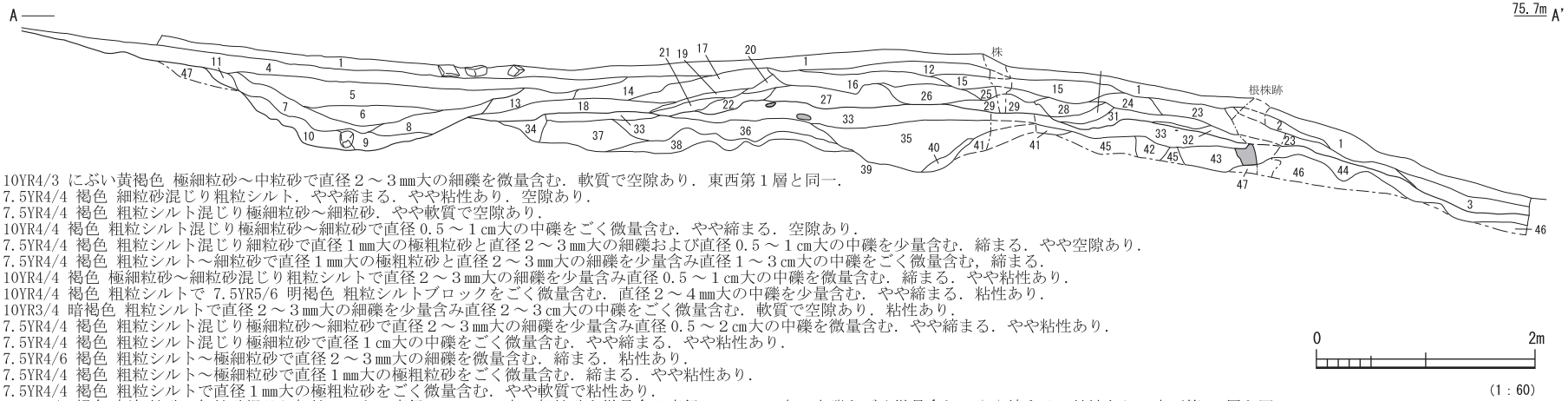
埋葬施設

調査前の墳丘が低平で、かなり削平を受けていたことが想定されたが、墳丘中心よりも約 1.1 ｍ西側にずれた位置に埋葬施設の下部と思われる石組が遺存していた。



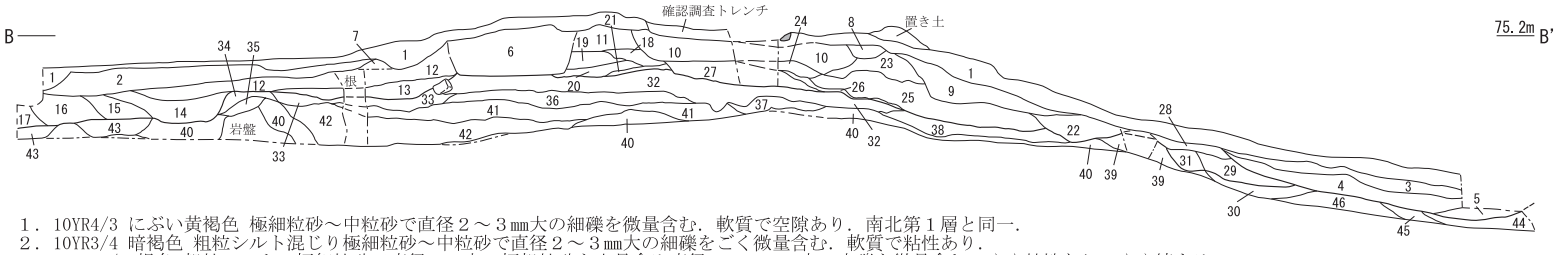


第 105 図　１区 16 号墳墳丘（調査前・後）



1．10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂～中粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．軟質で空隙あり．東西第１層と同一．
2．7.5YR4/4 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト．やや締まる．やや粘性あり．空隙あり．
3．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．やや軟質で空隙あり．
4．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや締まる．空隙あり．
5．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂と直径２～３㎜大の細礫および直径 0.5 ～１㎝大の中礫を少量含む．締まる．やや空隙あり．
6．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂と直径２～３㎜大の細礫を少量含み直径１～３㎝大の中礫をごく微量含む，締まる．
7．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量含み直径 0.5 ～１㎝大の中礫を微量含む．締まる．やや粘性あり．
8．10YR4/4 褐色 粗粒シルトで 7.5YR5/6 明褐色 粗粒シルトブロックをごく微量含む．直径２～４㎜大の中礫を少量含む．やや締まる．粘性あり．
9．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量含み直径２～３㎝大の中礫をごく微量含む．軟質で空隙あり．粘性あり．
10．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含み直径 0.5 ～２㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．やや粘性あり．
11．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径１㎝大の中礫をごく微量含む．やや締まる．やや粘性あり．
12．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．締まる．粘性あり．
13．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂をごく微量含む．締まる．やや粘性あり．
14．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径１㎜大の極粗粒砂をごく微量含む．やや軟質で粘性あり．
15．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎜大の粗粒砂を微量含み直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや締まる．粘性あり．東西第 10 層と同一．
16．5YR4/4 にぶい赤褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．やや締まる．粘性あり．
17．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎜大の極粗粒砂と直径２～３㎝大の中礫をごく微量含む．締まる．粘性あり．
18．7.5YR4/4 褐色 細粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫を微量含む．やや砂質でやや軟質．
19．10YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや軟質．
20．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．締まる．粘性あり．
21．10YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～中粒砂．砂質でやや軟質．
22．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり細粒砂～中粒砂．砂質でやや軟質．
23．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで粗粒砂を微量含み直径６㎝大の中礫を１点含む．やや軟質で粘性あり．
24．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．やや砂質で締まる．
25．10YR4/3 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂ブロックと 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルト．直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．締まる．東西第 24 層と同一．
26．7.5YR4/4 褐色 細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．締まる．粘性あり．
27．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎜大の極粗粒砂をごく微量含む．やや軟質．粘性あり．
28．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～２㎝大の中礫を微量含む．粘質でやや締まる．
29．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫と直径５㎜大の中礫をごく微量含む．締まる．やや粘性あり．東西第 27 層と同一．
30．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径５㎜大の中礫を微量含む．やや砂質でやや締まる．
31．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～中粒砂で直径 0.5 ～３㎝大の中礫を少量含む．やや砂質でやや締まる．
32．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．砂質でやや軟質．
33．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径３～６㎝大の中角礫をごく微量含む．やや砂質でやや締まる．旧表土．東西第 32 層と同一．
34．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり細粒砂で直径１～２㎝大の中礫を微量含む．砂質でやや軟質．盛土下の溝埋土．
35．7.5YR4/4 褐色 細粒砂～粗粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫を少量含む．やや砂質でやや締まる．
36．10YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり細粒砂～中粒砂で直径２～４㎝大の中礫をごく微量含む．砂質でやや締まる．
37．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１～３㎝大の中礫を微量含む．やや砂質で締まる．
38．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂．やや砂質でやや軟質．
39．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂．締まる．やや砂質．
40．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトで直径１～４㎝大の中礫をごく微量含む．粘質で締まる．
41．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや砂質でやや締まる．
42．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．やや砂質で軟質．
43．10YR３/４ 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～４㎜大の細礫を微量含む．やや砂質でやや締まる．
44．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
45．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径２～４㎜大の細礫を中量含む．やや砂質でやや締まる．
46．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径１～６㎝大の中礫と７～30㎝大の大礫・巨礫を中量含む．やや砂質で締まる．
47．10YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径 0.5㎜大の粗粒砂をごく微量含む．やや締まる．僅かに粘性あり．

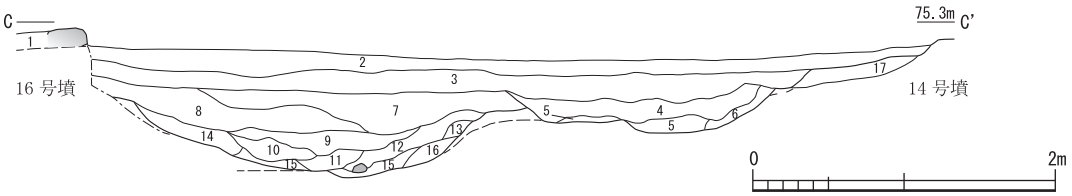
第 106 図　１区 16 号墳墳丘土層断面(1)



１．10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂～中粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．軟質で空隙あり．南北第１層と同一．
２．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～中粒砂で直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．軟質で粘性あり．
３．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂を少量含み直径 0.5 ～１㎝大の中礫を微量含む．やや粘性あり．やや締まる．
４．7.5YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で粗粒砂を少量含み直径１～４㎝大の中礫を微量含む．やや締まる．やや粘性あり．
５．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で粗粒砂を少量含む．締まる．やや粘性あり．
６．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂．やや締まる．やや粘性あり．埋葬施設埋土．
７．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．やや軟質．
８．7.5Y4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径４㎜大の中礫をごく微量含む．やや粘質で締まる．
９．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径 0.5 ～２㎝大の中礫を少量含む．やや粘質でやや締まる．
10．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで粗粒砂を微量含み直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや締まる．粘性あり．南北第 15 層と同一．
11．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり細粒砂～中粒砂で粗粒砂をごく微量含む．僅かに粘質でやや締まる．
12．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルトで粗粒砂を微量含む．粘質で締まる．
13．10YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．粘質で締まる．
14．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルトのブロックを少量含む．直径 0.5 ～２㎝大の中礫をごく微量含む．粘質でやや締まる．
15．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径６㎝大の中礫をごく微量含む．粘質でやや軟質．
16．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量含む．粘質でやや軟質．
17．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を中量含む．粘質でやや軟質．
18．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を微量含む．やや粘質でやや軟質．
19．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂で 7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂ブロックを微量含む．粗粒砂を微量含む．炭化物混じる．
20．10YR3/4 暗褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト．やや粘質でやや軟質．
21．10YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．やや粘質でやや締まる．
22．7.5YR4/4 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎝大の中礫を微量含む．僅かに粘質でやや締まる．
23．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～２㎝大の中礫を少量含む．粘質でやや軟質．
24．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．やや砂質で締まる．南北第 24 層と同一．
25．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含み直径１～３㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
26．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１㎝大の中礫をごく微量含む．粘質でやや締まる．
27．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫と直径５㎜大の中礫をごく微量含む．締まる．やや粘性あり．南北第 29 層と同一．
28．7.5YR4/4 褐色 細粒砂～粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を微量含む．やや粘質で締まる．
29．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量含み直径２～３㎝大の中礫をごく微量む．粘質で締まる．
30．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～２㎝大の中礫をごく微量含む．粘質でやや締まる．
31．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を微量含む．やや粘質でやや軟質．
32．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径３～６㎝大の中角礫をごく微量含む．やや砂質でやや締まる．旧表土．南北第 33 層と同一．
33．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で粗粒砂を微量含む．粘質でやや軟質．旧表土．
34．10YR4/4 褐色 粗粒シルト～細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量含む．やや粘質でやや締まる．
35．7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径３～５㎜大の細礫～中礫を微量含む．粘質でやや締まる．
36．10YR4/4 褐色 極細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径１～２㎜大の細礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．
37．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫をごく微量含む．やや砂質でやや締まる．
38．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり細粒砂～中粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．僅かに粘質でやや軟質．旧表土．
39．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫をごく微量含む．粘質でやや締まる．
40．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎝大の中礫を中量含む．粘質でやや締まる．
41．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～中粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量と直径 0.5 ～１㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．
42．10YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～３㎝大の中礫を中量含む．粘質でやや締まる．
43．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～１㎝大の中礫を含む．やや粘質でやや締まる．
44．10YR4/6 褐色 粗粒シルト～細粒砂で粗粒砂を微量含む．締まる．やや粘性あり．
45．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を微量含む．粘質で軟質．
46．地山風化土 10YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２㎝大の中礫をごく微量含む．粘質でやや締まる．

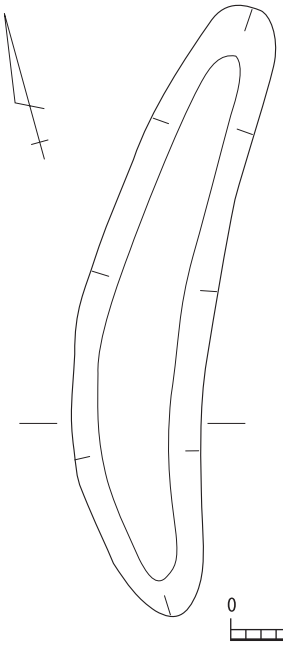
（1：60）

第 107 図　１区 16 号墳墳丘土層断面(2)

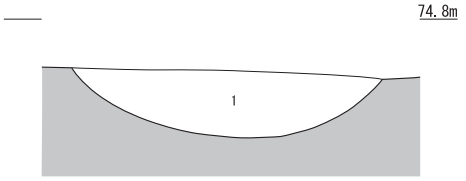


(1：50)

１．表土層（腐植土）
２．7.5YR4/3 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径１㎜大の極粗粒砂を微量含む．やや軟質．
３．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂を中量含み直径 0.5 ～３㎝大の中礫を少量含む．やや締まる．
４．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径２～３㎜大の細礫と直径２～３㎝大の中礫をを少量含む．やや粘性あり．やや締まる．14 号墳周溝埋土．
５．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫と直径２～４㎝大の中礫を少量含む．やや軟質でやや粘性あり．14 号墳周溝埋土．
６．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径１㎜大の極粗粒砂を微量と直径１㎝大の中礫をごく微量含む．やや締まる．粘性あり．14 号墳周溝埋土．
７．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を少量と直径１～２㎝大の中礫を微量含む．締まる．
８．7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量と直径１～２㎝大の中礫を微量含む．やや軟質．粘性あり．
９．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量と直径１㎝大の中礫をごく微量含む．軟質．粘性あり．
10．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで 7.5YR4/4 褐色 粗粒シルトのブロックと 10YR3/2 黒褐色 粗粒シルトのブロックを含む．直径１㎜大の極粗粒砂と直径２～３㎜大の細礫を少量含み直径１㎝大の中礫を微量含む．やや軟質．粘性あり．
11．10YR3/4 暗褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫を少量と直径２～３㎝大の中礫をごく微量含む．やや軟質．粘性あり．
12．7.5YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含む．やや締まる．粘性あり．
13．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫と直径１㎝大の中礫をごく微量含む．やや軟質．粘性あり．
14．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径２～３㎜大の細礫と直径１～２㎝大の中礫をごく微量含む．軟質．粘性あり．
15．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで同色の粗粒シルトブロック含む．直径２㎜大の細礫を少量と直径２㎝大の中礫を微量含む．軟質．粘性あり．
16．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂～粗粒シルトで直径２～５㎝大の中礫を微量含む．やや軟質．粘性あり．
17．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で直径２～ 10 ㎝大の中礫～大礫を微量含む．やや締まる．やや粘性あり．
地山の色調は 5YR4/8 赤褐色．



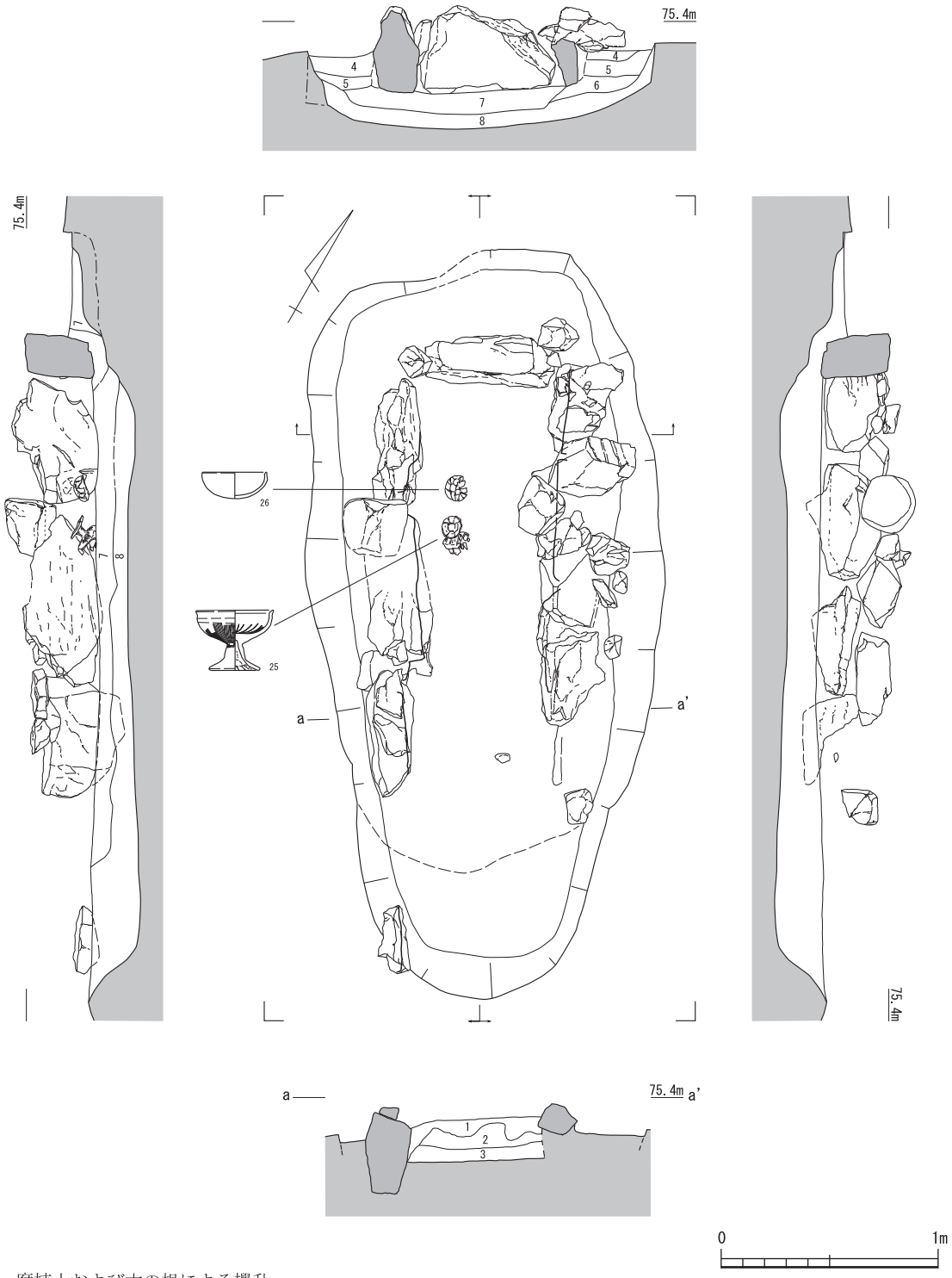
(1：50)



１．7.5YR4/4 褐色 中粒砂～粗粒砂混じり極細粒砂で直径２～３㎜大の細礫を微量含み直径２～３㎝大の中礫をごく微量含む．やや砂質でやや軟質．

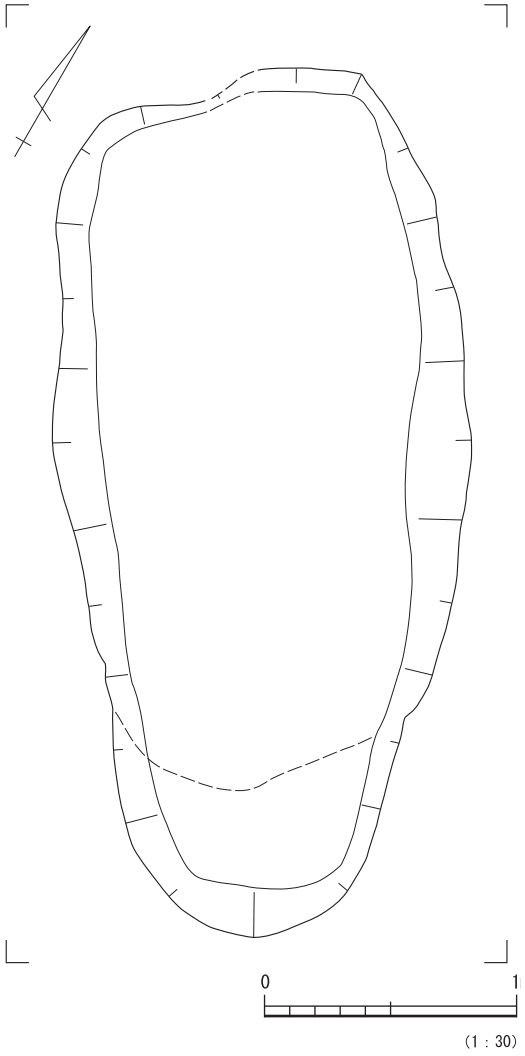
(1：20)

第 108 図　１区 16 号墳周溝埋土土層断面・下層溝



１．腐植土および木の根による攪乱.
２．7.5YR4.4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～極粗粒砂を多く含む．粘質.
３．6YR4.4/7 赤褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～極粗粒砂を多く含む．粘質.
４．7.5YR5/4.6 にぶい褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～直径１㎝大の中礫とを少量含む．やや粘質.
５．7YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．粘質.
６．7YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂・細礫を少量含む．粘質.
７．5YR4/6 赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を多く含む．粘質.
８．8YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～粗粒砂を少量含む．粘質．マンガン粒含む.

第 109 図　16 号墳埋葬施設



第 110 図　16 号墳埋葬施設墓壙

石組はコ字形に遺存しており、南南東側の壁は破壊されたものと判断される。ただし、石材抜き取り穴は遺存していなかった。石組内は北北西側の端で幅 69 ㎝、南南東側の遺存部端で幅 65 ㎝を測り、わずかに北北西側が幅広い。遺存長は 1.91 ｍで、西南西側壁の南南東側にある１石を側壁の続きの残存壁とすれば､2.72 ｍの長さになる。以上の規模から、16 号墳の埋葬施設は竪穴式石室と判断している。石室の主軸方向は、Ｎ 29°Ｗで、１枚石を使用していることから、埋葬頭位も同じ方向と思われる。また、南南東の短側壁が石材抜き取り穴すら検出できなかったことは、14 号墳の石室のように、小ぶりの石を使用し、床面よりも深く埋め込まなかった構造と思われ､被葬者の足側にあたるためであろう。

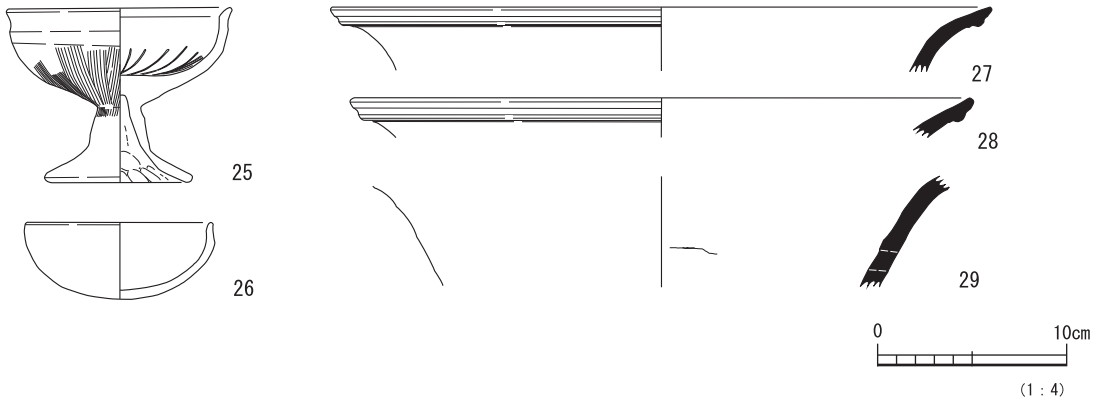
長側壁の基底石は、長さ 50 ㎝前後で、幅の狭い部分が縦になるように立てて構築しており、その上には塊石を横積みしている。調査時には２段まで遺存し、床面からの最大高は 45 ㎝であった。床面は平坦･水平である。なお、蓋石は残っていなかった。

墓壙は平面長い楕円形を呈し、長径約 3.5 ｍ、短径約 1.7 ｍで、短軸方向の底は丸みをもっている。検出面からの深さは最大で 40 ㎝である。

遺物出土状況

石室内の南南西壁寄りで、中央よりも遺存短側壁に寄った位置で、床面にほぼ密着した状態で土師器２点が出土した。２点とも長側壁から 15 ㎝前後離れており､短側壁に近い坏は短側壁から約 43 ㎝離れ、坏と高坏は６㎝の間隔であった。坏はほぼ逆転した状態、高坏も逆転状態で遺存短側石側に傾いた状態であった｡もう１点､石室内遺存部端の床面で土師器の坏と思われる小片が出土したが､図示していない。

須恵器甕の口縁部片は、北西側周溝のトレンチ内および表土直下と、墳丘西部の墳裾～平坦面にかけ



第 111 図　16 号墳埋葬施設・周溝埋土出土土器

ての部分で出土している。すべて同一個体と判断される。

出土遺物（第 111 図、巻頭図版 12、写真図版 63・65）

土師器高坏　(25) は石室内の床面から出土した完形の土師器高坏で、坏部口径 11.7 ㎝、器高 9.3 ㎝を測る。坏部の口縁端部は外反させ、端部は丸くおさめている。外面はタテハケ、内面にはヘラミガキを放射状の暗文状に施す。口縁部はヨコナデである。脚部は中空の脚柱部から外反して下外方に外反して裾部となり、端部にはやや丸みをもたせている。脚端径は 7.1 ㎝で、外面はヨコナデ、内面にはユビオサエ痕が多く残る。

時期は類例に乏しいため、確定しにくいが、後述の須恵器と同時期と判断している。

土師器坏　(26) は、(25) と同様、石室内の床面から出土した土師器坏である。ほぼ完形品で、底部は丸く、口縁端部は若干外反させている。口径は 9.7 ㎝、器高は 4.1 ㎝である。器表が荒れているため調整痕は残存していない。

変化に乏しい器形のため、時期を限定しにくいが、後述の須恵器と同時期と判断している。

須恵器甕　(27) ～ (29) は須恵器甕の口縁部片である。(27)・(28) の口縁端部は丸くおさめるが、外面下部に突帯を貼り付けたようになっている。(29) は頸部の破片である。

(27) は西側墳裾～西側平坦面、(28) は北西側周溝の埋土下層（暗褐色土層）でトレンチ出土、(29) は北西側周溝の埋土上層（表土直下）からそれぞれ出土した。

(27)・(28) の口径はそれぞれ 34.8 ㎝、32.5 ㎝を測るが、(29) も含めて同一個体と判断され、口縁端部はＯＮ 46 型式にみられる特徴を示すが、波状文を施さない点で異なるものの、型式学的特徴をもってＴＫ 208 型式期の５世紀後半の時期を与えておきたい。

これらの甕は、墳丘状に置かれていたもの、あるいは墳丘上で祭祀が行われた際に破壊されたものの可能性がある。

８．小石棺（第 112 図、写真図版 60）

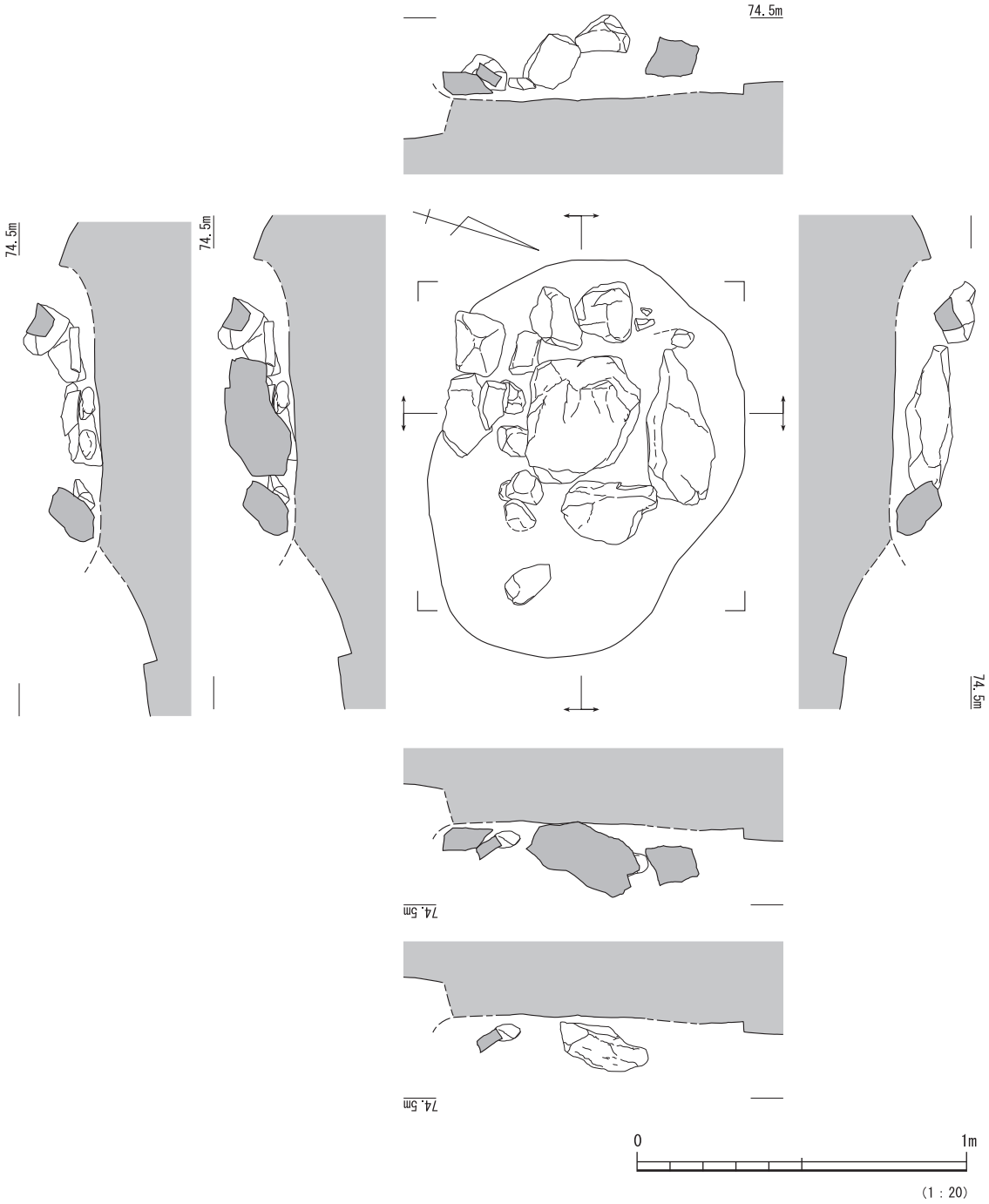
位置と検出状況

１区の 14 号墳と 16 号墳の周溝が重複する部分の東寄りに位置し、16 号墳の周溝埋土を切り込んでいることから、16 号墳の周溝が埋まってから構築されたと判断できる。

調査前の地形観察によっても墳丘は認められず、表土掘削の過程で集石を検出したため、精査をおこなった。検出した小石棺は、小型の箱式石棺で、蓋石が内部に落ち込んでいた。なお、小型の箱式石棺では、底に板石を敷く例が認められないことから、落ち込んだ蓋石と判断した。

形態・規模

蓋石は 40 ㎝× 35 ㎝の方形に近い自然礫で、厚さは 15 ㎝程度である。棺の内法は、調査時には東西約 40 ㎝、南北約 35 ㎝の正方形に近く、蓋石が棺内に落ち込んでいたことから、壁は崩壊していた可能性が高い。具体的には、蓋石の傾きから、棺身の北壁石は原位置を保っている可能性が高く、西側壁の２石も内面がほぼ揃っていたことから、大きくは動いていない可能性が高い。底からの遺存高は約 20 ㎝である。一方、南側壁は内面が整っているように見えるが、石がかなり傾いていることから、大きく動いた結果であるとみられる。南側壁は、外側に転んだ一辺 20 ㎝前後の礫と、内側に小礫が認められるが、いずれも元の位置から大きく動いた結果とみている。したがって、検出時点の棺内の規模は、石棺構築時とは異なっている可能性が高く、検出した蓋石が乗る程度の大きさと推定している。



第 112 図　１区　小石棺

したがって、この小石棺の被葬者は子供であったと判断することができよう。ただし、小石棺の場合、長方形に石組みされるのが通例であるが、本例のように方形に近いものは管見では異例である。

墓壙は歪な楕円形を呈し、東西長径約 1.2 m、南北短径は約１mで、検出面からの深さは約 10 ㎝で、底は平坦に近い。

なお、棺内・墓壙内から遺物は出土しなかったが、小石棺の位置から 14 号墳に関係があると思われ、構築時期も 14 号墳に近いと判断している。

９．17 号墳（第 113 ～ 116 図、写真図版 61・62）

位置と検出状況

17 号墳は 11 号墳～ 16 号墳の６基が群集する部分から、東方に９ｍ程度離れた斜面下側の緩傾斜部分に位置している。分布調査・確認調査時には全く認識されておらず、１区の樹木伐採終了後に実施した現況地形測量において古墳状の隆起部分を認めたことから、トレンチを設定して調査をおこなった。その結果、周溝を確認したため、17 号墳として本発掘調査１区の範囲に含めて調査を実施した。

なお、17 号墳は 12 号墳の東側斜面下に位置し、12 号墳墳裾から 17 号墳墳頂までの高低差は調査前で約 3.4 ｍであった。

形態・規模

調査前の墳丘最高点は標高 70.1 ｍで、西側周溝が埋没している部分と同じ高さであった。調査前の墳丘規模は長径約 7.5 ｍ、短径 7.0 ｍ程度のやや楕円形の円墳と判断していたが、周溝が墳丘の半分以上を巡っていたことなどから、調査後の墳丘規模は南北長径約 8.6 ｍ、東西短径は推定で 8.0 ｍのやや楕円の円墳となった。東側墳裾は調査区端より約 50 ㎝外側にあることになる。

周溝は墳丘の東側を除いた半分以上を弧状に巡り、周溝端は斜面地形により自然消滅する。周溝幅は最も広い北西部で約 2.1 ｍを測るが、多くの部分では 1.5 ｍ前後の幅となっている。周溝の深さは最も深い西側で検出面から 85 ㎝を測る。周溝底の幅は周溝が最も深い西部では約 20 ㎝で、そこから徐々に底幅をひろげ、周溝の北と南部分では 80 ㎝程度になっている。特に斜面上側にあたる西側での周溝壁の傾斜は急になっている。

埋葬施設

調査前の墳丘が低平で、削平を受けていたと想定され、墳丘盛土の厚さは最も厚い墳丘中央部でも 35 ㎝程度であった。

埋葬施設は、１区の他の古墳と同様に石組の施設を想定して調査を進めたが、検出することができなかった。墳丘盛土をかなり掘削した後、土層断面観察・記録後に土層観察用畦を除去する際に、須恵器のやや大きな破片を検出した。畦の幅部分に限られたが、遺構の存在を精査すると、木棺直葬の痕跡を検出した。

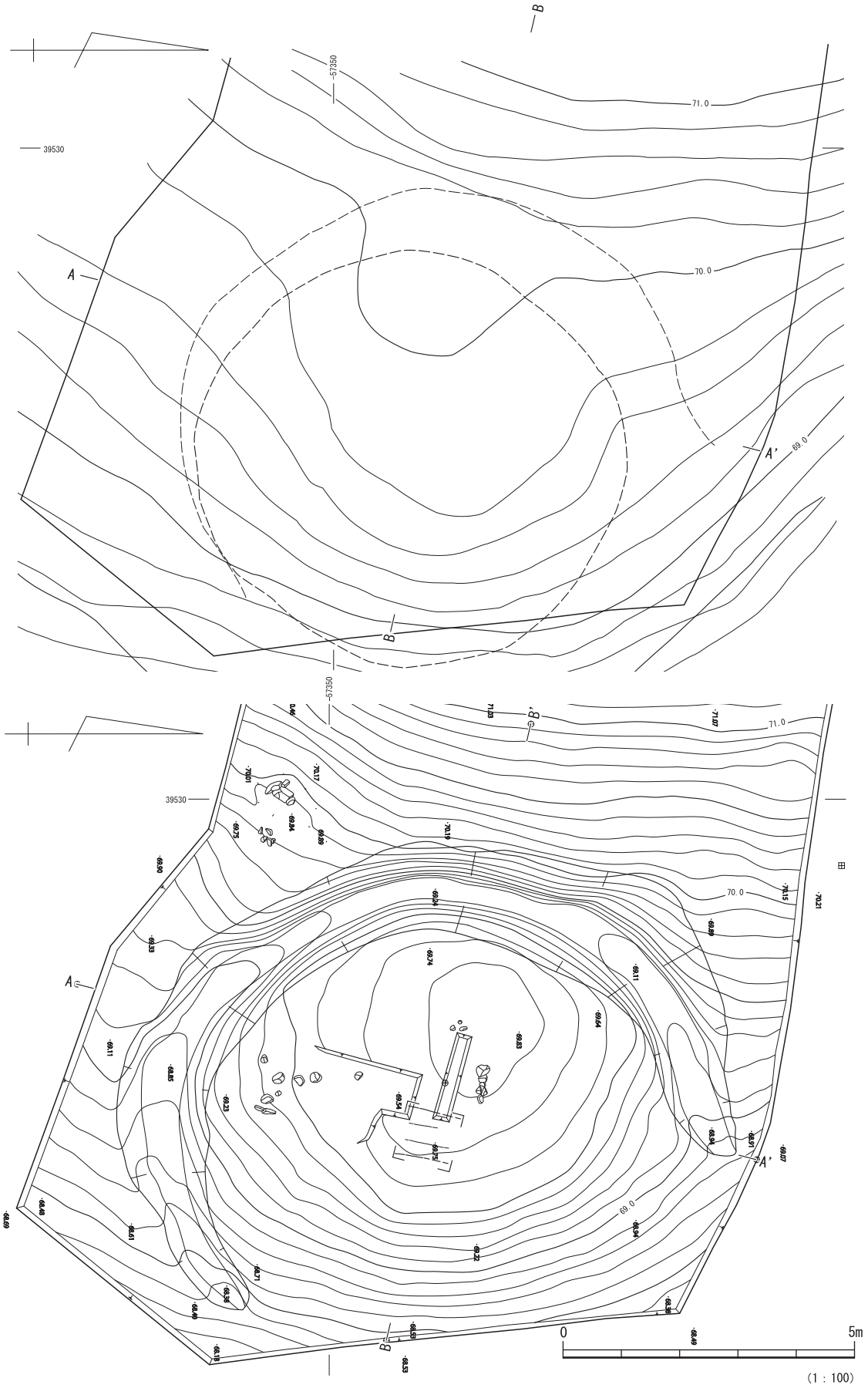
木棺は横断面の状況から割竹形であることが判明し、残存長は約 60 ㎝で、他の部分はすでに削平してしまっていた。断面を詳細に検討したが、墓壙と棺の境界を検出することができなかった。したがって、墓壙の最大幅は 85 ㎝、棺幅は推定で 45 ㎝程度となる。また、断面観察による棺底までの深さは 50 ㎝であった。

埋葬施設を検出した位置は墳丘のほぼ中心部にあたり、若干西側に寄っている。棺・墓壙の長軸方向は、南北に近く、北を基準とした場合、ほぼＮ 11°Ｅ方向となる。

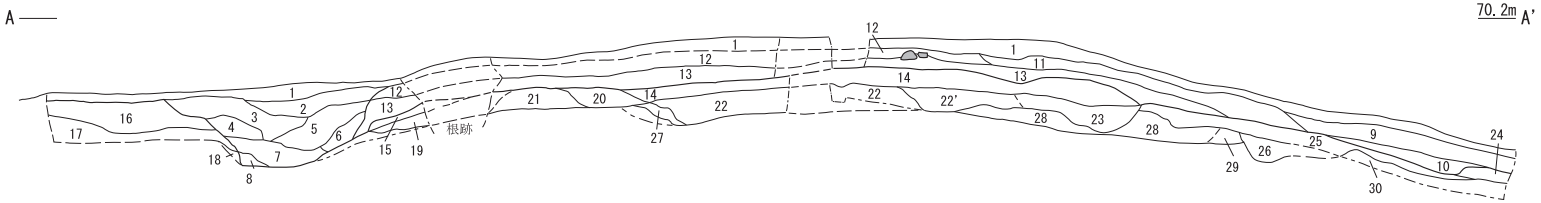
遺物出土状況

最初に検出した須恵器坏片は棺中央よりも東寄りで、棺底から約 30 ㎝浮いた位置で、側面を上にした状態で出土した。また、同一個体の小片も２箇所で計４片検出したが、平面的には棺中心線に近い部分で棺底から 10 ～ 15 ㎝浮いた状態であった。これらの須恵器坏は副葬品と判断できるが、出土位置からすると、棺上に置かれていたものが、棺の腐朽に伴って棺内に落ち込んだ可能性が高い。

なお、須恵器以外の副葬品や、棺以外の部分では遺物は出土しなかった。

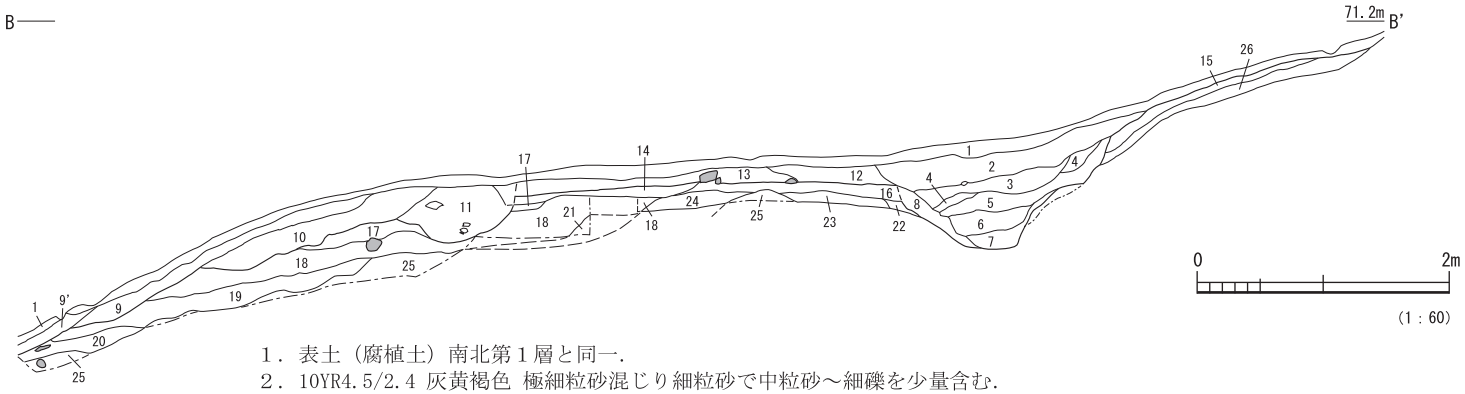


第 113 図　１区 17 号墳墳丘（調査前・後）



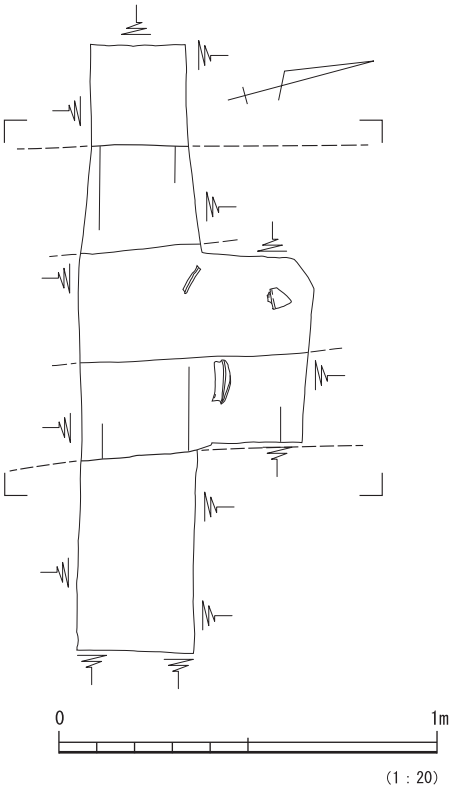
１．表土（腐植土）東西第１層と同一．
２．10YR5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む．やや粘質．
３．10YR5/2.8 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．粘質．
４．10YR5/3.5 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂～細礫を含む．粘質．
５．9YR4/2 灰黄色 極細粒砂で細粒砂～細礫を少量含む．やや粘質．
６．8YR4/3.5 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～粗粒砂を含む．粘質．
７．9YR3/1.5 黒褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～細礫を少量含む．粘質．
８．7.5YR4.6/7 明褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径１cm大の軟質中礫を含む．
９．10YR5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む．やや粘質．
10．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径５mm大の中礫を多く含む．粘質．
11．7.5YR5/3.5 にぶい褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．やや粘質．
12．7.5YR4/3.5 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．粘質．炭化物含む．東西第 13 層と同一．
13．7.5YR4/5 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径５cm大の軟質中礫を含む．粘質．東西第 14 層と同一．
14．7.5YR4.6/6 明褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径５cm大の軟質中礫を多く（10％程）含む．旧表土．東西第 18 層と同一．
15．7.5YR4/2.7 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む．旧表土．
16．7.5YR4/2 灰褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む．粘質．
17．7.5YR5/5.2 明褐色 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を少量含む．粘質．
18．5YR5/8 明赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径 10 cm大の軟質大礫を多く含む．粘質．
19．10YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径５mm大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．
20．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１cm大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．
21．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で直径 0.5 ～３cm大の地山由来中礫角礫を少量含む．ごく僅かに粘質で締まる．
22．7.5YR4/6 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径１～２cm大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．東西第 21 層と同一．
22'．第 22 層と同質で暗色化が弱い部分．
23．10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり細粒砂～中粒砂で直径 0.5 ～２cm大の地山由来中礫角礫を微量含む．やや砂質でやや締まる．
24．5YR5/8 明赤褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径 10 cm大の軟質大礫を多く含む．粘質．
25．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１cm大と直径３～４cm大の中礫を微量含む．やや粘質でやや軟質．
26．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径５mm大の地山由来白色細礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．
27．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～２cm大の地山由来中礫角礫を中量含む．やや粘質で締まる．
28．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径 0.5 ～６cm大の地山由来白色中礫角礫を多量に含む．やや粘質でやや締まる．
29．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１cm大の地山由来白色中礫を少量含む．やや粘質でやや締まる．
30．7.5YR5/5.2 明褐色 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を少量含む．粘質．

第 114 図　１区 17 号墳墳丘土層断面(1)

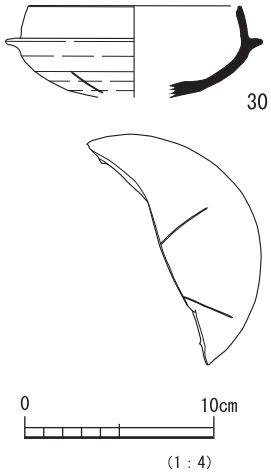


１．表土（腐植土）南北第１層と同一．
２．10YR4.5/2.4 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．
３．10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．
４．7.5YR4/2 灰褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．
５．7.5YR3/2 黒褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．炭化物含む．
６．8YR3/4 暗褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径１㎝大の中礫を多く含む．
７．6YR4/4 にぶい赤褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径１㎝大の中礫を含む．
８．7.5YR4/4 褐色 粗粒シルト混じり細粒砂～中粒砂で粗粒砂を微量含む．やや粘性あり．やや締まる．
９．7.5YR4/2.3 灰褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を少量含む．粘質．
９’．第９層の流出再堆積部分．
10．7YR5/7 明褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．やや粘質．
11．7.5YR4.7/7.6 明褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～粗粒砂を少量含む．粘質．主体部埋土．須恵器含む．
12．7.5YR4/2 灰褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂．粘質．炭化物含む．
13．7.5YR4/3.5 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～細礫を含む．粘質．炭化物含む．南北第 12 層と同一．
14．7.5YR4/5 褐色 粗粒シルト～細粒砂で中粒砂～直径５㎝大の軟質中礫を含む．粘質．南北第 13 層と同一．
15．7.5YR3.8/2 灰褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を多く含む．
16．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで粗粒砂を微量含み直径５㎜大の地山由来中礫角礫をごく微量含む．粘質でやや締まる．
17．7.5YR3/4 暗褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で粗粒砂をごく微量含む．僅かに粘質でやや軟質．
18．7.5YR4.6/6 明褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～直径５㎝大の軟質中礫を多く（10％程）含む．旧表土．南北第 14 層と同一．
19．7.5YR4/3 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径１～３㎜大の極粗粒砂～細礫を微量含み直径１㎝大の中礫をごく微量含む．僅かに粘質でやや軟質．
20．7.5YR4/6 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルト．粘質でやや軟質．
21．7.5YR4/6 褐色 細粒砂～中粒砂混じり粗粒シルト～極細粒砂で直径１～２㎝大の中礫を微量含む．やや粘質でやや締まる．南北第 22 層と同一．
22．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で粗粒砂をごく微量含む．やや粘質で締まる．
23．7.5YR4/6 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で粗粒砂と直径１㎝大の中礫をごく微量含む．やや粘質でやや締まる．
24．7.5YR4/4 褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトで直径１～４㎝大の地山由来白色中礫角礫を中量含む．粘質でやや締まる．
25．5YR4/8 赤褐色 極細粒砂～細粒砂混じり粗粒シルトで直径 0.5 ～１㎝大の中礫を少量含む．粘質で締まる．
26．7YR4/3 褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂～直径２㎝大の中礫を少量含む．粘質．岩盤土壌化層．

第 115 図　１区 17 号墳墳丘土層断面(2)



第 116 図　17 号墳埋葬施設



第 117 図　17 号墳埋葬施設出土須恵器

出土遺物（第 117 図、巻頭図版 12、写真図版 63）

須恵器坏　(30) は須恵器坏身の破片である。出土した破片はすべて接合でき、残存率は約３分の１である。口径 11.0 ㎝で、たちあがり部端部内面は丸みのある凹面をなす。受け部は水平方向に短くのびる。底部まで遺存していないが、残存高は 4.9 ㎝である。内面底部付近には仕上げナデを施している。ロクロ回転は右方向である。断面はセピア色を呈している。底部外面にはヘラ記号があり、「×」形と思われるが、欠失しているため確定できない。

端部の特徴や体部の深さなどからＭＴ 15 型式期の所産と判断される。

10. 小結

古墳群構造

１区は、地滑り後の台地状地形上に構築された７基の古墳群で、支群と呼べる単位と判断できる。その中でも 11 号墳～ 16 号墳の６基は、周溝を接し、あるいは周溝を重複させながら群集して築造されていた。しかも、６基中で埋葬施設が検出された５基のすべてが石組埋葬施設という共通性が認められた。さらに、この６基はほぼ同一の等高線上に並んだ 11 号墳･13 号墳･15 号墳の a 小群と、12 号墳･14 号墳･16 号墳の b 小群の３基ずつの２小群に細分されるようであり、 a 小群・ b 小群はそれぞれ周溝の重複や連接が認められるものの、各小群同士の古墳には周溝の重複などは認められない。それらの築造順を追うと、次のようになる。

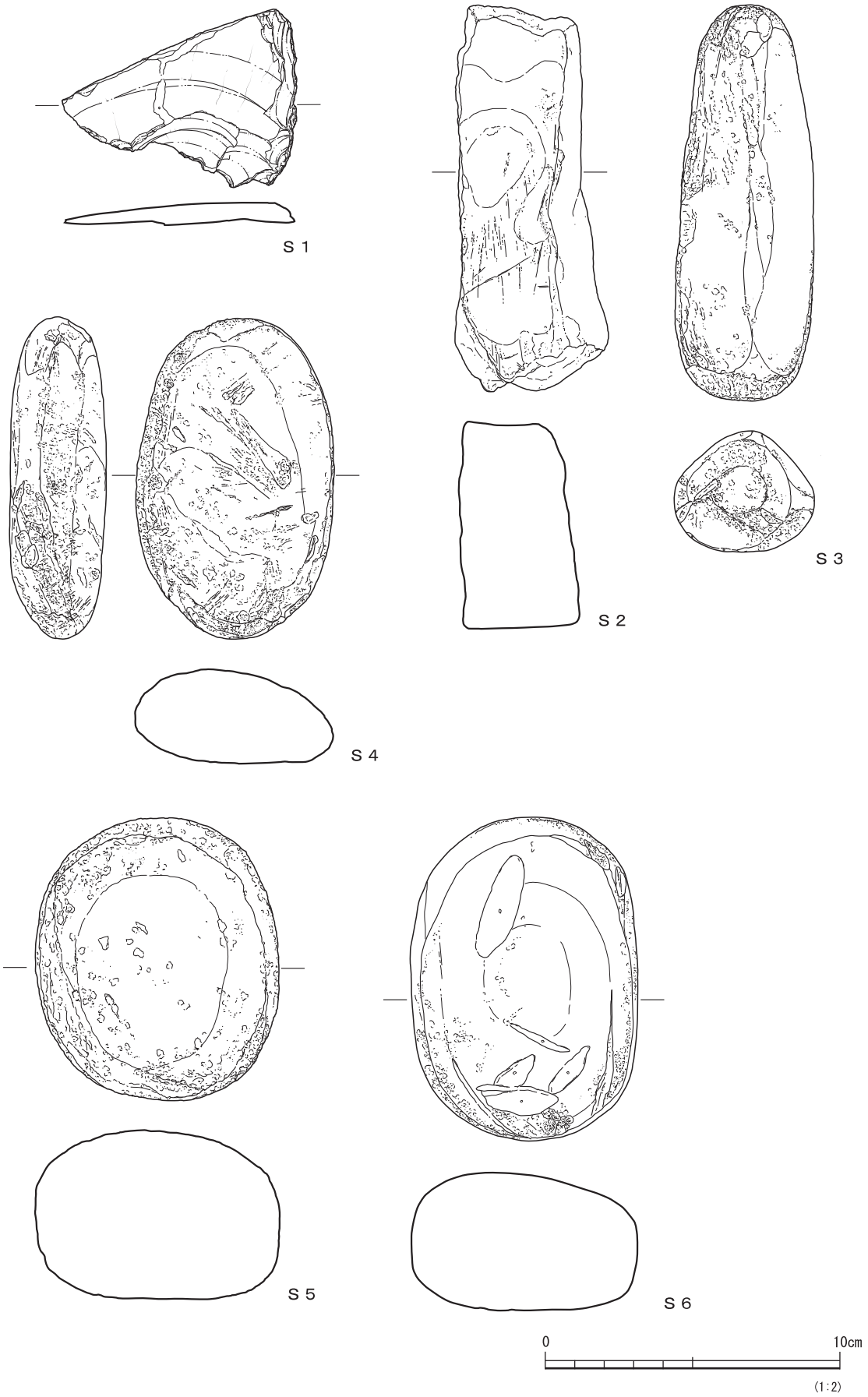
a 小群では、13 号墳（ＴＫ 208 型式期～ＴＫ 23 型式期 : ５世紀後葉）→（50 年程度）→ 11 号墳（ＭＴ 15 型式期～ＴＫ 10 型式期 : ６世紀前半）→ 15 号墳（不明）

b 小群では、16 号墳（ＴＫ 208 型式前半期 : ５世紀中頃）→（50 年程度）→ 14 号墳（ＴＫ 23 型式期～ＭＴ 15 型式期 : ５世紀後葉～６世紀前葉）→（20 年程度）→ 12 号墳（ＭＴ 15 型式期 : ６世紀前葉）

ちなみに、17 号墳はＭＴ 15 型式期で、６世紀前葉とすることができる。

１区の古墳群は５世紀中頃から６世紀前葉にかけて築造されたが、これらを築造順に記すと、

16 号墳（ b 小群）→ 13 号墳（ a 小群）→ 14 号墳（ b 小群）→ 12 号墳（ b 小群）→ 11 号墳（ a 小群）



第 118 図　全調査区出土石製品

→ 15 号墳（ａ小群）となる。ほぼ、ｂ小群とａ小群が交互に築造されていると判断できるほどであろう。

そうすると、古墳築造主体はａ・ｂ二つの系列があって、それぞれが列状に世代ごとに築造されたとみることもできよう。

墳丘構築と 11 号墳埋葬施設

１区の墳丘構築は、斜面上側の一部を除き、地山の旧表土を残して周溝を掘削しており、周溝掘削土を墳丘盛土に使用したと判断できる。この構築方法は、２区の８号墳・９号墳においても同様である。

11 号墳では埋葬施設を検出することができなかった。このことについては、石組の埋葬施設が墳丘上部に存在し、すでに破壊、削平された可能性を考える必要があるが、１区や２区の石組埋葬施設では、墓壙底の高さが旧地表面の整地後面（13 号墳・16 号墳）とほぼ同じになっているもの、あるいはそれを少し掘り下げて墓壙底とするもの（８号墳・９号墳・12 号墳・15 号墳）がほとんどを占め、14 号墳では墓壙上面が旧地表整地後の面となって、最も深く掘り込まれている。

11 号墳では、墳丘盛土部分の高さが最大約 96cm あったにもかかわらず、そこに設けておらず、墳丘断面の検討においても墓壙や大きな攪乱は認められなかった。仮に、石組埋葬施設がすでに削平されてしまっていたとすれば、墳丘高は現状よりも１ｍ程度は高かったことになるが、11 号墳はすでに山側周溝底から 1.5 ｍの高さがあり、斜面下側からの墳丘高は約３ｍもある。これよりもさらに１ｍ程度高くなることは考えにくいと判断される。

いっぽう、11 号墳の墳丘盛土下部では、土層Ａ－Ａ’断面において、攪乱されていない状態で旧表土が認められ、旧表土下の地山面で若干色・質が若干異なる部分が認められたため、念のためサブトレンチを設けて掘削したが、埋葬施設は検出されなかった。

以上のことから、11 号墳では石組の埋葬施設であった可能性があるものの、墳丘中央部に存在し、すでに削平により失われていたとするには躊躇せざるを得ない。仮に石組埋葬施設が存在していたとするならば、墳丘中央からやや離れた位置で、墳丘がすでに削平された部分であったとせざるを得ない。

１区の 13 号墳・15 号墳・16 号墳の埋葬施設も墳丘中心からややずれた位置に設けられているが、11 号墳では墳丘中心からあまりに離れすぎることになる点から、これも否定的にならざるを得ない。

古墳群の眺望

調査時には、３区の尾根上において円山川に近い現在の鶴岡・松岡地域から円山川右岸の鶴岡～上郷にかけて遠望できたが、１・２区の古墳群からは、木立に遮られて日高盆地の眺望は全く望めなかった。

しかし、古墳時代にあっては、平地に近い丘陵に存在する樹木は建材や道具をはじめ、燃料などに利用されたことにより、丘陵上の立木は灌木程度であったと想定されることから、古墳築造当時には、現在、鶴岡・国分寺・松岡の各地域となっている円山川左岸の平野部のみならず、山裾の現在の水上地域まで見下ろせたことは想像に難くないであろう。また、逆に、平地からも古墳群を眺めることができたと思われる。中期～後期中頃までの古墳は、眺望が開けた土地に築造されたものと判断している。

石室のほぼ上端まで遺存していた 14 号墳では、天井石が後世に抜き去られたか、板や丸太のような木製の材質で天井としていたかについては、石室構築は石棺よりも上位の埋葬施設と考えられることや、里山として古代以降多くの人々が利用してきた場所であるという観点からすると、13 号墳・16 号墳の埋葬施設の石材と同様に、後世に持ち去られた可能性が高い。また、14 号墳の石室上部の土が後世の客土の可能性が高いことからも、天井石も後世に抜き去られたために現存しないと想定しておきたい。

第４章　自然科学分析結果

第１節　尼ヶ宮古墳群における放射性炭素年代（AMS測定）

株式会社 加速器分析研究所

１．測定対象試料

尼ヶ宮古墳群は、兵庫県豊岡市日高町水上（北緯 35.482395°、東経 134.768784°）に所在し、丘陵台地上に立地する。測定対象試料は、12 号墳（１区２号墳）の墳丘盛土内腐植土層から出土した木炭１点である（第３表）。試料が出土した腐植土層は、古墳造成時の旧表土と見られ、６世紀前葉以前と考えられる。

２．測定の意義

木炭が古墳造成時の年代を示すかどうか確認する。

３．化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ(1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第３表に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４．測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C 濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５．算出方法

（１）$\delta^{13}C$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第３表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した

値を第３表に、補正していない値を参考値として第４表に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を第３表に、補正していない値を参考値として第４表に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1 σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2 σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C 補正を行い、下１桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第４表に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

６．測定結果

測定結果を第３表、第４表に示す。

試料１の ^{14}C 年代は 1780 ± 20yrBP、暦年較正年代（1 σ）は 231 ～ 325cal AD の間に２つの範囲で示される。推定される年代の範囲内であるが、古墳の時期とは年代差がある。

測定された木炭が古墳造成時より古いものだった可能性の他に、古い年代値を示す理由として、以下に記す古木効果と暦年較正曲線の地域差の影響が考えられる。

樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ、内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す（古木効果）。今回測定された木炭は樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、測定された年代値は、その木が死んだ年代よりも古い可能性がある。

また、試料１が含まれる１～３世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜 2009、坂本 2010 など）。この日本産樹木のデータを用いてこの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は 70％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第３表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C(‰)(AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						LibbyAge(yrBP)	pMC(%)
IAAA-160430	1	1 区　2 号墳　盛土内腐植土層	木炭	AAA	-27.23 ± 0.53	1,780 ± 20	80.17 ± 0.25

［#8069］

第４表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-160430	1,810 ± 20	79.81 ± 0.23	1,775 ± 24	231calAD-260calAD(28.7%) 280calAD-325calAD(39.5%)	143calAD-156calAD(1.7%) 167calAD-195calAD(4.8%) 210calAD-337calAD(88.9%)

［参考値］

文献

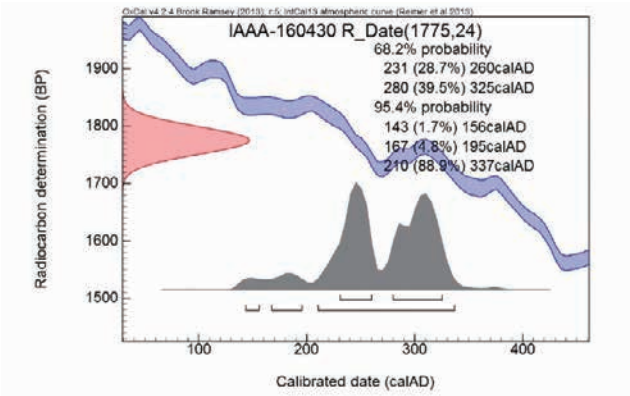
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

尾嵜大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代，設楽博己，藤尾慎一郎，松木武彦編弥生時代の考古学１　弥生文化の輪郭，同成社，225-235

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－，第５回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集，（株）加速器分析研究所，85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363



第 119 図　暦年較正年代グラフ（参考）

第２節　尼ヶ宮古墳群から出土した石製遺物の石材同定

株式会社 パレオ・ラボ

１．はじめに

尼ヶ宮古墳群は、豊岡市日高町水上に所在する。ここでは、尼ヶ宮古墳群から出土した石製遺物について、肉眼観察による石材同定を行い、石製遺物の石材利用について検討した。

２．試料と方法

石製遺物は、尼ヶ宮古墳群の 11･15･16 号墳（１区１・５・６号墳）および８・９号墳（２区１・２号墳）から出土した、磨石、剥片、砥石、石棺底円礫および礫床の礫など、計 24 点である（第５表）。

石材同定は、主に肉眼と実体顕微鏡観察により行い、実体顕微鏡を用いてすべての石材表面の写真を撮影した。

３．結果

第５表に、肉眼による石材同定の結果を示す。

以下に、岩石の特徴について記載した。記載は、岩石表面における色調や構成鉱物、岩石組織の特徴等について行った。また、石材の写真を第 121 図に示した。

第５表　尼ヶ宮古墳群の石材とその特徴および岩石

番号	調査区	遺構	器種	ﾈｰﾐﾝｸﾞ番号	土層	備考	色調	組織の特徴	石材
1	１区	１号墳南東墳丘	磨石	015	茶褐色土層（表土直下）		灰黄色（2.5Y 6/2）	白色・黒灰色粒子	細粒砂岩
2	１区	５号墳南側墳裾	磨石？	084	茶褐色土層（表土直下）	１号墳西側周溝端	灰黄褐色（10YR 5/2）	斑晶質、長石類・斑晶抜け痕	安山岩
3	１区	６号墳墳丘下層	磨石	111	旧表土直上層	東西アゼより北側	灰色（10Y 6/1）	斑晶質、長石類・緑色鉱物	凝灰岩
4	１区北東部		剥片	114	茶褐色下面	出土写・位置不明	灰色（7.5Y 5/1）	極細粒の斑晶質	ガラス質安山岩
5	２区	２号墳北側周溝	砥石	124	埋土内		灰白色（10Y 7/2）	斑晶質、輝石類・緑色岩片	凝灰岩
6	２区	2-1 号墳箱式棺内	礫床？	116		礫床の一部か	にぶい黄色（2.5Y 6/3）	斑晶質、斑晶痕（長石類・輝石類の抜け痕）	安山岩
7	２区	2-1 号墳箱式棺内	礫床？	117		礫床の一部か	淡黄色（2.5Y 8/3）	白色粒子	細粒砂岩
8	２区	2-1 号墳箱式棺内	礫床	121-1	埋土	礫床の一部	灰色（5Y 6/1）	白色・黒灰色・赤色粒子	細粒砂岩
9	２区	2-1 号墳箱式棺内	礫床	121-2	埋土	礫床の一部	灰白色（7.5Y 8/1）	斑晶質、石英・長石類（大型粒子）	流紋岩
10	２区	１号墳	石棺底円礫	1			灰白色（2.5Y 7/1）	白色・黒灰色粒子	細粒砂岩
11	２区	１号墳	石棺底円礫	2			灰白色（10Y 7/2）	斑晶質、大型白色・緑色岩片・輝石類	凝灰岩
12	２区	１号墳	石棺底円礫	3			灰白色（5Y 7/2）	斑晶質、白色・緑色粒子、細粒質	凝灰岩
13	２区	１号墳	石棺底円礫	4			灰黄褐色（10YR 6/2）	斑晶質、石英・長石類・黒灰色岩片	凝灰岩
14	２区	１号墳	石棺底円礫	5			オリーブ灰色（10Y 6/2）	完晶質、石英・長石類・輝石類	閃緑岩
15	２区	１号墳	石棺底円礫	6			灰白色（2.5Y 8/2）	斑晶質、石英・長石類・輝石類	流紋岩
16	２区	１号墳	石棺底円礫	7			灰黄色（2.5Y 6/2）	斑晶質、長石類・輝石類	細粒安山岩
17	２区	１号墳	石棺底円礫	8			浅黄色（2.5Y 7/4）	斑晶質、長石類・輝石類・火山岩片	凝灰岩
18	２区	１号墳	石棺底円礫	9			灰オリーブ色（7.5Y 6/2）	完晶質、石英・長石類・輝石類などの斑晶鉱物	閃緑岩
19	２区	１号墳	石棺底円礫	10			にぶい橙色（7.5YR 7/3）	完晶質、石英・長石類・輝石類	花崗岩
20	２区	１号墳	石棺底円礫	11			灰白色（2.5Y 7/1）	斑晶質、長石類・輝石類	安山岩
21	２区	１号墳	石棺底円礫	12			灰白色（7.5Y 7/1）	斑晶質、長石類・輝石類	安山岩
22	２区	１号墳	石棺底円礫	13			灰オリーブ色（5Y 6/2）	斑晶質、長石類・輝石類	安山岩
23	２区	１号墳	石棺底円礫	14			灰黄色（2.5Y 7/2）	斑晶質、石英・長石類・輝石類	流紋岩
24	２区	１号墳	石棺底円礫	15			浅黄色（2.5Y 7/4）	斑晶質、長石類・緑色鉱物	凝灰岩

１）細粒砂岩（第 121 図 -1、分析 No. 1）

白色粒子、黒灰色粒子、赤色粒子などの細粒粒子で構成される。

２）凝灰岩（第 121 図 -2、分析 No. 13）

石英、長石類、輝石類、火山岩片、白色粒子、緑色岩片または鉱物、黒灰色岩片からなる斑晶質の岩石である。基質は白色またはオリーブ灰色である。

３）流紋岩（第 121 図 -3、分析 No. 9）

大型の石英や長石類、輝石類の斑晶鉱物からなる斑晶質岩石である。

４）ガラス質安山岩（第 121 図 -4、分析 No. 4）

極細粒の斑晶鉱物からなる斑状組織を呈する黒色岩石である。

５）細粒安山岩（第 121 図 -5、分析 No. 16）

細粒の斑晶鉱物からなる斑状組織を呈する灰色岩石である。

６）安山岩（第 121 図 -6、分析 No. 20）

大型の輝石類や長石類の斑晶鉱物からなる斑状組織を呈する岩石である。分析 No. 6 は多くの斑晶が抜けている。

７）花崗岩（第 121 図 -7、分析 No. 19）

長石類や石英、雲母などで構成される完晶質の岩石である。

８）閃緑岩（第 121 図 -8、分析 No. 18）

輝石類や雲母類が多く、その他石英や長石類で構成される灰白色の岩石である。

4. 考察

第６表に器種別の結果をまとめた。

以下では、石製遺物の石材利用の特徴について述べる。

第６表　石製遺物と岩石の種類

大分類	中分類	石材	器種または種類							総計
			石棺底円礫	礫床	礫床？	磨石	磨石？	砥石	剥片	
堆積岩類	砕屑岩	細粒砂岩	1	1	1	1				4
火成岩類	火山砕屑岩	凝灰岩	5			1		1		7
	火山岩	流紋岩	2	1						3
		ガラス質安山岩							1	1
		細粒安山岩	1							1
		安山岩	3		1		1			5
	深成岩	花崗岩	1							1
		閃緑岩	2							2
総計			15	2	2	2	1	1	1	24

［石棺底円礫および礫床の礫］

細粒砂岩、凝灰岩、流紋岩、細粒安山岩、安山岩、花崗岩、閃緑岩といった数々の岩石が利用されているが、凝灰岩や安山岩、流紋岩などの火山砕屑岩や火山岩がやや多いようである。

［磨石または磨石？］

細粒砂岩、凝灰岩、安山岩が各 1 個体である。

［砥石］

輝石類や緑色岩片を含む斑晶質の白色岩石である凝灰岩を利用している。

［剥片］

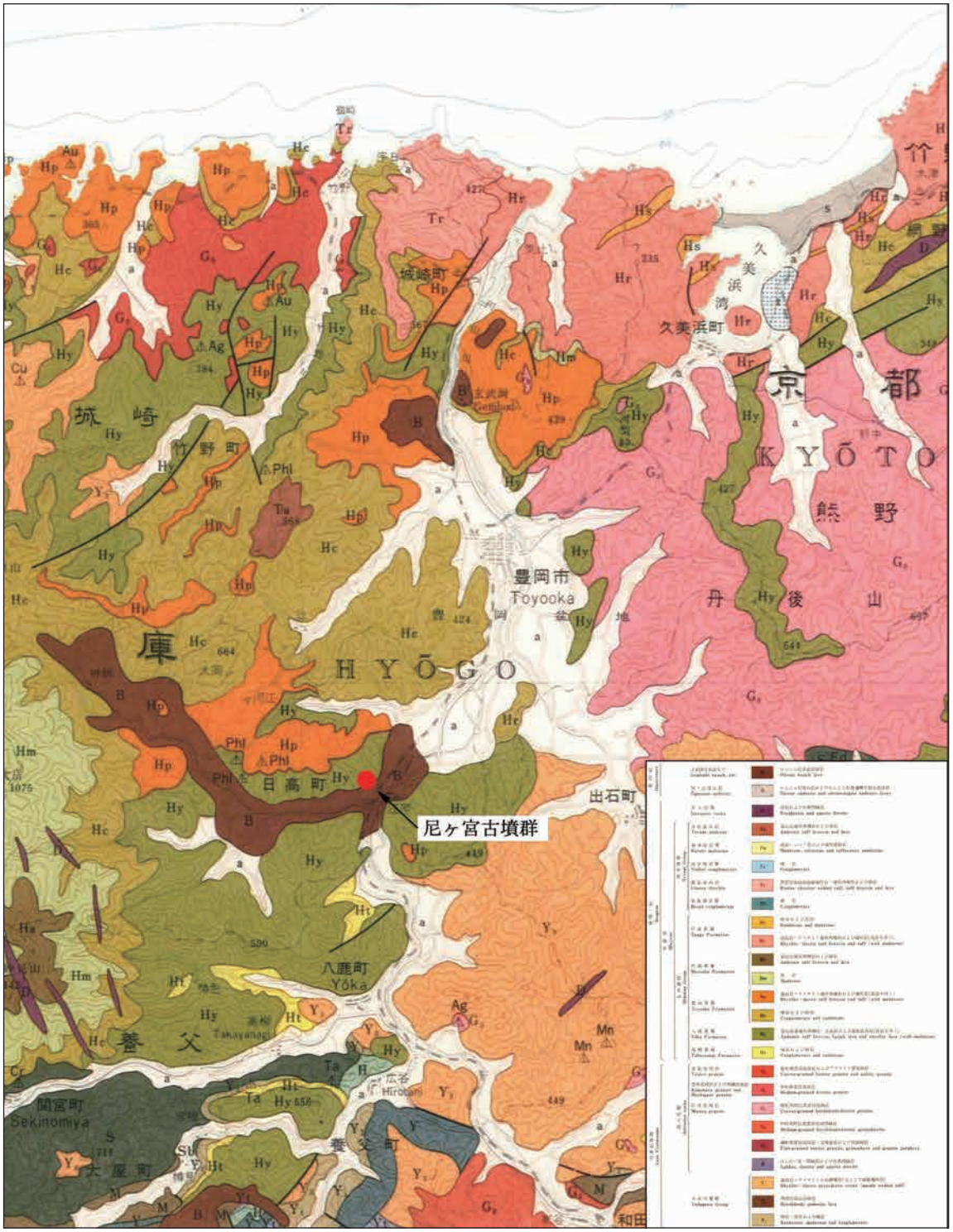
緻密なガラス質安山岩である。

なお、遺跡周辺には、第四紀の玄武洞玄武岩など（第 120 図の凡例 B）、第三紀中新世の北但層群八鹿累層の安山岩質凝灰角礫岩・玄武岩および凝灰岩（第 120 図の凡例 Hy）、豊岡累層の流紋岩～デイサイト凝灰角礫岩や礫岩（第 120 図の凡例 Hp）および砂岩（第 120 図の凡例 Hc）、白亜紀後期の矢田川層

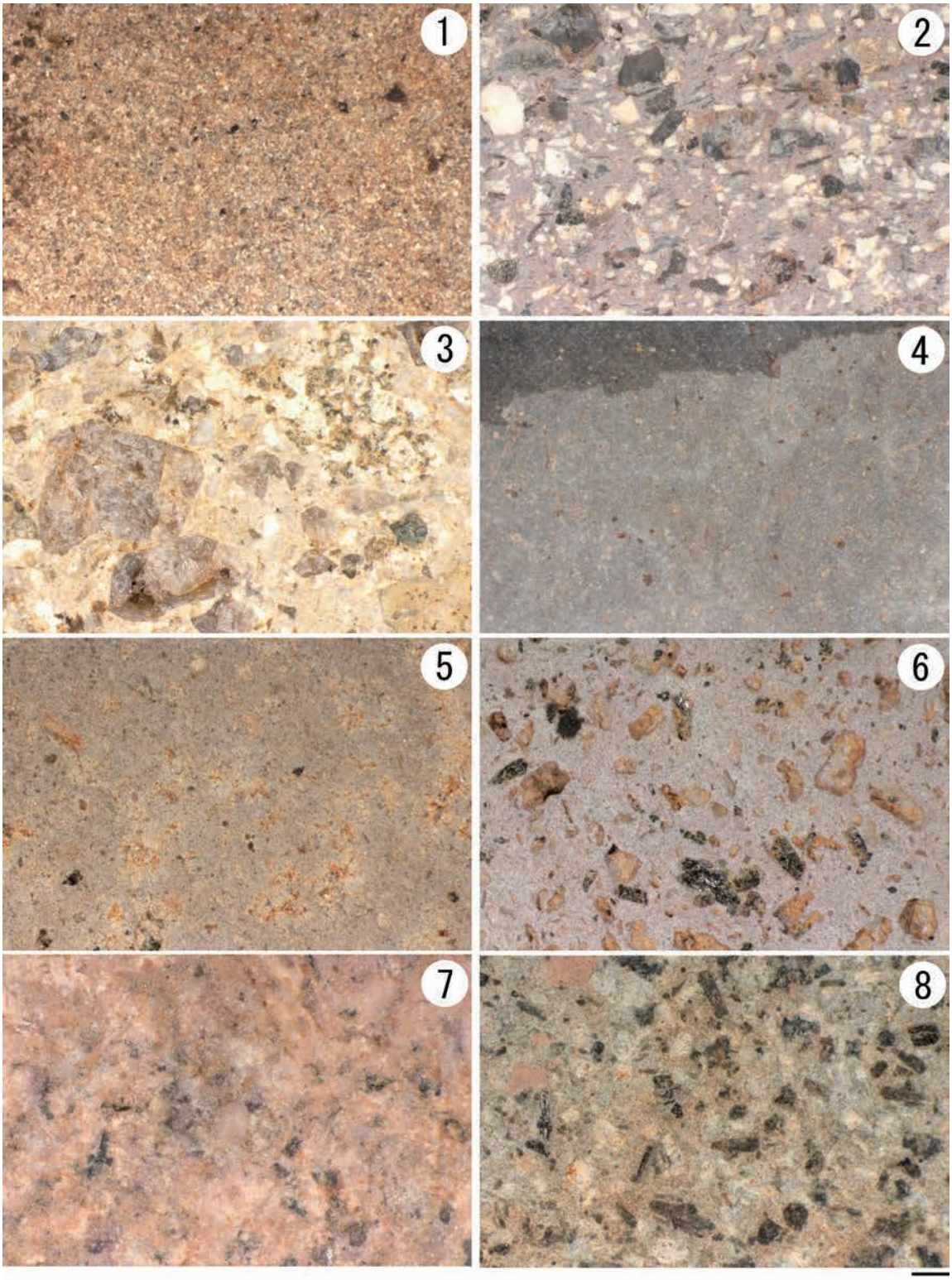
群の流紋岩～デイサイト火山砕屑岩（第 120 図の凡例 Y_3）や宮津花崗岩の粗粒角閃石黒雲母花崗岩（第 120 図の凡例 G_3）など、剥片のガラス質安山岩を除く、大半の岩石が分布する。　　（藤根　久）

引用文献

上村不二雄・坂本　亨・山田直利・猪木幸男（1974）20 万分の 1 地質図幅「鳥取」. 地質調査所



第 120 図　尼ヶ宮古墳群とその周辺の地質（上村ほか（1974）20 万分の 1 地質図幅「鳥取」を編集）



第 121 図　岩石の実体顕微鏡写真（スケール bar：１㎜）

１．細粒砂岩（分析 No. １）　２．凝灰岩（分析 No.13）　３．流紋岩（分析 No. ９）
４．ガラス質安山岩（分析 No. ４）　５．細粒安山岩（分析 No.16）　６．安山岩（分析 No.20）
７．花崗岩（分析 No.19）　８．閃緑岩（分析 No.18）

第５章　総　括

第１節　尼ヶ宮古墳群の構造と築造時期

１．各調査区の構造と築造時期

尼ヶ宮古墳群 41 基のうち、今回本発掘調査を実施したのは古墳時代中期前半～後期前葉にかけて築造された 15 基の古墳で、それらの立地場所から３地区に分かれていた。

３区（２～６号墳）

３区では、標高 83 m～ 89 mの尾根稜線上に階段状に築造された２～６号墳の５基を調査した。２号墳の西側にはやや離れて１号墳、３区の尾根の斜面下側には同じ立地の７号墳がそれぞれ存在しているが、７号墳については２～６号墳と同様の立地であることから、２～６号墳と同じ支群に含まれると判断できる。２～６号墳は墓壙を構築するための平坦面を確保するため、丘陵尾根の山側を削って下側や横側に盛土をおこない、墳丘平坦面を造成したと思われるが、発掘調査時点では盛土はほとんど確認できなかった。このことから、削平を行った際の残土は少なく、しかも流失したものと推定している。また、２～６号墳すべてにおいて斜面山側に区画溝を設け、山側については古墳の範囲を明確にしている。しかし、斜面下側には古墳の範囲を明確にする施設は設けておらず、墳裾としての傾斜変換線も認められない。このことは、山側から古墳平坦面への土砂の流入を防ぐ効果を意図していたものと思われる。

さて、３区では６号墳を除いた２～５号墳の４基は木棺直葬の単葬墳で、６号墳のみ木棺墓を２基設けていた。埋葬施設の規模は６号墳のＳＸ３６１が最も大きく、墓壙長約 6.3 mで、H形木棺の長側板長は約 5.8 m、小口板で囲まれた棺内長は約 4.1 mを測る。次いで規模が大きい木棺墓は２号墳と３号墳の主体部で、棺長はそれぞれ約 3.8 m、約 3.7 mであるが、墓壙長は２号墳が約 5.1 mに対して３号墳が約 5.5 mと逆に大きい。その次には６号墳のＳＸ３６２の棺長約 2.5 m、墓壙長約 3.2 mがあり、４号墳主体部の棺長約 2.2 m、墓壙長約 3.2 mと続く。最も規模が小さかったのが５号墳主体部で、棺長約 1.5 m、墓壙長約 3.1 mとなっていた。なお、６号墳ＳＸ３６１では、自然石を使用した石枕が置かれていた。埋葬施設の規模の差は、そのまま墳頂部平坦面の規模とほぼ比例しており、６号墳が最も広く、次いで２号墳、３号墳と続くが、５号墳の平坦面規模は４号墳よりも広くなっていた。

副葬品では、埋葬施設や墳頂平坦面の規模では６号墳が最大であるが、副葬品や供献用土器の数・種類ともに３号墳が突出しており、鉄刀１・鉄鏃６以上・刀子１に加えて高坏と壺が棺上に置かれていた。６号墳ＳＸ３６１では鉄鎌が１点出土したのみで、２号墳からは長い鉄刀が１点出土した。鉄刀と鉄鎌を品物のランクとして単純には比較できないが、性別による可能性を考慮する必要があると思われる。

３区の各古墳の築造時期は、それぞれの古墳の時期を限定できるほど遺物が出土していないが、３号墳が出土土器から古墳時代中期前半～中葉の５世紀前半～中頃、６号墳で出土した鉄鎌も３号墳と同じ時期のものである。築造順として、２号墳から６号墳まで上から順次築造、あるいは６号墳から２号墳まで下から順次築造されたとするには無理があるように思われる。また、３号墳と６号墳の間には時期不明の４号墳・５号墳が存在しているが、４・５号墳の部分を空けて３・６号墳が先に築造、あるいは３・６号墳の部分を空けて４・５号墳が先に築造されたと判断することについても、違和感は否めない。

したがって、３区の２～６号墳はひとつの墓域として設定され、中期前半～中葉の間に築造された古墳群で、５基の築造位置があらかじめ決められていたと推定しておきたい。すなわち、複数の集団で構

成された同族集団のまとまりが２～６号墳の造墓集団として想定され、同族集団を構成する複数の小集団それぞれの長が２～６号墳の被葬者と考えておきたい。同族集団は血縁紐帯を原則としたもので、その中に含まれる小規模血縁集団は家族的な結びつきを原則としたまとまりと想定しており、現在も一部地域で残っている、「マキ」や「カブ」に近いものと考えている。この集団はほぼ同一地域内で、同じ苗字をもち、家族単位が血縁を紐帯として集合した同族集団で、苗字を冠して「ーマキ」や「ーカブ」と呼ばれ、本家が核となり、家族単位数の数によって規模の大小や、発言力などの勢力に違いがある。

２区（８～10号墳）

２区は３区の尾根南西側裾の扇状地状部分で、幅15ｍほどの狭い尾根上に位置し、標高66.5ｍ～71ｍの間に３基の古墳が築造されていた。８号墳は最も高い位置を占め、そこより山側には古墳は存在していない。９号墳は８号墳と約６ｍの墳裾間距離を置いて築造されており、尾根稜線の傾斜が急であったことと、尾根の幅が狭く、古墳の規模を確保できなかったことによるためと推定している。10号墳は９号墳とは周溝間約２ｍの間隔をおいている。なお、10号墳の南東側、同一小尾根の延長上には数十ｍの距離をおいて19号墳が存在している。

２区の古墳では、主として山側に幅70㎝前後の溝を掘っているが、平面形状は弧状を呈しており、３区のものとは異なり、区画溝ではなく周溝と呼べるものである。９号墳では斜面下側にも弧状の周溝を付設していた。８・９号墳ともに径10ｍ前後の墳丘規模をもち、斜面上側の墳裾よりも墳頂部が高いという特徴をもっている。この状況は、１区の古墳においても認められたことである。これは、立地による差や、尾根稜線に階段状に築造された３区のような、弥生時代から続く伝統的ともいえる築造方法でないことも理由と思われるが、埋葬施設が竪穴系の石組施設であったことにも理由があると思われ、この場合、伝統的な階段状古墳よりも高い墳丘高を確保する必要があったためと推定している。

２区の古墳では８号墳が石室系石棺（箱式石棺）、９号墳がやや規模の小さい竪穴式石室で、10号墳では埋葬施設は残っていなかったが、埋葬施設が検出できたものはすべて石組のものであったことに注意すべきであろう。この点は１区の古墳でも同じ状況であった。あるいは、２区の南西側に所在する谷部分の北東側斜面が８・９号墳の墳丘を削っていることからすると、古墳築造後に土砂流出等によりこの地形になったと判断することもでき、そうすれば、１区という支群古墳群内の小支群の一つであった可能性もあろう。その際にはまた、谷部にかつて古墳が存在していたが、流失したとすることもできよう。ただし、このことはひとつの可能性に過ぎないことから、ここでは考慮せずに先に進むことにする。

８号墳の埋葬施設は塊石を積んだ石室系石棺（箱式石棺）で、棺幅は南側が広く、石枕も残っていたことから、西側頭位であったことが判断できる。９号墳では、塊石積の竪穴式石室が２基並列しており、長さ２ｍ前後、幅60㎝前後の規模なもので、木棺の痕跡は石室床に１段深くなって残っていた。また、石室の幅と短側石の構造から、頭位が判断できた。それによれば、南側のＳＸ２９１は西側頭位、北側のＳＸ２９２では東側頭位と判断でき、２基の並列された埋葬施設の埋葬方向は、いわゆる「差し違え」の方向で埋葬されていた。このことは、３区の６号墳の埋葬施設でも認められたことである。

副葬品は９号墳のＳＸ２９１で鉄鏃２点が検出されたのみで、築造時期を推定する手がかりもこの鉄鏃に限られる。平根の短茎鏃の型式から古墳時代中期末頃の５世紀末頃ととらえており、８・９号墳についても中期末～後期初頭頃の築造と考えている。なお、２区での古墳築造順序は不明である。

１区（11～17号墳）

１区では７基の古墳を調査したが、そのうち11～16号墳の６基が周溝を重複、あるいは墳裾を接して

第７表　尼ヶ宮古墳群調査結果一覧

調査区	古墳名（番号）		墳形	墳丘規模 （m） （平坦面規模）	埋葬施設・（掘形・墓壙規模）						築造時期	備　考
	調査後	調査時			種　別		棺長 （m） 石室長（墓壙長）	棺幅 （計測位置） 石室幅（墓壙幅） （m） （計測位置）	棺高 （m） 石室高 （墓壙高）	副葬品 （墳丘等出土遺物）		
3区	2号墳	1号墳	長方	長辺約 16.0 （約 9.5 ×約 6.0）	木棺直葬		約 3.8 （5.1）	約 0.8 （2.85）	約 0.5 （0.84）	鉄刀（長さ約 93 cm）	中期中葉 （5 世紀前半～中頃）	南側頭位
	3号墳	2号墳	長方	長辺約 10.0 （約 7.0 ×約 7.0・約 4.6）	木棺直葬		約 3.7 （約 5.5）	約 0.75（北）　約 0.6（南） （約 2.2）	約 0.25 （0.7）	鉄刀・鉄鏃・刀子 （土師器高坏・壺片）		北側頭位
	4号墳	3号墳	方	東西約 6.1 （一辺約 4.5）	木棺直葬		約 2.2 （約 3.2）	約 0.6（北）　約 0.6（南） （約 1.5）	約 0.4 （約 0.65）	—		
	5号墳	4号墳	方	東西約 7.5 （約 6.0 ×約 5.0）	木棺直葬		約 1.5 （約 3.1）	約 0.4 （約 1.5）	約 0.4 （約 0.5）	—		南側頭位？
	6号墳	5号墳	長方	東西約 12.0 （約 11.0 ×約 8.5）	木棺直葬	ＳＸ 361	約 4.1（約 5.8） （約 6.3）	約 0.8 （約 1.95）	0.55 （1.08）	鉄鎌		北側頭位（石枕）
						ＳＸ 362	約 2.5 （約 3.2）	約 0.5（南）　約 0.45（北） （約 1.2）	推定 0.4 （0.48）	—		南側頭位
2区	8号墳	1号墳	円	径約 11.4	箱式石棺		1.84 （約 2.8）	0.47（南西）　0.34（北東） （約 1.8）	0.55 以上 （0.45）	（須恵器片）	中期末頃 （5 世紀末頃）	礫床・枕石・南西側頭位
	9号墳	2号墳	円	径約 9.5	竪穴式石室	ＳＸ 291	推定約 1.9 約 1.9	推定約 0.55（西南西）　推定約 0.45（東北東） 0.70（西南西）　0.50（東北東）	不明 0.53 以上	鉄鏃２		木棺痕跡・西南西側頭位
						ＳＸ 292	約 1.8 約 2.2	約 0.55（東北東）　約 0.4（西南西） 約 0.7（東北東）　約 0.48（西南西）	不明 約 0.5 以上	—		木棺痕跡・東北東側頭位
	10 号墳	3号墳	円	推定径約７	—		—	—	—	—		埋葬施設検出されず
	ＳＸ－１		—	—	小型箱式石棺		推定約 0.8 （残存長 0.3）	0.21 （北西）	0.2 以上	—		底石
1区	11 号墳	1号墳	円	径約 12.8	—		—	—	—	（須恵器甕片・土師器甕片）	後期前葉 （6 世紀前半）	埋葬施設検出されず （MT15 ～ TK10）
	12 号墳	2号墳	円	径約 12.2	石室系石棺		2.2 （約 3.6）	0.6（南）　0.53（北） （推定 1.9）	0.6 前後 （約 1.0）	刀子 （須恵器坏・土師器高坏脚）	後期前葉 （6 世紀前葉）	蓋石完存・石枕・南側頭位 （MT15）
	13 号墳	3号墳	円	径約 9.8	石室系石棺		2.2 （約 2.9）	0.6（北西）　約 0.54（南東） （約 1.9）	0.42 以上 （0.47）	刀子 （須恵器甕片・土師器高坏片）	中期後半 （5 世紀後半）	石室上部崩壊・石枕・北西側頭位 （TK208 ～ TK23）
	14 号墳	4号墳	円	径約 8.8	竪穴式石室		約 1.9 2.1	約 40（南南西）　約 30（北北東） 54（南南西）　50（北北東）	0.28 以上 0.48 以上	（土師器壺） （土師器高坏・坏）	中期末～後期前葉 （5 世紀後葉～6 世紀前葉）	木棺痕跡・南南西側頭位 （TK23 ～ MT15）
	15 号墳	5号墳	円	径約 10	石室系石棺		1.1 程度 （約 2.2）	約 0.45（西北西）　0.40 弱（東南東） （約 1.4）	推定約 0.35 （約 0.4）	（須恵器甕片） （土師器小型鉢）	後期前葉 （6 世紀前半）	蓋石落下・上部崩壊 西北西側頭位
	16 号墳	6号墳	円	径約 10.2	竪穴式石室		— 1.9 以上 （2.72 以上？）	— 0.69（北北西）　0.65（南南東）	— 0.45 以上	土師器高坏・坏 （須恵器甕）	中期後半 （5 世紀後半）	石室上部崩壊 北北西側頭位 （TK208）
	17 号墳	7号墳	円	径約 8.6	木棺直葬		0.6 以上 （0.6 以上）	推定 0.45 （0.85）	0.5 以上 （0.5 以上）	（須恵器坏身）	後期前葉 （6 世紀前葉）	割竹形木棺 （MT15）
	小石棺		—	—	小型箱式石棺		約 0.45	約 0.35	0.2 以上	—		蓋石残存・14 号墳関連？

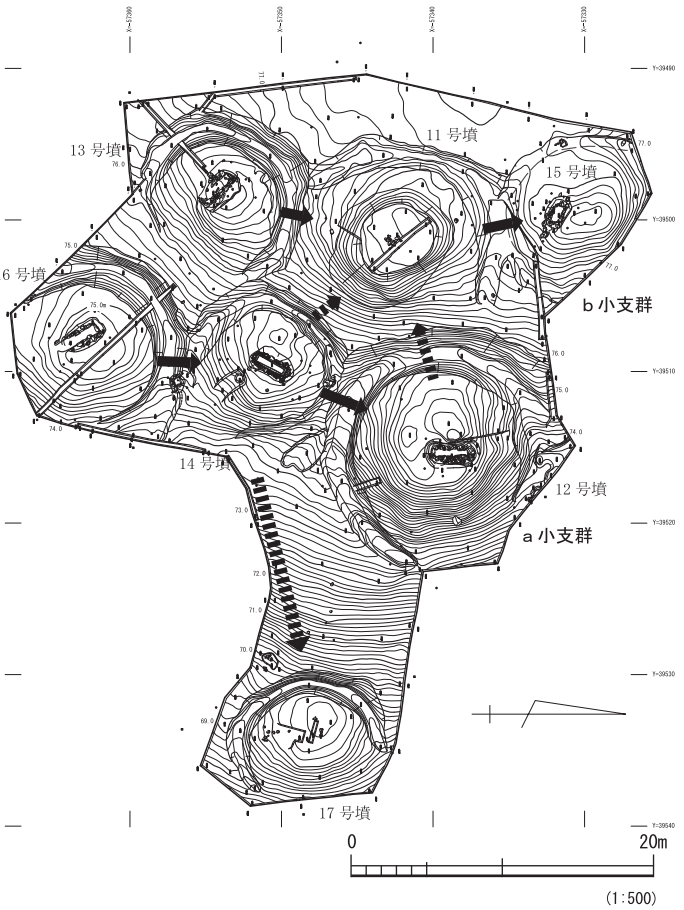
集中して存在していた。これらは、標高 74 ～ 77 m程の台地上に築造されている。なお、第３図では表示されていないが、11・13・15 号墳の西側調査区外は幅数mの緩斜面を経て、その西は傾斜変換線まで湿地状の低い地形となっているため、古墳は築造できない。また、西側尾根上に小規模な 18 号墳が離れて存在しているが、２区の８～ 10 号墳以外には近接した古墳は存在しておらず、11 ～ 16 号墳の群集状況から見れば、この６基あるいは 17 号墳も含めた７基で一つの支群を形成しているとみることができよう。

１区の 11 ～ 17 号墳はすべて円墳で、やや楕円形のものもみられた。すべて幅 1.5 ～３m程度の周溝をめぐらしているが、多くは斜面下側には周溝を有しない。11 ～ 16 号墳の直径は約９～ 13 mで、17 号墳は 8.6 m程度とやや小規模である。また、墳頂部の高さが斜面上側より高いものが殆どで、11 号墳では特に顕著であった。これらの６基のうち、11 号墳を除いた５基は埋葬施設がすべて石組のものであり、すべて単一埋葬となっていた。古墳の形態と埋葬施設の種類が２区の８・９号墳と同様となっている。その埋葬施設は、木棺の痕跡や石組の規模から、やや小型の竪穴式石室と判断したものが 14・16 号墳の２基、塊石積で一見して石室と思えるが、その規模などから石室系石棺（箱式石棺）と判断したものは 12・13・15 号墳の３基である。

本支群における埋葬施設は墳丘の中心からずれた位置に構築されていることが特徴としてあげられ、13･15･16 号墳では特に顕著で､中心から１m前後ずれている。他に埋葬施設が検出されなかったことから、単一の埋葬施設であるにもかかわらず、このような位置に埋葬施設を設ける意味は不明である。また、埋葬施設が設けられた高さは、12 号墳では残存墳頂部から約 40 ㎝下に蓋石があり、13・15・16 号墳も同様に、墳頂部から浅い位置に埋葬施設が設けられていたと想定できる。一方、14 号墳では、残存墳丘高が低いうえに、さらに残存墳頂部から約 70 ㎝下に残存石室上端部があり、天井石が存在していたとすれば、天井石上面が 50 ㎝程度下にあたり、他の古墳との差は少なくなる。

この点からも、14 号墳の石室には蓋石が存在していたものの、後世に抜き去られたと想定しておきたい。また、竪穴式石室は箱式石棺よりも上位に位置付けられる埋葬型式と判断できることも蓋石存在推定の傍証となろう。

１区の古墳群は出土遺物により、古墳時代中期後半～後期前葉の５世紀中頃～６世紀前葉の数十年の間に営まれた古墳群であることが判明したが、さらに、周溝の重複状況や等高線に平行な各古墳の位置関係から、東側の列の３基と西側列の３基がそれぞれ別のａ・ｂ小支群とする



第 122 図　尼ヶ宮古墳群１区の古墳築造順序

ことが可能であると思われ、それぞれが南から北側に順に築造されていたと判断している。

１区内で最初に築造されたのはｂ小支群の 16 号墳で、出土土器からＴＫ 208 型式期と判断され、次いでａ小支群の 13 号墳がＴＫ 208 型式期～ＴＫ 23 型式期、その後の築造順は１区の小結に記述しているとおりであるが、ａ小支群の 16 号墳の次にｂ小支群の 13 号墳が築造された後、ａ小支群の 14 号墳が築造され、その後ｂ小支群の 11 号墳築造というように、最初は小支群間で交互に築造されている。ただし、11 号墳の築造時期がＭＴ 15 型式期～ＴＫ 10 型式期とやや幅広いことから、12 号墳築造よりも前あるいは後のどちらであったかについては厳密に解明できない。

このように小支群が列状に配置されていると判断されている例は、兵庫県小野市中番古墳群（水野正好 1974）や、横穴式石室墳では兵庫県西脇市寺内古墳群（岸本一郎 2004）があり、寺内古墳群では等高線に沿って並ぶことも共通している。ただし、寺内古墳群では盟主墳とされる７号墳が存在しているが、尼ヶ宮古墳群の１区内では認められないものの、第４図の尼ヶ宮 19 ～ 22 号墳は規模・墳丘高ともに群中では目立った存在であり、丘陵先端に位置する尼ヶ宮 27 ～ 29・33 号墳の一群は規模が最も大きいことからすると、築造時期が不明であるものの、この二つの小支群を尼ヶ宮古墳群の盟主的古墳のグループとして捉えることも可能であろう。寺内古墳群のように盟主墳が単独で存在しているわけではないが、尼ヶ宮古墳群における古墳時代中期～後期前葉にかけてはこのような群構造と捉えることができるものと思われ、このような複数の小支群の集まりと古墳の規模によって、尼ヶ宮古墳群築造集団とそれを構成する小集団の数や優劣差を推定することができるであろう。

１区では副葬品として出土したのは、土器以外には鉄刀子に限られ、しかも 12 号墳と 13 号墳以外では出土しなかったことに加えて、平地に面した丘陵上ではなく、かなり奥まった位置に築造されていることから、尼ヶ宮古墳群の造墓集団内では上位集団ではなかったと想像している。

２．各古墳埋葬施設の埋葬頭位

尼ヶ宮古墳群１～３区の発掘調査では、副葬品の配置や埋葬施設の形態などを根拠として、多くの埋葬施設で埋葬頭位を判断することができた。

３区

３区では、中期中葉に築造された古墳５基の埋葬施設である木棺墓６基のうち、４基の埋葬施設で埋葬頭位を判断し、１基で埋葬頭位を推定した。

２号墳の主体部であるほぼ南北方向の木棺墓では、棺の北端・南端で棺幅に差はなかったが、東側棺側に沿うように鉄刀が検出された。刀の切先は北側であったことから、切先は被葬者の足側に向け、被葬者の右体側に置かれ、頭位は南側であったと判断できた。刀剣が副葬されていた場合、切先は被葬者の足側に向けらるのが一般的である（用田正晴　1980、宇垣匡雅　1997 年など）とされ、尼ヶ宮古墳群３号墳においても同様の状況であった。このことからも尼ヶ宮古墳群２号墳の埋葬方向が南頭位であったと判断できよう。さらに、尼ヶ宮古墳群２・３号墳では、刀は被葬者の右体側に置かれていたことも判断できた。

尼ヶ宮３号墳では、刀の切先が南側に向けられて副葬されていたことに加え、北側の棺幅が南側よりも広く、棺底のレベルも南側より約 10 ㎝高くなっていた。また、棺上または墓壙上に置かれていたと判断できた土器は棺の北部に偏っていたことも、北側頭位であったことの傍証とできよう。

このように、尼ヶ宮３区の２号墳は南頭位、３号墳は北頭位と逆方向であった。

６号墳では南北に近い方向に構築された２基の木棺墓を検出したが、西側の長大なＳＸ３６１では、自然礫の石枕が北側に置かれ、さらにその北には鉄鎌が置かれていたことから、北側頭位であったことが確認できた。なお、棺幅には差は認められなかった。一方、東側の木棺墓ＳＸ３６２では、南側の棺幅が北側よりも若干広くなっており、南側頭位と推定している。

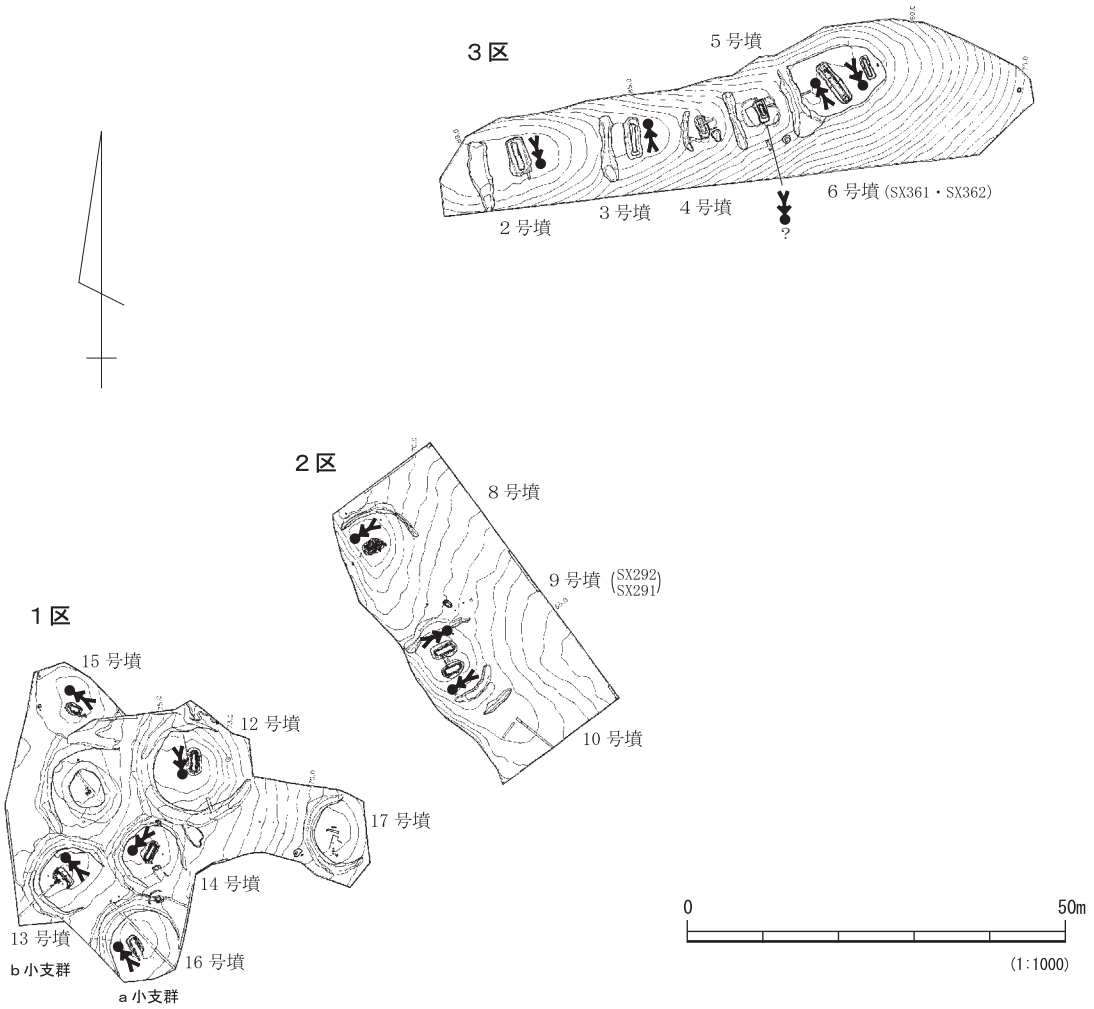
２区

８号墳の主体部である石室系石棺（箱式石棺）では、南西側の棺幅が広く、自然礫の石枕が置かれていたこと、棺底の高低差から南西側頭位で埋葬されたと判断できた。また、棺の小口壁は頭側に大型の礫が使用されていた。

９号墳では、２基の竪穴式石室が平行して構築されていたが、石室の幅および短側壁の使用石材の大小により、北西側のＳＸ２９２は北東側頭位、南東側のＳＸ２９１が南西側頭位と判断でき、「差し違え」方向となっていた。さらに、８号墳に近い側のＳＸ２９２の頭位は、８号墳の頭位とは逆方向になっていることにも注意しておきたい。なお、ＳＸ２９１に副葬されていた鉄鏃（矢）は被葬者の右体側に置かれ、先端を足側に向けていた。

１区

１区では、ａ小支群の 12・14・16 号墳、ｂ小支群の 13・15 号墳の各埋葬施設で埋葬頭位を判断・推定することができた。



第 123 図　尼ヶ宮古墳群調査区全体図と埋葬方向

ａ小支群の 12 号墳では石室系石棺（箱式石棺）とした南北方向の埋葬施設の棺底に自然礫の石枕が置かれていたことから、南側頭位と判断できた。なお、刀子は足側の棺内北端で、切先を東に向けた方向で検出された。14 号墳では、竪穴式石室の木棺痕跡および石室で南側が幅広く、南短側壁に使用されていた礫が北側のものより大きいことから南側頭位で葬られていたと判断した。12・14 号墳における埋葬頭位は、まったく同じ方向ではなく、14 号墳がやや西に振れている。方位に合わせたというよりも、地形の等高線と平行方向になっているようにみえる。

16 号墳では、規模から竪穴式石室と判断した主体部の北側の幅が広いことや北短側壁に大きな礫を使用していたことから、北西側頭位と推定できた。なお、16 号墳が築造された部分は、台地の南東隅部分にあたり、小規模であるものの、舌状に緩傾斜面が続いていた。ａ小支群のなかでも、16 号墳の埋葬方向は大きく異なり、12･14 号墳においては南側頭位であるが、厳密には 33°方向が異なっている。

ｂ小支群の 13 号墳では、石室系石棺（箱式石棺）と判断した主体部の幅の差と小口石の大きさ、自然礫石枕の存在および棺底の高さから、北西側頭位であると判断できた。また、出土した刀子は被葬者の右体側で棺主軸と平行方向で検出し、切先を足側に向けていた。15 号墳では小規模な石組であることから主体部は石室系石棺（箱式石棺）と判断した。小口石の大きさと石棺幅から北西側頭位と判断した。13 号墳と 15 号墳の埋葬頭位は厳密には 20°異なっており､15 号墳の頭位がより西側に振れている。

13・15 号墳の頭位を 16 号墳と比較すると、16 号墳の頭位が最も北に近く、15 号墳との差は 33°、13 号墳とは 20°異なっている。13・15 号墳の埋葬方向と直交するものは等高線が最も近く、16 号墳についても同様のことがいえる。

12・14 号墳の埋葬方向に近いものも、地形の等高線であり、埋葬方向と等高線がほぼ平行になっている。12・14 号墳が築造された部分は、台地状地形の東端にあたり、平坦な面から傾斜面に変換する部分である。一方、北西方向に頭位をとる 13・15・16 号墳の立地は傾斜面を含んでいない。このような地形の差により埋葬方向が決められた可能性を考えておきたい。すなわち、斜面地では等高線と平行方向、水平に近い部分では等高線と直交方向で、頭位は高い方にとっていたと推定しておきたい。しかし、頭位については、南や南西、北西といった方向にばらつきがあり、方位を意識していたかどうかの判断がつかない。

小結

尼ヶ宮古墳群の埋葬方向は、２区・３区では尾根と直交方向に埋葬施設を設けることは共通していたが、方位を重視したとは言えない状況であった。また、２方向に分かれそうな１区においても、方位を意識したかどうかの判断はできなかった。

但馬地域の古墳のうち、直径 40 ｍの若水古墳（岸本一宏編 2009）や直径約 36 ｍの城ノ山古墳（櫃本誠一編　1972)、直径 90 ｍの茶すり山古墳（岸本一宏編 2010）では、いずれも東を中心とした方向に頭位が置かれており、但馬地域の大型古墳では東側頭位という統一性原則がみられる。一方、小規模古墳である尼ヶ宮古墳群の場合、尾根稜線に築造された場合には尾根稜線と直交方向に埋葬していたが、頭位では方位に統一性が見られず、方位には無頓着ともいえる。ただし、一列に築造された２・３区の古墳では、古墳ごとおよび埋葬施設ごとに埋葬方向が逆になっていることに注意しておきたい。このように「差し違え」方向に頭位を置く理由は、現在のところ用意できていない。さらに、１区のように広い台地上に築造された場合には、大きく２つの方向のようにも見えるが、ばらつきが多く、等高線に平行・直交する方向の２者といった程度はいえるが、厳密な方向の原則の有無は見いだせなかった。

第２節　竪穴系石組埋葬施設で構成される古墳群

１．尼ヶ宮古墳群１・２区（８・９・12～16号墳）の特徴

尼ヶ宮古墳群では、１区と２区でやや小型の竪穴式石室や石室系石棺（箱式石棺）といった、石組の埋葬施設が多く検出された。これらの石組埋葬施設を横穴式石室や竪穴系横口式石室とは区別して、竪穴系石組埋葬施設と呼ぶことにする。

２区では８～10号墳の３基のうち、埋葬施設が検出されなかった10号墳を除いて、８号墳では石室系石棺（箱式石棺）、９号墳では小型の竪穴式石室２基を埋葬施設としていた。１区においては、11号墳～17号墳の７基の古墳のうち、埋葬施設が検出されなかった11号墳と、木棺墓を主体部とした17号墳以外の12号墳～16号墳の５基が竪穴系石組埋葬施設を採用していた。12号墳～16号墳は、11号墳も含めて非常に近接してまとまって存在しており、尼ヶ宮古墳群の一支群ととらえるべきものである。また、２区についても同様に支群ととらえるべきであろう。すなわち、支群を形成する古墳９基のうち、埋葬施設が判明したすべての古墳にあたる７基において竪穴系埋葬施設が採用されていたことになり、施設の総数は８基となっていた。

その内訳は、竪穴式石室が３古墳（９・14・16号墳）で４基、石室系石棺（箱式石棺）と呼べるものが４古墳（８・12・13・15号墳）で４基となっている。

横穴式石室墳を除くと、木棺墓を埋葬施設とする古墳は但馬地域で一般的であり、これまで調査が行われた古墳群においても、埋葬施設の主体をなすのは木棺墓で、そのなかに箱式石棺や竪穴式石室、石室系石棺が少数含まれているにすぎない。尼ヶ宮古墳群のように、ほぼすべてが竪穴系石組埋葬施設で構成される古墳群の支群の存在は、但馬地域において特異な存在といえる。

また、但馬地域以外においても、管見では韓国以外でこのような状況は知り得ない。この状況が本古墳群に限った状況といえるか否かを確認するために、周辺の古墳群の埋葬施設を検討する。

２．尼ヶ宮古墳群周辺での類似例の有無

近隣の竪穴式石室の独立墳・竪穴系横口式石室の古墳群

尼ヶ宮古墳群周辺において竪穴式石室を埋葬施設とする単独墳は、昭和31年に発掘された馬場ヶ崎（先）古墳（櫃本誠一　1980）（第１図72）に限られる。墳丘形態や規模は不明であるが、円筒埴輪片が出土している。石室は川原石を積み上げて構築されたもので、全長2.58ｍ、幅1.05ｍ、高さ60㎝あり、天井石は端から中央付近までの３枚が大型の１枚石で、他の部分はやや小型の石を重ねて天井を覆っていた。石室床面には大型礫と砂利が敷かれており、木棺の置台と考えられる礫が４個見いだされている。石室内からは刀・剣・鐙といった鉄製品のほか、玉類が多数出土したらしい。鐙の出土から、中期中頃以降の古墳と考えられる。

竪穴系横口式石室の例ではあるが、大師山古墳群（瀬戸谷　晧・潮崎　誠　1993）（第１図62）では、調査された13基の古墳のうち、10基が竪穴系横口式石室か竪穴式石室もしくはそれらに類似した埋葬施設で、６世紀前半～６世紀後半に築造されたものである。調査された石室が、細部に小異があるものの、竪穴系横口式石室ばかりであったことから、強烈な個性が発揮された古墳群と意義付けられ、被葬者が半島からの渡来人と想定されるものの、遺物の上からは渡来系の色彩は窺えなかったとされている。

近隣の竪穴系石組埋葬施設

尼ヶ宮古墳群の近隣では、小山３号墳（第１図９）のほか、北近畿豊岡自動車道建設に伴って調査された藤井１号墳（第１図 51)、大木谷 17 号墳（第１図 48)、竹貫 23・24 号墳（第１図 52）などで竪穴系石組埋葬施設が検出されているが、多くが不明な竹貫古墳群を除き、古墳群中に占める石組埋葬施設の割合は少数であり、古墳群の全体もしくは大半が竪穴系石組埋葬施設とはなっていない。一方、『日高町史』によれば、稲葉川流域には訓原４号墳、猪子垣２・17 号墳など未調査でも竪穴式石室とされているものがあり、近江谷・荒神山などの各古墳群は１～ 1.5 ｍという墳丘高などから竪穴式石室が想定される。一方、日高町域の円山川東岸においても宮ノ谷１～３号墳が竪穴式石室とされており、姫路山・西ノ谷・才谷・上ノ郷・満仲谷などの各古墳群も竪穴系石組埋葬施設と想定されものがある。以下、これらをもう少し詳細に述べ、竪穴系石組埋葬施設で構成されるか否かにより、当地域の地域的・時期的特色の有無を判断し、大半が竪穴系石組埋葬施設であった尼ヶ宮古墳群１・２区の評価を行うことにする。

訓原古墳群（第１図２）　１～４号墳の４基の古墳が集中して存在する部分があり、４号墳が竪穴式石室であることが判明していた。踏査の結果、４号墳は墳丘高 1.5 ｍ程度で、長さ約 3.2 ｍ、幅約 0.8 ｍの竪穴式石室が確認できた。残り３基の古墳は埋葬施設が不明であるが、墳丘上に石材は認められず、墳丘も低平であることから、石室以外の埋葬施設であろう。

猪子垣古墳群（第１図 13）　18 基の古墳が丘陵上に群在しており、そのうち２・17 号墳が竪穴式石室とされていた。10 基程度の古墳を踏査した結果、２号墳では石室を確認することができず、周辺に石材の散乱も認められなかった。また、他の古墳は丘陵尾根上に階段状に築造された、但馬・丹後型の低墳丘のもので、但馬地域においては埋葬施設が竪穴式石室である例は極めて少ない。仮に箱式石棺であってもその数は少ないものと推定される。

近江谷古墳群（第１図 15）　18 基が北と南の２群に分かれて存在しており、北群はかつて城山古墳群と呼称されていた。南群では尾根稜線上に低平な墳丘のものが並んでおり、埋葬施設は木棺直葬など石室以外のものと想定された。北群の近江谷（城山）群でも尾根稜線上に階段状に連続して築造されていたことから、南群と同様の埋葬施設と推定できた。

荒神山古墳群（第１図 16）　16 基が３本の尾根に分かれて稜線上に築造された古墳群で、墳丘高は約１ｍであるが、立地から近江谷古墳群と同様であると推定される。

赤城古墳群　７基が独立に近い丘陵の尾根稜線に存在しており、墳丘高が 1.5 ｍであることから、石室である可能性があるが、確認できなかった。

満仲谷古墳群・上ノ郷古墳群（第１図 65・66）　円山川右岸で、谷を挟んだ両側の丘陵尾根上に立地するが、詳細は不明である。なお、東側の豊岡市中郷地区では箱式石棺は認められるものの、竪穴式石室はこれまで見つかっていない。

才谷古墳群（第１図 69）　15 基が東西二つの尾根に分かれて存在しており、西側の８基が比較的幅広い尾根上に立地している。踏査の結果、３～５号墳は低平な墳丘で、埋葬施設は竪穴式石室とは考えにくい。

西ノ谷古墳群（第１図 70）　墳丘高１～ 1.5 ｍの９基の古墳が尾根稜線上に位置しており、立地的には竪穴式石室の可能性は低いと推定される。

姫路山古墳群（第１図 79）　30 基あまりの古墳が、比較的幅広い丘陵上に位置していることから、石室の可能性が高いと推測されたが、斜面尾根稜線上のものは但馬・丹後型の階段式、頂部の尾根稜線上

のものも低平な墳丘で、埋葬施設が竪穴式石室とは考えにくく、石材の散乱も認められなかった。ただし、古墳群中央部で一部損壊した小型箱式石棺が露出していた。

まとめ

尼ヶ宮古墳群周辺における、横穴式石室以外で、墳丘高１～1.5ｍの古墳群をいくつかみてきたが、竪穴式石室を確認できたのは訓原古墳群に限られ、しかも群中の１基に限られている可能性が高く、それ以外の古墳群において竪穴式石室は確認できず、その可能性も低いことが判明した。また、近年調査された十戸所在の小山３号墳や山本所在の大木谷 17 号墳、竹貫所在の藤井１号墳（渡瀬 2016）といった竪穴式石室墳も木棺直葬などの他の埋葬施設の古墳群中の１基に過ぎない。竹貫所在の竹貫 23・24 号墳は調査された２基が竪穴式石室であったが、群中の他の古墳の内容が不明である。

これらの結果、尼ヶ宮古墳群のように、古墳群中の埋葬施設の大半が竪穴式石室や石室系石棺（箱式石棺）である古墳群はほぼ、他に例がない可能性が高いことが判明した。このような竪穴系石組埋葬施設という埋葬型式のみを採用した理由は不明であり、竪穴系石組埋葬施設と木棺直葬の採用の差、石室系石棺と箱式石棺において差がどこにあるのかなど、課題は山積している。また、竪穴系横口式石室は竪穴系石組埋葬施設よりも後出するが、６世紀初頭から出現し、横穴式石室と融合しながら７世紀まで築造されている。この竪穴系横口式石室と竪穴式石室・石室系石棺（箱式石棺）との違いや関係性もこれからの課題である。

今回発掘調査を実施した、竪穴系石組埋葬施設墳のみで構成される、尼ヶ宮古墳群１・２区のような古墳群支群は、近隣や但馬地域においても稀であることが判明し、特異な古墳群支群と位置づけることができた意義は大きい。

第３節　再び竪穴系石組埋葬施設の呼称について

１．はじめに

今回調査した尼ヶ宮古墳群においては、竪穴系石組埋葬施設として箱式石棺と竪穴式石室の２者が存在していたが、その峻別は難しいものであった。かつて、芝花古墳群報告書の中で、芝花９号墳の埋葬施設を「小型竪穴式石室系石棺」あるいは「竪穴式石室系石棺」または「小石室系石棺」と呼称して他遺跡の類例から検討を加えた結果、長側壁の組み方で分類できる可能性を考慮しつつも、内部に棺を入れる幅を有するか否かの基準により、棺幅が 50 ㎝程度以下のものを「石棺」と呼称すべきとの提唱を行った（岸本一宏 2008）。内部に棺を納めるか否かにより石室・石棺と呼び分ける立場に変更はないが、今回の尼ヶ宮古墳群の調査結果により、単に幅の数値だけで明瞭に区別できるものではないことが判明した。

尼ヶ宮古墳群においては、芝花９号墳と同様の塊石積の石組埋葬施設が８基検出されたが、頭側の棺幅が 47 ㎝、足側で 34 ㎝と極めて狭い８号墳の埋葬施設は迷わずに箱式石棺と呼称できた。しかし、その他７基の石組埋葬施設は８号墳埋葬施設よりも幅広く、いずれの長側壁も８号墳と同様の塊石積であったことから、棺と石室を区別するには困難を伴った。その中にあって、９号墳の２基の埋葬施設と 14 号墳の埋葬施設では石室内に木棺の痕跡をとどめていたことにより、それら３基の埋葬施設を竪穴式石室と呼称することができた。それら以外の判断基準としては、石棺とした８号墳の埋葬施設には石枕が伴っていたが、石室とした９・14 号墳の埋葬施設には存在していなかったことにより、石枕が伴うものを石棺とする前提により、石枕が伴っていた 12 号墳・13 号墳の埋葬施設を石棺、石枕が遺存していなかった 16 号墳の埋葬施設を石室と判断した。各古墳埋葬施設の呼称と幅等の数値は以下のとおりである。

８号墳　石室系石棺（箱式石棺）　頭側幅 47 ㎝、足側幅 34 ㎝　棺長 184 ㎝　高さ 55 ㎝以上

12 号墳　石室系石棺（箱式石棺）　頭側幅 60 ㎝、足側幅 53 ㎝　棺長 220 ㎝　高さ 60 ㎝

13 号墳　石室系石棺（箱式石棺）　頭側幅 60 ㎝、足側幅 54 ㎝　棺長 220 ㎝　高さ 42 ㎝以上

15 号墳　石室系石棺（箱式石棺）　頭側幅 45 ㎝、足側幅 40 ㎝弱　棺長 110 ㎝　高さ推定 35 ㎝

９号墳ＳＸ２９１　竪穴式石室　頭側幅 70 ㎝、足側幅 50 ㎝　棺長 190 ㎝　高さ 53 ㎝以上

９号墳ＳＸ２９２　竪穴式石室　頭側幅 70 ㎝、足側幅 48 ㎝　棺長 220 ㎝　高さ 50 ㎝以上

14 号墳　竪穴式石室　頭側幅 54 ㎝、足側幅 50 ㎝　棺長 210 ㎝　高さ 48 ㎝以上

16 号墳　竪穴式石室　頭側幅 69 ㎝、足側幅 65 ㎝　棺長 190 ㎝以上　高さ 45 ㎝以上

上記のように、石組埋葬施設の頭側の幅は 54 ㎝で竪穴式石室、60 ㎝でも石室系石棺となって呼称が交錯し、長さにおいては 15 号墳の小型のものを除き、石棺も石室もほぼ等しい結果となった。

２．但馬地域における箱式石棺の分類と変遷

尼ヶ宮古墳群の竪穴系石組埋葬施設のうち、石室系石棺（箱式石棺）としたものの長側壁体は竪穴式石室としたものも含めすべて塊石積であり、竪穴式石室と共通性が認められた。一方で、一般的に箱式石棺とされるものの長側壁体は、板状の自然石や加工石を立てるものであり、尼ヶ宮８号墳などの埋葬施設の石組とは異なっている。そこで、尼ヶ宮古墳群の石室系石棺（箱式石棺）とした塊石積の形態のものについて、但馬地域の箱式石棺のなかでの位置づけや評価を行いたい。なお、ここでは長さ１ｍ以下の小型のものは扱わない。

但馬地域内で調査された箱式石棺は、管見にふれたものだけでも 80 例以上にのぼり、しかもこの数

は長さ１m以下の小型石棺を除いたものである。多数が調査されているにもかかわらず、研究は殆ど進んでおらず、その原因としては所属時期が確定しないものが多いことがあげられよう。しかし、芝花古墳群報告書の中で指摘したように、箱式石棺の長側壁の石組形態にはいくつかの種類があることがわかっている。以下では、所属時期がある程度つかめる但馬地域の箱式石棺について、尼ヶ宮古墳群の石組形態を位置づけるために、長側壁の石組形態の分類を行うことからはじめる。

但馬地域における箱式石棺の分類（第 124 図）

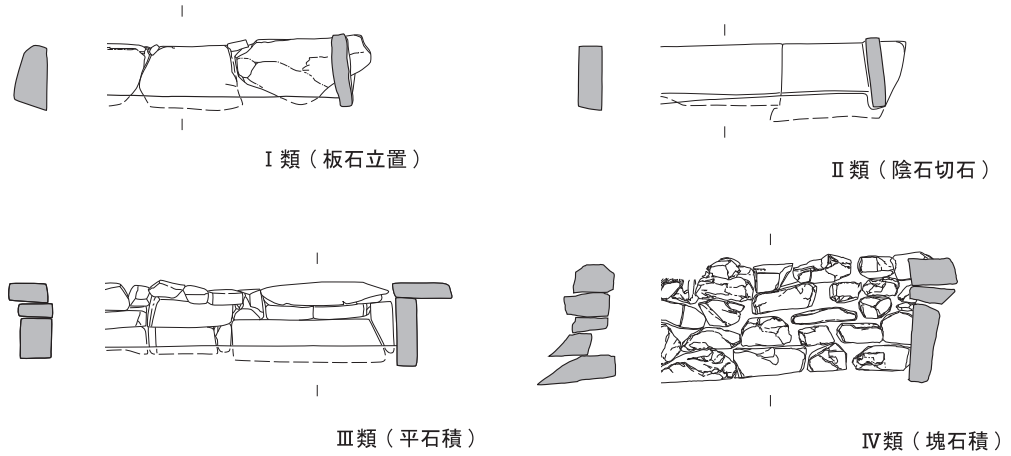
但馬地域の箱式石棺には、長側壁に板状の自然石を立てる形態が最も多くを占め、しかもほぼすべてが長辺を水平にして、短辺を立てる形態である。これをⅠ類とし、板石立置と呼称する。この形態のものは、そのすべてにおいて「箱式石棺」と呼称されるものである。但馬地域においては、この形態を有しながら、地元で産出する凝灰岩の節理を利用して板状に切り出した「陰石」を使用石材とするものがあり、これをⅡ類（陰石切石）とする。Ⅱ類では、程度の差はあるものの、切石の表面調整を行うものが大半である。

板石立置とは対照的に横位に積み上げ（長手積）た、いわゆる割石積のものも存在する。この一群をⅢ類（平石積）とする。この形態のものは､前期の大型古墳などの竪穴式石室と類似していることから、これまで竪穴式石室と呼称されている場合が多い。Ⅳ類の塊石積と分類したものは、芝花９号墳や尼ヶ宮古墳群内などに認められたもので、但馬地域では竪穴式石室の長側壁の形態と共通している。

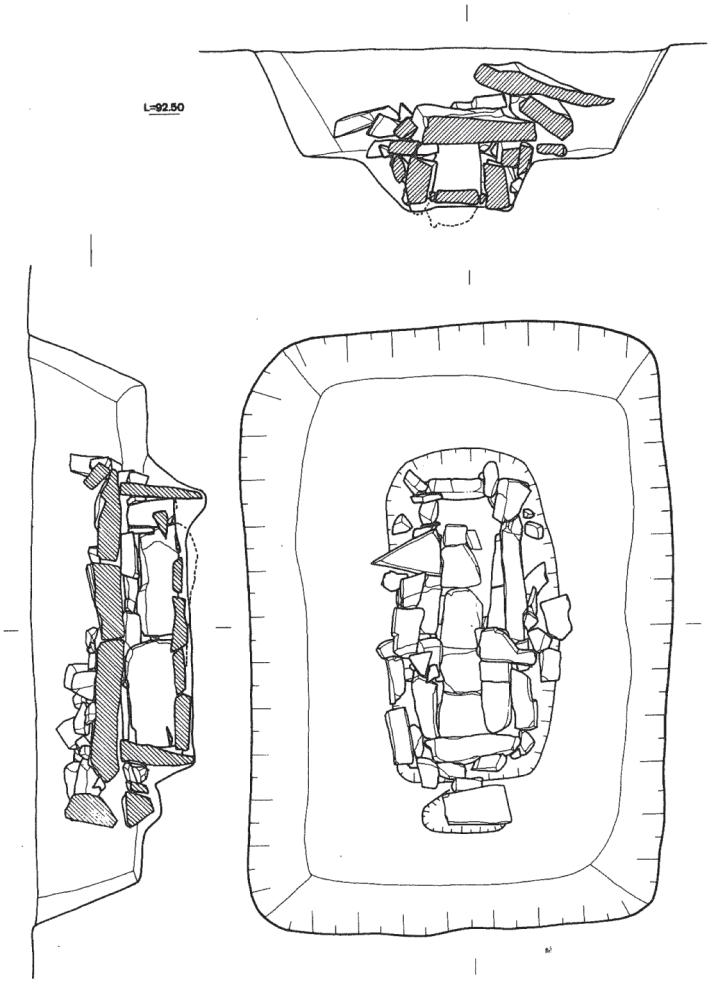
以下、これらの分類をもう少し詳細にみてみることにする。

Ⅰ類（板石立置）（第 125 図）　但馬地域で最も多く認められる形態で、所属時期が判断できるものでも管見で二十数例にのぼる。長側石はほぼすべてが１段組みで、養父市小山３号墳第１主体例では一部２段積となっているが、４世紀後半とされる前期のものである。所属時期は前期から後期まであり、特に時期的に集中している様子は認められない。もっともオーソドックスな箱式石棺形態といえよう。

蓋石には、さらに上に石を重ねて重厚にしているものは前期～中期後半、蓋石間など一部分を重ねている例は中期中葉～後期に認められるが、蓋石をほとんど重ねないものも前期～後期まで認められるようである。棺内の礫敷や石枕が認められるのは半数以下である。棺内の長さは 204 ㎝の朝来市市条寺１号墳第１主体部が最も長い。Ⅰ類の頭側の幅は 29 ㎝～ 52 ㎝で 40 ㎝前後が最も多く、足側幅では 20 ㎝～ 40 ㎝で 30 ㎝前後が最も多い。このように、Ⅰ類では頭側と足側で 10 ㎝程度の幅の違いが認められる。また、10 例ほどで人骨が遺存していたが、12 歳～ 15 歳から 60 代の熟年まであり、男女・年齢等での



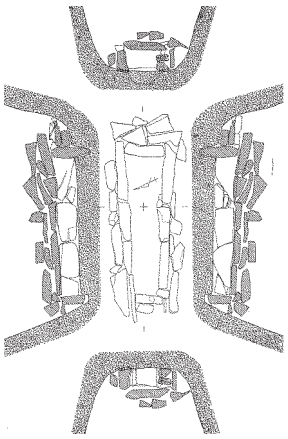
第 124 図　但馬地域における箱式石棺の分類模式図



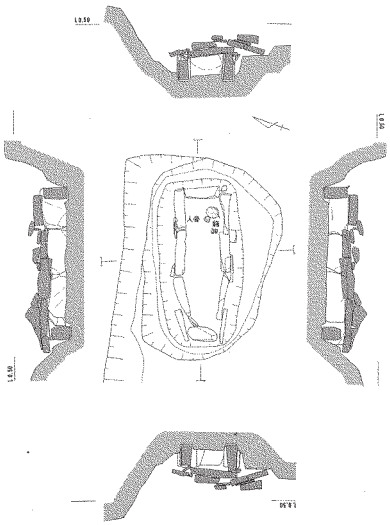
箱式石棺Ⅰ類（養父市小山３号墳第１主体）

0　2m

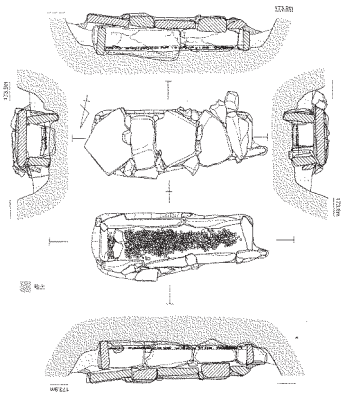
(1:50)



１　朝来市秋葉山２号墳第４主体部



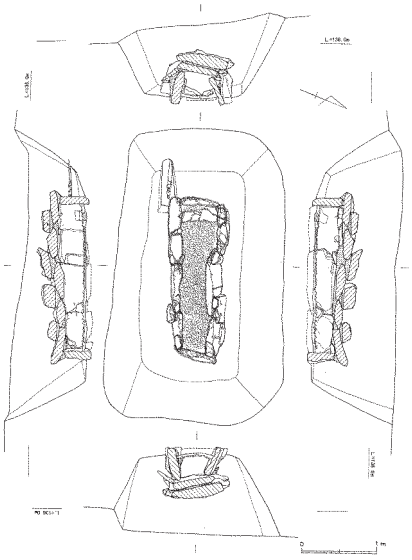
２　豊岡市田多地６号墳第２主体



３　朝来市向山 11 号墳第２主体部

0　5m

(1:100)



４　養父市七面山３号墳

第 125 図　箱式石棺の分類(1)　Ⅰ類

傾向は認められない。

Ⅱ類（陰石切石）（第 126 図）　但馬地域北東部で特徴的にみられる形態で、前期から中期末まで認められるが、中期中葉が最も多く、大半を占めている。この石材を使用した石棺についてはこれまで数多くの検討が加えられてきており、その分布範囲は石材産出地である旧豊岡市域が最も多く、豊岡市出石町域にも多く認められ、朝来市の椿ノ森古墳が最南端にあたる。但馬地域を超えるような広範囲には供給されていないようである。

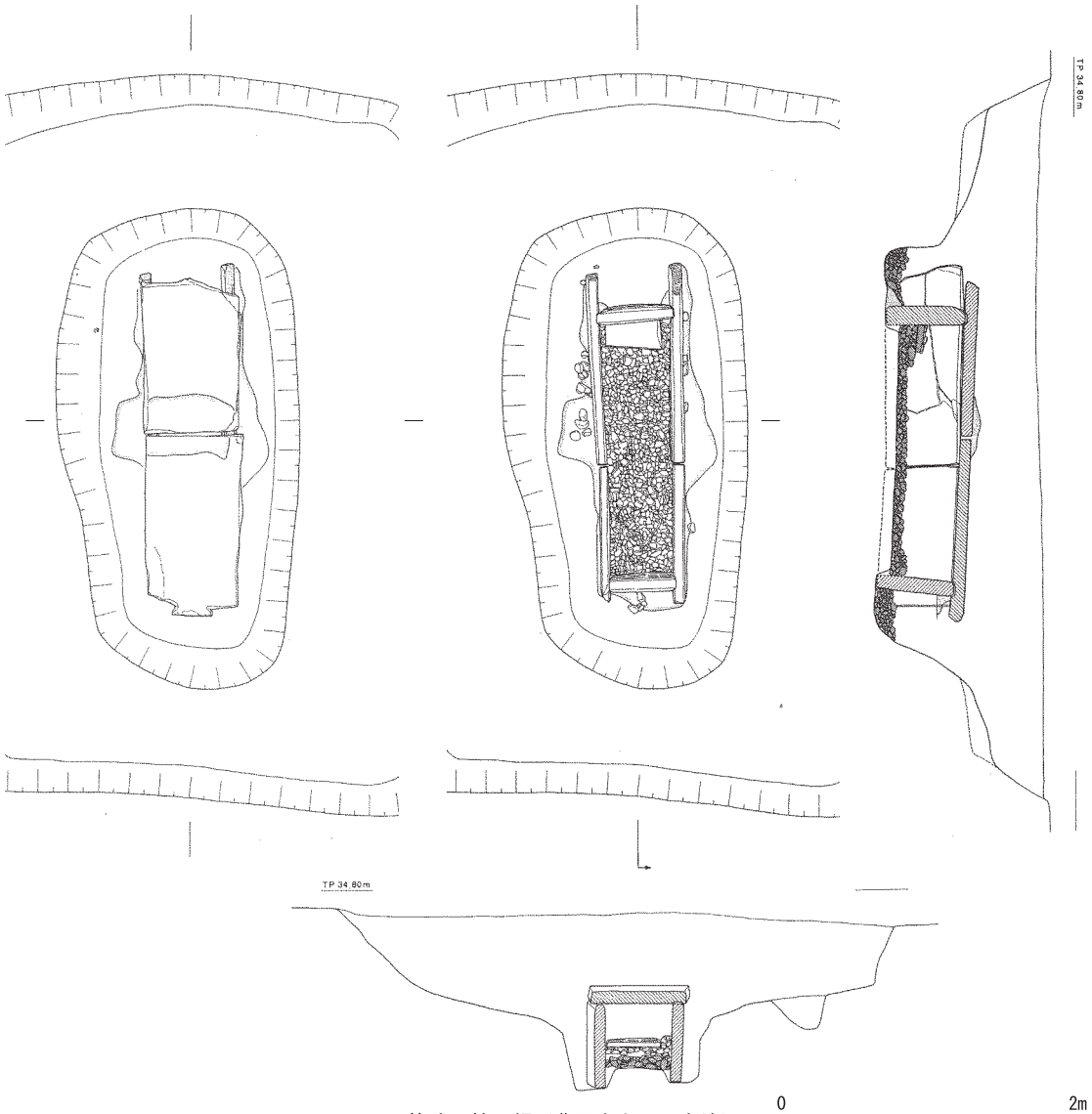
やや軟質で加工しやすいためか、豊岡市カチヤ古墳例のように表面全体に調整を加え、蓋石にも縄掛突起を造出している例もあるが、短辺を直線的に削る、稜の面取りを行う程度のものも認められる。また、長側壁は通常複数枚で構成されるが、豊岡市駄坂・舟隠３号墳第１主体（前期）のように１枚のものも認められ、段数は原則として１段である。蓋石の重ねはⅠ類と異なり時期的な傾向は認められず、３種それぞれほぼ等数を数えることができる。また、長側石の外側にも切石を立てるものが散見される。

棺底の礫敷はないものが多いが、板石を敷くものが特徴的に認められ、石枕状に彫刻を施すものも数例認められる。粘土で目張りされることが多いため、人骨が遺存しているものが多く、被葬者は男女区別なく壮年～熟年であり、Ⅰ類と同様に、区別はないようであるが、精巧な造りのものには鏡が副葬されている。棺内の長さは 200 ㎝まで認められ、特に規模の大きいものがあるわけではない。頭側の棺幅は 24 ㎝～ 55 ㎝で 40 ㎝前後が最も多く、足側での幅は 27 ㎝～ 45 ㎝でばらつきが多い。足側幅の平均は 34 ㎝であるが、頭側と足側の幅の差は 10 ㎝前後のものが４例あるが、２㎝～７㎝のものも９例と多く、Ⅱ類では頭側と足側の幅の差が少ないものが多いことがいえる。ただし、豊岡市亀ヶ崎１号墳例では、他類のように 15 ㎝の差をもつものも認められる。

Ⅲ類（平石積）（第 127 図）　Ⅲ類のうち調査されたものの大半が竪穴式石室と報告され、石棺と報告されたものは朝来市梅田東 10 号墳第５主体部の長さ 105 ㎝のものと、梅田 15 号墳ＳＸ０１の長さ棺内長 156 ㎝の２例をあげうるにすぎない。ただし、平石積でも香美町庵の谷２号墳のように長さ 1.8 ｍ、幅 1.6 ｍのように規模の大きいものは石室と判断できる。Ⅲ類としたもののうち、頭側の幅が明らかとなっている７例では、33 ㎝～ 54 ㎝と幅が狭く、足側でも 20 ㎝～ 33 ㎝という狭さである。なお、頭側と足側の幅の差は３㎝～ 30 ㎝まで認められ、差が大きいものが多いことが特徴である。弥生時代後期末～古墳時代初頭の庄内期から認められ、前期いっぱいまで構築されており、営まれた時期が限定される。

棺長は梅田東 10 号墳第２主体部の 196 ㎝まで認められ、長側壁の外側に控積がなされているものが多い。また、蓋石の上にさらに石を重ねている例が多く、重厚な埋葬施設の感がある。石枕を有するものが少なく、棺底の礫敷を施しているものも半数に満たない。また、鏡が出土した豊岡市森尾古墳の３基の石室も平石積で、第１石室と呼ばれた埋葬施設は幅 48 ㎝、棺長 182 ㎝で、箱式石棺Ⅲ類に含まれる。ただし、第２石室と呼ばれた埋葬施設は幅 67 ㎝、長さ 303 ㎝と規模が大きいことから、竪穴式石室と判断すべきであろう。

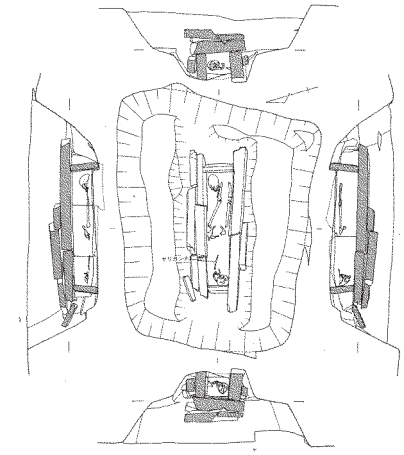
前期段階の石棺のうち、豊岡市西垣１号墳の主体部１・２の長側石は陰石製で、延石のような角柱に近い形態のものを使用しており、主体部２の角柱石以外の部分では平石積であることから、Ⅲ類の亜式と判断しておきたい。また、朝来市向山２号墳第２主体部の長側壁も延石のような石材とその上に平石で積み上げられており、Ⅲ類の亜式としておく。向山古墳群の報告書では、棺の痕跡と判断される部分が検出されていることから、竪穴式石室と呼称されているが、頭側での幅は 52 ㎝、足側でも 28 ㎝と幅が狭い。



箱式石棺Ⅱ類（豊岡市カチヤ古墳）

0　2m

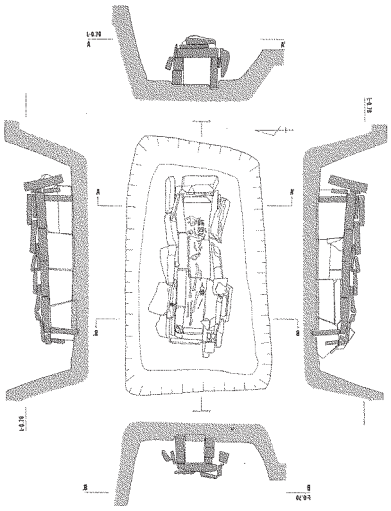
(1:50)



1　豊岡市駄坂・舟隠２号墳第１主体

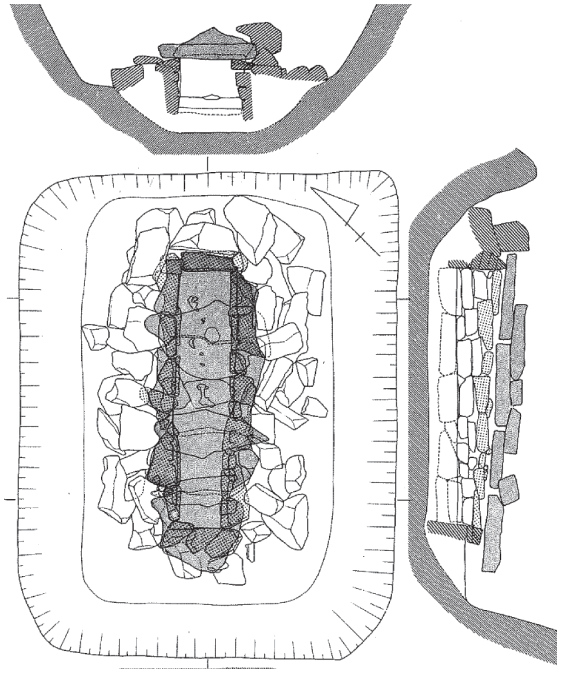
0　5m

(1:100)



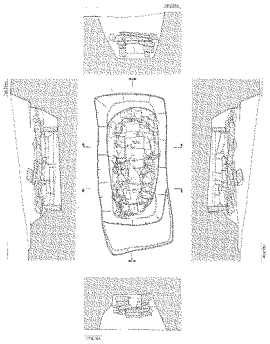
2　豊岡市田多地３号墳第５主体

第 126 図　箱式石棺の分類(2)　Ⅱ類

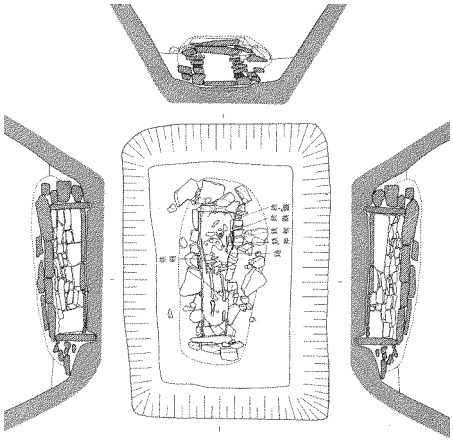


箱式石棺Ⅲ類（朝来市柿坪中山２号墳第１主体部）

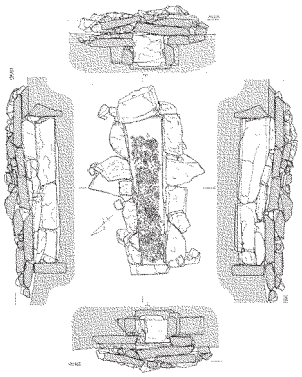
0　2m
(1:50)



１　朝来市梅田東 10 号墳第２主体部

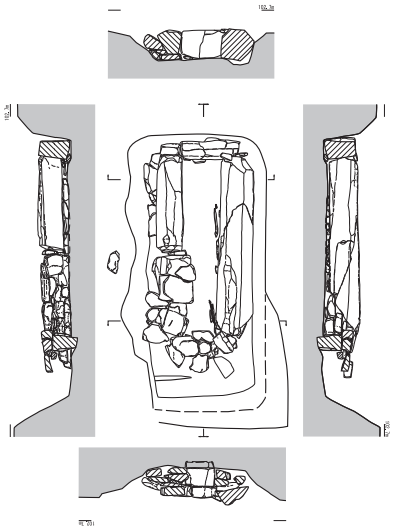


２　朝来市柿坪中山４号墳第１主体部



３　朝来市向山２号墳第２主体部

0　5m
(1:100)



４　豊岡市西垣１号墳主体部２

第 127 図　箱式石棺の分類(3)　Ⅲ類

人骨が遺存している例が多いが、長さ 105 ㎝と最も規模が小さい梅田東 10 号墳第５主体部で３歳～６歳、他は 20 代から熟年の男女で、性別・年齢で限定されているわけではない。

Ⅳ類（塊石積）（第 128 図）　豊岡市尼ヶ宮８・12・13 号墳や朝来市芝花９号墳、朝来市若水Ｂ８号墳など 12 例がある。所属時期は養父市小山３号墳第２主体のように前期に遡るものもあるが、ほとんどは中期後半から後期に限定されるようであり、後述するように、同様の長側壁石組をもつ竪穴式石室も 12 例以上認められ、同時期に存在している。

最も古い小山３号墳例ではやや大きな石材を用いているが、頭側幅 36 ㎝、足側幅 18 ㎝、長さ 173 ㎝で、規模は大きくない。中期後半～後期のものの長さは 220 ㎝まであり、頭側の幅は 26 ㎝～ 60 ㎝、足側幅は 18 ㎝～ 53 ㎝で、頭側と足側の幅の差は 10 ㎝前後のものが多い。

棺底の礫敷は無いものが大半であるが、自然石を利用した石枕は大半のものに設置されており、竪穴式石室と分別する際の基準にもなりうる。石組の隙間が多いためか、人骨の遺存例が２例と非常に少ない。40 代～ 50 代の男性である。

もう１点、Ⅳ類で特徴的なこととして、小口壁の石組があげられる。Ⅰ類～Ⅲ類の小口壁では、ほぼすべてにおいて板石を立置使用しているが、Ⅳ類では頭側は板石を立てているものの、足側は塊石を積み上げたものが多くを占めている。人骨の遺存が少ないⅣ類にあって、頭位を判断する際の基準となるものである。

以上のように、但馬地域の箱式石棺について、長側壁の状況を基準にして４分類した。Ⅰ類（板石立置）は古墳時代を通じて時代的変化もなく、普遍的ともいえるほど広範囲に営まれている、典型的な箱式石棺の形態といえる。Ⅱ類（陰石切石）は、但馬地域限定で豊岡市域に集中的に分布し、時期も前期から中期中葉頃までに限定できるようである。Ⅲ類（平石積）は最も古く出現しており、弥生時代後期末まで遡り、古墳時代前期末には無くなるようであり、最も限定された箱式石棺形態といえよう。Ⅳ類（塊石積）は中期後半という最も遅く出現した形態で、後期まで続いて構築されている。Ⅱ類を除いた各形態での地域的な偏りは認められないことから、Ⅰ類とⅢ類、Ⅰ類とⅣ類は但馬地域で同時期に構築されていた点を整理することができた。Ⅱ類に関してのみ、豊岡市域内で上位ランクの箱式石棺に位置づけることができそうであるが、Ⅲ類がさらに上位に位置づけられる可能性もある。Ⅲ類は前期の竪穴式石室との関わりのなかで出現した可能性もあるが、Ⅲ類亜式は在地のステータスに拠るところが大きいと考える。また、全期間を通じて構築されたⅠ類とⅡ・Ⅲ類を比較した場合、Ⅰ類が最も下位のランクとすることができそうである。また、後述するように、竪穴式石室とのかかわりの中で出現したⅣ類についても、Ⅱ・Ⅲ類の終焉後に出現していることから、Ⅰ類よりも上位に位置づけることができるかもしれない。しかし、その選択におけるランクの実態は不明な点が多く、これからの課題である。

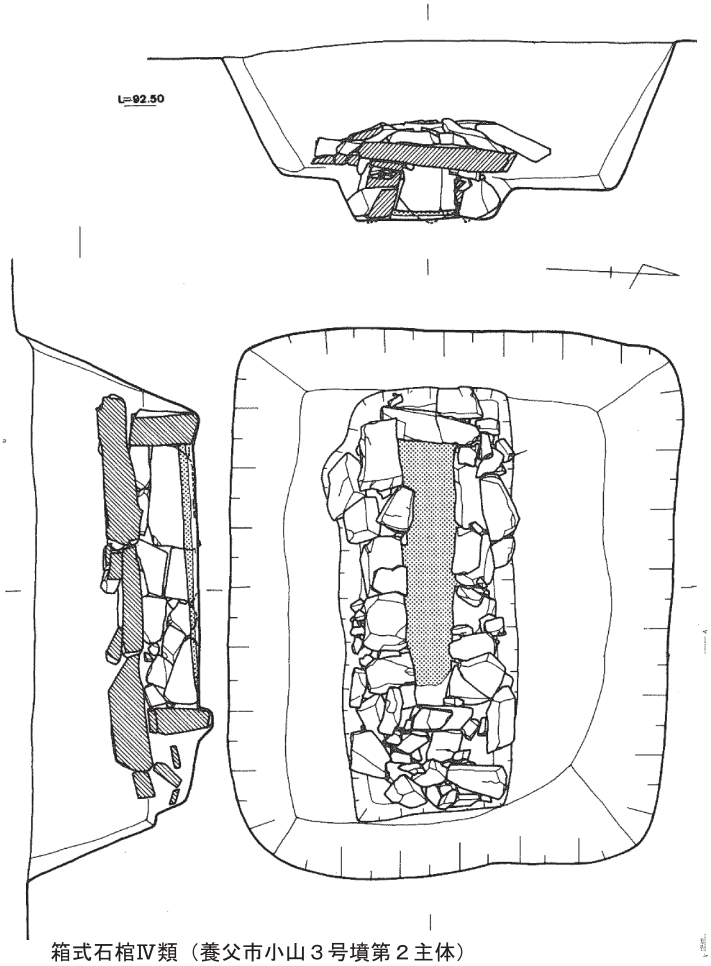
なお、Ⅲ・Ⅳ類の場合、箱式石棺よりも石室系石棺という名称がその特徴をとらえたものと考えていることを付け加えておきたい。

３．但馬地域における竪穴式石室と箱式石棺の特徴

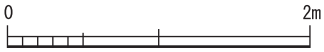
但馬地域の竪穴式石室には、中期で川原石積の豊岡市馬場ヶ崎古墳や割石積の香美町庵の谷２号墳などが存在しているが、大半は塊石を積み上げて石室を構築したものである。

箱式石棺Ⅳ類と類似する竪穴式石室（第 129 図）

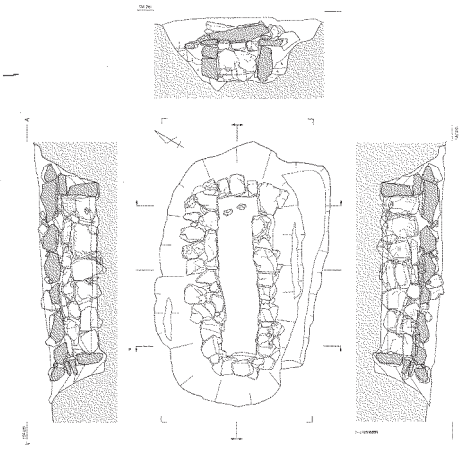
箱式石棺Ⅳ類（石室系石棺）とした塊石積の長側壁は、但馬地域における竪穴式石室と共通しており、



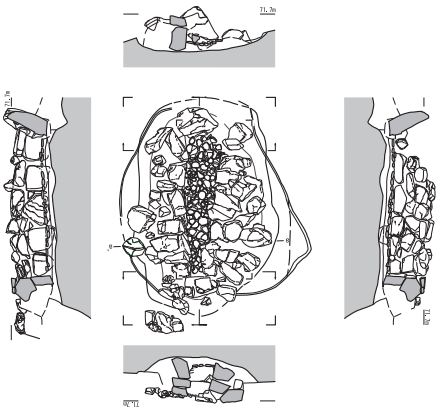
箱式石棺Ⅳ類（養父市小山３号墳第２主体）



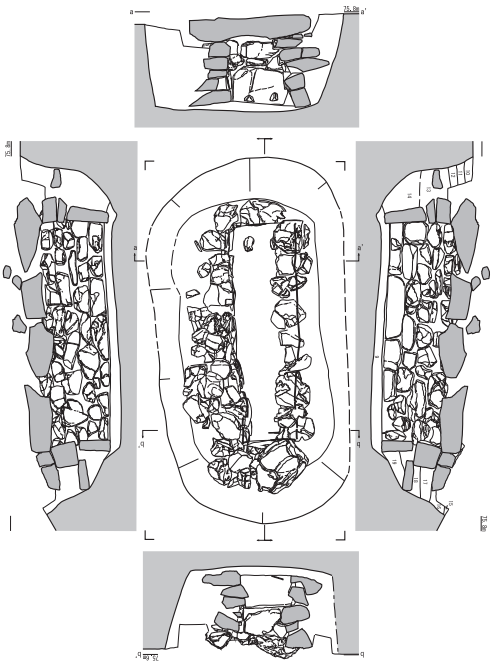
(1:50)



１　朝来市芝花９号墳ＳＸ９０１



２　豊岡市尼ヶ宮８号墳



３　豊岡市尼ヶ宮 12 号墳

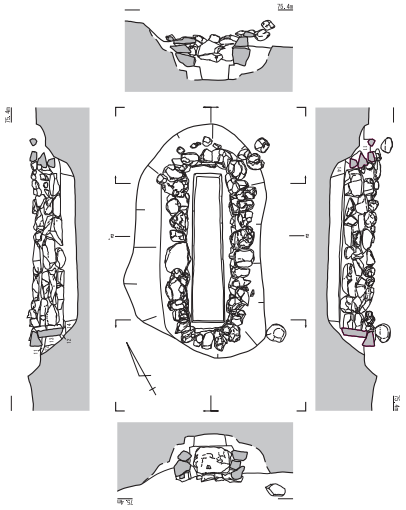
(1:100)

第 128 図　箱式石棺の分類(4)　Ⅳ類

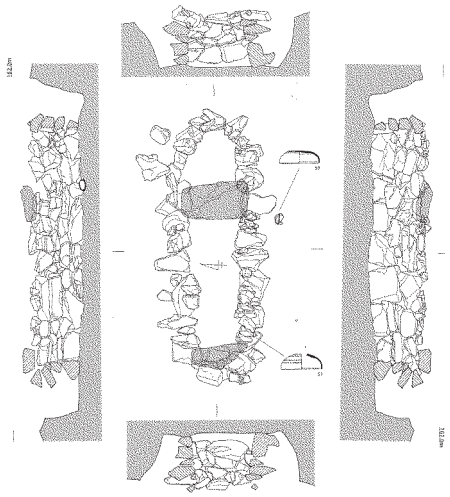
尼ヶ宮古墳群のように古墳群内で石棺と石室が混在し、また、一古墳においても混在しているものも認められる。また、但馬地域の塊石積の竪穴式石室は中期後半から後期に営まれており、箱式石棺Ⅳ類（石室系石棺）の存在時期と重なっている。

そこでまず、箱式石棺Ⅳ類（石室系石棺）と同じ塊石積の竪穴式石室との判別基準を探ることとする。

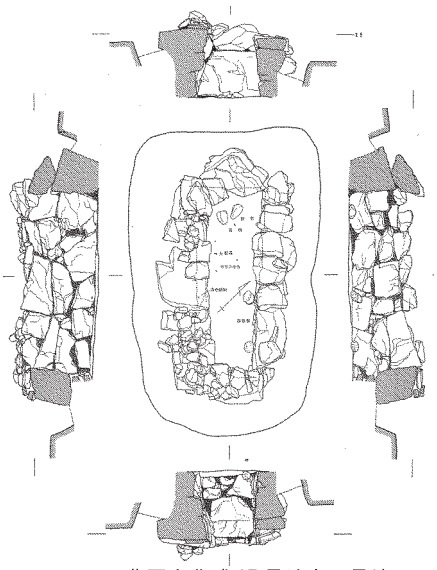
第一に、石室内床面に木棺の痕跡が存在する例をあげることができる。それらは尼ヶ宮９号墳の２基の竪穴式石室や 14 号墳の竪穴式石室の床で確認・判断することができ、豊岡市藤井１号墳や朝来市梅田 27 号墳ＳＸ０１においても検出されている。それらのうち最も大きい石室長は 320 ㎝の藤井１号墳例で、石室幅も 110 ㎝と広い。一方、最も規模が小さいのが尼ヶ宮 14 号墳で、石室長 210 ㎝、石室幅 54 ㎝にすぎない。梅田 27 号墳例は石室長 309 ㎝、石室幅 93 ㎝と比較的大きいが、尼ヶ宮９号墳例では石室長 190・220 ㎝、幅 70 ㎝とやや小規模である。木棺を納めるための幅が必要と思われるが、尼ヶ宮 14 号墳で検出した棺痕跡の幅は最大 40 ㎝であった。このことから、但馬地域において竪穴式石室と



１　豊岡市尼ヶ宮 14 号墳



２　朝来市梅田 27 号墳ＳＸ０１



３　豊岡市北浦 27 号地点４号墳

第 129 図　箱式石棺Ⅳ類と類似する竪穴式石室

呼称できる石室幅は 54 ㎝以上とすることができよう。一方、箱式石棺Ⅳ類（石室系石棺）の最大幅は尼ヶ宮 12・13 号墳例で 60 ㎝もあることから、幅において石室・石棺の境界数値を明確にすることができないが、概ね 50 ㎝～ 60 ㎝程度と幅広くとらえておきたい。

次に、石枕の有無を取り上げる。箱式石棺Ⅳ類（石室系石棺）では大半の棺底に石枕が置かれていたが、竪穴式石室をみてみると、10 例中２例にのみ石枕や須恵器坏転用枕の存在が確認されている。石枕は豊岡市北浦 27 地点４号墳竪穴式石室に存在し、石室幅は 92 ㎝である。朝来市梅田 27 号墳では須恵器坏が枕に転用されていたが、石室幅は 93 ㎝もあり、棺痕跡も検出されている。このように、石枕が存在しないことと、上述の石室幅が 50 ～ 60 ㎝程度以上であることを加味して竪穴式石室と呼称することができるであろう。

また、竪穴式石室では、床面を礫敷としたものは豊岡市藤井１号墳例と朝来市筒江中山 26 号墳例に限られ、竪穴式石室の大半は床面に礫敷を行っていない。さらに竪穴式石室の場合、石室短側壁は両壁とも塊石積としたものが半数近くあり、この点も判断基準にできる可能性があろう。

以上の根拠により、尼ヶ宮９号墳・14 号墳・16 号墳の埋葬施設が竪穴式石室、尼ヶ宮８号墳・12 号墳・13 号墳・15 号墳例を石棺（石室系石棺）と呼称できることや、あらためて朝来市芝花９号墳例も石棺（石室系石棺）と呼称できることを再確認できたと考えている。

第８表　但馬地域の箱式石棺等一覧

箱式石棺Ⅰ類（板石立置）

旧市町	古墳名	埋葬施設名	報告時	報告書
豊岡	立石 102 号地点	第４主体	石棺	1
豊岡	七ツ塚８号墳		石棺	2
出石	田多地６号墳	第２主体	石棺	3
日高	小垣谷 16 号墳		石棺	4
八鹿	東家ノ上２号墳		石棺	5
八鹿	七面山２号墳	第１主体	石棺	6
八鹿	七面山３号墳		石棺	6
八鹿	小山３号墳	第１主体	石棺	7
大屋	田和遺跡	２号主体	石棺	8
大屋	向山１号墳		石棺	9
和田山	秋葉山２号墳	第２主体部	石棺	10
和田山	秋葉山２号墳	第４主体部	石棺	10
和田山	大盛山２号墳	第１主体	石棺	11
和田山	大盛山３号墳	第１主体	石棺	11
和田山	大盛山３号墳	第２主体	石棺	11
和田山	梅田東 10 号墳	第４主体部	石棺	12
和田山	梅田 24 号墳		石棺	13
和田山	向山３号墳	第１主体部	石棺	14
和田山	向山５号墳	第１主体部	石棺	14
和田山	向山 11 号墳	第２主体部	石棺	14
和田山	市条寺１号墳	第１主体部	石棺	14
和田山	市条寺２号墳	第１主体部	石棺	14
和田山	市条寺３号墳	第１主体部	石棺	14
和田山	岡田箱式石棺		石棺	15
山東	柿坪中山２号墳	第２主体部	石棺	16
山東	若水古墳群	ＳＸ－Ｗ９	石棺	17
山東	方谷５号墳	第２主体部	石棺	18
山東	大月北山１号墳	ＳＸ０１	石棺	19

箱式石棺Ⅱ類（陰石切石）

旧市町	古墳名	埋葬施設名	報告時	報告書
豊岡	亀ヶ崎１号墳		石棺	20
豊岡	七ツ塚６号墳		石棺	2
豊岡	駄坂舟隠２号墳	第１主体	石棺	21
豊岡	駄坂舟隠３号墳	第１主体	石棺	21
豊岡	駄坂舟隠３号墳	第２主体	石棺	21
豊岡	駄坂舟隠５号墳		石棺	21
豊岡	カチヤ古墳		石棺	22
豊岡	中ノ郷深谷1号墳	第２主体	石棺	23
豊岡	中ノ郷深谷2号墳		石棺	23
出石	田多地３号墳	第３主体	石棺	3
出石	田多地３号墳	第５主体	石棺	3
出石	カヤガ谷１号墓		石棺	
出石	坪井遺跡２号墓	第１主体部	石棺	24
出石	下安良城山	Ⅰ号石棺	石棺	25
出石	下安良城山	Ⅱ号石棺	石棺	25
出石	下安良城山	Ⅲ号石棺	石棺	25
日高	羽根山古墳		石棺	26
和田山	椿ノ森		石棺	

箱式石棺Ⅲ類（平石積）

旧市町	古墳名	埋葬施設名	報告時	報告書
豊岡	森尾古墳	第１石室	石室	27
日高	西垣１号墳	主体部１	石棺	28
日高	西垣１号墳	主体部２	石棺	28
和田山	梅田東 10 号墳	第２主体部	石室	12
和田山	梅田東 10 号墳	第５主体部	石棺	12
和田山	梅田 15 号墳	ＳＸ０１	石棺	13
和田山	向山２号墳	第２主体部	石室	14
山東	柿坪中山２号墳	第１主体部	石室	16
山東	柿坪中山３号墳		石室	16
山東	柿坪中山４号墳	第１主体部	石室	29

箱式石棺Ⅳ類（塊石積）

旧市町	古墳名	埋葬施設名	報告時	報告書
豊岡	駄坂舟隠 10 号墳	第２主体	石棺	21
出石	田多地３号墳	第６主体	石棺	3
日高	尼ヶ宮８号墳		石棺	本書
日高	尼ヶ宮 12 号墳		石棺	本書
日高	尼ヶ宮 13 号墳		石棺	本書
日高	尼ヶ宮 15 号墳		石棺	本書
八鹿	広瀬１号墳	石室２	石室	30
八鹿	竹ノ内１号墳		石棺	31
八鹿	小山３号墳	第２主体	石棺	7
山東	芝花９号墳	ＳＸ９０１	石棺	32
山東	若水古墳群	ＳＸ－Ｗ８	石棺	33
山東	若水Ｂ８号墳		石棺	33

竪穴式石室（塊石積）

旧市町	古墳名	埋葬施設名	報告時	報告書
豊岡	北浦 27- ４号墳		石室	1
日高	尼ヶ宮９号墳	ＳＸ２９１	石室	本書
日高	尼ヶ宮９号墳	ＳＸ２９２	石室	本書
日高	尼ヶ宮 14 号墳		石室	本書
日高	尼ヶ宮 16 号墳		石室	本書
日高	藤井１号墳	第１主体部	石室	34
八鹿	米里８号墳	第１主体	石室	35
和田山	秋葉山３号墳		石室	10
和田山	梅田 27 号墳	ＳＸ０１	石室	13
和田山	筒江中山 26 号墳	主体部	石室	36
和田山	向山 11 号墳	第１主体部	石室	14
八鹿	広瀬１号墳	石室３	石室	30
日高	小山３号墳		石室	

参考文献

池田征弘編 2007「第４章第２節　古墳時代　１．土器の変遷」『加都遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告 第 324 冊　兵庫県教育委員会

魚津知克 2000「鉄製農工具副葬についての試論」『第７回鉄器文化研究集会　表象としての鉄器副葬』 鉄器文化研究会

宇垣匡雅 1997「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』第 44 巻第１号（通巻 173 号）

岸本一郎 2004『寺内古墳群』西脇市文化財調査報告書 第 13 集　西脇市教育委員会・西脇多可行政事務組合

岸本一宏 2008「第５章第３節　９号墳埋葬施設の名称」『芝花弥生墓群・古墳群』兵庫県文化財調査報告第 345 冊　兵庫県教育委員会

岸本一宏編 2009『若水古墳群・城跡』兵庫県文化財調査報告第 364 冊　兵庫県教育委員会

岸本一宏編 2010『史跡 茶すり山古墳』兵庫県文化財調査報告第 383 冊　兵庫県教育委員会

杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第８　創立 50 周年記念　吉川弘文館

瀬戸谷 晧・潮崎 誠 1993「大師山古墳群」『豊岡市史 史料編下巻 考古資料編』豊岡市

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

谷本進 1992「但馬地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社

櫃本誠一編 1972『城の山・池田古墳』和田山町・和田山町教育委員会

櫃本誠一 1980「第４章 古墳時代」『日高町史 資料編』日高町

兵庫県教育委員会 2011『兵庫県遺跡地図』

福島孝行 2000・2001「弥生墳墓における鉇の副葬作法について（１）・（２）」『京都府埋蔵文化財情報』第 78・81 号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

福永伸哉 1992「近畿地方の小竪穴式石室－長法寺南原古墳前方部小石室の意義をめぐって－」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第２冊　大阪大学南原古墳調査団

松井敬代 1991「破砕土器の埋納について」『但馬考古学』第６集　但馬考古学研究会

水野正好 1974「群集墳の群構造とその性格」『高山古墳群調査報告書』小野市文化財調査報告書 第６冊　小野市教育委員会

用田正晴 1980「前期古墳の副葬品配置」『考古学研究』第 27 巻第３号（通巻 107 号）

渡瀬健太 2016「弥生時代から古墳時代の墳墓」『ひょうごの遺跡』第 93 号　（公財）兵庫県まちづくり技術センター

但馬地域の箱式石棺報告書（第８表）

１　『北浦古墳群・立石墳墓群』豊岡市教育委員会　1987 年

２　『七ツ塚古墳群』豊岡市文化財調査報告書第８集　但馬考古学研究会（豊岡市教育委員会）　1978 年

３　『田多地古墳群・田多地経塚群Ⅰ』出石町文化財調査報告書第２冊　出石町教育委員会　1985 年

４　『ひょうごの遺跡』第 96 号　（公財）兵庫県まちづくり技術センター　2017 年

５　「東家ノ上遺跡群」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和 57 年度　兵庫県教育委員会　1985 年

６　『七面山古墳群・数田北遺跡』八鹿町文化財調査報告書第 14 集　八鹿町教育委員会　1998 年

７　『小山古墳群・東家の上遺跡』八鹿町文化財調査報告書第９集　八鹿町教育委員会　1990 年

８　「田和遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和 59 年度　兵庫県教育委員会　1987 年

９　「向山１号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和 58 年度　兵庫県教育委員会　1986 年

10　『秋葉山墳墓群』和田山町教育委員会　1978 年

11　『大盛山遺跡』和田山町文化財調査報告書第７集　和田山町教育委員会　1995 年

12　『梅田東古墳群』兵庫県文化財調査報告第 241 冊　兵庫県教育委員会　2002 年

13 『梅田古墳群Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第 257 冊　兵庫県教育委員会　2003 年

14 『向山古墳群 市条寺古墳群 一乗寺経塚 矢別遺跡』兵庫県文化財調査報告第 191 冊　兵庫県教育委員会　1999 年

15 「岡田箱式石棺の調査」『城の山・池田古墳』和田山町・和田山町教育委員会　1972 年

16 『柿坪中山古墳群』第１集　山東町教育委員会　1975 年

17 『若水古墳群・城跡』兵庫県文化財調査報告第 364 冊　兵庫県教育委員会　2009 年

18 『方谷古墳群』兵庫県文化財調査報告第 330 冊　兵庫県教育委員会　2008 年

19 『梶原遺跡・梅ヶ作遺跡・北山遺跡・大月北山古墳群』兵庫県文化財調査報告第 342 冊　兵庫県教育委員会　2008 年

20 「亀ヶ崎遺跡群」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和 56 年度　兵庫県教育委員会　1984 年

21 『駄坂・舟隠遺跡群』豊岡市文化財調査報告書 22　豊岡市教育委員会　1989 年

22 『半坂峠古墳群 辻遺跡』兵庫県文化財調査報告第 18 冊　兵庫県教育委員会　1983 年

23 『中ノ郷・深谷古墳群』豊岡市教育委員会　1984 年

24 『カヤガ谷墳墓群 大谷墳墓群 坪井遺跡』兵庫県文化財調査報告第 259 冊　兵庫県教育委員会　2003 年

25 「下安良城山古墳調査概況」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第２集　兵庫県教育委員会　1974 年

26 『日高町史資料編考古編』日高町　1980 年

27 「兵庫県下に於ける古式古墳の調査」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第２輯　兵庫県　1925 年

28 『西垣古墳群・岩谷古墳群』兵庫県文化財調査報告第 498 冊　兵庫県教育委員会　2018 年

29 『柿坪中山古墳群』第２集　山東町教育委員会　1978 年

30 『広瀬古墳群』兵庫県文化財調査報告第 502 冊　兵庫県教育委員会　2019 年

31 『竹ノ内古墳群』八鹿町文化財調査報告書第 15 集　八鹿町教育委員会　2000 年

32 『芝花弥生墓群・古墳群』兵庫県文化財調査報告第 345 冊　兵庫県教育委員会　2008 年

33 『若水古墳群・城跡』兵庫県文化財調査報告第 364 冊　兵庫県教育委員会　2009 年

34 『ひょうごの遺跡』第 93 号　（公財）兵庫県まちづくり技術センター　2016 年

35 『米里古墳群・米里窯跡』八鹿町文化財調査報告書第８集　八鹿町教育委員会　1989 年

36 『筒江遺跡群Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第 31 冊　兵庫県教育委員会　1985 年

古墳群から国府平野を望む（西南西上空から）

古墳群遠景（東北東上空から）

調査区全景（東北東上空から 2013 年 11 月 8 日撮影）

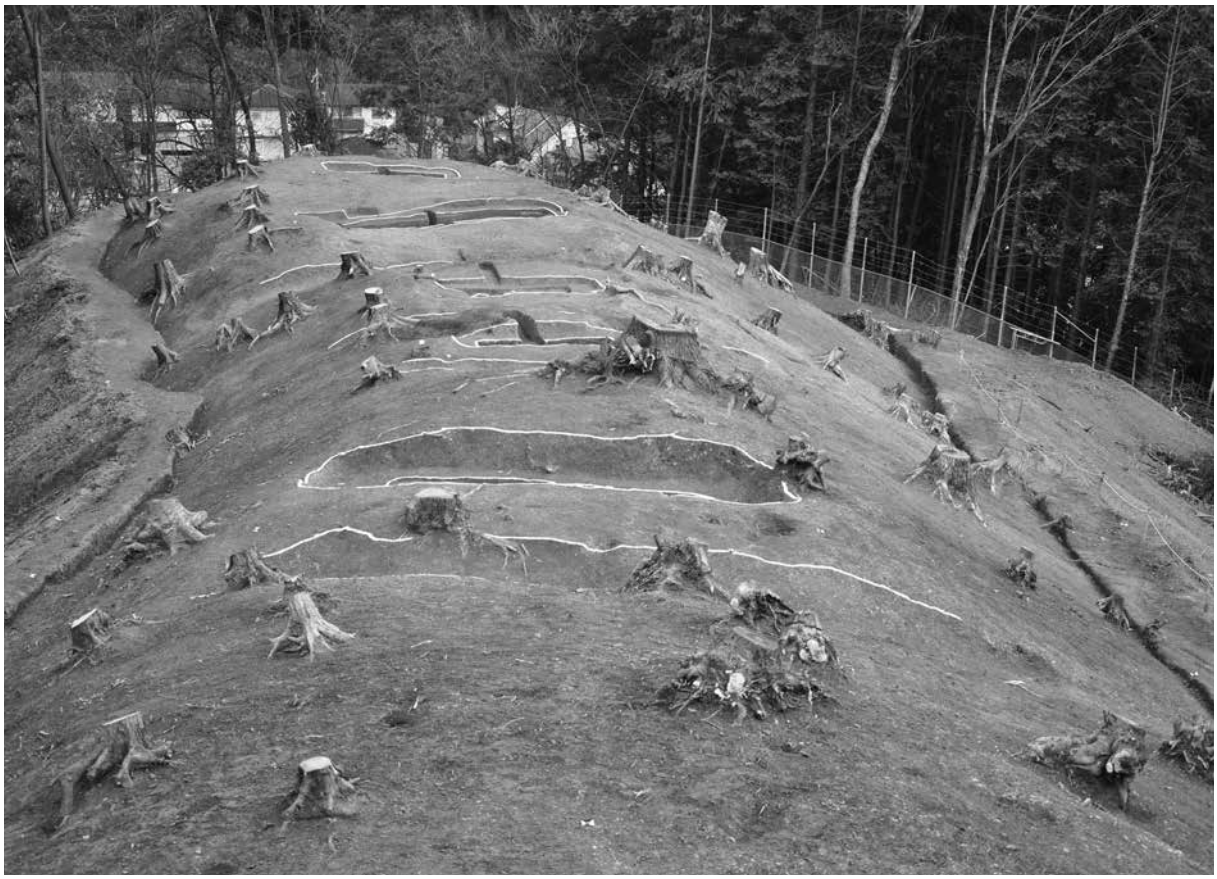
３区全景（東北東上空から 2013 年 11 月 29 日撮影）

１区全景（南東上空から）

２区全景（南東上空から）

３区全景（東南東から）

３区全景（西南西から）



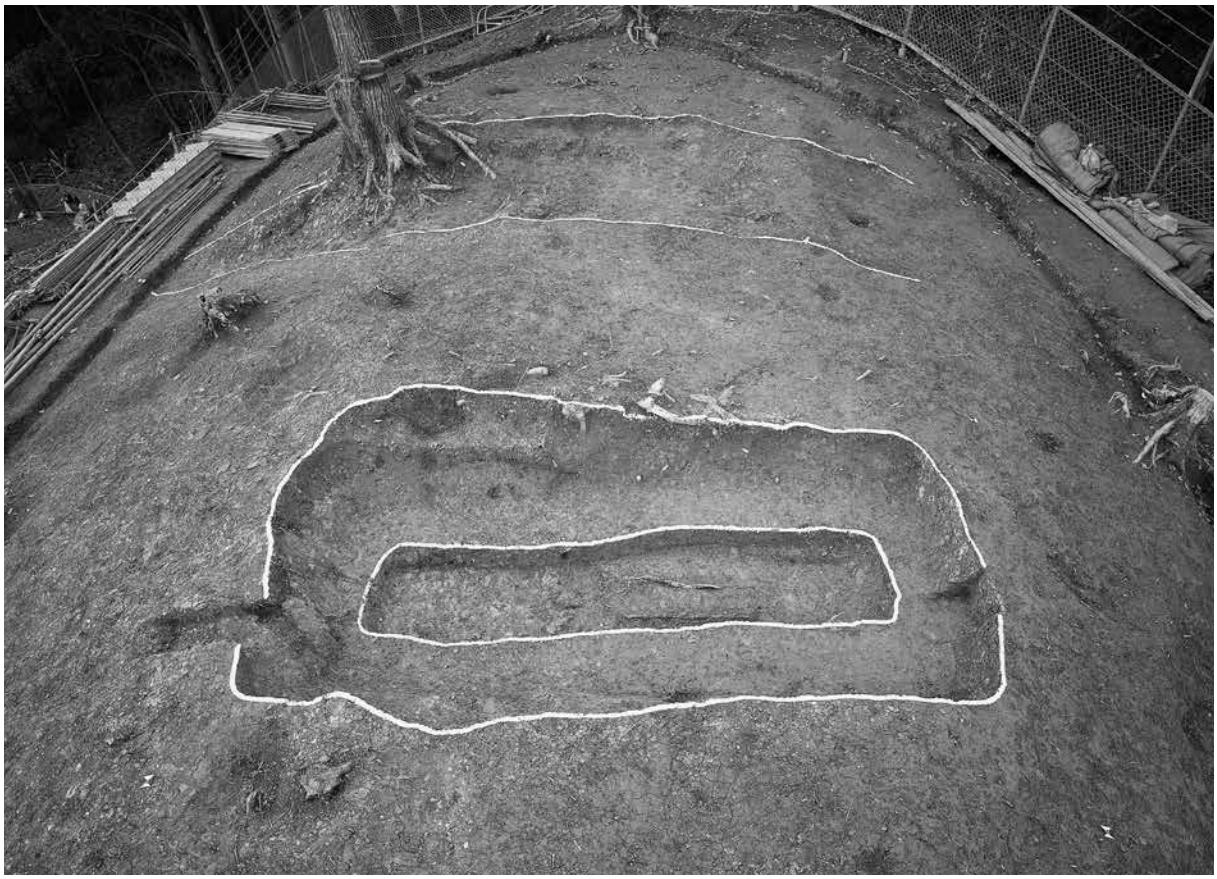
３区３～６号墳（西南西から）

①３区調査前全景（東北東から）

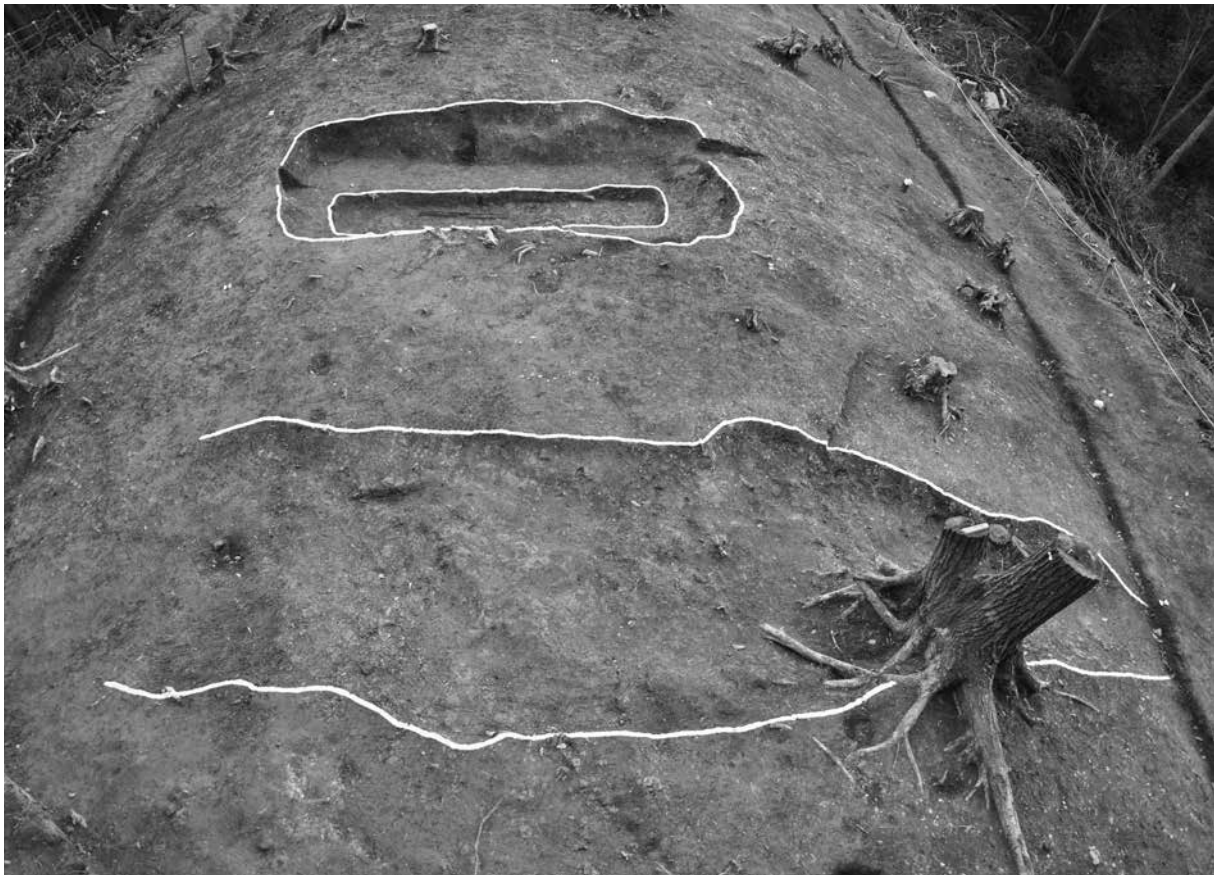
②２～５号墳調査前（北東から）

③３区調査前全景（西南西から）

④５・６号墳調査前（西南西から）

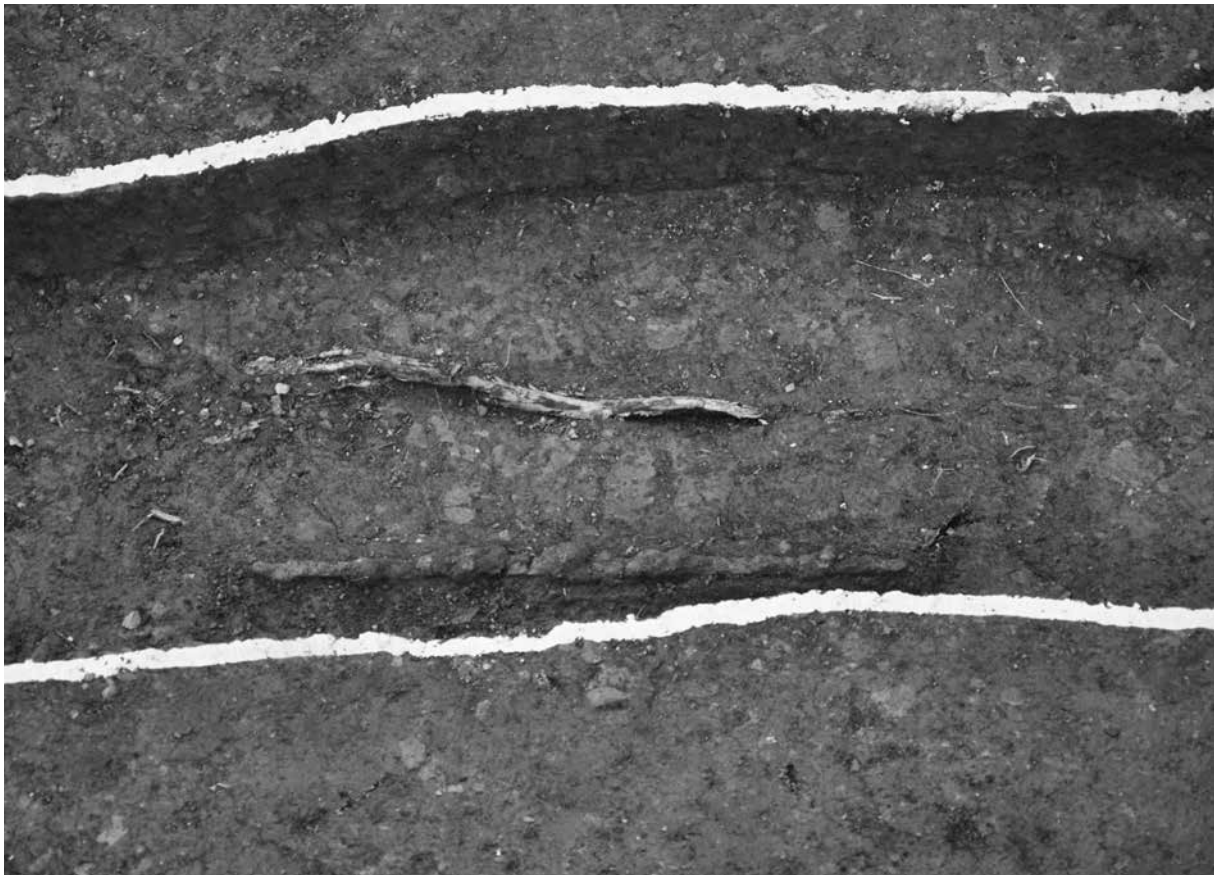


２号墳（東北東から）



２号墳（西南西から）

２号墳墓壙内埋土土層断面（北北西から）



２号墳棺内鉄刀出土状況（東北東から）

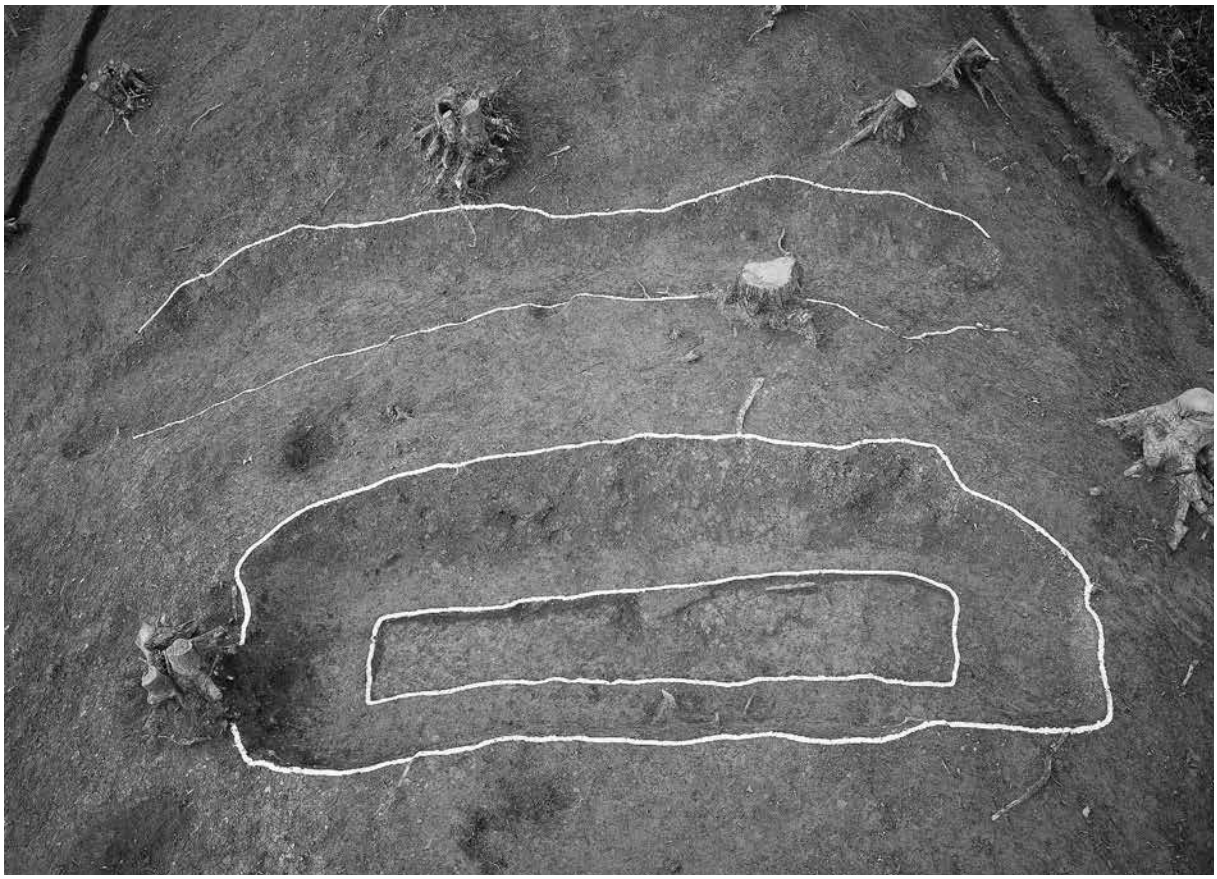
２号墳埋葬施設墓壙（西南西から）

①２号墳墓壙下部埋土土層断面（北北西から）

②２号墳区画溝埋土土層断面（南南東から）

③２号墳墳丘部土層断面（北西から）

④２号墳墳丘部土層断面（南西から）

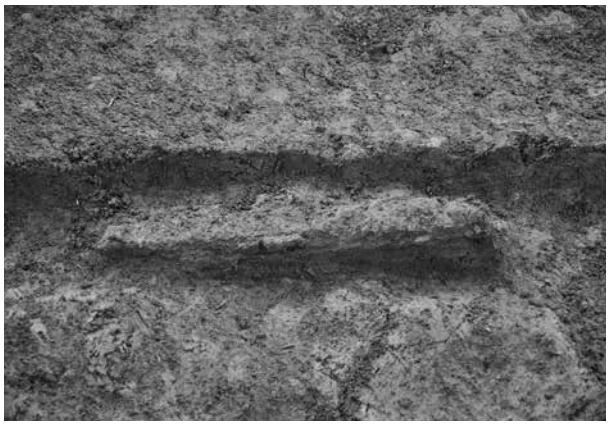


３号墳（東から）

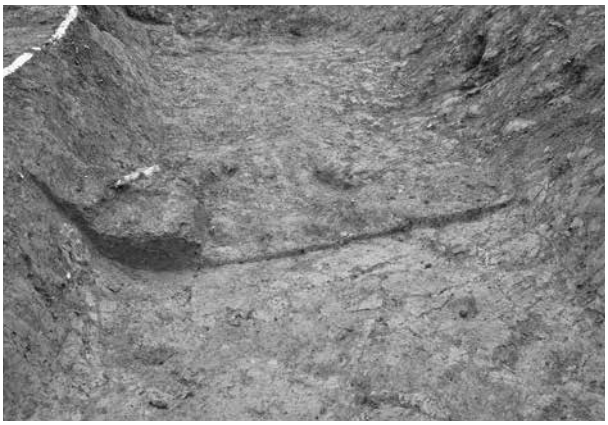
３号墳（西から）

３号墳墓壙内埋土土層断面（北から）

３号墳埋葬施設墓壙（西から）



①３号墳棺内鉄刀出土状況（東から）



⑤３号墳墓壙下部埋土土層断面（北から）

②３号墳墓壙内土器出土状況（東から）

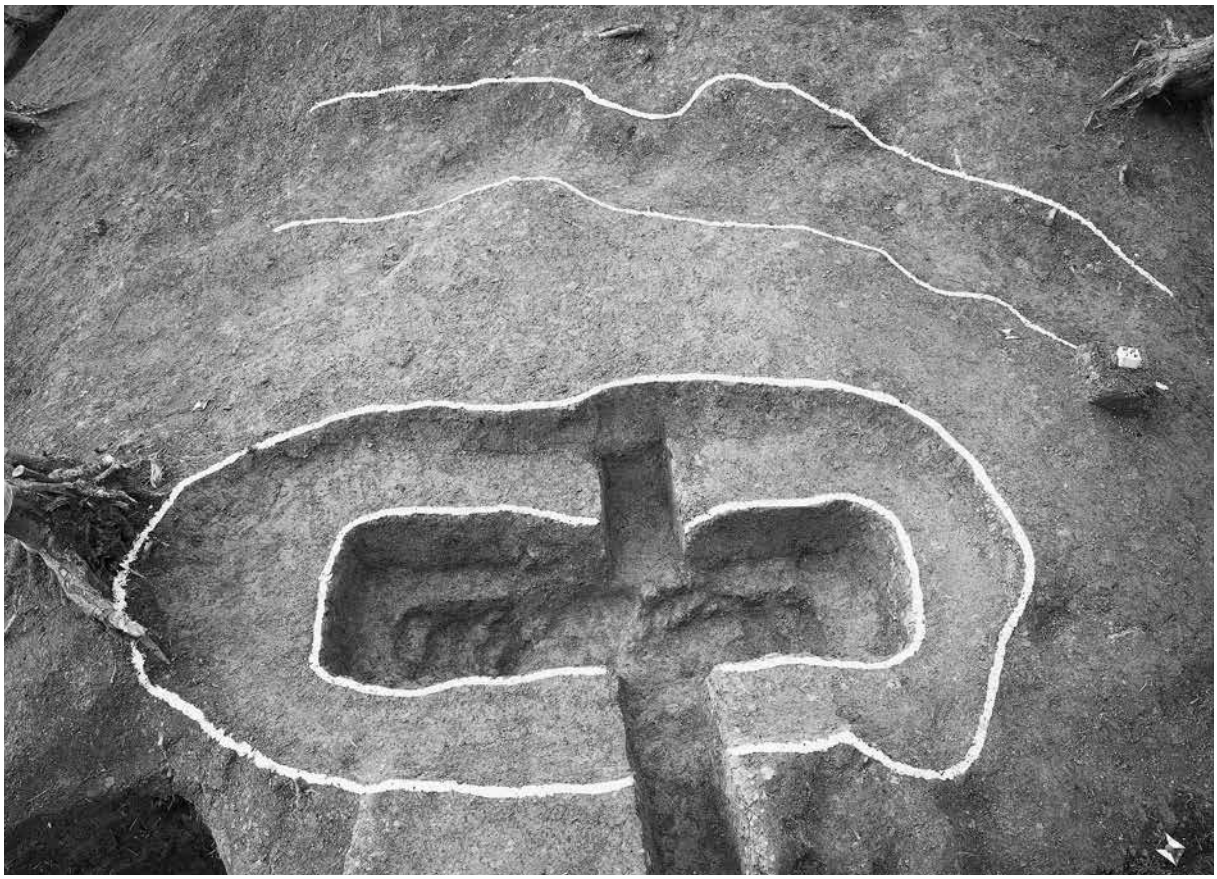
⑥３号墳区画溝埋土土層断面（北から）

③３号墳墓壙内土器出土状況（北から）

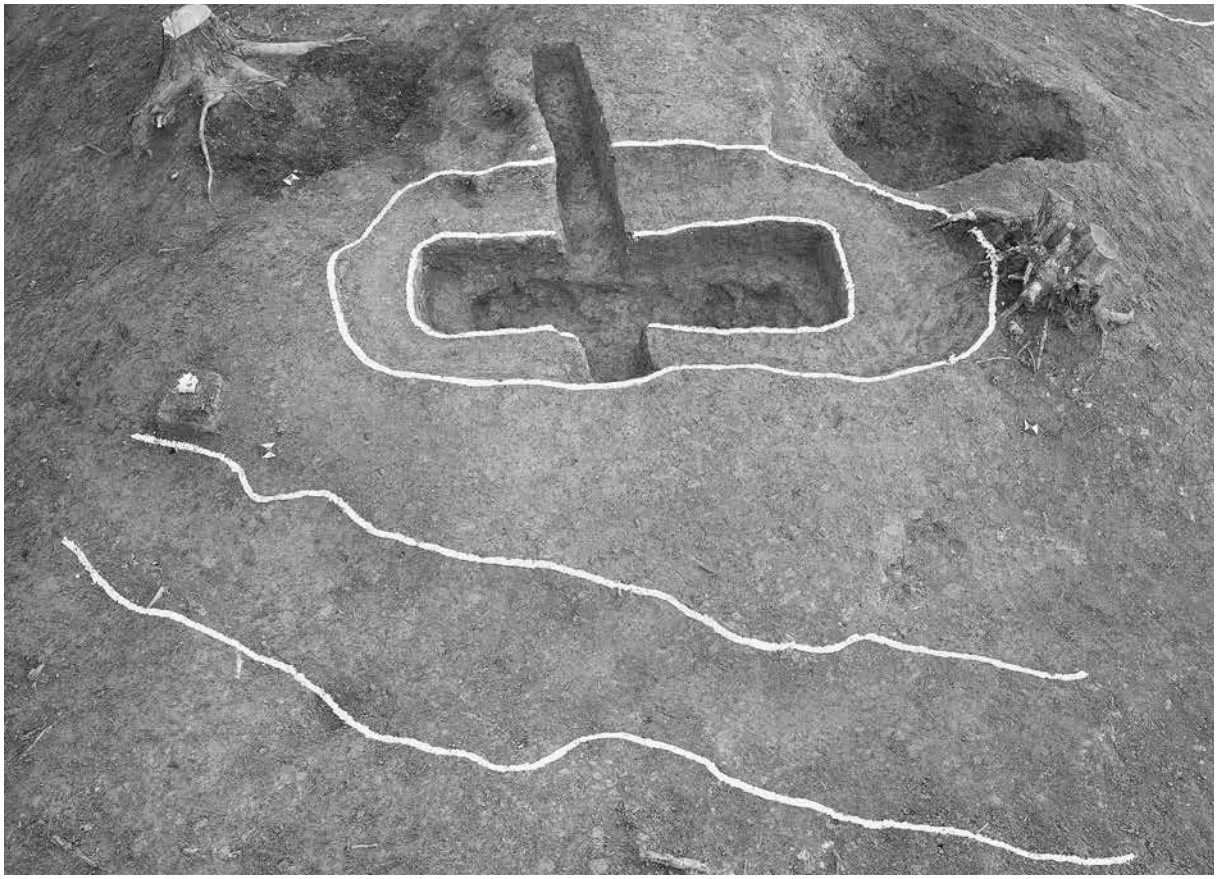
⑦３号墳墳丘部土層断面（西北西から）

④３号墳墓壙内土器出土状況（西から）

⑧３号墳墳丘部土層断面（西から）



４号墳（東北東から）



４号墳（西南西から）

４号墳墓壙内埋土土層断面（北北西から）

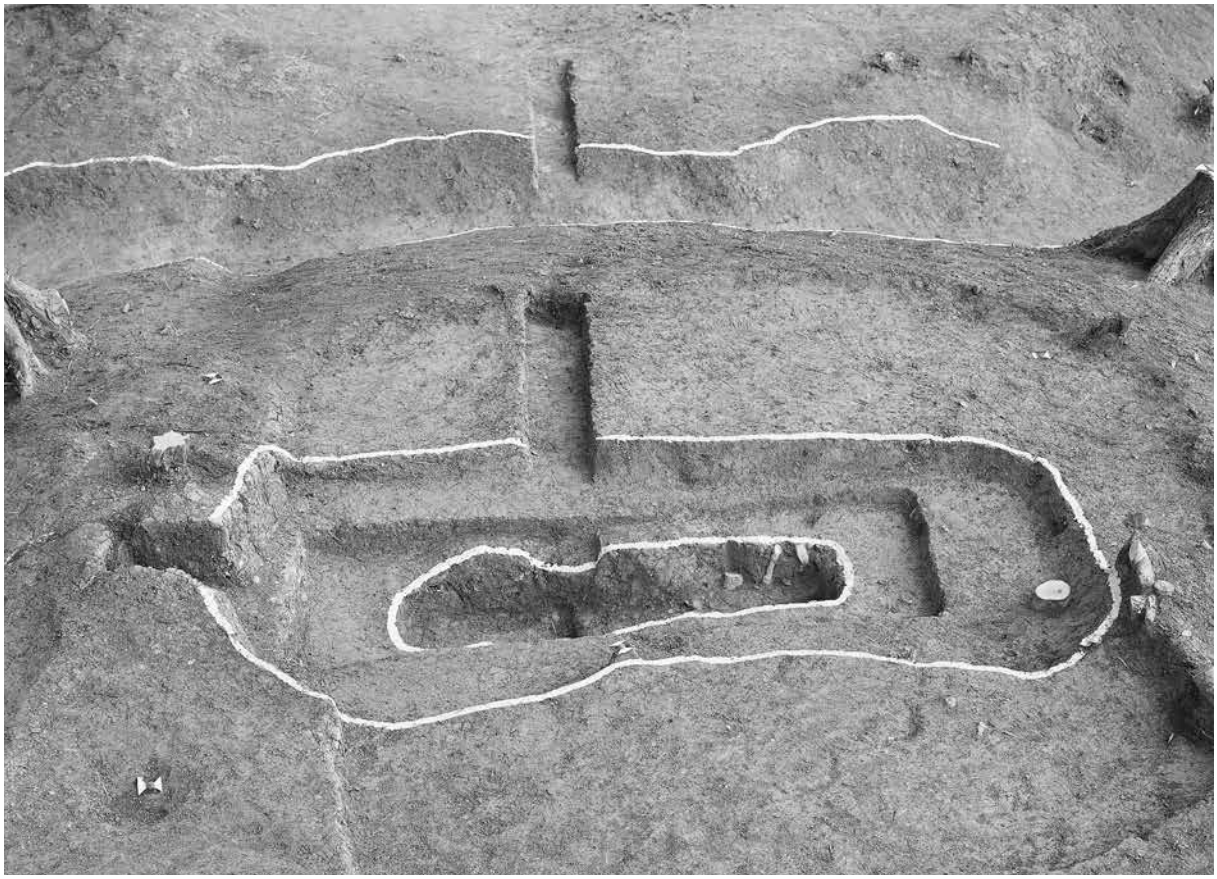
①４号墳埋葬施設墓壙（西南西から）

②４号墳区画溝埋土土層断面（北北西から）

③４号墳墳丘部土層断面（西から）

④４号墳墳丘部土層断面（西南西から）

５号墳（東北東から）



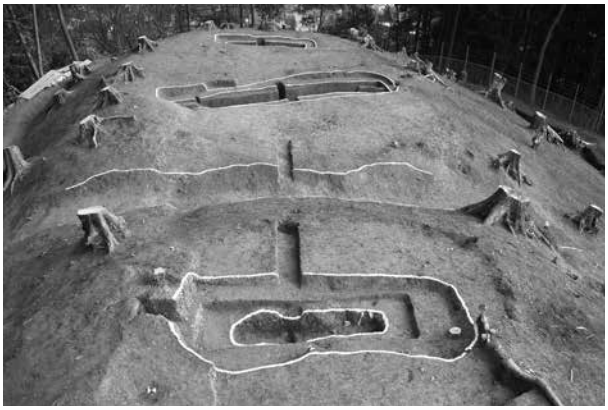
５号墳（西南西から）

５号墳埋葬施設墓壙（西南西から）

①５号墳埋葬施設棺内埋土土層断面（北北西から）

②５号墳区画溝埋土土層断面（北北西から）

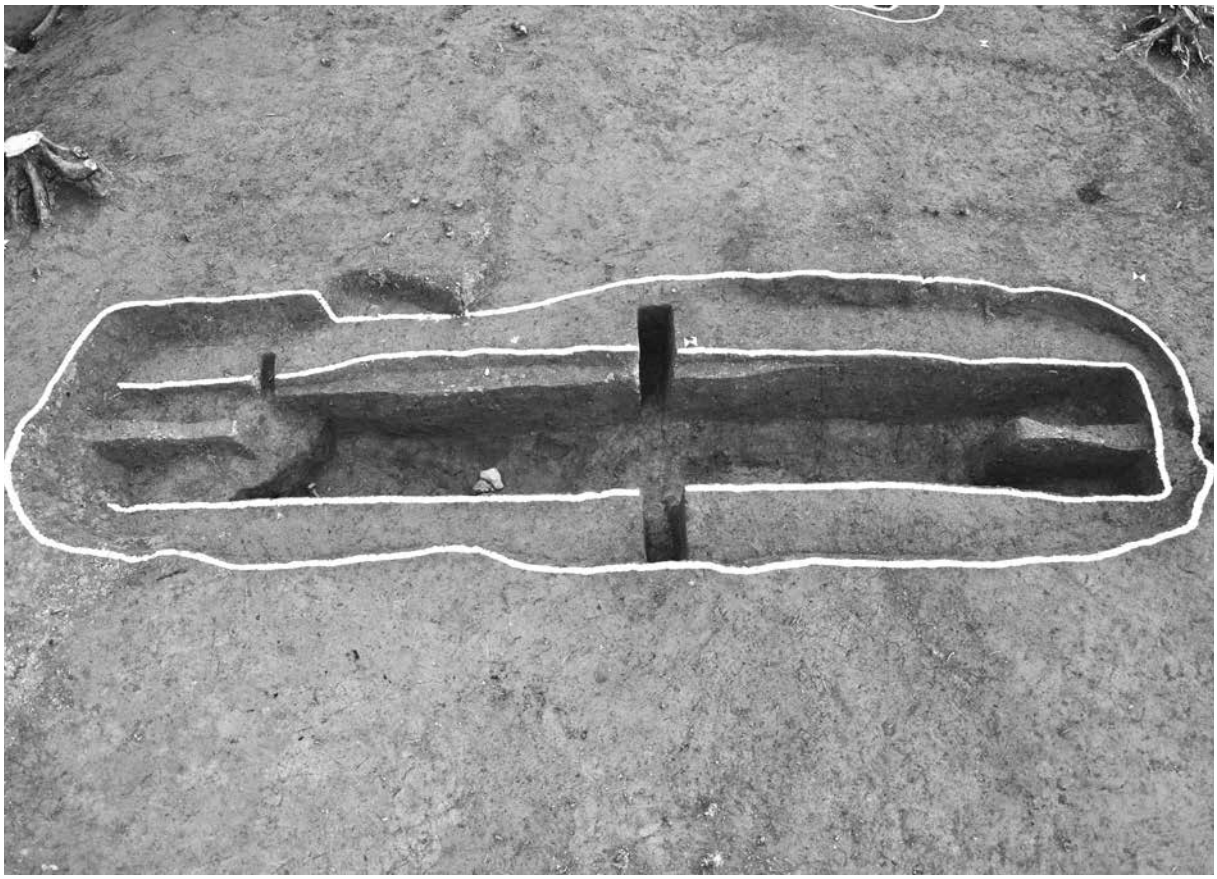
③５号墳墳丘部土層断面（西から）



④５・６号墳（西南西から）

６号墳埋葬施設（北東から）

６号墳埋葬施設墓壙（西南西から）



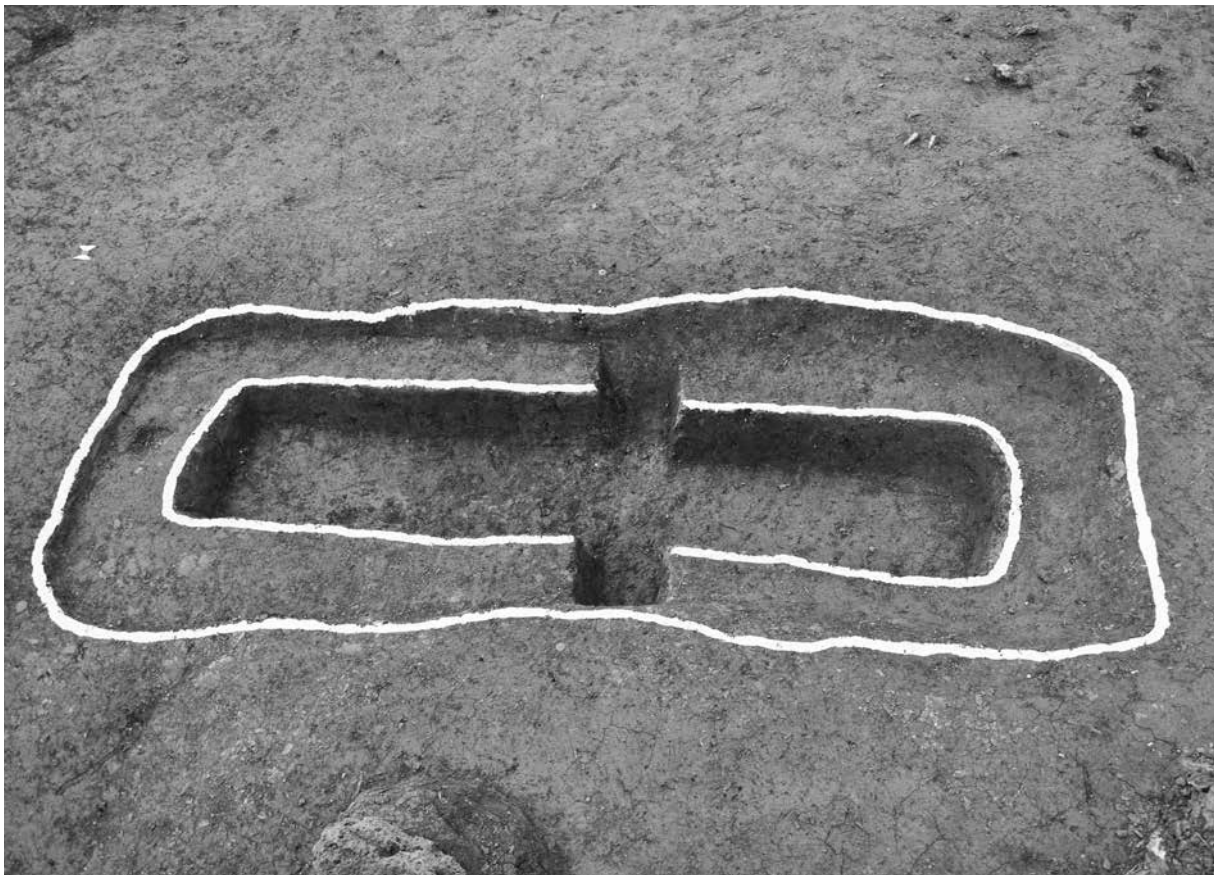
６号墳ＳＸ３６１（南西から）

①ＳＸ３６１棺内（南東から）

③ＳＸ３６１棺内鉄鎌出土状況（南東から）

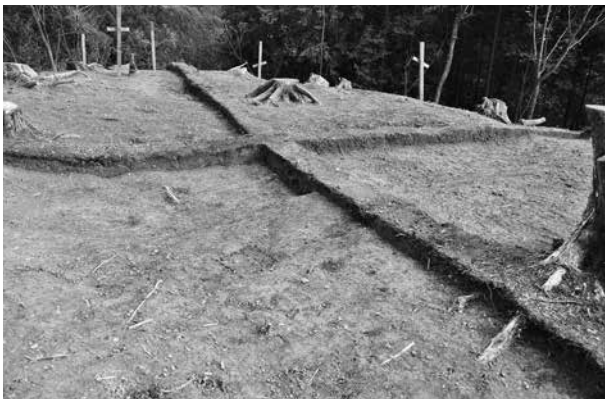
②ＳＸ３６１石枕詳細（北西から）

④ＳＸ３６１棺内鉄鎌出土状況（南西から）



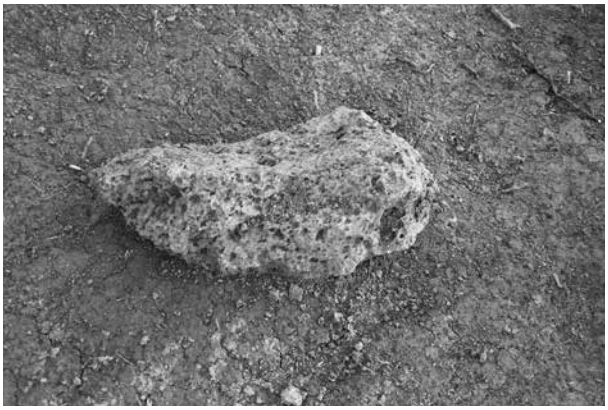
６号墳ＳＸ３６２（北東から）

①ＳＸ３６２棺内埋土土層断面（北北西から）



③６号墳墳丘部土層断面（西から）

②６号墳区画溝埋土土層断面（北北西から）



④６号墳墳頂東端の溶岩塊（西南西から）

２区全景（北から）

８・９号墳（南東から）

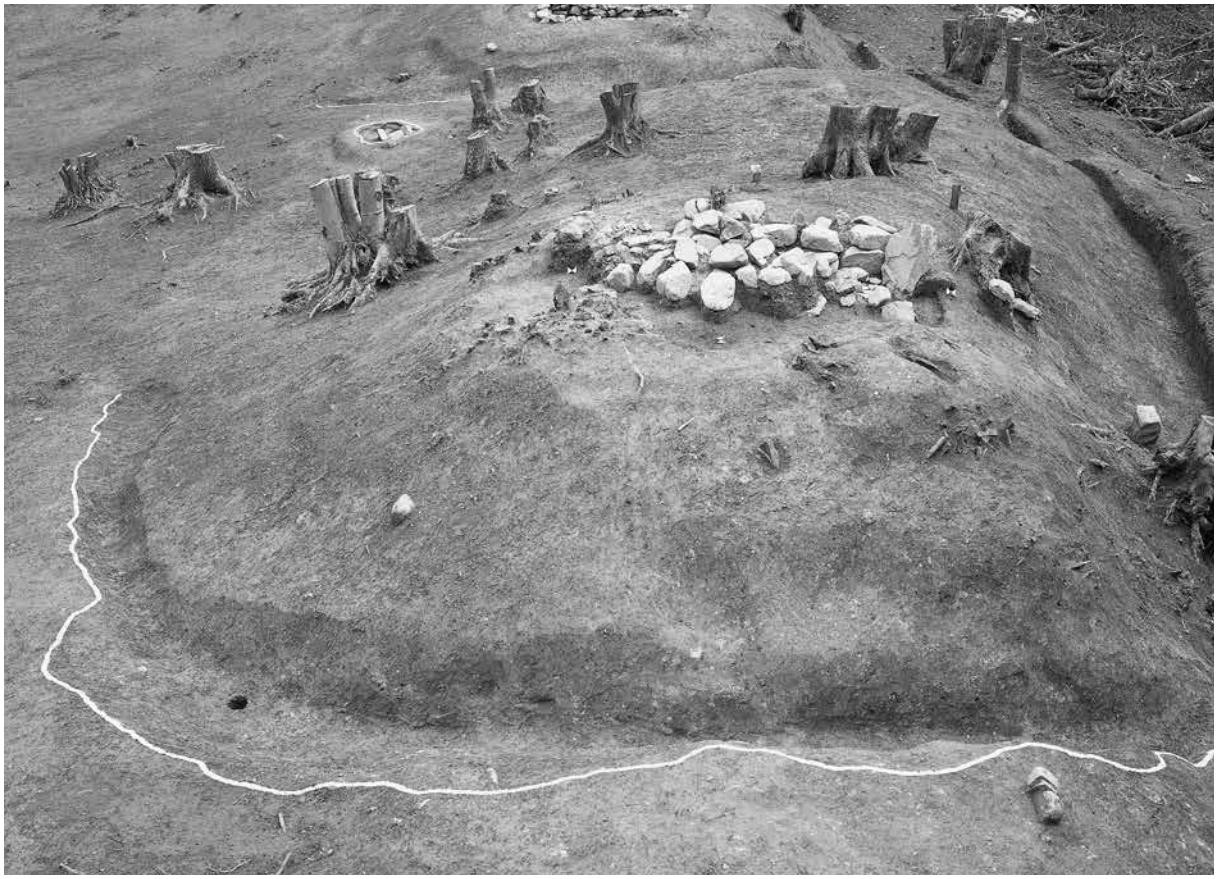
２区全景（南西から）

２区北西壁土層断面（南東から）

２区北西端付近遺物出土状況（南から）

２区遺物出土状況拡大（南から）

８号墳（北東から）



８号墳（北西から）

①８号墳埋葬施設礫床（南西から）

②８号墳埋葬施設北東側壁（南西から）

③８号墳埋葬施設南西側壁（北東から）

④８号墳埋葬施設（北西から）

⑤８号墳埋葬施設北西側壁（南東から）

⑥８号墳埋葬施設内埋土土層断面（南西から）

⑦８号墳埋葬施設調査前（北東から）

８号墳区画溝埋土土層断面（南西から）

①８号墳埋葬施設墓壙（南東から）

②８号墳墳丘盛土土層断面（北から）

③８号墳墳丘盛土土層断面（北西から）

④８号墳墳丘盛土土層断面（西から）

９号墳調査前（北から）

９号墳（北東から）

９号墳（北西から）

９号墳（南東から）

９号墳埋葬施設（南東から 下がＳＸ291）

９号墳埋葬施設墓壙（南東から）

ＳＸ２９１（北西から）

ＳＸ２９１（北東から）

①ＳＸ２９１北西側壁（南東から）

⑤ＳＸ２９１鉄鏃出土状況拡大（北西から）

②ＳＸ２９１南西側壁（北東から）

⑥ＳＸ２９１墓壙（南西から）

③ＳＸ２９１北東側壁（南西から）

⑦ＳＸ２９１石室埋土土層断面（北東から）

④ＳＸ２９１鉄鏃出土状況（北西から）

⑧ＳＸ２９１石室上面検出状況（南東から）

ＳＸ２９２（北西から）

ＳＸ２９２（南東から）

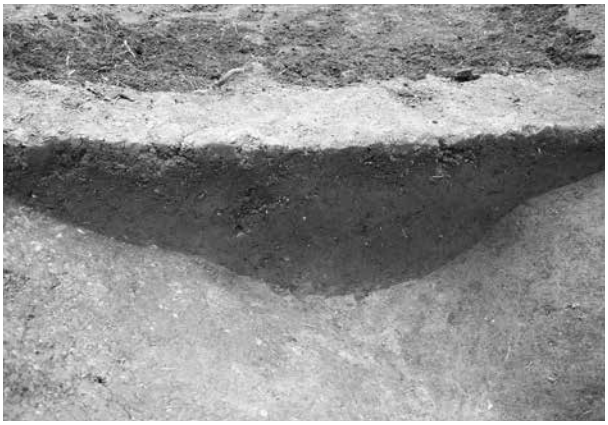
①ＳＸ２９２北東側壁（南西から）

②ＳＸ２９２南西側壁（北東から）

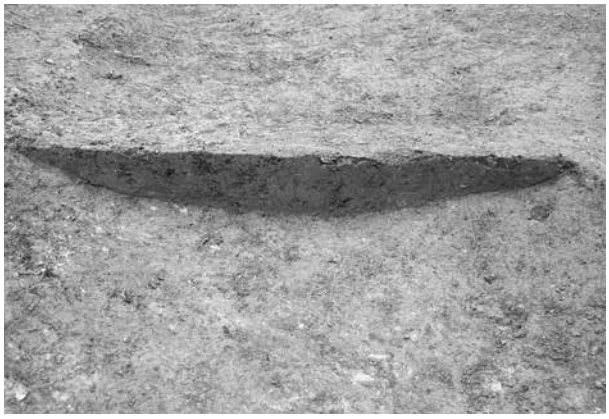
③ＳＸ２９２墓壙（東から）

④ＳＸ２９２墓壙南西部埋土土層断面（北から）

⑤ＳＸ２９２石室埋土土層断面（北東から）



⑥９号墳北西区画溝埋土土層断面（南西から）



⑦９号墳南東区画溝埋土土層断面（南西から）

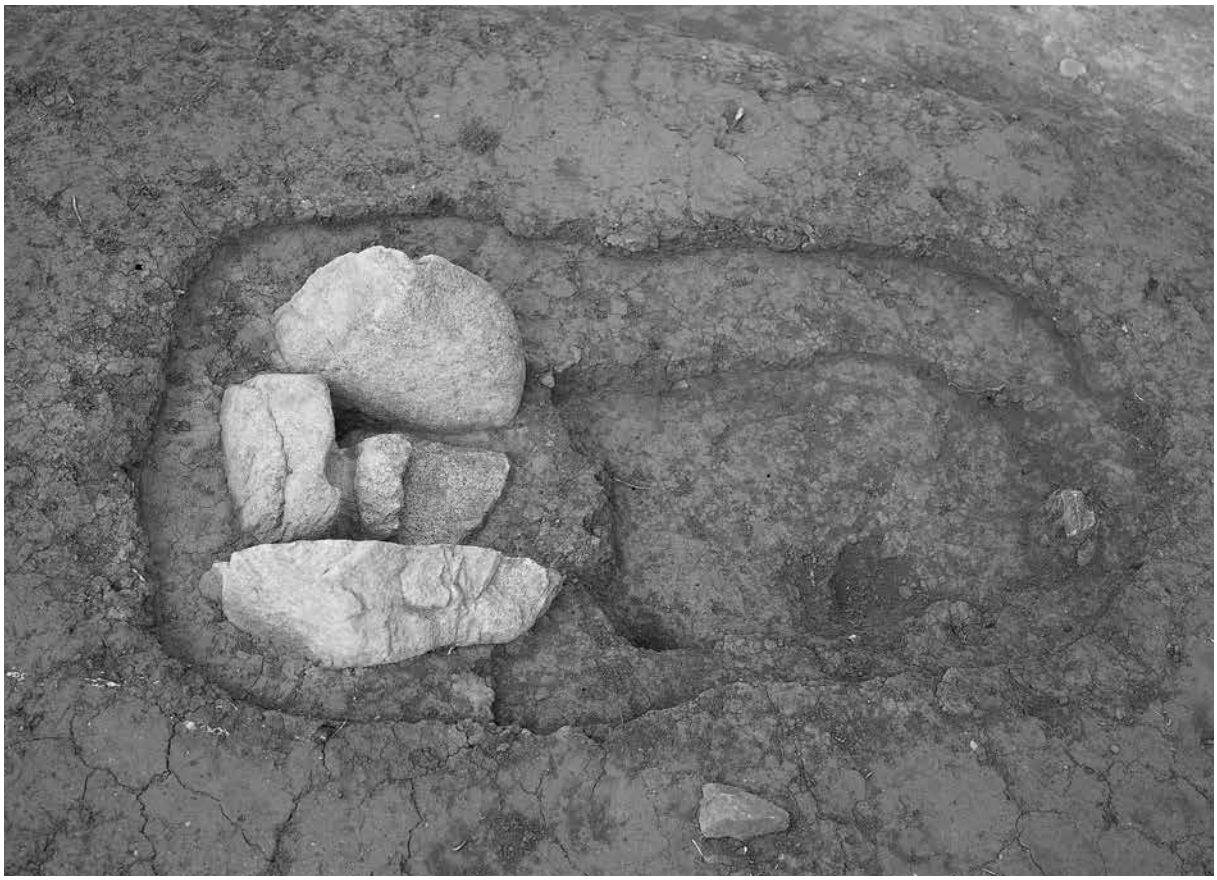
⑧９号墳墳丘盛土土層断面（北北西から）

① 10 号墳調査前（北から）

③ 10 号墳墳丘土層断面（南南西から）

② 10 号墳区画溝埋土土層断面（南西から）

④ 10 号墳墳丘土層断面（北から）



小石棺（旧ＳＸ１）（南西から）

①小石棺（旧ＳＸ１）（南東から）

②小石棺（旧ＳＸ１）北西部（南東から）

③小石棺（旧ＳＸ１）北西部（北東から）

④小石棺（旧ＳＸ１）北西部（南西から）

⑤８号墳埋葬施設掘削状況（北東から）

⑥ＳＸ２９１掘削状況（北から）

１区調査前全景（北東から）

１区調査後全景（東北東から）

1 区中央部 11 ～ 14 号墳（北東から）

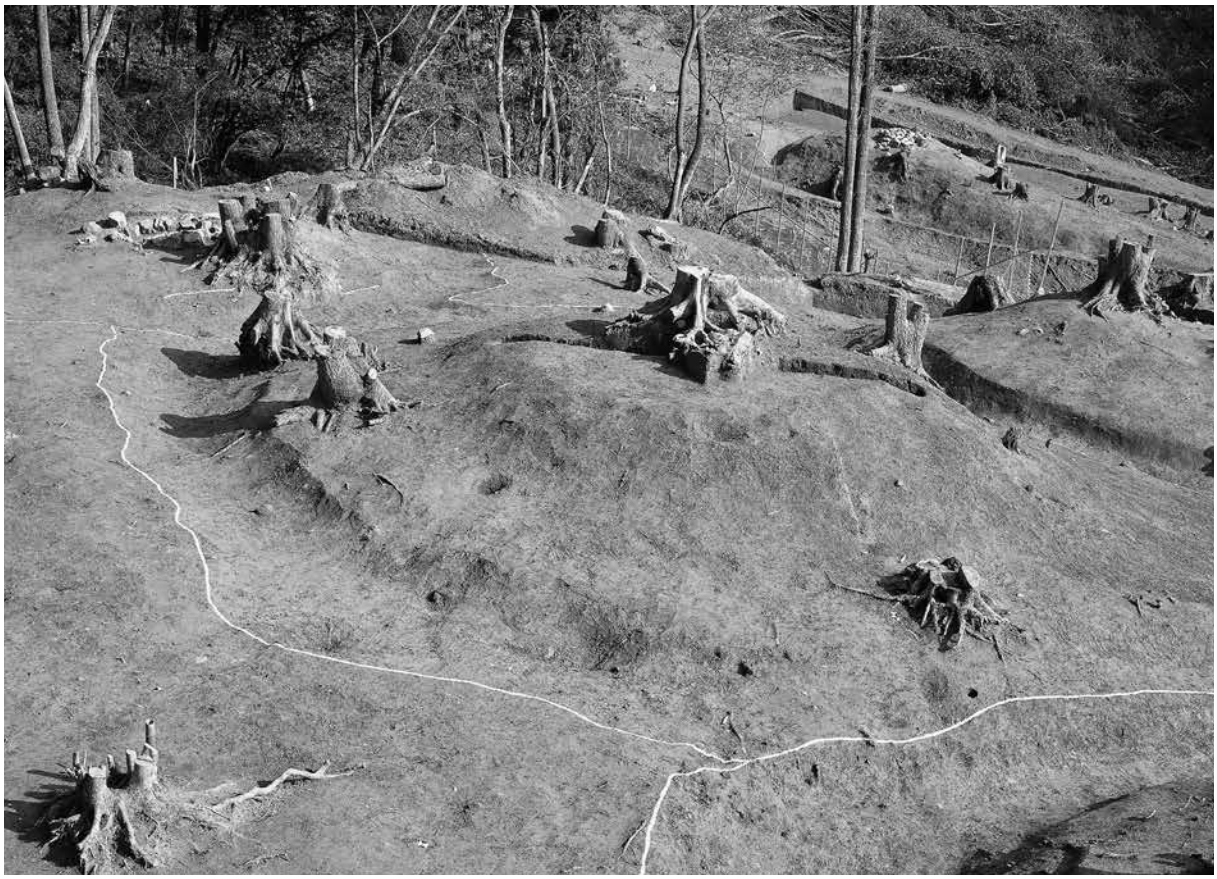
1 区中央部 11・12・14 号墳（西から）

1 区西部 11 ～ 15 号墳（南西から）

1 区西部 11・13・14 号墳（東から）

1 区西半部 11 ～ 16 号墳（南から）

1 区南西部 13・14・16 号墳（北西から）



1 区北西部 11・12・15 号墳（南西から）

①1 区 11・12・14 号墳調査前（北東から）

③ 11 号墳墳丘部礫検出状況（北東から）

② 11 号墳墳丘部礫検出状況（南西から）

④ 11 号墳墳頂部須恵器・礫検出状況（西から）

11 号墳墳丘盛土土層断面（南西から）

11 号墳墳丘盛土土層断面（南南東から）

11 号墳西側周溝埋土土層断面（南から）

11 号墳北西側周溝埋土土層断面（南西から）

11 ～ 13 号墳間周溝埋土土層断面（南東から）

11 号墳墳丘盛土と礫の関係（南西から）

11 号墳墳頂部木根が絡んでいた礫（北から）

12 号墳埋葬施設蓋石（西から）

12 号墳埋葬施設蓋石（北から）

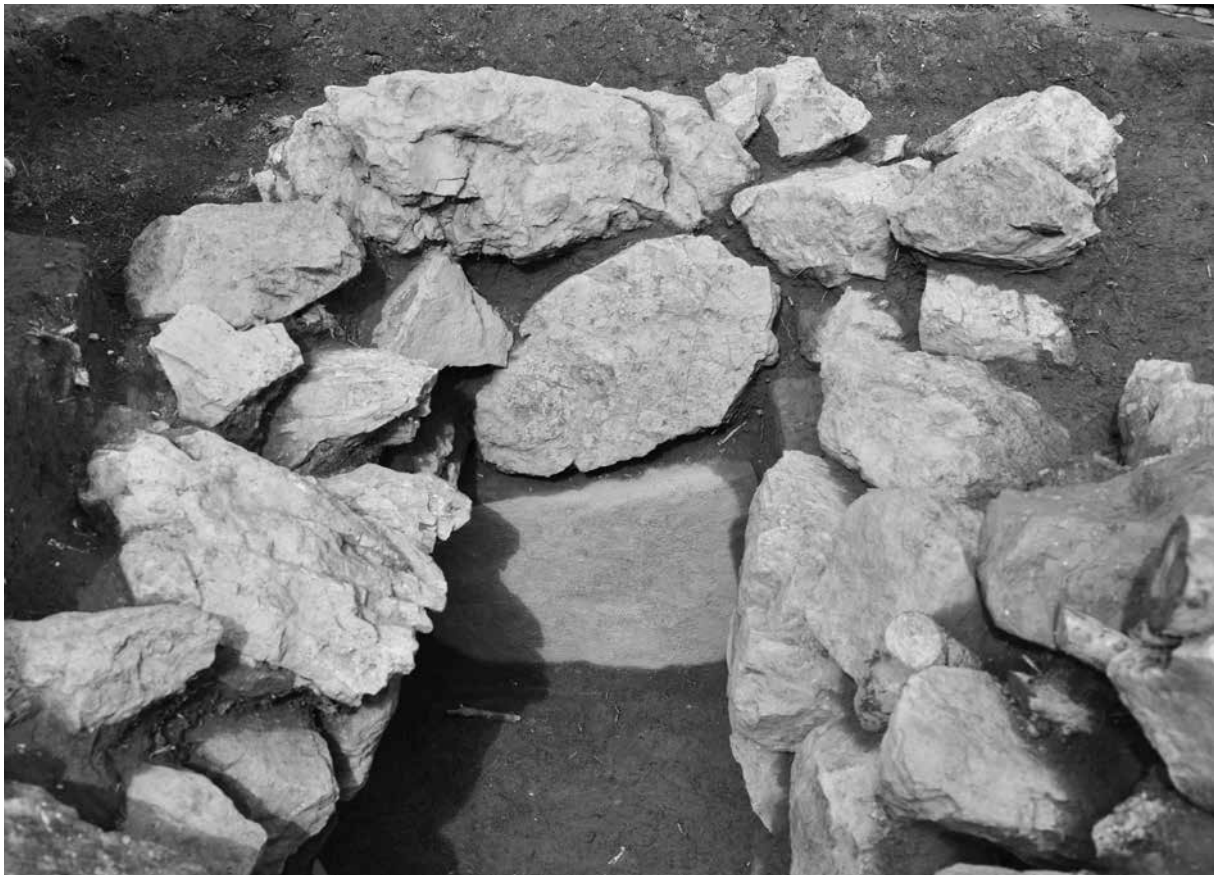
12 号墳埋葬施設（西から）

12 号墳埋葬施設（北から）

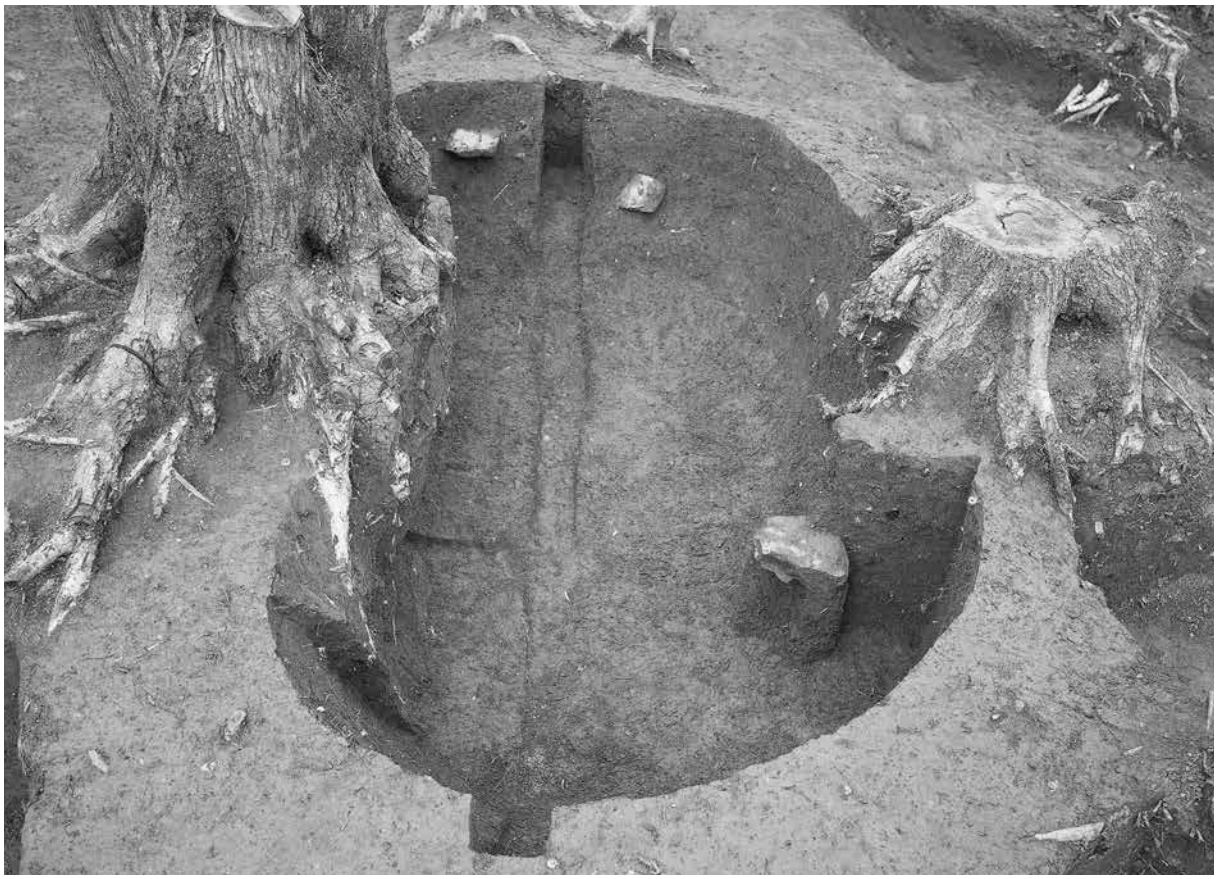
12 号墳埋葬施設東側壁（南南西から）

12 号墳埋葬施設西側壁（南東から）

12 号墳埋葬施設南側壁と礫枕（北から）



12 号墳埋葬施設北側壁と刀子（南から）



12 号墳埋葬施設墓壙（南から）

① 12 号墳石棺埋土土層断面（南から）

② 12 号墳石枕の状況（北から）

③ 12 号墳刀子出土状況（南から）

④ 12 号墳刀子出土状況拡大（南から）

12 号墳墳丘盛土土層断面（南西から）

12 号墳墳丘盛土土層断面（南から）

① 12 号墳調査前（北東から）

② 12 号墳墳丘盛土土層断面（南東から）

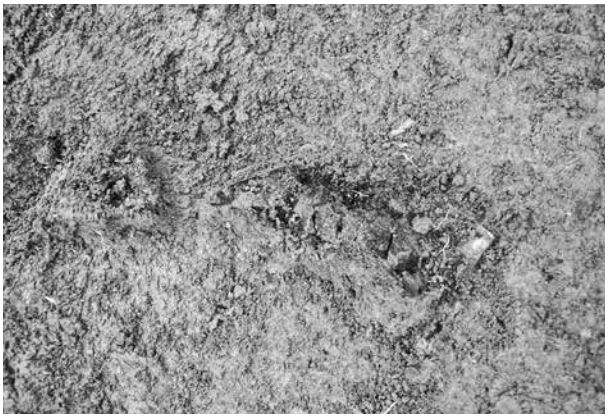
③ 12 号墳東半部墳丘盛土土層断面（北東から）

④ 12 号墳北東側周溝内須恵器出土状況（南から）

⑤ 12 号墳墳丘盛土最下層土師器出土状況（東から）

⑥ 12 号墳南側周溝埋土土層断面（東北東から）

⑦ 12 号墳南東側周溝埋土土層断面（南西から）



⑧ 12 号墳墳丘盛土内下層炭化材出土状況（東から）

12 号墳西側周溝埋土土層断面（南から）

12 号墳北側周溝埋土土層断面（北西から）

12 ～ 14 号墳間周溝埋土土層断面（西北西から）

13 号墳（西南西から）

13 号墳（北から）

13 号墳埋葬施設北西部（南東から）

① 13 号墳埋葬施設検出状況（北西から）

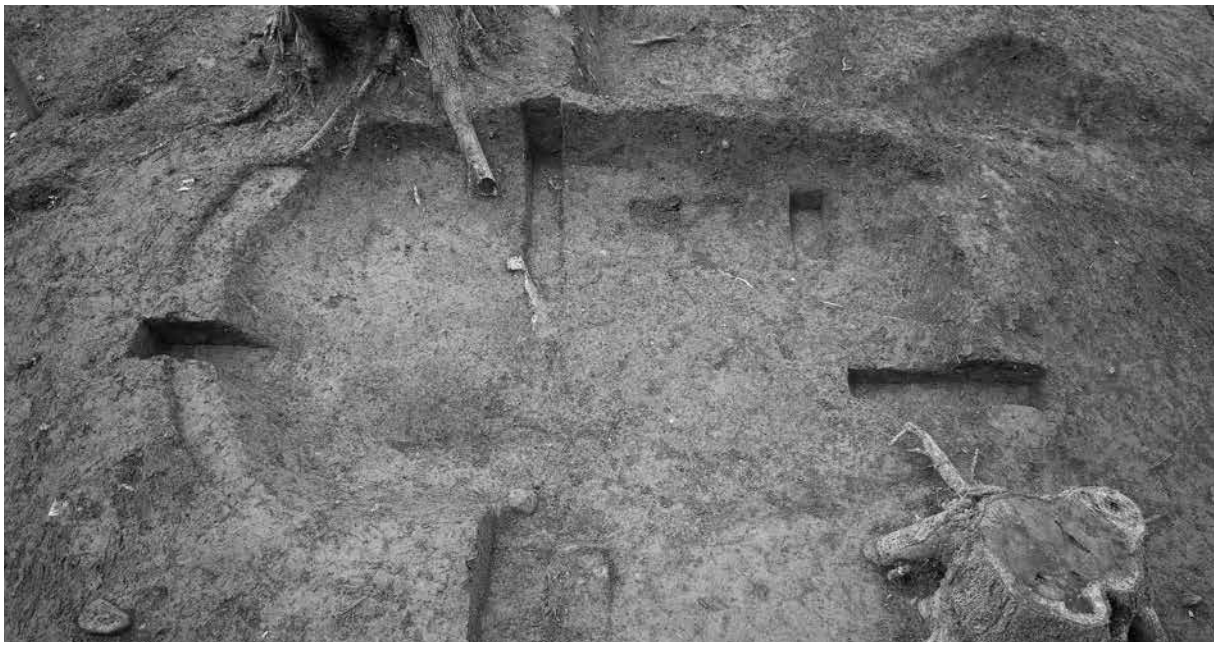
② 13 号墳埋葬施設埋土土層断面（北西から）

③ 13 号墳埋葬施設北西部（北西から）

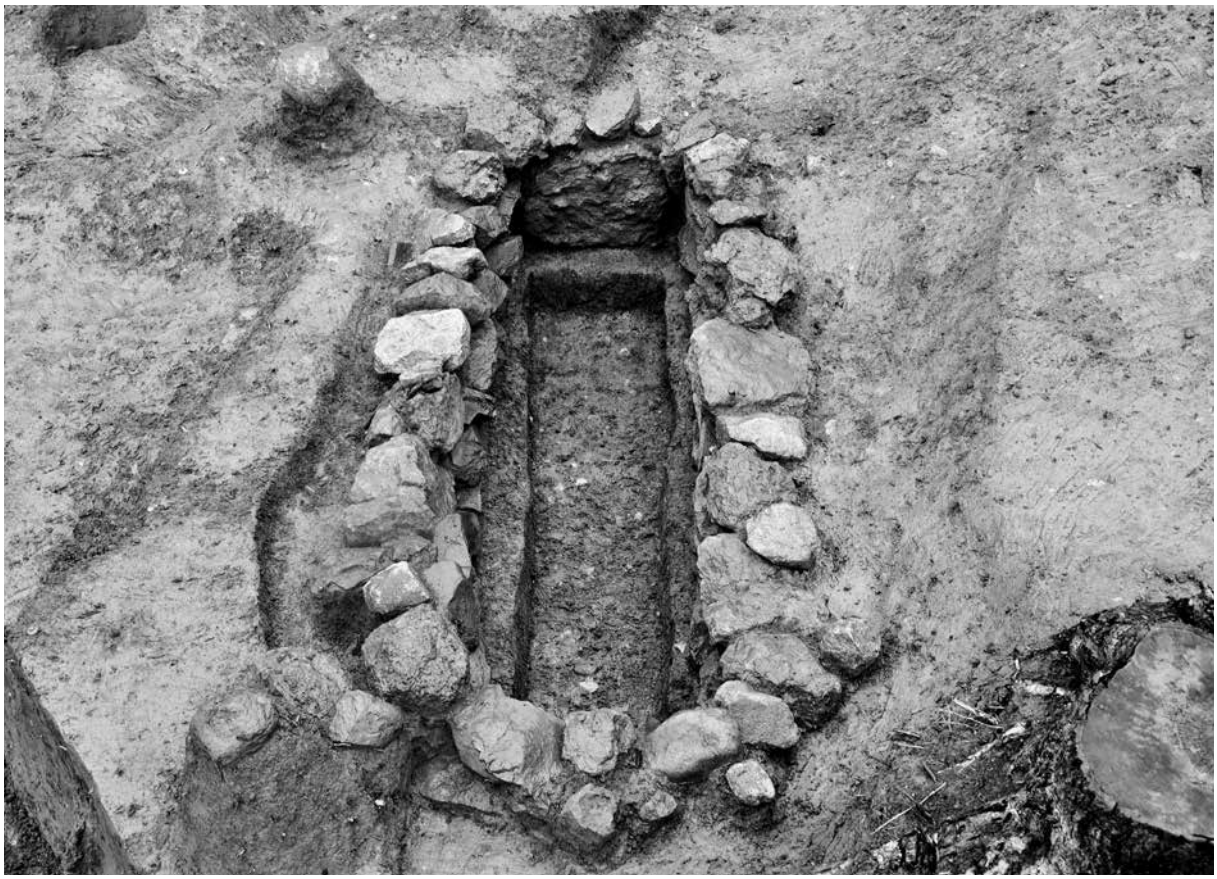
④ 13 号墳埋葬施設刀子出土状況（南西から）

13 号墳北西側周溝埋土土層断面（南西から）

13 号墳南東側墳裾埋土土層断面（北東から）



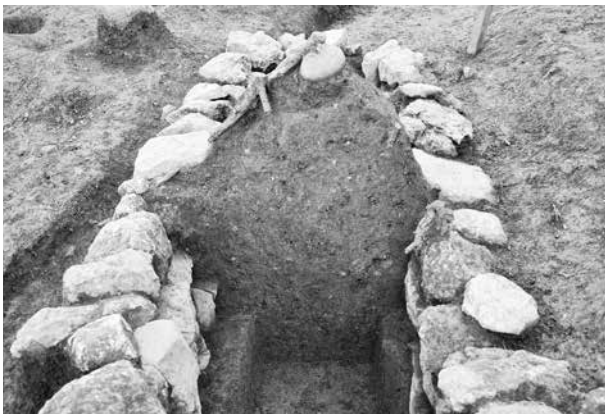
13 号墳埋葬施設墓壙（南西から）



14 号墳埋葬施設（北東から）

14 号墳埋葬施設（南西から）

① 14 号墳埋葬施設北西側壁（南から）



⑤ 14 号墳埋葬施設埋土土層断面（北東から）

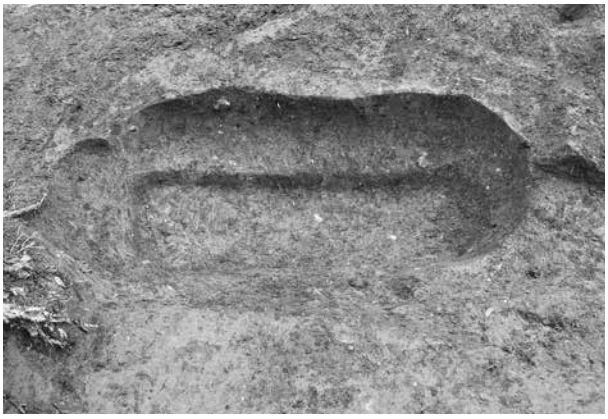
② 14 号墳埋葬施設北西側壁（東北東から）

⑥ 14 号墳埋葬施設埋土土層断面（北から）

③ 14 号墳埋葬施設北東側壁（南西から）

⑦ 14 号墳埋葬施設埋土上部土師器出土状況（北東から）

④ 14 号墳埋葬施設上面検出状況（東北東から）



⑧ 14 号墳埋葬施設墓壙（南東から）

① 14 号墳北西側周溝埋土土層断面（南西から）

② 14 号墳北側周溝内土師器出土状況（北から）

③ 14 号墳北側周溝内土器ａ出土状況（北西から）

④ 14 号墳北側周溝内土器ｂ出土状況（北西から）

⑤ 14 号墳北側周溝内土器ｃ出土状況（北北西から）

⑥ 14 号墳南西側周溝埋土土層断面（南東から）

⑦ 14 号墳北東側周溝埋土土層断面（南東から）

⑧ 14 号墳北西半墳丘盛土土層断面（西南西から）

15 号墳（南西から）

15 号墳埋葬施設蓋石（南西から）

15 号墳埋葬施設（東南東から）

15 号墳埋葬施設（西北西から）

① 15 号墳埋葬施設蓋石（東南東から）

③ 15 号墳埋葬施設埋土土層断面（東南東から）

② 15 号墳蓋石間隙須恵器出土状況（西から）

④ 15 号墳埋葬施設墓壙（西北西から）

15 号墳墳丘下陥し穴（西南西から）

① 15 号墳墳頂北部礫検出状況（西南西から）

② 15 号墳墳丘西半部土層断面（南東から）

③ 15 号墳西側周溝内土師器出土状況（南南東から）

④ 15 号墳西側周溝内土師器出土状況拡大（南西から）

⑤ 15 ～ 11 号墳間周溝埋土土層断面（東から）

⑥ 15 号墳墳丘盛土土層断面（南から）

⑦ 15 号墳墳丘下陥し穴（南東から）

⑧ 15 号墳墳丘下陥し穴埋土土層断面（東南東から）

16 号墳埋葬施設（西から）

① 16 号墳石室床面土師器出土状況（北西から）

② 16 号墳石室床面土師器出土状況（北東から）

③ 16 号墳埋葬施設埋土土層断面（北西から）

④ 16 号墳埋葬施設墓壙（南東から）

16 ～ 14 号墳間周溝埋土土層断面（東から）

16 号墳北西側周溝埋土土層断面（南西から）

16 号墳墳丘盛土土層断面（南西から）

16 号墳墳丘下溝埋土土層断面（北北東から）

16 号墳確認トレンチ（南から）

小石棺蓋石（南南東から）

小石棺身（南南東から）

小石棺蓋石（北北西から）

小石棺下層截ち割り土層断面（東北東から）

17 号墳（南から）

① 17 号墳埋葬施設須恵器出土状況（北北東から）

② 17 号墳埋葬施設須恵器出土状況拡大（北北東から）

③ 17 号墳埋葬施設（北北東から）

④ 17 号墳埋葬施設（南南西から）

17 号墳西側周溝埋土土層断面（北北東から）

① 17 号墳南側周溝埋土土層断面（東南東から）

② 17 号墳墳丘盛土土層断面（北西から）

③ 17 号墳確認トレンチ（北東から）

④ 17 号墳調査前（北北東から）

1

14

15

16

20

21

22

19

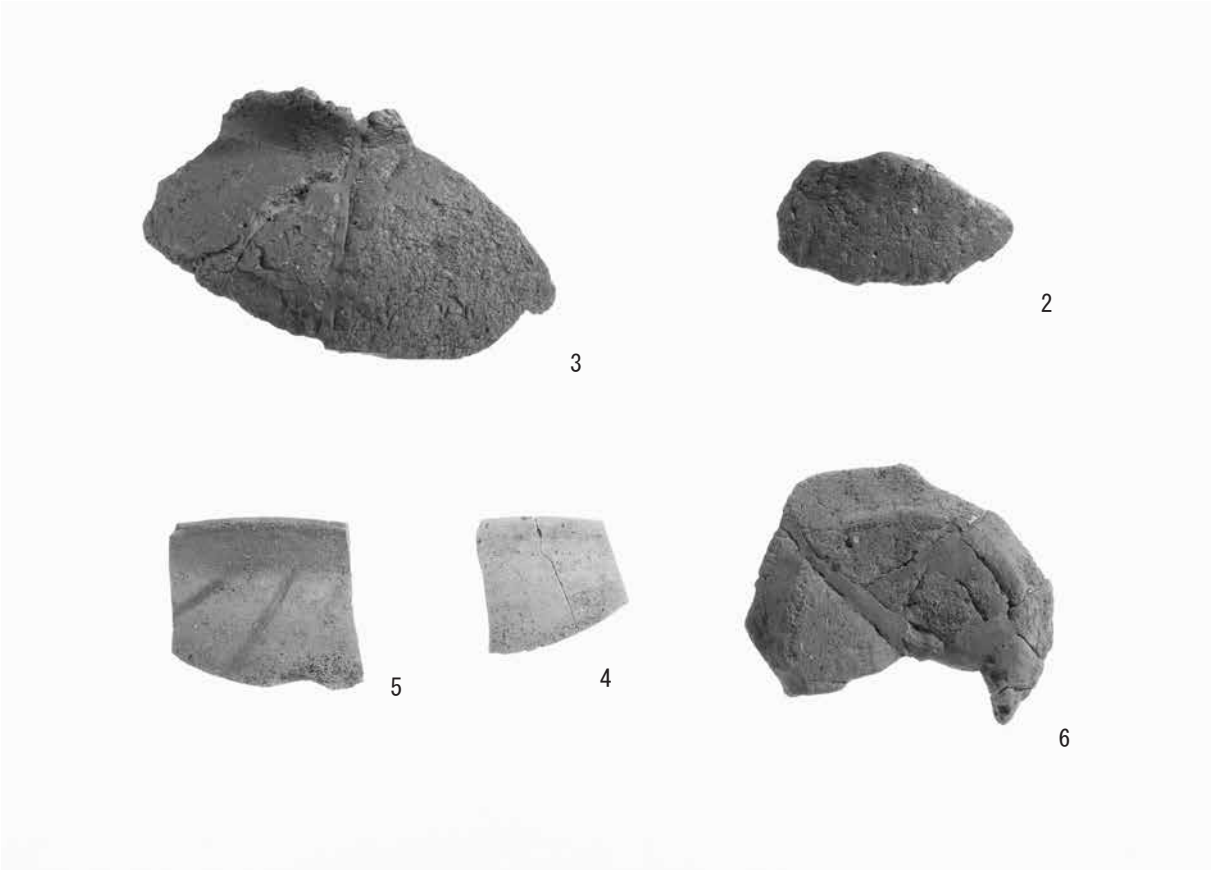
24

25

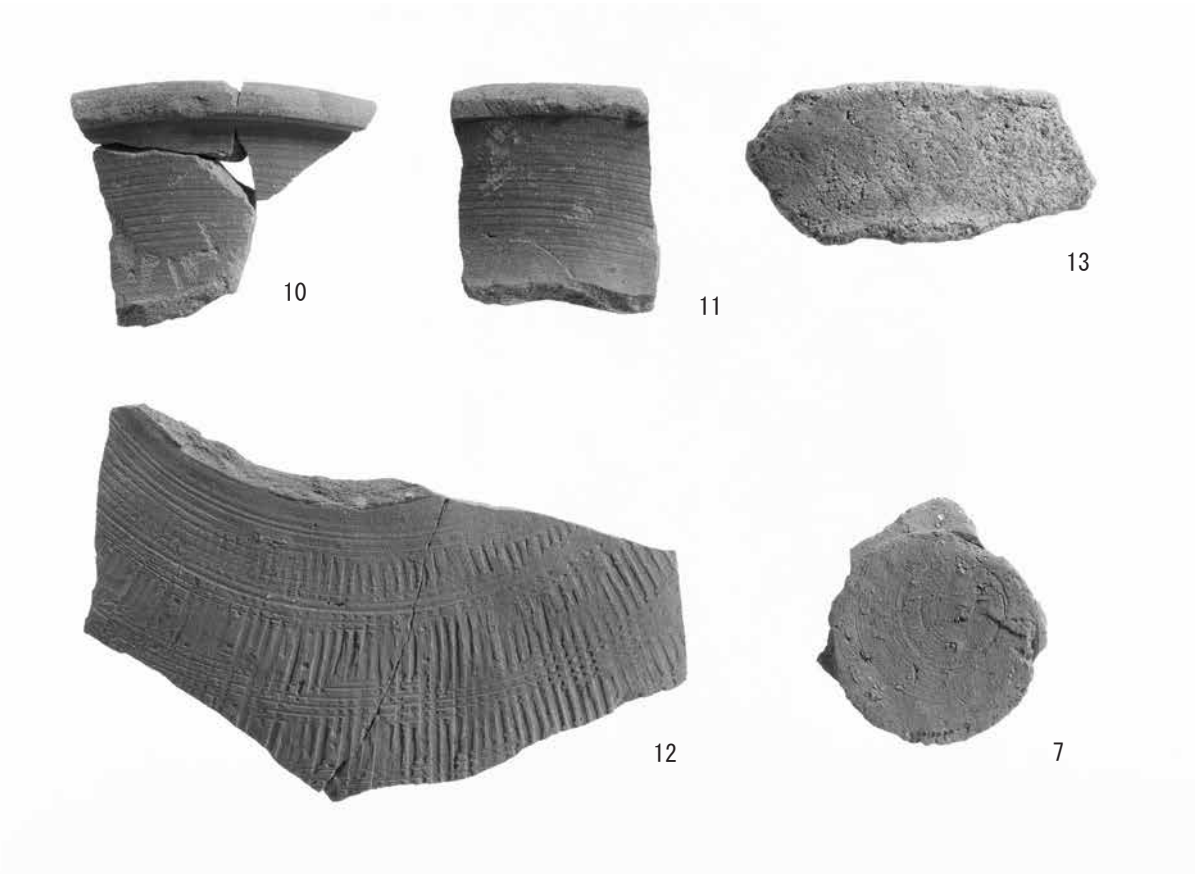
26

30

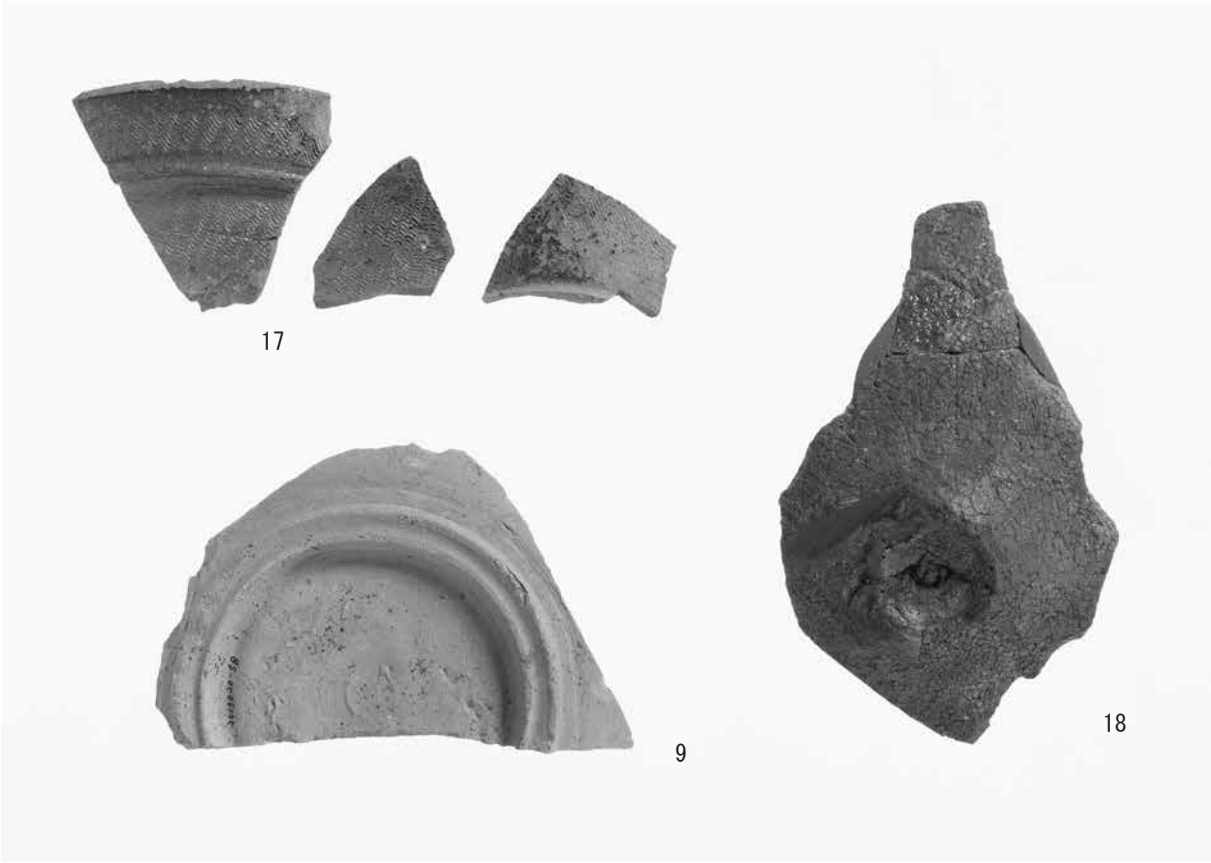
3・12・14 ～ 17 号墳出土土器



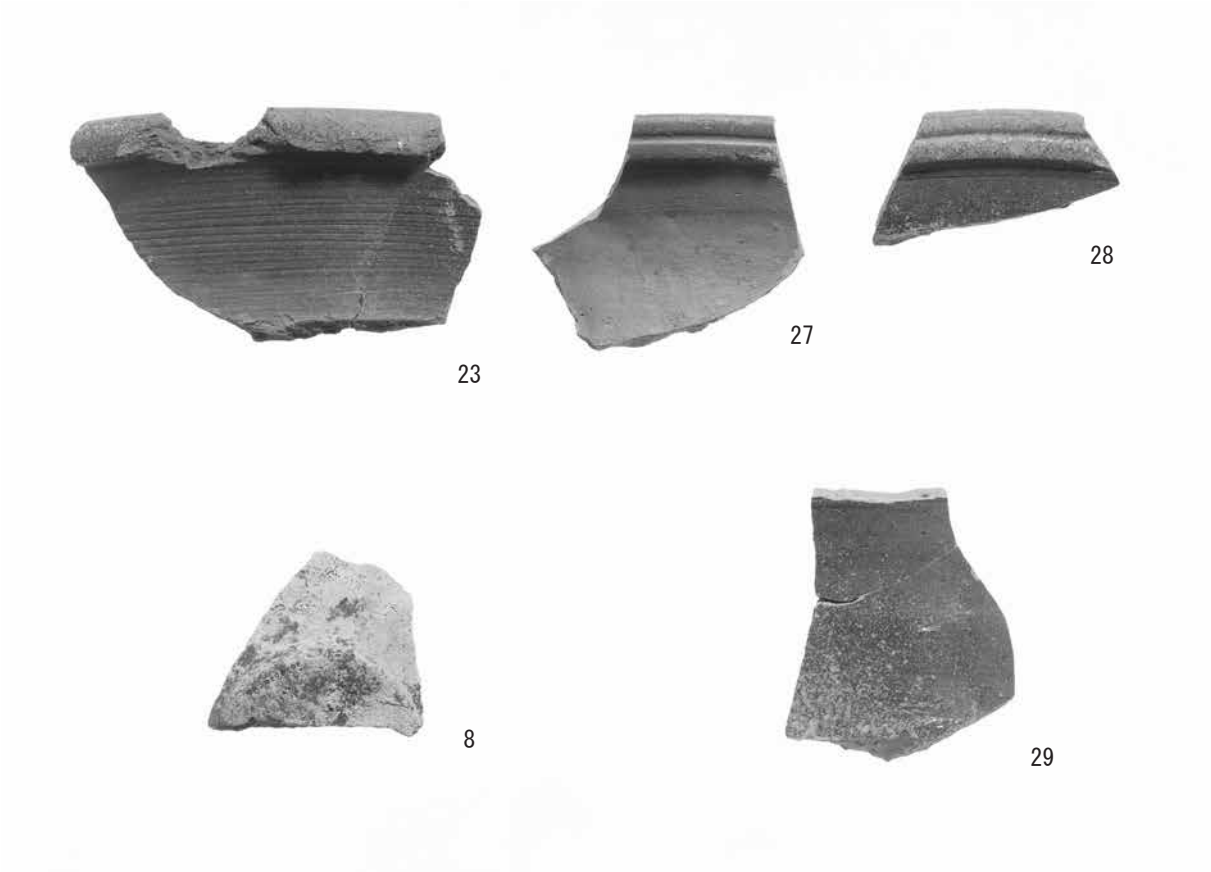
３号墳・２区包含層出土土器



11 号墳出土土器



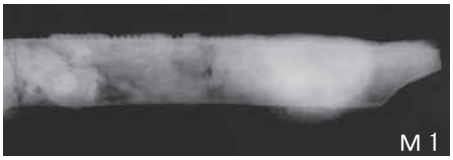
13 号墳出土土器

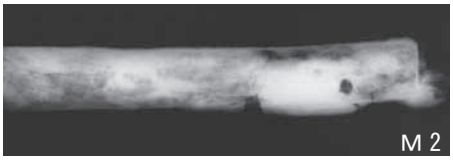


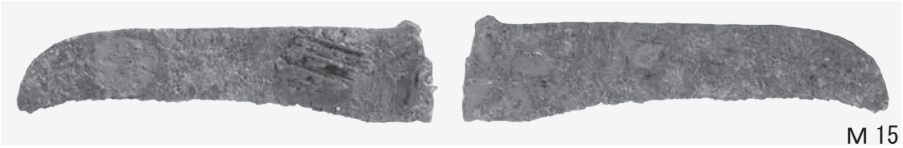
15・16 号墳、１区出土土器

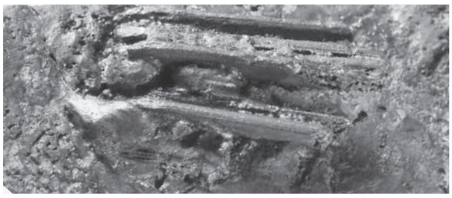
M 1

M 2


M 1


M 2


M 15


M 15

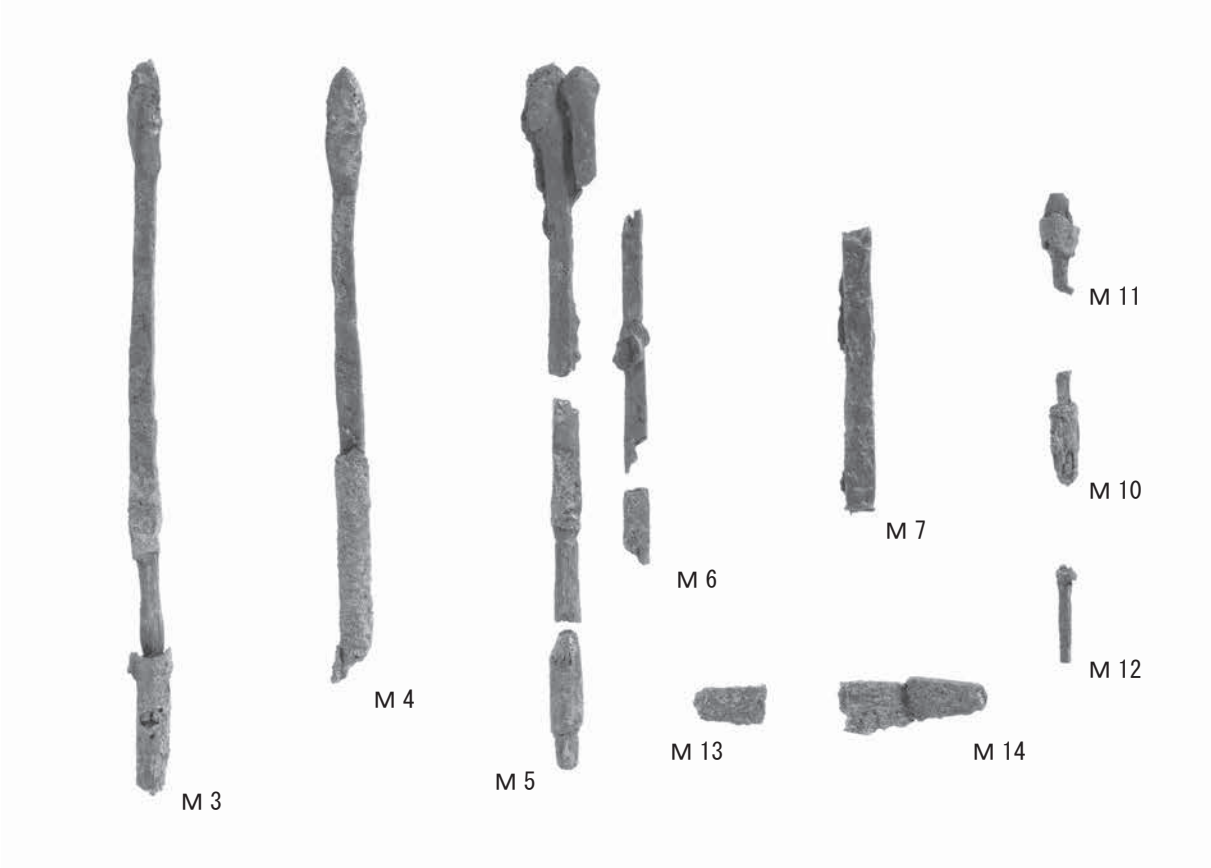
M 16

M 17

M 18

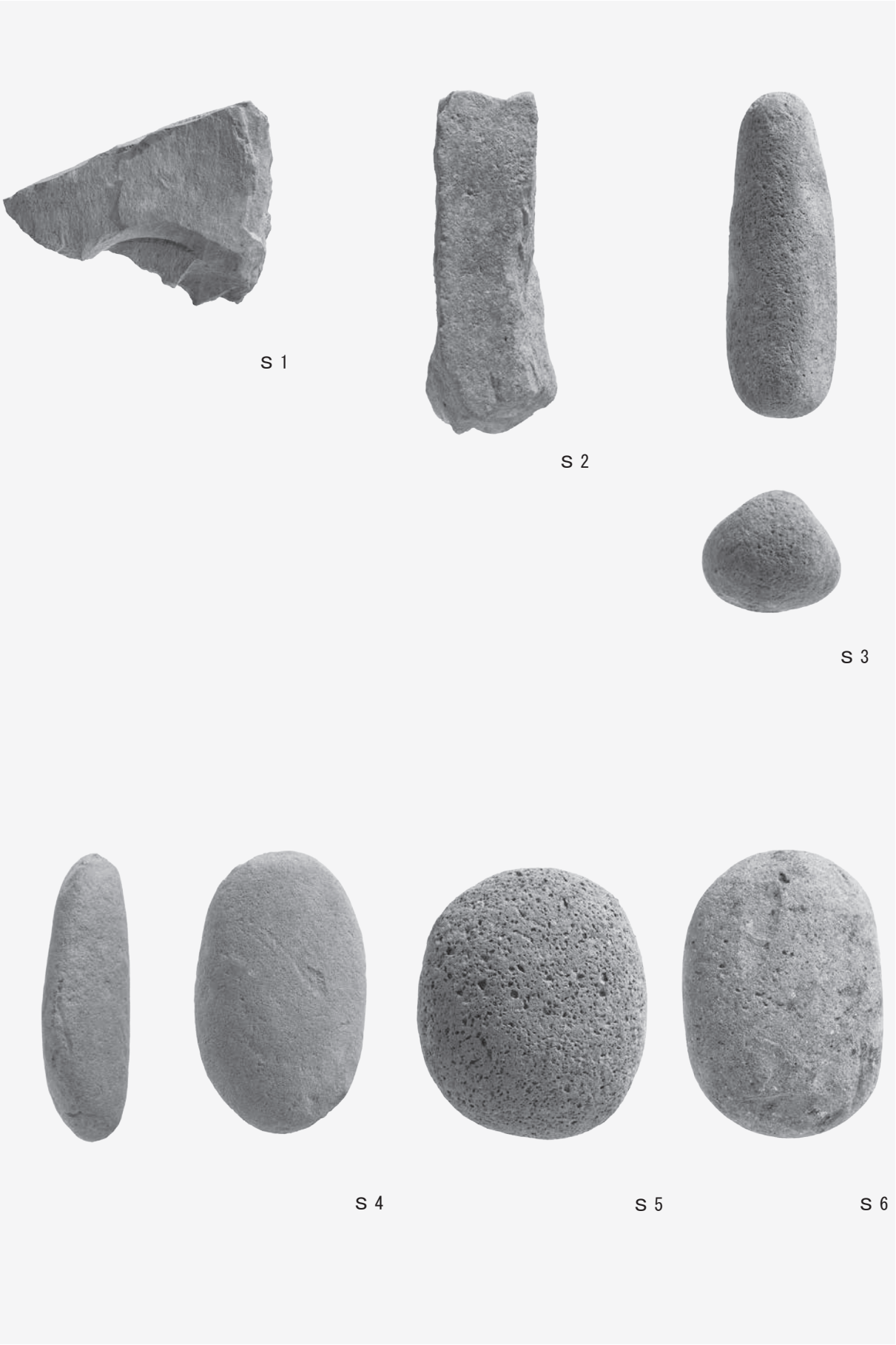
M 19

2・3・6・9・12・13 号墳出土鉄器



３号墳出土鉄鏃等

８号墳礫床の礫



１・２区出土石製品

報　告　書　抄　録

ふ り が な	あまがみや こふんぐん
書　　名	尼ヶ宮古墳群
副　書　名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第５０１冊
編著者名	岸本一宏　藤根 久　株式会社加速器分析研究所
編集機関	公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所　在　地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号（兵庫県立考古博物館内）　TEL.079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　　TEL.078-341-7711
発行年月日	2019年（平成31年）３月10日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
尼ヶ宮 古墳群	兵庫県豊岡市（ひょうごけんとよおかし） 日高町水上（ひだかちょうみのかみ）	28209	61549～61560 61670～610689 611502～611510	35度 28分 58秒	134度 46分 1秒	20121109～20121220 20130805～20140116	確認167㎡ 本発掘 2,997㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尼ヶ宮 古墳群	生産 古墳	縄文時代？ 古墳時代中期 中葉～後期前葉	陥し穴 古墳15基 木棺直葬・竪穴式石室・ 箱式石棺・小石棺	磨石・敲石・剥片 土師器・須恵器・鉄器	竪穴系石組 埋葬施設 多数

概　　要

尼ヶ宮古墳群41基のうち15基を調査。調査区は３地区に分かれ、それぞれ支群単位となっており、３支群のほぼ全体を調査。

３区は２号墳～６号墳の５基を調査した結果、中期中葉に尾根上に築造された階段状の木棺直葬墳で、約１ｍの鉄刀や鉄鏃などが出土した。墓壙長6.3ｍの６号墳は埋葬施設が２基存在したが、遺物は鉄鎌１点に限られた。

２区は８号墳～10号墳の３基を調査し、８号墳は箱式石棺１基、９号墳は竪穴式石室２基で、鉄鏃が出土した。中期末頃の築造である。

１区では中期後半～後期前葉に築造された11号墳～17号墳の７基を調査した。埋葬施設が判明した６基のうち、５基までが竪穴式石室や箱式石棺で、埋葬施設の大半が竪穴系石組である点は当地域においても特異な存在である。埋葬施設の規模や石枕の存在などから竪穴式石室墳２基、箱式石棺を埋葬施設とする古墳３基に分けられるが、埋葬施設種の選択理由は不明である。副葬品には鉄刀子や土師器・須恵器が認められたが、総じて少ない。１区では６基がまとまって存在しており、２つの小支群に分割できそうである。なお、木棺直葬の17号墳は割竹形木棺で、他の古墳とは少し離れて存在していた。

兵庫県文化財調査報告　第５０１冊

豊岡市

尼ヶ宮古墳群

－一般国道483号北近畿豊岡自動車道
八鹿豊岡南道路に係る埋蔵文化財発掘調査報告書　－

平成３１（２０１９）年３月10日　発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
（兵庫県立考古博物館内）

発行：兵庫県教育委員会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印刷：小野高速印刷株式会社
〒670-0933　姫路市平野町62番地